

感想と紀行

小池辰雄著作集

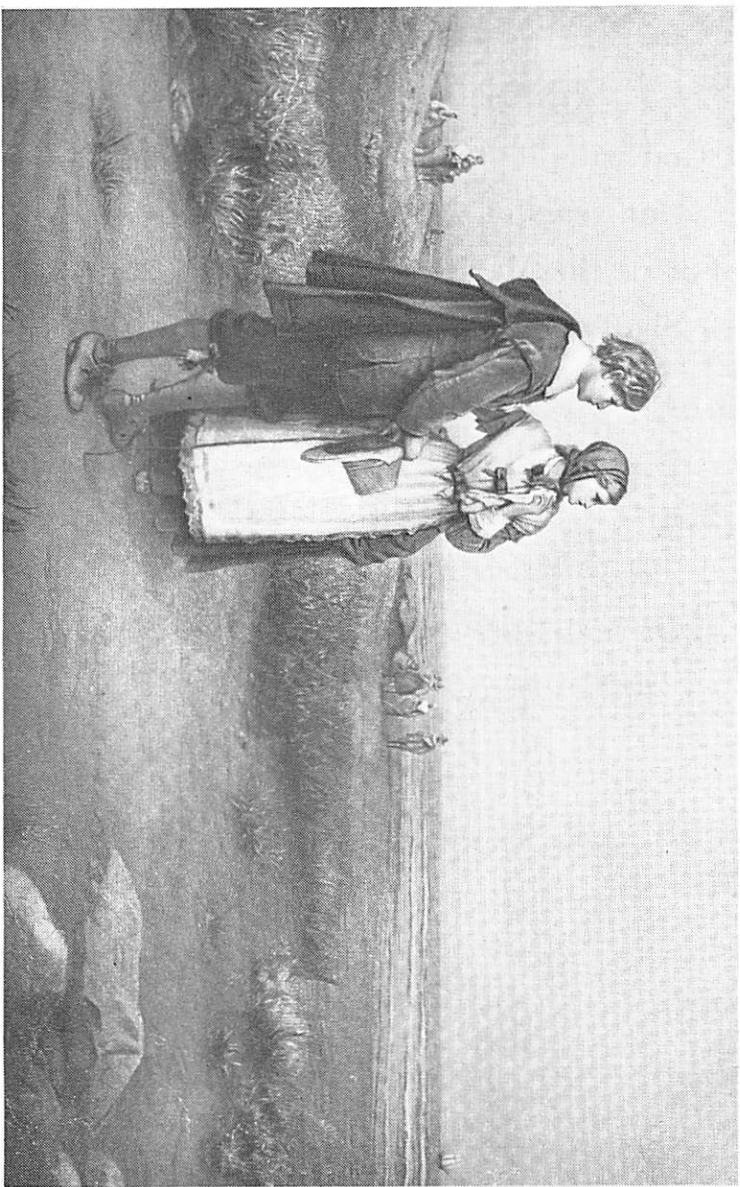
第九卷

⑨紀行

感想と紀行

小池辰雄著作集

第九卷



帆船メイフラワー号の船運を見送る清教徒

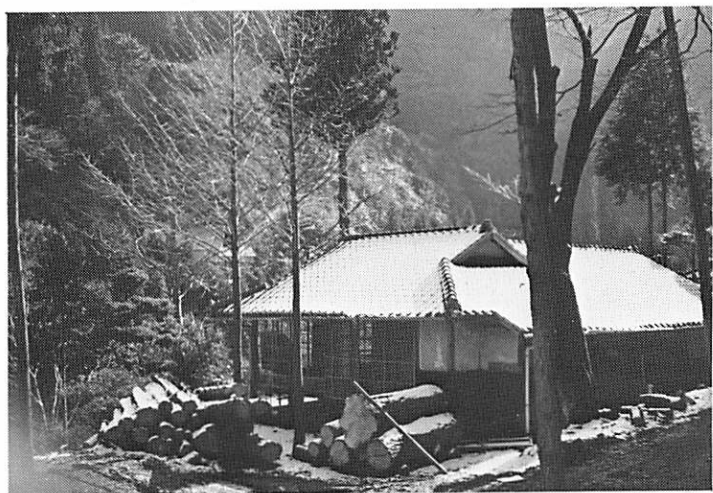
“God wills it : here our rest shall be,
Our years of wandering o’er.
For us the Mayflower of the sea,
Shall spread her sails no more”.

——Whittier

聖旨は曰く、「我らの青山此処に在れ、
我らが旅路の幾年も^{いくとせ}
我らがために海原の「五月の花」は^{さつき}
再びその帆をうち張る勿れ」と。

——ホイッチャー

[注] 第8巻「請歌集」242～243頁参照。
本巻第3章「感想集」第7項「私の書齋」参照。
本巻第5章「人物回想」第10項「小池政美」参照。



1950年11月3日～5日、大阿蘇山垂玉(たるたま)の瀧見荘での集会に於て、
 天界から聖霊のバプテスマにあづかった。
 (上：夏の瀧見荘、マクヤの横山君撮影。下：冬の瀧見荘、召団の森満夫君撮影)

阿蘇の深山の瀧見莊

聖靈降臨 新生よ！

使徒らの次元慕はしや

十字架・聖靈の現実を

生涯を賭けて生き貫かん

まえがき

この第九巻は題して『感想と紀行』であるが、単なる感想でもなければ、紀行ばかりでもない。それは「目次」の各章とその諸項目の標題が示している通りである。

第一章告白と論説の主眼は「キリストと私」、「福音の根本構造序説」、「イエス・キリスト無即無限無量者」、「自然・靈然・神然」、「ガリラヤ湖」、「私の教育理念」等であるが、第一章が本巻全体の主眼である。

第一章に所属すべき論説には「キリストの福音」（曠愛新書第五号）、「砂漠はサフランの如く」「曠野の愛」（同第三号）、「預言者の歴史観」（曠愛文庫第二号）、「預言者の終末観」（同第三号）、「聖意体現」（曠野の愛社出版）、等があるが、頁数の関係で残念ながら割愛せざるを得なかった。

第二章詩の波の前半の詩「愛そのもの」は信州小諸の「キリストの石垣会」の生みの親川口愛子姉のことである。後半、「全十二召団の歌」以降は日本キリスト召団の讃歌（第八巻所載）の追加で勿

論自作のものである。召団讃歌といってもキリスト教界で一般に歌はれ得るものが多々ある。

第三章感想集 これらは文字通りの感想集である。未発表の随筆的感想文はまだまだあるがすべて割愛した。

第四章紀行集の「A内地伝道旅行」は年代の古い約三十年前のもので昔なつかしいものである。その後も伝道旅行は幾度びとなくやっている。その一部は「エン・クリスト」誌上で報告している通りである。

「B海外旅行」「ドイツだより」の詳しいものは曠愛新書第四号「旅に想う」で一五〇頁も書いたから、本巻に到底載せるわけにはいかない。

海外旅行としてはこの他に「ルター生誕五百年記念印象記」（「エン・クリスト」誌第十六号所載）、「キリスト受難劇への旅」（同誌十九号所載）、及び「北欧旅行印象記」（同誌第二十三号所載）の三篇がある。これらも割愛した。

第五章 人物回想の「佐々木吉三郎先生」は小学校時代の校長先生で、極めて印象の深い先生であったが、この先生の遺著の一つ『青年と人生観』を読んで感銘したのでこの一文となった。学校教育の中軸は何といっても校長の人格とその教育道にある。中学校時代の校長は嘉納治五郎先生（講堂館柔道の元祖）であったから、これまた大変な存在であった。「恩寵の跡」は信仰の恩師藤井武先生の集會に五年間参列して賜った恩寵の想い出である。「大阿蘇の恩寵」は信友手島郁郎兄の主催の大阿

蘇での特別集会で受けた天来の聖霊のバプテスマである。これは私の信仰に次元的飛躍を齎らしたものである。

「噫、内村鑑三」は、感恩を以てする人物論ではあるが、先生が十字架信仰から使徒的次元の聖霊体現に突き抜けていただきたかった。無教会グループの今後の課題である。

「塚本虎二先生」はイエス伝研究の権威であり、「共観福音書異同一覧」という厄介な仕事もなし遂げ、新約聖書の翻訳も果された聖書学者であった。

内村、藤井、塚本の三恩人を回想して、そこに遺る悲願がおのづから「大阿蘇の恩寵」に爆発しているわけである。第六巻『随想集』の「霊的な一大突破」を参照していただきたい。

「主我を愛す」は天野貞祐独協学園長の地上最後の一年間の想い出である。先生の場合を言うのではないが、保育園、幼稚園、小学校時代に宗教的な物語や祈りや讃美歌をからだで受けとらせておくことはたましいの成長の上で大切なことだと思う。「即行の巨人関渡」独協学園理事長の存在は磐石の強みであった。天野、関両巨頭なくして今日の独協は在り得ない。

「ゲルマニウム浅井」氏は文科系の人でありながらも独力物理化学的研究を積んで有機物ゲルマニウムを製作されたものである。感服のほかはない。

「高島鴻子小母さま」は私的な内容で恐縮であるが、母を措いて舎兄政美を最も愛惜した婦人であった。「小池政美」は私にとって言で表はしきれぬ存在で、生涯を以て兄の死に答へねばならない。

第六章独協学園、私は独協大学教授十五年、並行して独協中学高校校長十年を勤め、七十五歳を以て、教職満五十年に別れを告げたわけであるが、この第六章の内容はその独協時代の主として校長としての勤務期間に折にふれて書いたものである。

目白台の独協中学高校長として「独協学園百年史」を提案した関係上、職を去ってから、その編集委員長として、これに与^{あづか}っているが、この仕事は現在独協大学経済学部長たる斎藤博教授が主任として主役を演じてくれている。因みに「独協学園百年史」という本史は来年の春発行の予定である。かれこれ十年間に亘る独協百年史の仕事（「独協百年」全五巻及「目で見る独協百年」が既刊）がこれを以て完結する。なほその傍系の仕事として「あるばむ、人間閑湊」という写真を主体とした回想集と「回想天野貞祐」という文集が既刊されている。夫々特色ある回想集である。

この第九巻「感想と紀行」は第六巻「随想集」と姉妹篇を成すものである。

第一巻「無者キリスト」は第三巻「無の神学」と姉妹篇で、本著作集の根幹である。

第四巻「詩篇珠玉集」と第八巻「詩歌集」が姉妹篇。第五巻「百世の師ヒルティ」と「聖書の人ルター」が姉妹篇と言へよう。

第二巻「芸術のたましい」の内容は、最大の芸術家たる神を隠れたる主体とした芸術論と、その神の靈感に浴しつつ神を追求してやまなかった二大詩人ダンテとゲーテを論じたもの。

最後の第十巻「一日千年」は全聖書から三六六の聖句を選んで、それを解説しながら自由に人生を、

文化文明を、神学や文学を、歴史や社会を、世界や宇宙を語るであろう。著者の告白ならざるはなしである。これは一九八八年出版の予定で、それを以て著作集は一応完結する。

なお延々と続くであろう小池辰雄主筆の季刊『エン・クリスト』誌をこの『著作集』の姉妹篇として読まれんことを希う。

一九八七年如月七日

八十三路の峠にて

天童

目次

まえがき

第一章 告白と論説

- 一 キリストと私（一九八五年五月二六日） 17
- 二 ルターと私（一九八五年五月十一日） 21
- 三 ヒルティ―と私（一九八五年四月二八日） 25
- 四 ダンテと私（一九八五年五月四日） 29
- 五 ゲーテと私（一九八五年五月一九日） 33
- 六 ベートローヴェンと私（一九八五年五月一六日） 37
- 七 視よ此の人！（一九八五年四月） 42
- 八 人間革命への路（一九五〇年十二月） 46
- 九 福音の根本構造序説（一九六〇年八月一九日、二十、二十一日） 57

十 イエス・キリスト無即無限無量者（一九八二年十月） 75

十一 「二」の宗教（一九七一年十二月） 98

十二 信仰の奥義（一九七三年七月） 105

十三 自然・靈然・神然（一九七三年五月） 111

一四 涙の泉（エレミヤ九・一）（一九七四年六月） 118

一五 ガリラヤ湖（一九七四年八月） 128

一六 私の教育理念（一九七五年一月） 138

一七 教育の根本態勢（一九八五年七月三十一日） 148

第二章 詩の波

一 ヨルダン！（一九五二年六月） 155

二 わが路（一九五六年十月二十三日） 159

三 三十年！（一九六〇年晩夏） 161

四 岩つばめ（一九七一年十二月二十三日） 162

五 タンポポ（一九七二年七月二十日） 162

六 愛そのもの（一九七二年十二月二七日） 164

七 詩と無の神学（一九八五年二月七日） 170

八 全十二召団の歌（一九八六年四月一九日） 170

九 第12四国キリスト召団讃歌（一九八六年六月一日） 174

十A 42 深き情けの旅路（一九八六年七月三十一日） 175

十一A 43 主の大饗宴（一九八六年八月一日） 176

十二A 44 パリサイ人と取税人（一九八六年八月二日） 177

十三A 45 霊肉渾然一如（一九八六年八月二日） 178

第三章 感想集

一 私の白線水高時代（一九四六年十月三十一日） 183

二 幕屋的展開（一九五一年十月） 190

三 基督者の使命（一九五二年正月） 193

四 空谷の梵音 197

五 歌道囁語（一九五五年十月一日） 201

六 西洋文化の源泉にして偉大なるドラマたる聖書（一九五八年五月一日） 207

七 私の書斎（一九六七年晩秋） 212

八 祈りとは何か（一九六八年五月一八日） 217

九 『エン・クリスト』誌創刊の辞（一九八〇年夏） 225

十 ルターの足跡を訪ねて 229

伝道の第一声（一九八三年七月二日）

聖霊の戦（一九八三年七月九日）

ルターの聖書翻訳（一九八三年七月一六日）

アナンケー（必然）（一九八三年七月二十三日）

自主と奴隸（一九八三年七月三十日）

十一 「聖霊の愛」の証者たち（一九八三年十一月三十日） 236

十二 八十路（全寿）の峠を迎へて（一九八四年二月七日） 245

十三 武蔵野幕屋（東京キリスト召団）

創立四十五周年記念祭（一九八五年九月二十二日） 254

第四章 紀行集

A 内地伝道旅行

一 聖書一卷の旅（一九五二年年頭伝道旅行） 267

二 信濃路（一九五二年十一月） 281

三 北方伝道（一九五四年四月） 286

四 小諸伝道（一九五四年八月） 298

B 海外旅行

一 ドイツだより 306

a 鍊光術（一九六一年晩秋）

b 飯^{シマ}城雜感（一九六一年十一月）

二 帰路点描（一九六二年五月二五日） 324

三 夏の西ドイツ紀行（一九七六年十二月一五日） 333

四 聖地旅行印象記（一九八一年三月） 341

五 中国旅行印象記（一九八一年十月） 358

第五章 人物回想

序文 回想ということ（一九八六年八月二八日） 373

一 佐々木吉三郎先生（一九八六年九月十日） 376

二 恩寵の跡（一九三二年十二月十三日） 382

三 大阿蘇の恩寵（一九五〇年十二月） 397

四 噫、内村鑑三（一九八一年早春） 402

五 塚本虎二先生（一九八六年八月二八日） 410

六 「主我れを愛す」（一九八〇年四月六日） 414

- 七 即行の巨人関渡（一九八五年七月） 417
八 ゲルマニウム浅井（一九八二年十一月一六日） 421
九 高島鴻子小母さま（一九八六年九月十二日） 424
十 小池政美（一九八六年九月十三日） 429

第六章 独協学園

- 一 天賦に生きる（一九六九年七月一五日） 439
二 敬天愛人（一九七〇年六月五日） 442
三 自然と人生（一九七五年六月二十日） 445
四 他律と自律（一九七五年十二月一五日） 451
五 図書館の世界（一九七六年如月） 455
六 神・天然・福音（一九七四年十二月） 457
七 浩然の気（一九七七年六月二十日） 468
八 寺小屋と塾精神（一九七七年十一月二十日） 474
九 佐久間象山（一九七八年七月一五日） 477
十 峠の囁語（一九七九年一月） 481
十一 独協高等学校第二十三回卒業生に対する式辞（一九七〇年、昭和四十五年） 486

十二 目白台を去るに際して（一九七九年六月九日） 490

十三 目白台十年（一九七九年七月二〇日） 494

一四 第四回独協大学祭所感（一九六九年一月） 502

一五 古典を身読すべし（一九七九年五月一日） 506

一六 『独協百年』刊行に際して（一九七九年五月一日） 509

一七 『独協百年』終刊に際して（一九八一年十二月一日） 514

一八 『目で見る独協百年』序文（一九八三年十月二十二日） 517

一九 『回想』天野貞祐』序文（一九八六年 秋） 519

感想と紀行

第一章 告白と論説

一 キリストと私——絶対恩恵の無即無限無量

(一九八五年五月二六日ペンテコステ記念日)

まづ合掌してから筆を執った。こういう標題があるかと人は問うにちがいない。ところがあるのだと主が応えて下さる。

過越の祭の前、最後の晚餐を迎えるに当たり、イエスは弟子どもの足を洗い給い、ペテロの番がきた。すると彼はイエスに洗足されては勿体ないと思って、「断じていつまでもわが足を洗ひ給はざれ」と言った。これに対してイエスは「我れもし汝を洗はずば、汝われに関はりなし」と返答された(ヨハネ一三・八)。即ちキリストの洗足にはペテロの存亡に関わる重大な意味があった。

「キリストと私」という関係は、洗足関係であって、キリストの方から本願の行為を以て関係づけ給うた絶対恩恵関係であるので、「主が応えて下さる」と書いたわけである。

しからば、キリストの私への恩恵の迫りはどのようにして来たか。紙面に限りがあるから簡単にその由来を記そう。第一は舎兄政美の信仰生活と北京における客死とこれを迎えに行つた母の黄海船上

での失明である。第二は預言者内村鑑三先生の著書と集会である。第三は詩人藤井武先生の自宅集会とその著書である。そして両先生の一九三〇年の召天である。第四は聖書学者塚本虎二先生のイエス伝講義とその著書である。第五の決定的なキリストの迫りは、大阿蘇垂玉温泉瀧見荘において霊的人物手島郁郎氏と共に開いた聖書講筵に際して、直接天界から臨んだ聖霊のバプテスマであった。

パウロの「我れキリストと偕に十字架せられたり。我れ最早生くるに非ず、キリストわが内に生き給うなり」(ガラテヤ二・二〇)が私の根源現実となった。一九五〇年晩秋のことである。

私の「無教会時代」に、十字架の信仰はたしかに築かれていた。しかしそれらはまだ観念の域を脱しきれてはいなかった。祈りがまだ心の域のもので、全身的なものでなかった。ところが、全身的にキリストの中に祈り入る棄身の祈りに聖霊が臨み、霊撃されて始めて、「キリストがわが内」というパウロの告白が本ものとなった。キリストの聖霊が、聖霊なるキリストが、「わが内に」なのである。パウロがさんざん「我れキリストの中に」「キリストわが中に」といつている内住の事態が私自身の内面的霊的現実となり告白となった。

たしかに信仰の次元がちがってきた。聖書のヴェールがとれた。使徒的信仰の現実が身について来た。使徒行伝的な質の不思議なことになって来た。医者がふしぎに思うことが起きて来た。行きつまっている魂、重病的な人々を今までにどれほど、キリストは私如き者を通して助け給うたか。ただ聖名を讃えるばかりである。

さてイエス自身、「自分は何も出来ない」「私が教えているのではない」「なぜ私のことを善いと言
うか、神の外に善きものはない」等と言って、イエスは自身を何ものともせず、ただ父なる神を一切
とし、自分の意思を棄て、ただ父の意思を求めた。即ちイエスは神の前に無者であった。すると神の
無限無量の内容が彼の中に入って来た。実に「父わが内に」「我れ父の内に」の一体一如の現実がキ
リスト・イエスの信仰の現実であったから（ヨハネ第十七章）、「我と父とは一つなり」と告白した
（ヨハネ一〇・三〇）。

「恵福なる哉、霊の貧しき者、天国はその人の有なり」（マタイ五・三）とはイエス自身の告白であ
る。「霊が貧しい」とは上述の如く自分を何ものともしない無現実のことである。「天国」即ち神
の臨在がその人の有とは、イエス自身が天国体であるという告白である。

それでは私はどうしたらよいのか。するとこの第一言はこう響いて来た。「恵まれたる哉、汝、わ
が十字架により霊の貧しくされた者よ、天国即ち天国体なる聖霊の我れ汝の中にあり」と。かくて私
は畳の上に平伏した、異言がほとばしった。山上の第一言はガラテヤ書二・二〇と同じことであるの
を知った。自我という罪が根源的に贖われた無私という根源現実なる「無」は禅宗的な悟りの無では
ない。絶対恩恵の無の現実である。そこに聖霊が臨まざるを得ない。

かくて十字架と聖霊は不可離の関係にある。キリストは十字架の贖罪を果してしかるのち聖霊を臨
ましめた。十字架は私に無現実を与え、聖霊は私に無限無量の質を賜う。即ち無即無限無量なるキ

リストは十字架・聖霊によって不滅の関わりを私に賜っている。

そういう絶対恩寵の焦点たる十字架・聖霊は、いかなる人を通してでも、その人らしきあり方を以てキリストの栄光を現じ給う。指紋が異なる如く、一人一人は天下一品なのである。万人はこの無即無量之恩恵の力によって、大調和の文化文明の百花を咲かせ万果を結ばせ得るのに、この二十世紀末はサタンの力にあやつられて何たる世界破滅への危機的現実であるか。

キリスト教界は、一般に申して、十字架・聖霊の使徒的信仰の現実に、回歸しなければ、キリストは天にて歎異し給う。拙著『無者キリスト』及び『無の神学』において私はこのことを叫んでいるが、『棄てられたる石』の如くされている。いつかこの石は別な形で、ダンテの如く、ゲーテの如く全世界に叫び且つ謳うだろう。

二 ルターと私——聖霊による“信仰”

(一九八五・五・十二)

旧制水戸高校時代、私は腸カタルが原因で病弱の歳月を四年間（一年休学のため）過ごした。しかし、たましいの世界で曙光を仰ぎ、私の人生道に確かな方針が据えられた。

たましいの世界に現れて来た星々は、内村鑑三（当時是在世中）、ルター、ダンテ、ゲーテ、ヒルティ、ハイネ、グリルバルツェル等であった。

さてルターとの関わりはどのようにして始まったか。私は文科乙類即ち独乙語を第一外国語として学ぶ学生であったので、現代ドイツ語の土台を据えたルター訳ドイツ語聖書は読まなければならないと思い、ダンテの場合と同じく平野書店に出かけて行った。すると大版金縁の聖書が唯一冊、突然私にこれだと呼びかけているかのように、書架にあった。どうして田舎市（まち）の本屋にこんな立派な独乙語聖書が備えてあったのか、不思議にすら思った。その聖書の扉に横文字で一九二四年十一月十日と日付を書いた。

その翌年、わが国ルター研究の創始者であり權威である佐藤繁彦先生が講演に來られた。講演会場に当てられた柔道場に向き、先生の真正面最前列最短距離に座って拝聴した。先生の白熱的な力強い講演に感激した。寮に帰ってルターの生涯をしらべたところ、私がルター・ビーベル（聖書）を買った日が、何とまたルターの誕生日ではないか。どうして私はこういう神秘的な冥合に出会ったのか。

東大独文科に入ってから、佐藤先生の「ルター研究」誌は電車通学の往復でも読んだ。丸善でカルル・ホルの名著「ルター」を見つけ、これに喰いついたりした。その後、先生の博士論文「ルターの根本思想」を読み、先生がいかにルター精神をもって神学しておられるかに感動。無教会流の神学嫌いの偏狭に対して、あたまたの神学ではなく、ルター的なたましいの神学を神学することの重要性を知った。それはカントが哲学は哲学することであると言ったのと同然である。そういう精神で私は「無教会神学論」を発表した（著作集第三巻「無の神学」を参照されたい）。

ルター神学の珠玉篇は「キリスト者の自由」と「ロマ書序文」であろう。カルヴァンは正に組織神学者であるが、ルターのは超えるいは非組織神学で、その元祖はパウロ。そのまた源流はイザヤ書である。神が歴史的啓示をもって投げかけている神の言と行為とは劇的であり、矛盾の要素をもっている。聖書が素材である限り、聖書の啓示の真理を組織化するとその靈的生命性、劇的構造の平板化、機械化の危険が多分にある。プラトーンの哲学が論理的構造でなく文学的対話の構成であるところに彼の哲学のすばらしさがあり、旧約のヨブ記が対話態であるところに、生の神学なまが生きている。

ルターの『キリスト者の自由』と『ロマ書序文』のテキストにかなり詳しい註解をつけて南江堂から発行してあるので、読者の方々は是非参考にされたい。ルターの『キリスト者の自由』と親鸞の『歎異抄』はその信仰の類似性とそれぞれの特性において、福音と仏教の二珠玉篇と思う（著作集第七巻『聖書の人ルター』の中で論じた）。

ルターは音楽を神学の姉妹だと言い、悪魔払いの最適な武器とした。彼自ら作詞、作曲し、自分でラウテ琴を弾きながら讃美歌で神・キリストを讃えた。私も知らぬ間に七十歌ほど讃歌を作った。作曲の才能がないから、教団讃美歌の好きな歌調や一般の名曲、例えば「荒城の月」、「美しき天然」、「青葉の笛」、「花」、「噫玉杯」等々、歴史的なものは自由に用いさせていただいている。

ルター・ビーベルといえば、旧新約聖書全訳の初版一五三四年版（ライプツィヒ大学図書館所蔵）の複製を神田の古書店で見つけたが、既に四十五年間自宅の一角を会堂にして聖書講筵を実施しているが、このルター聖書を講壇の左に置いて参考にしている。ルターの生の独乙語は何とも言えない古典的詩的な格調と霊的な迫力を感じる。

それではロマ書序文の中からルターの信仰についての著しい一言を紹介しておく。「まことの信仰は、我々の中に於ける神の行為であって、この行為は我々を変革し、新たに神から生れしめる。それはヨハネ福音書一・一三にあるように。そして旧きアダム【性来の我れ】を殺し、我々を心に於て情緒に於てまたあらゆる能力に於て全く別人にする、しかも聖霊を共に齎らすものである。噫、信仰と

は何と生き生きとした能動的な活動的な、有力なことからではないか。であるので間断なく善きことを実現しないでは居られないのである。信仰は善き行為がなされ得るか否かを問はない。そんな問いを発しないうちに信仰は善き行為をなしている。「信仰のみ」といったルターは信行一如の消息を喝破した。信仰は信交であり、信行である。これは聖霊の力による。この点ルターをもパウロをも見そこなつてはならない。信仰そのものが全身をもつてする十字架と聖霊の体受であるからである。

三 ヒルティ―と私——「愛は一切に勝つ」

(一九八五・四・二八)

旧制水戸高校二年生のとき、小牧健夫教授のドイツ語の授業において、ヒルティ―の『幸福論』全三巻からの入門的な三、四の論説を学んでヒルティ―を知った。三年生のとき、ヒルティ―の『眠れぬ夜のために』上下二巻を熟読し、後年第一巻を翻訳した(白水社刊)。東大独乙文学科の学生時代には、大学からの帰途、神田の古本店街で——その当時は英、独、仏の洋書がふんだんにあったので——独文学、哲学、宗教関係及び英詩関係の洋書を漁るのが何よりの楽しみであったが、その際ヒルティ―の宗教道德論説の諸著作はほとんど全部買い集めた。これもほとんど全部読んだので後年『百世の師ヒルティ―』という一書を私の著作集の第五巻として著わすことになった。

ヒルティ―(一八三三・二・二八—一九〇九・一〇・一二)はドイツ系のスイス人で、ベルン大学の法学教授であり、スイス陸軍の裁判長を勤めたこともあり、国法学、国際法学の權威でもあり、弁護士としては、稀有の模範的存在であった。非常な勤勉家で、かつ広範な古典の読書家であり、弱者

の友としての慈善家でもあった。

彼の全生活の原動力また光源は正に聖書、そのもので、旧新約聖書を実によく身読していることは、彼の著作に出てくる自由にして適切な聖句の引用や指摘を見ても充分うなずける。

私の信仰の土台は内村鑑三、藤井武の両先生の集会和諸著書ではあったが、ヒルティーの諸著書は前二者と綾織り成して、たましいの世界に確かな指標となり、ゆたかな内容を与えてくれた。因みに言うと、日本におけるヒルティーの愛好者としての第一人者は藤井の親友塚本虎二で、この先生からは、内村、藤井召天後、聖書の学的研究豊かなイエス伝を学んだ。

ところで日本にヒルティーを最初に紹介した人は、私の青年時代に存命であられた東大の哲学教授ラファエル・ケーベル博士であるが、その『続小品集』の中で「ヒルティーの著作のどれを繙いてみても、どの本に於ても、また殆どどの頁に於ても、人々は明瞭に、單純に、断乎として語られている著しい思想に出会う。これらの思想は、ある力強い確信に基づいており、内的生活の領域において非常な人間知と個人的経験の有ることを証している」と述べているが正に然りである。

その「力強い確信」は、さきにも触れたように聖書の身読から来ているもので、彼の言説は本質的に神、キリスト主体に因る告白である。それでは、彼の片言隻句を紹介しよう。

「祈りと思索とは決して対立するものではない。それどころか、両者は共に真理の完全なる把握のために必要である。自ら探究するにも、また神の啓示にあづかるためにも、他方なくして一方のみでは、

両者ある場合のように完全には作用し得ない」

「神の先見千慮ある徐々たる導きは、このようなことを自ら体験しないかぎりには、誰れも信じ得ない最も不可思議な経験の一つである。……人間はおのがもつ一切のものを犠牲に供する覚悟を絶えずしていなければならぬ。特にこれのみはわが有（もの）と呼んでいるところのおのが意志をこそ、つねに神に全く任せ切る心構へであらねばならぬ」

「我ら一たび全く愛の国に踏み入らんか、この世がどんなに欠けたものであらうとも、なほ此処は美しく豊かなものとなる。この世はもっぱら愛を生きたための機会から成り立っているからである」

「我々の思想体系などは、神にとっては何ら障害ではなく、神のみ霊の息吹きに遭えば一瞬にして破れ去る蜘蛛の巣にすぎない」

「初代の使徒時代の天与の賜（カリスマ）は今も確かに存在する。この賜の有る人々は、それを極めてよく知っている。ただこのような霊能は是非用いられねばならない」（以上、私訳）。

以上は『眠られぬ夜のために』の上巻下巻から拾いあげたものにすぎないが、ヒルティ―の面目躍如たる短言隻語である。

彼の信仰はヨハネ的である。ヨハネ的な神、キリスト、我の霊的合一の神秘性をもっている。「愛は一切に勝つ」とは彼の墓碑銘である。愛が一切に勝つとは、敵を倒すことではない。逆説的に言へば、愛で相手を圧倒して救い上げること、荷い上げること、包摂することである。キリストのみ霊の

力がそれを可能ならしめ給う。

私も使徒的信仰の次元を賜っているので、ヒルティーの言が全的に然りと、あたまでではなく、からだで受け容れ得るのである。

人々はヒルティーの言説が、キリストと一如的な深い信仰の現実から発しているものであることを改めて認識すべきである。彼は処世的な「幸福」を説いているのでは断じてなく、天的な幸福、愛の世界を現すべき悲願をあらゆる角度から諄々切々と語っている。

四 ダンテと私——神を目指す上昇の愛

(一九八五・五・四)

超一流の詩人「ダンテ」と私などというテーマは何ごとだと人々は思うにちがいない。その通りである。しかしキリスト新聞の編集局からそのように課せられたので仕方がない。だがこんなふしぎな宿命となったのは編集局を通して天つ風がそうさせたものと私は信じている。さきには「ヒルテューと私」、次は「ルターと私」その次は「ゲーテと私」、そしてオメガには「キリストと私」というとんでもない題目で書くのである。読者の方々はしかしこれら五回が終わると、ああそうかと誤解が溶けるものと思っている。

旧制水戸高校生のとき、水戸の上市の平野書店で中山昌樹著述『詩聖ダンテ』（洛陽堂刊四六版九三頁）を見つけた。私は大方本の扉に買った年月日をつける癖がある。ところがこの日はその本を読んでいるうちにダンテが一三二一年の正にこの日、即ち、九月十四日に召天していることを知って、何たる冥合ぞやと思った。ダンテとのふしぎな^いしを感じて、その本を感激して読破したあと、中

山詠の『神曲』を始め、とうとう全集を買って読んだ。その後、大学時代以後、神田の古本屋で、『神曲』の原書、諸種の日本語、英訳、独訳を買い集め、相当あとになって、とある古書展で田中耕太郎博士所蔵であったダンテ文献をゴッソリ買った。

一九四七年の夏には新教出版社企画の『苦難の意義』という論説集に「ダンテの苦難」という論説を書いた。それは私の著作集第二巻『芸術のたましい』に載っている。

大学時代には、ダンテの好きであったわが信仰上の恩師藤井武先生の指導のもとで、日曜の午后、桜新町の草原の丘の上で、二、三人の学友と共に『神曲』を読みかつ学んだ楽しい思い出もある。

ともあれ、ダンテの『神曲』は、ゲーテの『ファウスト』と共に、生涯の貴き伴侶である。易道の研究者によると、私には大きな星が二つ光っている由、それは象徴的に言うにダンテとゲーテだと私は申したい。

ところでここに「ダンテと私」というとき、何を焦点として今書こうとしているのか。

人間ダンテは周知の如くベアトリーチェという女性なしにはその存在の意義を失う詩人である。九歳の少年ダンテがほぼ同年のこの少女を一瞥した瞬間、その全身の血が頭（ふる）え、クオレ（心）の最奥に住む「生命の霊」が震憾した、という。これは第一の瞬間であった。その後九年を経て、ゆくりなくもアルノ河の橋のほとりで妙齢に達している彼女に出遭い、得も言われぬ優しき会釈を受けた。ダンテは「福祉のあらん限りをそのとき見極めた」という。この第二の瞬間の虹のような美はダ

ンテの心底に永遠の映像を刻印した。やがて人妻となったが、二十四年を一期としてこの地上の稀有の美女は天上の明星に化した。これはダンテにとって決定的な第三の瞬間となった。彼はその後「新生」(ラ・ヴィータ・ヌォヴァ)という叙情詩集を書き、その巻末に、「私はどの女性についても謳はれたためしのないことを彼女について謳はうと望んでいる……」とある。その大いなる結果が大詩篇『神曲』である。

ダンテはベアトリーチェにおいて女性美の極致の心身の相を見たが、神の創造のこの傑作たるベアトリーチェに案内されて天界(パラディース)を神へと導かれてゆく。ダンテのクオレを全的に魅了したベアトリーチェではあるが、彼女は究極の対象ではない。神を目的とした上昇型の恋愛である。もちろん現実の彼女はダンテによって詩的ベアトリーチェに変貌されている。その彼女はいわば媒介となつてダンテを神にひきあげてゆく。ゲーテが『ファウスト』の終句において、「永遠に女性的なるもの我らを引きあぐ」と詠った詩句をダンテは既に身証していた。媒介者ベアトリーチェはダンテにとって現実であると同時に詩的存在である。詩が現実であり、現実が詩であるという現実と詩の神秘的な融合の境地が詩的現実である。それは祈りの世界で根源現実を体験するのとアナログである。相対界即絶対界のその消息をキリストは「天国は汝らのうちに在り」と喝破し給うた。

そしてダンテは人間というものの現実界を「インフェルノ」(地獄)において、「ブルガトリオ」(煉獄)において、そして「パラディース」(天国)においてつづさからだで見ている。この天国が

絶対界的現実であることは黙示録に通ずる。

ダンテはイタリア・ルネサンスの曙の明星であり、宗教改革の曙光的存在とも言い得る時代の子であり、かつ時代を超越している。故里フィレンツェから追放され、十九年の流浪の旅路を辿り、血涙をもって『神曲』一巻を世に投じた。人類に義と愛の大警告を今こそ叫んでいるのではないか。世界の政治家よ、ダンテの『神曲』を改めて読まれよ！。この危機的二十世紀末に、靈的救済の讃歌をうたいつつ歩く旅人がどこかにいる。彼はいつか「新しき詩（うた）」を世界に投ずるであらう。

五 ゲーテと私——『ファウスト』、神の息吹を感じて

(一九八五・五・一九)

旧制水戸高校時代、同じく小牧健夫教授のドイツ語授業で、ゲーテのあの有名な『若きウェルテルのなやみ』も教わった。これがゲーテとの出会いであった。この情感の深い、しかも教養のゆたかな恋愛小説の内容に魅せられたあの授業から受けた浪漫的な雰囲気は今でもほのぼのと甦ってくる想いがする。

高校時代は、しかしヒルティールターへの関心の方が強かったので、ゲーテとダンテは一応おあずけのかたちであった。

東大独文科に入ってみると、木村謹治教授の「若きゲーテ」(博士論文)の講義ではないか。ゲーテを生きているが如き心境の名講義に心を奪われた。ゲーテの偉大さが次第に見えてきた。ゲーテの恋愛につまりずいてはゲーテを見損ずる。その点一般のキリスト者はどうもゲーテにつまりずいている。ダンテの恋愛は星空の明星ベアトリーチェに焦点を結んでいるが、ゲーテは真珠を玉の緒につらねた

ように、生涯のそれぞれの時期にのっぴきならぬ恋愛を貫いて行つた。ダンテもゲーテも恋愛の仕方はちがっていても、神より出でて神に帰る道程におけるたましいの燃焼に不可欠の要素であつたのである（拙著第二巻『芸術のたましい』を是非見ていただきたい）。

大学のとき、『ウエルテル』を読みかえした。そのとき五月十日の左記の一節がゲーテ本然の相であることに気がついた。

「彼がいとおしくも僕の囲りに烟り、中空の太陽が昼なほ暗く見通しもきかない僕の森の上に憩い、わづかの光線がチラホラと森の聖所に忍び入っている。そして僕が溪流沿いの小高い草の中に身を横たえ、近くの地面の沢山の小草が目につくと莖の間の小さな世界のうごめきを、虫や蚊の無数の究め難いすがたを、胸もと間近かに感じ、そして我々をその似姿に創造された全能者の現在を感じ、我々を永遠の歡喜の中に漂はせつつ荷い、且つ保つておられる一切を愛する者の息吹きを感じる。友よ！さてそこで僕の眼の囲りが黄昏れて、周囲の世界も天空も全く僕のたましいの中に、あたかも恋人の姿のように安らう。そんな時に僕はしばしば憧憬の念にかられて思う。へああ、これを再現できればいいなあ、紙面に息吹き込めればなあ、かくもゆたかに、かくもあつく自分の中に生きているものを！自分の魂が無限の神の鏡であるように、それが自分の魂の鏡となるように再現できたらなあ！——友よ——だが僕はそのために降参だ。僕はこれらの現象の素晴らしさに圧倒されている」。

（私訳）

このひとくだけに見るように、ゲーテは大自然のふところの中に自分の存在を投入している。その大自然は太陽の光の中にある。そしてそこで体感している相は何か。全能者の現在である。神の似姿に創造されている自分自身である。そのような神の息吹きをも体感している彼である。そしてその大自然は彼の魂に恋人の如く映している。しかも彼の魂は神を宿す鏡として自覚され、その魂であるような作品を作りたいと願っている。このように今体感している一切に圧倒されている、と告白している。

若きゲーテのこの相は、彼の全生涯を貫いている最も内面の相である。神、大自然、女性、我という渾然たる融合がゲーテの本質である。

ゲーテは生涯を通して聖書をからだで読んでいた。彼は聖書を「万巻の書中の書」と呼んだ。彼の驚くべき多種多作の作品の中には聖書の言葉や思想が自由に変貌して溶けこんでいる。聖書を読まずしてゲーテの文学はつかめない。また聖書を知りながらゲーテを読めないパリサイも困ったものである。

ゲーテはパウロの「我らは神のうちに生き動き在るなり」（使徒行伝一七・二八）の言を特愛していた。彼自身本当にそういうたましいであつたからである。彼は観念的な信仰を空しいと感じていたから、ヨハネによる福音書一・一を「元始に行爲ありき」とファウストをして訳させているほどである。彼の作品には、光、生命、愛の消息があふれている。その点まことにヨハネ的で、実はキリストに近

い消息である。彼は靈界のキリスト、自然界の太陽に無条件の畏敬の念をもっていた。彼は実にあらゆるイズム（主義）を越えた人物である。

彼は太陽が中天にあり、時計が正午の時報を告げている時に生まれた「太陽の子」であった。彼はこの世界的大作『ファウスト』の起句を「太陽」で始めて、結句を「永遠の女性我らを引きあぐ」で終らしているその余韻は好いが、私はこれに「愛と歓喜をもて、聖なる太陽【神】へ！」という二行の詩句をつけ加えた。ゲーテは天界でうなずいているだろう。

私も実は一九〇四年二月七日の日曜日の太陽が中天に指しかかっている時に生まれたと聞かされている。

ダンテやゲーテの如き偉大なる人物は童心をもち、全一的である。彼らはたましいの世界の劇的な矛盾を体験しつつ宇宙的調和に帰入して行くのであった。

私は昼は太陽の詩人ゲーテを相手に、夜は星の詩人ダンテを相手に、詩の国の旅についた。これから十二年間は谷を渡り山を越え、である。キリストの聖霊が導者となって下さるから有難き極みである。

六 ベートーヴェンと私——力と愛と祈りの交響曲

(一九八五・五・一六)

古典音楽を聴くことは好きであっても、音楽の世界は全くの素人である。そんな私がなぜこんな題で書くのか。それは人間ベートーヴェンとたましいの世界で、ある火花の散るのを感じるからである。大学時代にゲーテに対して深い関心をもち始めたことはさきにも述べたが、私は卒論の研究対象はシラーに定めていた。そんなわけである「第九」の第四楽章に出てくるシラーの「歓喜に寄す」の原詩は愛誦していた(その完訳は私の著作集第二巻『芸術のたましい』に載っているので御参照下さい)。

我々の大学時代の東大文学部は古典時代と言ってよいだろう。木村教授のゲーテ、新関教授のシラー、桑木教授のカント、兼常教授のベートーヴェン。そういう学的雰囲気は我々の人間形成には有難いものであった。

大学からの帰途、神田・駿河台のあたりを散歩していた私は地球堂という額縁・絵画を売る店に、

ある時立ち寄った。すると、今でもありありと想い出すが、真正面に、深い眼光の人の肖像画が掲げられてあった。ベートーヴェン！　じーっと見つめた。ベートーヴェンもじーっと見つめている。これは私の書斎に掲げたいと次の瞬間に思った。「あれはいかほどですか」「五円です」「いただきます」簡単なとりきめである。当時のお小遣いの月額の半分である。これはドイツ製で、それから今日まで約六十年間、私の書斎に掲げられてある。このベートーヴェンにどれほど励まされて来ただろう。特に孤軍の境涯に在って。

彼は一八一五年十月十九日にマリ・エルデーディ伯爵夫人に宛てた手紙の中で、「無限の精霊を有った我々有限者は苦難と歓喜のために生まれているのです。ですからほとんどこう言ってよいでしょう。秀れた人々は苦難を突き貫けて、歓喜を得るのだと」(私訳)と語っている。

実際ベートーヴェンは、幼年時代から地上の生涯の果てるまで、さまざまな苦難に鍛えられ、苦しめられ、これに耐え、これに打ち勝ったのであった。この手紙を書いたころは既に全聾的な耳疾の人であった。

彼の音楽は、ゲーテの文学がそうであったように、すべてその時その処における告白であった。言葉の生命は、その言葉の奥にあるひびきである。その意味において、音楽は言葉の奥のひびきをそのまま告白しているものである。強烈な魂のベートーヴェンが深刻な体験を、旺盛な情感と練達な作曲力で表現した。

彼の耳疾は遺伝的な要素に因ったが、彼はこう告白している。「まことに苛酷な宿命が私を打った。だが私は運命の意志に自らをゆだね、神に常にただ懇願する。私がなほこの地上でこの生に於て死の苦しみに耐えねばならない限り欠乏から守られるように、神がその神意を動かして下さることを。然らばこのことは、私の宿命が、どんなに苛酷であり、おぞましくあろうとも、至高者の意志にゆだねて宿命に耐えるだけの力を私に与えるであろう」（私訳）。

ダンテが、地獄、煉獄を経て、天国に到達したあの『神曲』を彼自らは『喜劇』と呼んだように、ベートーヴェンも、この世を去る三日前に「歓呼せよ、友らよ、喜劇は終わった」と呼んだそのことは、あの『第九交響曲』の終曲が証している。

歓喜（よろこび）よ神々の美しき火花よ

楽園に生（あ）れ出でし娘子よ（むすめご）！

相抱けよや千万（ちよろず）の人々よ！

この接吻（くちづけ）を遍（あまね）く世界に！

同胞（はらから）よ星の幕屋の彼方には

愛の御父ぞ住み給う

と謳って全世界に愛に因る歓喜を叫びかけ、祈りかけている！ シラー、ベートーヴェンのこの大悲願が年ごとに演奏され謳歌されているが、それが徒らに虚空に消えるのでは空の空なる哉。

最近ベートーヴェンを想って作詞作曲した。

一 噫ベートーヴェン！ 生涯の

彼の涙を誰か知る

「第二の我」は遂に無し

この世は仮の宿なりし

二 音はひびけど音の無き

旅路を独り辿りつつ

森と小川を眼にて聴き

パストーラルを奏でたり

三 見よ此の人ぞ！ 孤独なる

音の芸術（たくみ）の巨匠なり

なやみ苦しみ突き貫けて

世に投ぜしは「第九」なり

四 孤独なれどもその心

力と愛にみなぎりて

あらゆる人の胸をうつ

音曲（しらべ）の波はかぎりなし

噫、ベートーヴェン！

「永遠の恋人」を「第二の我」として遂に抱き得なかったが、彼の音楽はなやみ、苦しみ、悲しみ、涙をもつ全世界の人々を抱くのである。超大国の代表者たちが、第九交響曲の壮大雄渾な歓喜の調べに、心の緒琴の調べを合わせて、直ちに核兵器全廃への緒につかんことこそ何より願わしきことである。合掌。

（「キリスト新聞」寄稿）

七 視よ 此の人！ (ECCE HOMO)

(一九八五・四)

キリスト

ローマの第五代総督ポンテオ・ピラトは官邸にイエスを呼び出して、問答をしたが、イエスが真理を証しするために自分は来たのだと言ったら、「真理とは何だ」と訊いた(ヨハネ一八・三八)。「真理」のギリシャ語「アレーテΙΑ」は「レートー」「隠れる」という動詞から来ていて、それが「ア」で否定されて、「かくれていないもの」「あらはなるもの」「ありのままのもの」「本当のもの」、現実、事実、真実といった原義で、要するに「本もの」のことで「真理」といったロゴスのなびきよりも「道義」といったエスト的なびきである。ヘブライ語なら「アーメン」から来ている名詞「エメツ」「エムナー」で、この場合は「ハー・エメツ」。正に「まことなるもの」の意である。だからピラトは「本ものとは何だ」といった語気である。

その後、ピラトはイエスに茨の冠をかぶせ、紫色の上衣を着せ、ユダヤ人の王者と侮辱して言った、

「視よ、此の人だ！」と。

彼はさきに「本ものとは何か」と問いかけた。そしてこんどは「視よ、この人だ！」と祭司長や下役どもに叫んだ。実はピラト自身が自問自答しているのに気がついていない。即ち、「本ものとは何かだ」「視よ、この人だ！」（「視よ、この人を」ではない）という自問自答が成りたっているのを自ら気がついていない。

本もの（人のうちの人）とはイエス・キリスト。彼の外にそういう絶対次元の「本もの」はいない。本ものは正にキリスト・イエスなのである。

ベートーヴェン

オーストリアの詩人グリルバルツェルがベートーヴェンの召天即ち一八二七年三月二十六日の後三日目の二十九日墓前で集いで弔意の演説をしているが、その中に次のような言がある。

「彼は芸術家であった。彼が在りしところのものは唯芸術によってのみであった。生命の棘が彼を深く傷つけた。それで難破者が岸にしがみつこうように、彼は汝が腕に遁れ入った。おお汝善と真との同じく素晴らしき姉妹にして、なやみの慰め手なる天来の芸術よ！ 彼は確かと汝を抱いてはなさなかった。汝がそこを通して彼の許に踏み入り彼に語っていたその門扉が閉ざされてさえも、彼の耳が聳いて汝が美のすがたに対して謂はば盲してすらも、彼は尚も絶えず汝がすがたを胸に抱き、彼が仆れでもなほすがたは彼の胸の上に寄り添うていた。

巨獣へモートが大海原を狂い泳ぎぬくように、彼は彼の芸術の全域を飛翔しつくした。

堂々たる交響楽よ！へ歓喜よ、神々の美しき火花よ！汝白鳥の歌よ！歌謡と絃楽の女神よ！彼のおくつきを囲んで立ち並び、月桂樹ローレルの緑葉みどりばを撒き散らせよ！

彼は芸術家であつた、彼はしかしまた人間であつた。言葉の最も全き意味に在つての人間であつた。……彼は世にすべてを与えたが、世からは何も受けなかつた。彼は孤独のままであつた。彼は第二の我を見出さなかつたからである。だが死に到るまで彼はあらゆる人に人間らしき心をもっていた。血縁に対しては父らしき心を、全世界には財（楽曲）と血（身命）のすべてを捧げた。

彼はこのように在つた、このように死んだ、そしてこのようにあらゆる時代に生き往くであらう。（傍点訳者）

グリルバルツェルの右の言葉は切々と胸に迫る。全文はこれの三倍程のものであるが、力強い深い名演説である。彼は一八二七年の十一月のある日、ベートーヴェン記念碑除幕式に際しても演説をしたが、その中に次のような言葉がある。

「この石碑は、丁度彼自身が在りし日にそうであつたように簡素であり、大きくない。これが大きければ大きい程、それはこの人の偉大さに対していよいよ逆に笑うべき距離をつくることになる。碑はただベートーヴェンという名のみが記されてある。……

ここに横たはれる人は靈感ゆたけき人であつた！唯だ一つを追求し、唯だ一つの為に耐え忍び、

一切を唯一つのために投げ棄てながらこの人は生涯を貰いた。妻なく、子なく、喜びも殆どなく、楽しみも乏しく、一方の眼が彼を顧みれば、これを摘抉するといった気魄で彼は目的に向って邁進したのであった。」

右の引用の数倍の長さの演説であるが、上掲二篇の姉妹演説はよくベートーヴェンの本質を喝破したもので、昔から私は愛誦している。

正に「視よ、この人ぞ！」である。運命、環境そしておのれに打ち勝ち音楽作曲に一生を燃やした人だ！ 彼自身ある手紙の中で「Durch Leiden Freude」「艱苦を突き貫けて歓喜！」という句を吐き、〈Plaudite, amici, comedia finita est〉「歓呼せよ、友らよ、喜劇は終わった」と臨終の三日前に叫んだと謂う。腸の中に落ちた彼の涙は火となり、歓喜の曲と化したのである。

八 人間革命への路——一九五〇年降誕節

(一九五〇・十二)

実存の神ヤーウエー、シオンより獅子の如く呼号し、エルサレムより雷霆の如く轟き給ひしとき、牧人の牧場は呻き、カルメルの巔きは枯れた。生ける神の声は紀元前八世紀の真昼時に、当時の諸邦に向つて霹靂の如く鳴り響いた。スリヤの首都ダマスコがまづ槍玉に挙がり「ダマスコは三つの罪あり、四つの罪あれば、我れ必ず之を罰して赦さじ……」(アモス一・三)と宣告される。ペリシテもフェニキアも、エドムもアンモンも、モアブも、ユダもそしてイスラエルも、その不虔と不義、虚偽と邪惡を苛責なく指摘され、残滓なく曝露される。誰かまたいづれの国か、生ける神の前に自らをごまかし得ん！ イスラエルに対するヤーウエーの聖情は反語となつて責める。「汝らベテルに往きて罪を犯し、ギルガルに往きて益々多くの罪を犯せ」(アモス四・四) 預言者アモスの靈眼には、救うべくもなきイスラエル王国の滅亡の影が映じた。「處女イスラエルは仆れて復た起きあがらず、彼女は己れの地にうち倒さる。之を扶け起す者なし」(同五・二)



1957年4月21日復活祭武蔵野幕屋の兄弟姉妹

「陽が真昼に没し、地が白昼に暗くなる日」
 (同八・二) はパンの乏しきよりも、水に渇くよりも、大なる饑饉のもとに来る饑飢とは何か、生ける神の言に聴かざる靈の枯渇である。耳ある者は聴くべし。アモスの預言はビリビリと今の世に鳴り渡る

世の人々よ、愛する青年男女よ！ 生ける神の厳かな言をよそ言^{こと}として聞き流し、読み過ごし、或は之を嘲けり棄てることほど畏るべきはない。止めよ、理性の巧智と、論理のからくり
 に空転するの空しさを。神の生ける言は新たに烈しく、感受されねばならない。アモスを通して烈火の終末的審判の聲を降し給ひし神（アモス九・二―四参照）は、併しまた救いへの路を示し給うた。曰く「汝ら我を求めよ、さらば生くべし」（同五・四）イエスが「求めよ、さらば

与えられん」と言ひ給ひし意は、実にこのアモスの生ける神を求めよ、に通ずる。「我を求めよ！」と迫り給う神は、我らを生かさんとの悲願を有ち給えばこそ此く迫り給うのである。アモスを通しての終末的審判の宣告のかげに、この救ひへの血路が拓かれていることを見のがしてはならない。「万軍の神、ヤーウエー、或はヨセフの遺れる者を憐みたまはん」(五・一五)をアモスへの預言として私は見たいと思う。徹底的審判と矛盾する救いへの希望の一閃にアモスの切なる祈りを聴く審判はサタンのものではなく、神のなし給うものである限り、そのかげに、審判の対象をサタンの勢力から救い出ださんとのあわれみの意志が動いていることを信すべきである。問題はただ今日もなお人間が、然り、日本人が「神に立ち帰らん」と志すか否かにある。(同四・六、八、九、一〇、一一)

引き継いでホセアが出現したときのイスラエルの社会道徳、宗教状態は「姦淫」を以て表現されるに相応しいものであつた。それは正に「淫の霊」(四・一二、五・四)がその心身を支配して「ヤーウエーを知る」(四・一五)という真に実存的な交りから離叛していた。「誠実なる愛情」(四・一)が絶えて、そこには姦淫が昼も夜も横行し、呪詛と虚偽の果ては強盗と殺人であり、血が血につゞいて流れるという惨状である(四・二)。我らは今こゝにホセア書に漲る不信不貞への警告の文字をつらねて二十世紀の現代社会に対して警鐘を鳴らすことが出来る。併しそれは或る意味で最早徒らであろう。噫……何となれば、現代人の情性はホセアの痛み嘆きしものを、快しとするほど墮落しているからである。機械文明と唯物史観の現場にあつて、享楽慾と闘争慾に飽満していると見える現代人の矯慢

は、神に背き、神を嘲り、神を忘れ去っている（同二三・六）。「悔改はかくれて我が目に見えず」（同二三・一四）ホセアにとつてイスラエルはどん底の不倫状態で救うべくもないものであつたが、それをも愛して棄てない神の愛をホセアは身を以て、生きることを神に命ぜられた。

その創造し給ひし個人をも民族をも限りなく愛惜し給う神に我らの出会う場所はどこであるか。それは荒野であり（ホセア二・一四）、神の荒野は都の巷にもある。夜更けて、また朝まだき、聖霊の神に親しく面接するところが即ち荒野である。かゝる荒野が魂の故里である。実にいつ、いつこにても、それが電車の中であらうと、どういう雑踏であらうとも、祈り心となるところに荒野は現するのである。かかる質的荒野を知らざる者は神に出会うことが出来ない。啓示の神は正に荒野の神であり、荒野的地盤にのみ聖国をうち建て給う神である。かかる荒野の上に打ち建てられざる文化世界は必ず自己崩壊する。これは絶対に真理である。人間革命はかかる消息の中に成つてゆく。神は聖書を通して此の如く示し給う。ホセアやエレミヤが荒野の神とその神の荒野の愛（ホセア二・一四、一五。エレミヤ三一・二、三）を限りなくなつかしむ所以は正にここにある！パウロのアラビヤがそうであつた。聖霊は現実、ラヂオの電波よりも烈しく降りそぐものであることを、私はこの秋、大阿蘇の垂玉の峡谷に於て信友手島郁郎氏の祈りの霊場に於て体験した。その「聖霊の愛」を親しく感受しないのが、現代クリスチャンの失われたる現実である。信仰をしてその觀念化、お題目化により生ける、実存の信仰に立ち帰らしめよ。預言者はそんな「信仰」の觀念的論議などを夢の中でもやる暇さえな

かつた。何と、座談とか対談の流行することよ。漫談ならともかく、それが神の真理に関わることに於てすら横行するとは。何ゆえに神と坐談しないのか。「人間革命」とは何も大げさなことを言わうとしているのではない。危険思想でも何でもない。人間革命は正にこの最も親しい神との坐談から始まることだからなのである。

預言者も使徒たちもみんな、神と対談、坐談した人たちであつた。そしてイエスこそ最も親しく神のふところにとびこんだ人であつた。

「信仰なき私をおあわれみ下さい。お父様！ 聖子イエスを通しての、あのあなたの愛によりたのみです。いつもいつも新しくあなたのものとして下さい。聖愛の神様、この五体にみなぎって下さい。どうか、これを感じる存分お用い下さい。私は何も出来ません。たゞ本当に人を愛したいのです。誤解されても、棄てられてもいいです。人を愛し、イエス様と一緒に歩きたいのです。楽しい荒野です。あなたの幕屋です。聖霊が宿つて下さるこのうれしさを何ものと替えることが出来ませう。荒野はサフランの花ぞのです。イザヤが唱えた通りです。何んで世界はこんなに悪しみにみつるのです。聖愛のあなたを拒み、嘲けつてゐるからです。おそろしいことです。羔の怒を積みつつあります。どうかお父様、私たちの小さな、併し切なる祈りを聴いて下さい。おねがひいたします。神を蔑みしてゐる人たちが、ああ悪かつたという日を来たらしめて下さい。私たちが、あなたの聖子のあの十字架の砕けでやつと目がさめ、み許に涙を流しましたように！ そしてあなたのいのちが、光が、愛が、私

たちの五体に流れて来て、この血を湧き立たせて下さいましたように。いくら戦争の、平和のと、人間的論議をつづけても駄目であります。銘々が、国々が、あなたのみ前にすべてを明け渡しませんうちは！ みんなが碎かれて、あなたの自由と、あなたの平安と、あなたの秩序とが全世界にほのぼのと明けて来ますように。どうか世界の人々の心を、魂を新たに与えて下さい。神様、お父様、あなたのみ力は絶大です。何ものもこれに抗することが出来ません。私達はそれによりたのみます。ルツターがあの「神はわが糧」「Ein feste Burg ist unser Gott」で唱った通りです。詩篇第四十六に「汝ら鎮まりてわが神たるを知れ！」と申された通りであります。愛と力の神様、聖霊のいのちを以て生かして下さるお父様、この幸を世の人に知らせたいのです。そしてみんなで聖名を高らかに讃美いたしたくあります。来るべきクリスマスをそういう純なるよろこびと、また熱い祈りを以て迎える様に基督教界をとらえて下さい！ 主のみ名によつて御聴きあげ下さい。アーメン」。

私の筆はいつの間にか祈りになつてしまつた。

ホセアは併し何と言つたろう。「イスラエルよ、汝の神、ヤーウエーに立ち帰れよ！ 汝は一たび汝の不義のために仆れてしまふだろう。仆れても神に立ち帰ることを忘れるなよ！ そして斯う祈りなさい。

『私の不義をみんなおゆるし下さい。アツシリヤは我らを援けることは出来ません。我らはもう軍馬に騎りません。もう再^{また}たと自分の手で作つた偶像に向つて、わが神などとは申しません。寡婦も、孤

兒も、憐れんで下さるのは、貴神^{あなた}ヤーウエーでありますから」(ホセア一四・一—三) 胸に手をあててこのホセアの言を憶えて置こう。

預言者は神の力を絶対的に信ずる、聖霊が預言者の魂をとらえるからである。だから彼らの終末観はすばらしいのである。ホセア書第十四章の如きは、その著しきものである。我ら現代人は聖書を理性の水でわつてよんでいる。聖書の素晴らしさのつかめないのは正に理性のさまたげによる。理性そのものは何も排斥さるべきものではない。大切な賜である。併し理性をして真にその限界を知らしめねばならぬ。それはどういふ事か、愛性の下位に立たしめるということである。愛性を殺したところに人間の喪失が生じたのである。ルツターが折角戦いつた神の自由を人間の自由にきりかえてしまつたところに現代文明の禍根がある。そこに神からの脱落があることを深く反省しなければならぬ。民主主義というものに、はやくも精神的行きづまりを来たしているのは、神抜き^{かたくなさ}の民主を民主としているからである。福音の真理をかくも頑強に拒んでいる日本人のかたくなさよ! 「砕け」の警鐘を鳴らさざるを得ぬ所以である(拙論『終末の実存者』生命の光社発行、参照)

「永遠の愛」「永遠の真実」を以てイスラエルを愛し、神に立ち還るすべての者を神の民として深く顧る神を告白したのはホセアであつた。実にホセアの預言はいかに強調されても過ぎることはない。それは最も深くイエスの愛に通ずるからである。かかる神の愛に浸り、その愛の実力を体現せんがために必要なるものは神の霊である。かかる「神の霊」の消息を伝えたものは即ちイザヤであつた(イ

「ザヤ一、二」ホセア的な愛を以て「憐まざる者」「わが民にあらざる者」に向つて、即ち神に叛逆する世界に向つて、愛を行^{イサ}ぜんとする者は、また第二イザヤ的「ヤーウエーの僕」の路を歩んで、「真理を地の極にまで立て終らん」との意志を与えられるであらう。イザヤ的な愛を以て、神の義を建て、神の秩序を布かんと祈りに生くる者はパウロ的世界伝道の路を海を渡り、山を越えて進むであらう。

「聖霊の愛の現実の中で賜わる異言や預言を、この愛からきりはなして尊重することは勿論あやまりであるが（コリント前書十三章）神の愛、キリストの愛を聖霊に於て戴くところに花咲く異言や、預言を神のものとして謙虚に受くるに何の奇異があらう。正しく賜わらんことをもとむべきである（コリント前書十四章）異言は万民の母語であり、神の根源語であると言えよう。（使徒行伝二章）

斯くてヤーウエーの愛、全地に満ち、ヤーウエーを知るの知識あまねく行きわたるに及ぶ日には、「イスラエルはエジプトとアッシリヤとを共にし、三つ相ならび、地の上にて福祉を享くる者となるべし。万軍のヤーウエーこれを祝して言いたまわく、わが民なるエジプトわが手のわざなるアッシリヤ、わが産業なるイスラエルは福なる哉！」（イザヤ一九・二四、二五）これは実に驚異に価する祝福である。アッシリヤとエジプトとは今日で申せば正にソ連とアメリカに比すべき大国であつた。イスラエル・ユダはその間に介在した小国であつた。その三つが一つとなつて神の祝福にあづかるという終末的人間革命の成就する世界！ 神の聖なる霊の力により、その愛に浸れば、人間的なるいかなる

対立も消えて一つとなる。人も国もそれぞれ立場と主張があろう。併し、それを神に返還せよ！真理も国土も、われらの存在そのものも、その能力の一切も神の属である！私してはならない。神はその民族、その国家、その国土、その家郷、その人間にふさわしきものを知り給う。祈りを以て神の示したまうものを、与えたまうものを感謝して受けよ。

「聖霊」についていかに聖書が力をこめて語り、預言者も、使徒も聖霊に於てこそ告白しているそのなまの相にぶつかれ！福音書に於けるイエスの聖霊の言動の一切に目を見張ろう。私はかつて「聖霊の磁場」ということを拙論（『無教会神学論』三一書店発行）の中で言つた。そこに「福音の場」の中心があることを指示した。そのことがいよいよ本当であることを阿蘇の恩恵以来示されつゝある。昨秋以来、イザヤ的な「神の熱情」（基督教文化十月号「預言者の歴史観」参照）、ホセア的な「どん底の愛」、第二イザヤ的な「砕けの愛」を中心として終末的な愛の実存を小さき武蔵野の幕屋の友らと学んで来た。それを「聖霊の愛」に於て更に現実を受けたる阿蘇の恩恵の奇しきさよ！手島氏の友情を通してあらわしたまいし主の愛に感謝しているのである。教会または無教会の人々よ、また世の人々よ、手島氏の「異言」に関わる事態をあやまり見てはならない。論議は無用である。聖霊をなまに体験せよ。然らば福音書も、パウロもヨハネも、生き生きと読めるようになる。それが何よりの証拠であつて、この月たらぬ私ですら明言できるのであつて、私も亦、聖霊の恩寵を拒むことは出来ない。砕けの愛を以て今こそ我らの中にいのちを漲らせたまえ、主イエスよ！人を愛し、サタン

と戦わしめ給え。サタンの虜となつてゐる人の魂のために祈ることを得しめ給え。

誰かヤーウエー神の愛に在つて言動し、幻を見、預言を語りたるかの旧約の預言者を危険だと言うか。誰かイエス・キリストに現せしあの愛の現実をうたがうか。十字架を信ぜしむるものは霊の外の何ものであるか。かゝる事態をうたがう者は福音を拒む者である。あの烈しき霊の現実を、あのあつき愛の実存を生まに受け入るる者にとつては、異言は自然となるであらう。誰か使徒らにあらわれし聖霊のみ業を無視し得ようぞ。その者は使徒行伝をも使徒らの書論をもいつわりとなす者である。

人と国とをこのあるがままの現実^{に於て}、握手せしめるものは唯一つ！ 聖霊^{に於ける}人間革命[！]！
イエス・キリストの砕け^の愛の霊に抱かれよ！ 全人類よ！

ベートーヴェンがその全魂を傾け、シラーの熱情に相応えて作曲したあの「第九」の調べにあわせて謳わずや、人々よ！ ベートーヴェンの音楽会で好い気持になるためではない。その魂身を人類の福のために捧げた楽聖ベートーヴェンの心と共に燃えなくては駄目である。芸術の奴隷になるのではなく、霊に於て芸術の、そして一切の文化の主となるためだ。そして真の神に一切を帰したてまつり感謝せんためである。讚美せんためである。

„Seid umschlungen, Millionen!“

Diesen Kuss der ganzen Welt!

Brüder, überm Sternenzelt

Muß ein lieber Vater wohnen."

「相抱けよや、億万の人々よ！

此の接吻を遍く世界に泌みわたらせよ！

同胞よ——星の幕屋の上にこそ

愛の御父は在ますなれ。」

（附記）本項「人間革命の道」は一九五〇年晩秋、大阿蘇の集会で聖霊のバプテスマを天界から受けたあとで書いた最初のもので、手島郁郎主筆「生命の光」第十八号巻頭に載った論説である。なほ、「キリスト教と文化」（新教出版）なる雑誌に「預言者の歴史観」及び「預言者の終末観」を書いたので参照されたし。

九 福音の根本構造序説

(一九六〇・八・一九―二十一)
第七回夏期福音特別集会、伊香保にて、
第五講、八月二十一日午前の内容

昨日、一昨日と、前後四回の講筵で、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書から夫々一ヶ所づつを撰んで福音を学んできたわけですが、さて今朝は何を語ろうかと、実は私自身が「種なしのパン」(第一コリント五・七)なのです。この特別集会にはるる呉、京都、中津川方面から参加された遠来の御連中と昨夜はおそくまで語って準備をするひまを失ったのです。勿論私はよろこんでそれらの諸君と語ったので、一夜づけの準備などしない方がよい気もちでした。不断の準備を私がつねづねしているとは必ずしも申しませんが、何ごとにつけ、不断の準備というものは大切です。若いときによく準備しておきなさいよ。私などは全く落第生ですから、私の真似などしたらだめですよ。私は仕方がないから、私なりの「晩成」を目指して自らを督促しているわけです。今朝ほど私は畳の上に白い模造紙をひろげ、その前で端坐してしばらく冥目して祈りました。そのとき閃めてきたのが「神の羔こひひ」という標題でした。そこで聖書の朗読はイザヤ書第五十三章と決まりました。

ただ今、イザヤ書第五十三章を司会者S君によんでもらいまして、冥目のうち承りつつ、深い感動のため、私は言がありません。

神の羔！ 冥想すれば、羔を胸に抱きたまう神のすがたを語っているイザヤ書四〇章の聖言が浮んできます。

「主は牧者のようにその群を養い、

そのかいなに羔を抱き、

そのふところに入れてたずさえゆき

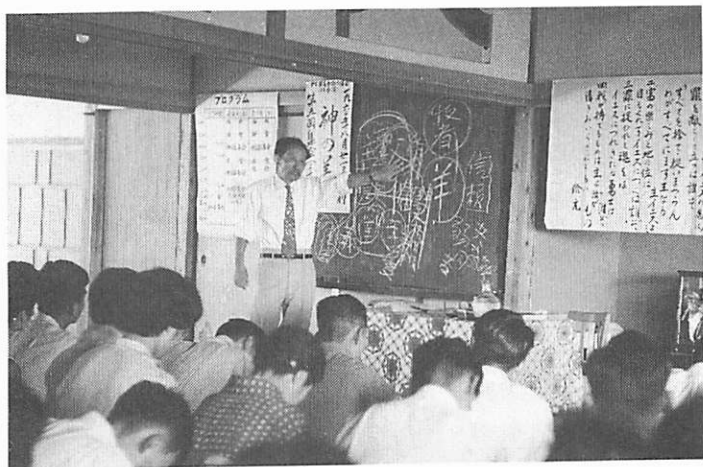
乳を飲ませているものをやさしく導かれる」

私は牧人の胸に抱かれている羔において、正にわれらの主イエスの実存の最も深い相を想見します。「アッバー！」（父よ！）と呼んで祈られたイエスは、正に父の胸に、ふところにあるイエスでありました。親羊の乳を飲む羔のように、イエスも父のふところから永遠の生命の乳をのんで生きておられたのです。詩篇第二十三篇の

「主はわが牧者である、

わたしは乏しいことがない」

羊が牧者に全幅の信頼をおいているように、イエスこそは父に全存在を托して歩いておられた。し



第七回夏期福音特別集会

1960年8月19日～21日伊香保天溪園に於て「福音の根本構造序説」

かし一体イエスの信頼というものはどういう性格のものであったか。それは、実はイエスが、父なる神の深いかえりみ、神のどん底の愛に、彼が信頼したもうたという在り方です。実に神の信愛の腕に抱かれてこそ本ものであり得たイエスの信頼があったのです。どの子が母親の乳房を慕い、その腕で安らかに眠らないでしようか。どの親が、信頼深い子を愛しないでおられましよう。放蕩息子にもひとしい我ら罪びとが、悔いえずほれて立ち還ってゆけば、過去を忘れてよろこび迎えるのが父なる神の親心であることは、ルカ伝福音書第十五章において、イエスがねんごろに語っておられるところであります。ヨルダンの流れに身をとおぶり浸して、我ら罪びとのあてにならない悔改を自らひきうけて、真の碎けのたましいを以って、悔改の必要のな

い罪なき者が、悔改のバプテスマを受けられたところに、受肉のキリストたるイエスの実証があったのです。そのとき天来の声が、

「これはわたしの愛する子、

わたしの心にかなう者である」(マタイ三・一七)。

とひびいて来ました。

牧人の羊への深いかえりみは、羊の一つ一つをその名を以て憶え、そのすがたをもって識別するほどであると聞いています。緑の草地へ伴れてゆき、憩いの水ぎわにもなってくれ、外敵が襲ってくれば、牧杖を揮って身を以って護ってくれるのが善き牧者で、「善き牧者はおのが羊のために生命をも棄てる」(ヨハネ一〇・一一)とは実にイエスの言でありましたし、イエスはその言の如く、我らのために生命を棄てました。羊飼と羊の間がらをイエスは「知る」という言葉で表現しておられます(ヨハネ第十章)。信愛関係を相知るという言で表現する「知る」というヘブライ語は実に深い人間関係、また血肉関係をあらわす言です。聖書において真理を「知る」とは、そういう全人的全実存的な「知る」であることを忘れてはいけません。そうでないと、福音的なドイツ人が「コップフ・クリステン」(Kopfchristen)といって非難する「あたまたのクリスチャン」になってしまいます。観念的ということも、勿論人間が思考する限り、大切な要素でありますが、信仰の世界では、所謂観念的では、聖書が証している生命の世界には入れないのです。

牧人は個々の羊を顧みると共に、また一群を一群として大きく牧するのであります。決してばらばらにせず、有機体的一体、一群として見ているわけです。そのように、神、キリストが我らの群をも顧みておられるわけです。我らの一人一人は、天下一品の神品であると同時に、その群そのものがまた天下一品の群です。世界中どここの教団も教会も、集会も皆同じく、夫々天下一品的で、千差万態であるのがのぞましいと私は信じています。このようなキリストとの縦の深い関係は、自己に執するための特殊性でなく、キリストの大エクレシヤという有機体への役割を果す意味において大切な柱です。さればこそ真の相互尊重がでてくるわけです。そこに横の信愛関係がおのずから生ずるのです。この自覚と認識が足りないところには、宗派根性やバリサイ精神が生ずるわけであります。

こういう有機体的立体的構造をあらわすのに三角錐体の幕屋の相が最も適切であることはしばしば語ってきましたから、今日は略しますが、単にキリスト教界ばかりでなく、社会も、国家も、世界も見えざる頂点G（神）を忘れ果て、畏るべき者を畏れなくなったら、二十世紀後半の世界はついに破壊するであらう。

ルカ伝第十五章の悔改を、ヨルダンのバプテスマで身を以て示されたイエスはあのととき何かのぞんだでしょう。実にいかなる弟子も受け得なかった聖霊の充満であります。それゆえにこそ、私たちが十字架の主のあがないを信受すれば、真の悔改をそこに受けとり、そして直ちにそこが聖霊を受ける場であるのです。そこに復活の主の生命が宿るわけで、十字架と聖霊と復活とはきつてもきれぬ関係

にあるわけでありす。

贖罪愛を身に宿しておられたイエスは、実に思いやりの深いイエスでした。彼の思いやりは、人間の同情とは異なり、実力のある思い遣りで、イエスを信ずる盲人の目は開かれ、跛者は歩けるようになり、癩病人は潔められ、聾者は聞こえるようになり、死人は甦えらせられ、心の貧しい者は福音に歓喜し、罪を犯した者はゆるされました。要するに彼は、すべての病をいやし、すべての不義をゆるす愛の実力をもって居られた。しかし彼は、それを靈力として私されなかった。彼はどこまでも神の聖意の体現としてなされた。彼の義にさからい、彼の愛を受けない者に、彼は無理強いを決してなされなかった。彼を信ぜず、彼を受けない者は、自ら審判を招くばかりでありました。

一体キリストが我ら罪びとをあわれみ給うその事実はどこからくるか。それはキリストが、神の聖意を体現せんとする僕たるの自覚から来ています。そのように「神の僕としてのイエスの自覚はどこから来たか。それが即ち、イザヤ書第五十三章の「ヤハウエの僕」(Ebed Jahwe エーベッド・ヤハウエー)の予言から来ています。すなわちマルコ福音書九章の始めに、イエスの変貌のことが書かれてありますが、十二節に、

「確かにエリヤが先にきて、万事をもとどおりに改める。しかし、人の子について、彼が多くの苦しみを受け、かつ恥ずかしめられると、書いてあるのはなぜか」というイエスの言は、「神の僕の受難」を自覚しての予言であります。神意を体現するためには献身の心がなければならない。キリストはこ

れを完全に全うした唯一人の義人でありました。神意は罪びとの、万人の救贖にありました。いきなり天界に入り得るイエスはその栄光を棄てて、贖罪の死を神意に従って撰びました。その予言があのイザヤ書五三章の聖句であります。

「彼は侮られて人に捨てられ、

悲しみの人で、病を知っていた。

まことに彼はわれわれの病を負い、

われわれの悲しみを荷なった。

彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。

しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、

われわれの不義のために碎かれたのだ。

彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え、

その打たれた傷によって、

われわれはいやされたのだ。

主はわれわれすべての者の不義を、

彼の上におかれた。

彼はしいたげられ、苦しめられたけれども、

口を開かなかった。

ほふり場にひかれてゆく羔のように、

口を開かなかった。」

これが「父よ、みこころを成させたまえ」の神の羔、キリスト・イエスの献身、提身、体现の実存でありました。このたましい、この心あつての思い遣りであり、罪のゆるしであり、病のいやしである。それは単なる相対的現象的な罪のゆるしでもなく、単なる肉体的病のいやしでもなく、根源的な罪と、根源的な病体のいやしで、たましいの救いと霊体への救いであります。私の「砕け神学」の根拠はここにあります。

このようなイエスの信頼深い従順のすがたを語っているのは、よく私が引用するビリビ書二章六—八のパウロの言です。六—一節はキリスト論の代表的告白といってよい句だと思えます。しかしここでは六—八節だけを引用します。

「キリストは、神のかたちであられたが、

神と等しくあることを固守すべきこととは思わず、

かえっておのれをむなしくして

僕のかたちをとり、人間のすがたになられた。

その有様は人と異ならず、おのれを低くして死に至るまで、

しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」

イエスが神を父として信愛して「私と父とは一つである」(ヨハネ一〇・三〇)との深い内在的關係に入られたのも、また神を主として信従して「どうか、みこころが行われますように」(マタイ二六・四二)との一貫した信義を貫かれたのも、聖霊の充満の実存であられたからである。そのような聖霊の充満の実存はどうして可能でありましょう。ただ祈りのたましいとなることであります。イエスは如何なる人であったか、と言えば、不断の祈りの人であったと言うのみであります。聖霊は一切の実存の源泉であります。聖霊に在ってこそ父と一つであったし、聖霊にあってこそ聖意体現も力強くできたわけです。聖意をよろこんで然りと受けとめ、我意を惜し気なく否と斥けるのです。これを義と申します。アブラハムが信仰の父であったのは(創世記第十二章、第十五章、第二十二章参照)、このような聖意体現の角度であったからです、それを信仰の義、信義といってよいわけです。アブラハムが信仰によって得たものは「約束」(エバンゲリヤ)であった。万民祝福への約束であった。そのことはパウロがガラテヤ書第三章第四章でたたみかけて語っている。旧約においては、専らこれを「契約」(ペリーツ)という極めて重要な言で語っている。「われ、わが契約を我と汝の間に立て大いに汝の子孫を増さん、……われ汝とわが契約を立つ、汝は多くの国民の父となるべし、……汝の名をアブラハム(多くの父)とよぶべし」(創世記第十七章)の如くであります。それはいわばおぼろなる福音であった。そのアブラハムが、独子であり、愛子である「約束の子」(ガラテヤ四・二八)イサ

クを捧げんとてモリアの山に向ったときの旅路ほど、信愛の人アブラハムの本質があらわれたことはなかったであります。彼の全身の血がそのまま熱涙の如くであったでしょう。ゲッセマネに祈るイエスに語りたもう神、ゴルゴタに昇りゆくイエスを見護りたもう神は……。新天地の神の国の到来まで、なぜ愛は十字架であるのか。ここに人類の罪、宇宙の悲曲があります。

一方モーセに十言（戒）が授けられて、「律法」が与えられ、神と選民との契約の保証とされました。ところでこの「律法」が実は根源的には神のイスラエルへの信愛、信義の断言命法であって、パウロのいわゆる「律法の義」の儀文的な「律法」ではなく、神がその選民を信頼して、例えば、「汝は殺人はしない」と断言している言であつた。それが実践できなかったところに、人を生かすはずの福音的なひびきの「律法」が、律法的な「律法」となった。その欠陥に気づいたのが予言者たちであつたが、彼らも真に信仰と、律法の根本精神との関係をつかみ得ませんでした。これをつかんで満たしたのは、唯イエスだけでした。彼がすべての予言者よりもけたがいに偉大であつたのは、かくれたる福音であるモーセの「律法」を、あらわなる福音として充たし、且つ新しき内実をそれに与えたからであります。それにとらえられてパウロが、「愛は律法の完成である」（ロマ書一三・一〇）と告白したのです。

子としてのイエスの信愛、僕としてのイエスの信義、実に信仰こそはたましいの真のすがた、そしてその内実は愛であり、義であるので、愛と義とは信の共通項のゆえに一如であります。愛と義はあ

る場合は両極性的概念でもあります。真の両極性的なものは根底においては一如一体的なものであって、もしそうでないならそのような両極性は分裂であり、破滅であります。

パウロでさえもサウロ時代に律法に躰き、律法は聖なるものと知りながら、律法の奥の聖意靈法と律法との関係を内的に把握することをせず、「律法の義」に固執した。それで彼は回心後も「信仰の義」と「律法の義」を峻別することに急であって、律法が実はかくれたる福音で、福音はあらわなる福音であること、それゆえに、律法即福音という一貫性をもっと大胆に道破するいとまがなかったようであります。しかし、真の靈法、パウロの言う通り「キリスト・イエスに在る生命のみ霊の法則」（ロマ書八・二）が福音であり、福音は律法の完成であって、律法の破棄ではありません。勿論、イスラエルが歴史的につかみそこなった饑文、戒律としての律法精神は破棄さるべきであります。パウロの信仰と行為の峻別も、信仰そのものが実は烈しき内的な行為であるといったつかみ方へとつき抜けることをしなかった。信行一如の把握あってこそ、いかに外的行為としては惨怛たる人間であっても、なお失望せずして信仰の道を欣び勇んで進み得るのであります。「行為なき信仰は空しい」といって行為面から信仰を見るならば、却て「信仰によってのみ義とされる」というと真理の躰きとなるであります。ともあれ、日本人には日本人らしい、東洋的思惟がある。福音の光を以って東洋的思惟を生かしてゆくことにこそ、福音を真に身につけるわれらの道があると思います。福音の日本の展開の問題がそこにあります。

福音は有機体的構造のものであります。何となれば、福音を体現したイエスの全実存が生命そのものであるからであります。しかし有機体的な福音の構造がわかったというだけではだめです。これ自身につけるのでなければ、自分が福音的有機体そのものとならなければ。

それはどうしたら可能でしょう。

創世記第四章のカインとアベルの物語は、神話的な物語であろうと、宗教史的な背景の物語であろうと、人類の歴史の終末に至るまで絶えない悲劇的な不信の現実であります。殺人は人間相互間の最大の罪です。しかしこの最大の罪がどうしても絶えないのです。神を真に畏れる人類になるまでは、人類はこの罪からのがれ得ない。その如く、十戒のどの一戒をも全うすることができない。「バラダイス・ロスト」(樂園喪失)とはミルトンの詩の題名ではなく、人類の現実であります。にも拘らず、「バラダイス・リゲインド」(樂園回復)も信仰的現実であります。にくしみの世界の中にいつくしみの天国が現にあります。

それへの門はどこにあるか。このことは既に、今回の特別集会でも、「狭き門、細き路」と題しておはなしをしました。それゆえここでは簡単にふれます。しかし、簡単であるだけ、深く強く、この門を開いて有機体的天国の中に入るのです。

いつかも「無門の門」(「贖愛」誌32の「終末的帰一」参照)という表現でキリストの十字架のことを語りました。「叩けよ、さらば開かれん」とある如く、全身があるがままで、全身をもって体あ

たりのにノックして、そこに倒れるのです。十字架という門の下に、あるがままの全身をもってたおれてみたら、実は既に開かれていた門であるのに気がついて、小躍りして立ちあがって門の中に入っているのです。あるがままのこの我れを、既にあがないとて解放して下さっていたのが、キリストの十字架であります。眼界は豁然として天界に向って開かれます。十字架の下での聖霊のバプテスマを受けることなくして、信仰の、神学の、聖書研究の、こねまわしても、それは画餅によって飢えをいやさんとするにもひとしいことです。十字架のあがないを信じ受けとることが全身的であるなら、必ずそこに聖霊のバプテスマが天界の主御自身の見えざる聖手をもってなされます。これは実に、現代の教会といわず、無教会といわず、真剣に自分の胸に手をあてて、思いをいたし、自らこれを信仰の現実として受くべき事態であります。パウロの諸書信は、この現実を突破せずしてどんなに精巧な解説註解を試みても徒勞でありましょう。パウロは全く、十字架の下での聖霊のバプテスマを深く深くうけ、み霊の内住のキリスト者としてもを言っているのです。ガラテヤ書二・二〇の告白も全くこのようなみ霊のバプテスマの現実告白であります。キリストの十字架の碎けで、碎かれた我ですから、全く自由無碍のたましいと彼はなりました。

十字架の下での——それは勿論、キリスト・イエスの十字架の恩寵ゆえに、キリストと共に十字架されての、という意味です。聖霊のバプテスマは、靈的な洗礼であり且つ靈的な聖餐であります。いわゆる洗礼、聖餐は、パウロの「割礼」の論法をもってすれば、第一義の問題ではなく、問題は形の

表現をしないかではなく、形の表現をしてもしなくても、内実として靈的な洗礼、聖餐を身に受けていないならば、それは聖書の示す信仰の事態ではないということであります。たましいのかたくなな口がキリストの十字架で開かれて、キリストのみ靈なる水を飲むことが、洗礼、聖餐で、その人はイエスがサマリヤの女に語られたように、永遠に渴くことなきたましいとなり、水（聖靈）はその人の中で靈泉となつて、永遠の生命の水が湧いてつきず、人のたましいのかわきをいやし、キリストの救へと助ける人となるのであります。これが本当の信仰の身証であります。（第六卷『隨想集』

「田毎の月影」参照）

羔なるキリストのみ靈を宿さない者はキリスト者ではないとパウロがロマ書で明言している通りであります。高峰の月も湖心に深く光もろともにその影を宿し、さしのぼる旭日も葉末の朝露を七色の宝石よりも素晴らしく輝かせるように、天界のキリストの聖靈は、水の如き自由な砕けのたましいには来たり宿り、輝き給うのであります。イザヤもその予言の詩でうたいました。

いと高く、いと上なる者、永遠に住む者、

その名を聖となえられる者がこう言われる、

「わたしは高く、聖なる所に住み、

また心砕けて、へりくだる者と共に住み、

へりくだる者の靈を活かし、

砕けたる者の心を活かす。

.....
 霊はわたしから出、

いのちの氣息（いき）はわたしがつくったからだ」

（イザヤ五七・一五・一六）

贖罪は既に完了しています。おそれなく、よろこんで主のみたまの水をのむことです。

「わたしはあなたの^{とが}愆を雲のように吹き払い、

あなたの罪を霧のように消した。

わたしに立ち還れ、

わたしはあなたを贖ったから。」

（イザヤ四四・二二）

「さあ、かわいている者は

みな水にきたれ。」

（イザヤ五五・一）

このようにして、我ら自身が、主の羔となって、福音の身証を、それぞれの生活においてあらわすことです。すべての文化的なとなみの根底に福音がなければ、文化は枯死します。単に人間中心の文明は、あだ花にすぎません。いわゆる民主主義といったものも、福音による信愛と自由と責任をもたないものは、決して社会をも国家をも世界をも幸に導くものではありません。主我的な主張をもった闘争心が、権利と利益の主張でおさまるところを知らぬは、労資問題の癌でありましょう。教育、

社会、経済、政治、すべての問題の中には倫理の問題あり、倫理の問題を根柢から支えるものは高次の宗教、特に福音であります。勿論、世の終末まで、福音がいかに伝えられても、人間社会が天国になるとは考えられません。それほどまでに人間は罪性的、矛盾の存在です。それであればこそ、十字架の福音なのです。それであればこそ、心のなかにみたまの生命、みたまの愛を内実とする天国をもっていないればやりきれないのです。いかなる環境も、いかなる運命も、或はそれに順応しながら、或はそれを突破しながら、これに耐え、しのび、これを満たし、あふれ、天国に変質させてゆくような実存体になりたいものです。それはただ神の羔、キリストをこの罪びとの中に宿すの一事にかかっています。

福音は根、倫理道念は幹、一般の文化文明は枝葉花果という一本の果樹の如き構造であります。イエスも、彼とエクレシヤの関係を葡萄の樹にたとえて説かれました（ヨハネ第十五章）。福音と文化は、方向が反対であり次元が異っていますが、すなわち、前者は不可見の絶対次元の世界であるし、文化の世界は可見の相対次元であります。しかしこの両次元界は相つらなっているわけです。この絶対次元なくして相対界はどうにもなりません。

私たちはパウロが言ってくれているように、存在と実存そのものが「キリストの書」であります。東洋的な表現をもってすれば福音の「不立文字」であります。「墨にあらで、活ける神の御霊にて録され、石碑にあらで、心の肉碑に録されたる」福音体であります。この破れた実存が恩寵の力によつ

てそうなのですから、あらゆる運命と環境に天国的に処してゆけるのです。「主は即ち御霊なり、主の御霊のあるところには自由あり、我々はみな顔帕おおいをはずされて主の栄光を映し、栄光より栄光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像に化するなり」

（第二コリント三・一七・一八）

かくて我らは神の新天地の終末の世界、ヨハネがパトモスで示されたキリストの再臨を迎える日を待って、地上の旅路を終末の天国体と自らがせられつつ進み往きます。世が不信不義をつづけてゆくなら、聖書が語るように「羔の怒り」の日（黙示録六・一六）が来るでしょう。恩恵が与えられているということは同時に審判が伴っていることです。羔の恩恵を拒む者は審判されるからです。また審判の奥には恩恵があります。神の羔を信する者は、審判即恩恵の現実に入れられて、おそれなく進んで往きます。何となれば審判は羔自らひきうけて下さっているからです。皆さん！ この自由無碍な恩寵の路をいよいよ碎けたるたましいをもって、のびのびと、生き生きと、聖名を讃美しつつ、聖意聖言に従い、天国を体現しつつ進み往かん！

（「曠野の愛」第三五号、一九六〇年晩秋号）

●キリスト論的福音の根本構造図表

アブラハムの信仰の靈統を継いだのが父祖たち、士師、エリヤ等のカリスマ的予言者

アブラハムへの啓示(約束の子、祝福、おぼろなる福音)

ヨハネ第十七章(大祭司の祈)

父(本質関係)―子(信愛一如)

罪の世救贖の聖意は

神
聖靈
キリスト・イエス

(福音体现者)

神の羔を十字架せしめた。

イザヤ書五十三章

ヘブル書九章

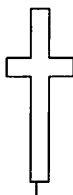
主(使命関係)―僕(信義一貫)ピリピニ・六―八

現代キリスト教界は、使徒的信仰と同質的になることを要する。ロマ書がその予言者面を、ヘブル書がその祭司面を代表する文書である。

モーセへの啓示(契約の民、律法、かくれたる福音、聖意、靈法)

かくれたる福音としての律法の根本精神を展開したのがアモス以降の文書予言者
制度的、儀文的に律法を展開したのが、夫々祭司、教法師、(祭儀誠律)。

十字架
受肉
靈言(ロゴス)スコに於て、聖靈にバプテスマされた
ペテロ、ヨハネ、ヤコブ等の使徒たちは
ペンテコステに際して、パウロはダマ
ガラテヤ二・二〇、ロマ書第六章
十字架の恩寵下で聖靈にバプテスマされ、永遠の生命を賜わりたる
個体とその群(幕屋、召団、教会)
ロマ八・九、第一コリント六・一一。



十 イエス・キリスト無即無限無量者

(一九八一・十・三十一)
宗教改革記念日の晨のNHKラジオ放送に基いて記之。

人間本来宗教人

元来「ひと」とは靈^{ひと}止、神靈^いの止どまっている者という意味の言（「大言海」参照）であります。人間存在の中心は靈、たましいであります。たましいは靈的絶対界との交りを要するものですから、万人は本来宗教人であるのです。それで「宗教」という表現はラテン語で「レリギオ」(RELIGIO)でこの名詞は動詞「レリガーレ」(religere)から派生したものであると、紀元三三〇年に召天したキリスト教の著作家ラクタンティウス(Lactantius)が申しておりますが、そうだとするとこの動詞は「結びつける」という意ですから、「宗教」とは人間のたましいを絶対界の神に「結びつけること」という意味で、「宗教」は「結合」ということで、これは大変重要な内実をもった表現であります。

ところで今日は、科学的知識と技能の極めて高度に発展している世界ですが、これとは逆比例してたましいの世界が大変萎^い靡^びしているようです。日本人が、そして世界の人々が一般に申して、人間本

来宗教人たるの自覚を新たにすること、今日ほど切なるはないと思われます。世界は宗教的危機にあります。

キリスト道

さて今からおよそ一九五〇年前、紀元三十年前後に、アジア大陸、ヨーロッパ大陸、アフリカ大陸の正に「結合」点にあたるバレスティナの一角、ガリラヤ湖畔でキリストは伝道をされましたが、湖の北方の丘陵で、弟子たちや群衆に対して、いわゆる「山上の垂訓」（マタイ福音書第五―第七章）を語りました。なるほどそれは教えに相違ないですが、本質的にはキリストの全存在的告白ですから、私は「山上の大告白」と申しております。

そしてキリストはまた「私は道そのものである、真理そのものである、生命そのものである」（ヨハネ一四・六私訳）と言いました。ですから、キリスト「教」というよりもむしろキリスト「道」と申したいです。日本人は本来道の民ではないですか。天道、人道、書道、華道、茶道、武道、剣道、柔道、弓道といって、真理を身に体する消息を「道」と称えて来たことはまことに正しい実存的自覚だと思います。

霊の貧者

さて山上の大告白の第一言は、「恵^{さいわい}福なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものである」（マタイ五・三）。「恵福なるかな、貧しき者たち、神の国はおまえたちのものである」（ルカ六・二〇）。

マタイの場合は、「心」に関わり、ルカの場合は「物」に関わっていますが、イエスはどちらも自由に言ったと思います。「心」とはイエスの母語では「霊（ルーファ）」であります。「霊」は「たましい」といっても可いでしょう。たましいが貧しいとは、自分を何ものともしないことです。イエスはそういう自覚を徹底的にもっていました。

ここで因でに申しておきますが、「キリスト」とは「あぶらそそがれたる者」の意味で、オリーブ油を頭に潑がれた者とは、神の霊を潑がれたことの象徴的な表現であります（詩篇二三・五）。ヘブライ語では「マーシヤハ」（メシヤ）と言います。神霊をそそがれたるキリストが、人間イエスとしては、どこまでも、自分を何者ともしなかったところに深く注目しなければなりません。

無の実存者イエス

そこでここにイエスのその自覚の言をいくつか御紹介します。

イエスが北のガリラヤ地方から南のエルサレムに向って最後の旅に立たれたとき、ある青年が走り寄り、跪いて、「善き先生、永遠の生命を嗣ぐためには、何をしたら可いですか」とたずねました。するとイエスは「なぜ私のことを善きなどというか、神様ひとりの外に善きものはない」（マルコ一〇・一八）と答えました。イエスは正に無善者なのです。

また或る安息日にユダヤ人に向って「まことにまことにおまえたちに言う。子は父のなし給うことを見て行かうほか自分では何ごともなし得ない」（ヨハネ五・一九）といって、自分は無行者たる事を告

白しています。

またこの問答のあとで、「私は自らは何事もなし能はない。ただ聞くままに審くのである。私の審判は正しい。それは私のところを求めないで私を遣わし給うた者の御意を求めるに因る」(ヨハネ五・三〇)といつて、自らは無能者、無意者となしています。

ですからイエスの祈りのキー・ノート(基調)は「私の意ではなくあなたの御意が成って下さい」(マタイ二六・三九)でありました。自分を提身して、どうぞこの私を通して「御旨を成して下さい」と棄身で祈っておられるのです。父なる神に全的に献身しての祈りで、ゲッセマネの祈りの如きは最も白熱的なものであります。それはまた主に対する忠実なる僕の在り方です。第二イザヤ書(イザヤ書四〇―五五章)に「エホバの僕」という一連の歌がありますが、正にあの僕の心根で、イザヤ書第五十三章はその極限で、キリストの贖罪死の預言であります。

またある飯廬かりいおの祭といつて収穫の祭の頃、神殿で道を説いていたイエスは、その説教をあやしむユダヤ人たちに「私の教は私の教ではない、私を遣わし給うた者(父なる神)の教である」(ヨハネ七・一六)といつて自分が無教者たることを自覚しておられました。

またイエスがこの世を去る前の所謂「訣別遺訓」(別れの言)というヨハネ福音書第十四章から第十七章の中でも、「汝らが聞くとおころの言は、わが言に非ず、我を遣わし給ひし父の言なり」(ヨハネ一四・二四)とハッキリ申しております。即ち彼は無言者であります。

以上のようなわけで、イエスの自覚は、無善、無行、無能、無意、無教、無言というわけで、要するにイエスは自らを神の前に何者ともしない無、無私、無我でありましたから、私はイエスを無者と申しております。

ところで我々は何かできると思っている。それは相対的な可能のはなしです。イエスはそういう相対的な能力を自分に対しては問題としなかった人です。そんなものは太陽の光の前の蠟燭の光の如きもので、彼が問題としたのは、父と呼んでおのれを全托していた神様だけでした。父なる神という絶対者だけを相手として生きていました。自分を神の前に全く無者として全人格を全存在を神の中に投入していた実存でした。神に信入して（信じて入って）いたのです。祈入して（祈り入って）いたのです。ヨハネ福音書一・一八に「父のふところに在ます独子」とありますが、正にイエスは父のふところに座を占めていた人でした。神に遣わされて地上にやって来たのだから、一切は神の指示と神の力による、というのが無者イエスの在り方、実存でした。これを私は絶対次元に生きていた無的実存者イエスと申します。

無即無限無量

ですから神の全神格がイエスの中に降臨し、イエスに充満しました。「神性の充満はことごとく体的に彼の中に宿っていた」（コロサイ二・九私訳）とある通り、神の生命、愛、光、力、知慧、言が自由自在にイエスにおいて顕現しました。無（者）即無限無量者というわけです。そしてそのような無

無限量のな実体は何かというと、聖靈なのであります。そして聖靈の本質は無量の愛であります。

“Amor est proprium nomen spiritus sancti.”

「愛は聖靈本然の名なり」

是はトーマス・アキナスの有名な言でありました。

東西古今、キリストほどの力強い聖靈の人は皆無であります。その人格の根柢が徹底的な無であつたからです。この無は有無の相対的な無ではありません。

イエスは地上にあって、歴史の終末の神の国を身邊に体現している人でした。福音書にあらわれている聖靈のはたらきにただただ驚嘆するばかりです。洗礼のヨハネがマケルスの牢獄から弟子どもを遣わしてイエスに設問したとき、イエスはこう答えました。

「往つて、おまえたちが見聞きするところをヨハネに告げよ、盲人は見、跛者は歩み、癩病人は潔められ、聾者は聞き、死人は甦えらせられ、貧しき者は福音を聞かされている。およそ私に蹟かない者は恵福である」と（マタイ一・四、五、六）。

これ皆、無の実存者イエスに於て身証された驚くべき聖靈の力であります。

であるので、私が申す無は虚無的なニヒルでは勿論ありません。また単なる「さとり」の無とも性格がちがいます。神を然りとなし、おのれを否とする極めて人格的な実存的な無です。神を信ずるとはこのような全存在的然りで、おのれを否として全存在を投入することです。信仰の「仰」はむしろ

「交」と書くべき信じ交る靈的現実です。「信仰」という事態も私できません。絶信の信であります。神の現在に圧倒されるので、信入せざるを得ぬ賜わりたる信であります。圧倒されるので私に賜りたる無であります。その点親鸞の「如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまふすにや。かへすがへすもあるべからざることなり」(『歎異抄』)の信心に絶した信心と同軌であります。

また「無門関」第四十六則に「百尺竿頭須らく歩を進むべし、十方世界に全身を現す」というすばらしい句がありますが、イエスこそは八方破れの無者でありますので、キリストは、正に「十方世界に全身を現す」ことの出来た無限無量の靈人でした。さればこそ、「百尺竿頭歩を進めて」ガリラヤ湖上を徒^かち渉りして荒波に転覆せんばかりの弟子たちの船に現われ、「我なり、おそるな!」と呼ばかけたキリストでした。

でありますので、イエス・キリストという表現は、無者(イエス)即、無限無量者(キリスト)というわけであります。

父子一如

であるので、イエスは〈EN ⊗ EΩ〉「神の中に」という現実を生きておられた。弟子のピリポとの問答にこういうのがあります。「ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給へ、然らば足れり』イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに我を知らぬか、我を見し者は父を見しなり、

如何なれば我に父を示せと言うか。私の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝らにいう言は己れによりて語るに非ず、父われに在ましてみ業を行い給うなり……」(ヨハネ一四・八一―一)。「父わが中に、我父の中に」という一如的内在関係が本当の信仰の現実なのです。イエスはバリサイ的なユダヤ人に烈しい語調で「我と父とは一つなり」(ヨハネ一〇・三〇)と喝破しました。ですからマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書に溢れているキリスト・イエスの言行がいかにかいたちがいなものすごい霊的現実であるか。意味がどうのこうのとか、解る解らないのといった角度では聖書はよめません。

聖書はドラマ

聖書は神、キリストの絶対次元が世の中の相対次元にきりこんでいるドラマですから、ドラマの中に自分を投げ入れてからだ、でよむこと、日蓮が法華經を身読、色読せよといったように全存在で聞き読み、体あたりすることです。例えばイエスがサマリヤの女と井戸ばたで会話をしている(ヨハネ伝第四章)場面に来たら、自分がサマリヤの女になって、ありありとイエスを現前にして身読することです。どの場面でも、イエスの言にも行為にも降参せざるを得ないです。本当に降参すると聖書の現実が見えて来ます。体で感じて来ます。

ゲーテがあゝの『ファウスト』劇の中で、主人公ファウストをして少女グレートヘンと宗教問答をさせている場面がありますが、その台詞に

“Gefühl ist alles.” 体感が一切だ！ (2456行)

というのがあります。この言は今私が言った意味に於て真理です。信仰の事態が一般に大変観念化しているのです。ゲーテは当時のキリスト教界に飽きたらず、言や観念ではダメだ、行為であり体感であるのだ、と「ファウスト」の中でも表現したかったわけです。この「ゲフェール」というドイツ語を「感じ」、「感情」、「情感」などと訳したら、薄っぺらになるので、私は「体感」とよみます。ゲーテは全的な、全存在的なものの見方、聞き方、感じ方、学び方、行動の仕方をした人でした。だから“Die Tat ist alles.”「行為が一切だ」(10188行)とも言いました。

大阿蘇に於ける聖霊のバプテスマ

さてところで我々はどうしたらそのような現実に入れるのでしょうか。私は一九五〇年の晩秋、十一月三日―五日でした。大阿蘇のふところにあるひなびた滝見荘で、今は天界におられる手島郁郎氏と聖書集会をしたあとで深い祈禱会をやりました。そのとき忽然として天界からキリストの聖霊が私に臨みました。私は全身が坐ったまま宙にぐーんと浮きました、次の瞬間にはどかんと落ちました。全く驚きました。全身が聖霊にしばれました。こんどは聖霊の力で祈る私の祈りがものすごいはたらきをしました。これにも驚きました。帰りの汽車の中で聖書を読むと、聖書のヴェールがとれているのに気がつきました。今までの聖書の読み方は、たしかに観念ではなく、心の深いところで把えてい

たとは思っています。しかしまだ霊の次元には達していなかったことがわかりました。くすぶっているところへ大阿蘇の火山の火がついたというわけでした。これは天来の霊火でした。手島兄はこの集会を彼の「原始福音」グループのペンテコステとして記念され、今もそうですが、私にとってこそ大阿蘇の体験は聖霊のバプテスマの第一体験でありました。

聖書の扉の鍵

その後、私の聖書の読み方に次元的飛躍が起きて来ました。ヘブライ語やギリシャ語の奥の神の根源語のひびきを聴くようになって来ました。何も原典でなくて好いです。日本語で結構です。聖書はドラマですから、その現実の中に投身して祈り入る態勢が大切です。さきほどのイエスの山上の大告白の第一言を祈り心で冥想して来たら、豁然として霊界が開け、光が臨んで来ました。あの言はこう響いて来ました。

「恵まれたる哉！ 汝、わが十字架によって贖われ、根源的にたましいの貧しき無者とされた者よ、聖霊の天国体なる我れ、汝の中に在り」と。

こう響きましたら、私の全身は聖霊に深く浸透されて、畳の上に平伏しました。これは決定的な、聖霊のバプテスマでした。これは私にとって新約聖書の、否全聖書の扉の鍵となりました。この一言が身についたら、キリストの言も行も強く受けとられるようになりました。福音なる哉と感じて来ました。烈しい言、不思議な行為が却て力となって来ましたが、「わが言は霊なり、生命なり」（ヨハネ六・

六三)は全くその通りと知りました。実に聖書の言は、その背後から、その行間から無量なひびき、うめき、叫び、をもっていることが感ぜられて来しました。聖書の現実はそのすごい霊的次元のものであることがわかって来しました。皆そのままの、否それ以上の現実なのです。

パウロのガラテヤ書二・二〇の

「われキリストと共に十字架せられたり、最早われ生くるに非ず、キリストわが衷に在りて生き給うなり。」

これは「山上の大告白」の第一言のキリストの言に照応するものであるとよめて来しました。

私もこのような霊的現実となりましたら、キリストは、私の如き者を通して、私の聖書の告白的解説や祈りによる按手によって、すでにどれほどの人々のたましいと肉体をお救いになったか、ありがたいことです。

十字架は土台 聖霊は家屋

さて一般にキリスト教界に於て案外自覚されていない消息をハッキリ申し述べます。

それは、地上にあつたイエス・キリストは弟子たちに直かに聖霊を与えることをしませんでした。それは十字架の贖罪の大業を果さねば、聖霊はそそがれるべきものではなく、注いでも徒らであることを知っておられたからです。それゆえキリストは、「我この世を去らずば助主(たる聖霊)汝らに來たらじ、我れ(天界に)往かば、聖霊を汝らに遣はさん」(ヨハネ一六・七七)と言ったのです。即

ち贖罪の十字架が土台で、聖霊はそこに建てられる家屋という霊的構造です。

十字架され、復活し、昇天したキリストは、復活した霊体として四十日間自在に現われ、更に十日間祈り待っていた弟子たちや女たちに五旬節の日、ペンテコステの日に、約束の霊、聖霊を降したので、使徒たちは聖霊のバプテスマにあずかって、俄然変りました。その最も著しい例はペテロです。アンティ・クリストであったバリサイ人パウロはダマスコへの途上で復活のキリストに靈撃されて回心、回帰してキリストの第一の僕と化しました。どうぞ使徒行伝をしっかりと読んで下さい。この二人がいかに驚くべきわざを聖霊の力で成し遂げているか！ 聖霊は、現代でも同質のはたらきをします。それがしかし一般のキリスト教界では稀有のこととなっているので、使徒たちは天界で嘆いているにちがいないです。

ルター提題の第一条

ところで今日は、はからずも、ふしぎなことにマルティン・ルター（一四八三・一一・一〇—一五四六・二・一八）の宗教改革記念日に当ります。即ち一五十七年十月三十一日にルターはヴィッテンベルクの城教会の門扉にラテン語で九十五ヶ条の提題を掲げてローマ教皇レオ十世の免罪符の売買に対する神学的反論の火蓋を切りました。このことが期せずして宗教改革の狼火^{のろし}となったのです。その歴史的提題の第一条は、

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝ら悔改めをせよ』と言ひ給うとき、彼は信徒の全生

涯が悔改めであるべきを欲し給うた。」

というのです。この一言は全提題の根本命題であります。即ち、イエスの伝道の第一声は、

「汝ら悔改めよ、天国は近づきたり」(マタイ四・一七)でありました。ところで「汝ら悔改めよ」はヘブライ語では「シューブー」で、「汝ら立ち帰れ」が原義です。預言者もキリストも使徒たちも、もともとユダヤ人ですから、日本語訳の「悔改め」といった消極的な意味ではなく、神へのキリストへの「立ち帰り」という全存在的な積極的な行動を求めたものであります。マルコ伝では「汝ら悔改めて福音を信ぜよ」ですが、私はこう訳したいです。

「汝ら回帰して福音に信じ入れよ！」

預言者に於ける帰入

旧約聖書の預言者たちも、キリストの先駆者としてエホバの神への「立ち帰り」を口を極めて叫んでいます。少しく例をあげてみると、

預言者エレミヤへの聖言は、「イスラエルよ、汝もし帰らば、我に帰れ」(四・一)。「汝もし帰らば、我また汝を帰らしめて、わが前に立たしめん」(二五・一九)。最も注目すべきは、

「エホバよ、汝はわが神なれば、我をひき帰したまへ、然らば我帰るべし。われ帰されし後に悔い、教えを受けし後にわが髀こしを打つ。エフライムはわが愛するところの子、悦ぶところの子ならずや。我彼に向ひて語るとに彼を念はざるを得ず、是をもて我が腸はらわたかれのために呻く、我彼をあわれみ、あ

われむべし。」(エレミヤ三一・一五…二〇私訳)

預言者エゼキエルへの聖言は、「主エホバ言ひ給う、我は活く、我れ悪人の死するを悦ばず、悪人のその途を離れて生くるを悦ぶなり。汝ら翻へり翻へりて、その惡しき道を離れよ、汝ら何ぞ死ぬべけんや」(エゼキエル三三・一一私訳)。この「翻へる」も「離れよ」も同じ「シェーブ」(帰る)で、我執から「離れる」ことは「方向転換」、神への「立ち帰り」を意味しているからです。(小池辰雄著作集第三卷『無の神学』第十章帰入・回帰。(一)「預言者に於ける帰入」の項(一二二—一四〇頁)参照)

ルターの宗教改革もパウロを中心とした使徒たちの信仰に立ち帰ることがあったから、ルター自身もこの場合、そういう独乙語 *Kehret umi*「汝ら立ち帰れ」を用うべきでした。

福音の原始の次元に回帰せよ

現代キリスト教は、使徒たちの靈的信仰の次元からはかなりのずれを一般的に來たしています。それであるので福音の原始の次元に、使徒たちの信仰の次元に立ち帰ることを要します。プロテスタントでもカトリックでも、教派の如何は問うところでありません。夫々の在り方に於て、問題は、本当に十字架と聖霊をからだで受けているかだけです。そのためには全存在を以って、十字架の中に祈り入り、帰り入ることです。回帰することです。

昔から宗教界で道を拓いた人たちが、深山幽谷や曠野や砂漠で祈ったのは、皆このような全存在的

祈入、回帰であつたわけです。何も大宗教家に限りません、最高最深の体験は万人に可能なのです。本当にその人が全存在的祈入、投身を無条件でやるならば。

十字架の門・聖霊の原野

キリスト道においては、十字架が門ですから、我々の我執を引きうけて下さった十字架のキリストを体受するに如かずです。十字架のキリストの中に祈り入って、自我がすつとばされていることを受けとれば、必ず聖霊が突破突入して来ます。そのときその人らしい霊的現象が起きます。体験の様相は何でも可いです。誰が何といつてもかまわぬ確信が与えられます。断じて主観ではありません。キリストが、聖霊が、主体である体験です。歡喜に溢れます。この無条件な簡単な、いかなる宗派も問わない、しかし絶対的な徹底的な一事が、新しい宗教改革の焦点であると示されています！この宗教改革記念日に期せずしてこのことを叫ばしめられていることをふしぎな理と感じ、キリストの聖名を讀えます。

イエスは手ばなしで無即無限無量の現実に居られました。そのことはこのはなしの始めの方でハッキリ例証した通りです。我々はキリストの十字架という門に体当りしてぶつたおれて無を賜り、開かれた十字架の門の下で、聖霊のバプテスマにあずかると、前方には詩篇二十三篇の如き、緑の野辺、憩いの水ぎわが展開して来ます。聖霊の気の、風の吹く光かがやく原野です。霊鳥が舞い、花の咲いている野辺です。かなたには富士の如き霊峰がそびえ、霊雲が帆船の如く走っている霊界です。我ら

の見る大自然が、今私が申した靈的色彩調音調を帯びて見えてくるのです。

十字架・聖靈は楕円の二焦点

キリストの十字架と聖靈は謂わば、楕円の二焦点で、断じて離すことの出来ない二焦点です。そして十字架は土台たる隠れた焦点であり、聖靈は光と生命と愛の力をもった顕わなる焦点です。この二焦点を廻って楕円を描きながら我らの日常生活が、車輪が廻転して快走する如く円現してゆきたいものであります。大宇宙の無数の星は皆球形をなして円運動をしている。我らの太陽も然り、その太陽のまわりを廻る遊星みな然り、地球の楕円運動を発見したケプラーの法則を私はこの福音の靈的生活に援用しているわけです。十字架のイエス、聖靈のキリストという原始の二焦点なる原点に、福音の原始の次元に、使徒らの次元に、回帰せよ！これが新宗教改革の叫びであります。誰れ彼れがではありません、各人が新宗教改革者になつて下さい！

パウロはその手紙の中で「EN CHRISTO」「我れキリストの中に、キリストわが中に」といった消息を一六四回書いていると「パウルス」という名著の中でダイスマンというドイツの神学者が言っております。そのようにパウロは十字架・聖靈一如のイエス・キリストを生きていました。こういう現実を生きていないキリスト者はキリスト者でない、とパウロはローマ書第八章で叫んでいます。ローマ書第八章と同質の福音を生きていないで、本当は、神学の、聖書解説の、伝道の、宣教の、と言えるすじあいではありません。この宗教改革記念日に、全キリスト教界に対して私はこの一事を叫

ばざるを得ません。

「教会」の原始形態と本質

そこで一言「エクレシア」のことに言及せざるを得ません。エクレシア (EKKLESIA) というギリシャ語は「召し出された者の集り」といった内容の言で、原始キリスト教における信者の群を表わす言でした。私の藤井先生はその「教会論」に於てこれを「召団」と訳しました。先生はしかし御自分では論だけで、実際には用いていませんでした。そこで私は一九四〇年秋以来始めている我々の集会を幕屋といったり、召団といったりしています。まだ日本の諸都市に九つの小さな召団があるに過ぎません（一九八七年一月現在では全十二召団です）。

キリストが「一、三人わが名の中へと集められたところ、そこに私は彼らのただ中に在る」（マタイ一八・二〇私訳）、

と言われたこの一言が「エクレシア」の本質であり、原型であります。「キリスト」という名は聖霊の宿っている名ですから、聖名を呼ぶ者は聖霊の臨在を感得する祈心でなければなりません。聖霊のキリストが汝らのただ中に在りと言っておられるからです。歴史的に教会が形成され、カトリックやプロテスタントの宗教団体、教階制度的な組織（ヒエラルヒー）にまで発展したために、キリストの原始の本質がどこにあるかとあやぶまれる状況です。私は出来あがっている形体は問題にしてもはじまらぬので、キリストの根本精神の原質へ回帰せんことを願わざるを得ません。いずれの教会も

夫々使命があります。問題は、本当にその教会員が十字架を体受しているか、聖霊を本当に受霊しているか、即ちさきほどから申している十字架・聖霊の二焦点が実存の中心となって生きているかです。『教会』(Kirche, Church)の原語(KYRIAKE)「キリアケー」は「主の属」というギリシヤ語ですから、主人公たる聖霊のキリストが臨在し給う現実でなかったら、「教会」はただ建物になって、主人はお留守というわけでしょう。現代のスイスの大神学者ブルンナーが「教会の誤解」(„Missverständnis der Kirche“)という名著を遺していますが、彼も聖霊のないところに教会なしと力説しています。

幕屋

また聖書には、創世記から黙示録まで、「幕屋」(オーヘル)という言葉が出て来ますが、イスラエルの民が牧畜による生活形態でしたから、天幕を張りながら、原野を求めて旅をしたわけで、住居の幕屋も、神霊を迎えて礼拝する幕屋もあったわけで、キリストの「二三人わが名の中へと集められる所」の原点は正に幕屋であったわけです。私はある時、このことに気づき、武蔵野の集会所を「幕屋」と自ら命名したのでした。個人の在り方にせよ、集団としての在り方にせよ、十字架・聖霊の二焦点が文字通り新しき改革の焦点であります。

「教会」「召団」「幕屋」といったキリスト者の集団の各員a、b、cは、夫々十字架(S)、聖霊(P)という二焦点の公分母をもつ $\frac{a}{sp}$ 、 $\frac{b}{sp}$ 、 $\frac{c}{sp}$ という実存体で大黒柱は十字架で、天幕が教会

堂の空間はPなる聖霊で満ちているというとき、それは本当の教会であり、召団であり、幕屋であります。(前掲第三卷『無の神学』第七章「オーヘル・エクレシア論」八〇—九九頁参照)

霊止の原点に回帰せよ

さて眼を転じて現代世界の状況を見るに、世界はイデオロギーの対立とその渦中にあります。国家の中にしろ、国際間にしろ夫々のイデオロギーには夫々の立場と意味と価値がありましよう。しかし政治的イデオロギーでバランスをとっているような平和はいっつ崩れ、いつ爆発するかわかりません。宗教界でも宗派的、教派的な対立をやっていたのでは、本当の平安はありません。歴史を血で染めて来たそして今も現に教派が基になっている戦争ほど宗教に悖る現象はありません。

政治的イデオロギーの政治家も、宗教的イデオロギーの宗教家も、どういう哲学的、宗教的体験でも結構ですが、^{ひと}霊止、人間という原点に立ち帰って、回帰して、国境を越え、宗教団体の罫いを越えて、偽りなき心の握手をせんことを悲願してやみません。単なる条約や非戦論ではなく、善隣のよしみを結ぶことです。然らば「剣は鋤になり、鎗は鎌にうちかえられる」でしょう(イザヤ二・四)。

世界の焦眉の問題、平安から平和へ!

東西にしろ、南北にしろ、強力なおそるべき武力をもつ国の指導者たちが、腹をわって握手したら、世界は大喝采をするでしょう。むなくしく血を流した幾百万の亡霊の枯骨も霊衣を以て天に昇るかも知れません。二十世紀の世紀末を迎えんとする今日、ノストラダムスの預言をして虚しく消えさせるか、

実現させて人類の破滅を招くか。実に焦眉の問題は、政治でも経済でもない、生産でも軍備でもない、学問でも教育でもない。人の心と魂の問題であります。万人がそのたましいを絶対界と「結合」するぎりぎりの問題であります。たましいが絶対界との交りに帰入したら平安となりますが、そのような縦の平安を得れば、横の人と人との、国と国との間の平和が生じてくるわけで、このような平和をこそ実現しなければならぬわけです。

木喰上人が暗れても降っても行脚したその菅笠には次の句が墨書されていました。

本来無^シ東西^ニ 何^ニ処^ニ有^ニ南北^ニ

迷^ラ故^ニ三界^ノ城^ノ悟^ル故^ニ十方^ノ空^{ナリ}

木喰が天界から今の東西対立、南北差別の混乱の世にこの句の書かれた菅笠をひらひらと舞いおろしているのではないですか。そしてこう言っているでしょう、

「木喰のけさや衣は破れてもまだ本願は破れざりけり」

「仏法はよきも あしきもへだてなしわが本願にもらすものなし」

宇宙の根源愛をたましいの呼吸とした二大詩人ゲーテとダンテ

人間が一番飢えているものは実は愛です。本願的な愛です。与えて尽きない無量の愛です。世界的大詩人ゲーテはその大劇詩『ファウスト』の終りの方でこう謳いました、

“So ist es die allmächtige Liebe,

Die alles bildet, alles hegt.” (11872-73行)

「かくてこそ全能の愛である

一切を形成り、一切を育くむものは。」(私訳)

またその「神と世界」という晩年の詩集の序説で、

「神らしきは宇宙をみふところの中に動かし、

自然をおのが内に、

おのれを自然の中に愛護すること、

されば神の中に生き動き在るものは

神の力、神の霊を失うこと絶えてなし」(私訳)

またゲーテは、世を去る旬日前にエッカーマンとの会話の中でこう言いました、「私は太陽の中に
見る神の光と創造力とに畏敬の念を捧げる。我々はすべてこれによってのみ生き動き在るのだ、植物
も動物もすべて我々と共に」(私訳)。

ここに引用した句で、「神の中に」、「神の光と創造力の中に」、「生き動き在る」とゲーテは告白し
ていますが、これはパウロが、アテネのアレオバゴスという丘の上で伝道の演説をした言の中にある

一句で、ゲーテはこの句を愛してその境地を呼吸して生きていた大詩人です。そして、キリストを道徳の最高原理の神的顯現者として、また太陽に於ける神の光と創造力の啓示に対し、無条件の畏敬の念を捧げると語っていますが、これは実に彼の全生涯を貫いてのたましいの相でありました。太陽を国旗としている日本人は、このゲーテの心境に対して残念ながら恥じねばならぬでしょう。イタリアの詩人ダンテもその大詩篇『ラ・ディヴィナ・コメディア』（『神曲』）の終句を次の如く結んでいる、

「されどすでにわが願望と意志とは、
等しく廻る輪の如く、愛に廻れり、

日輪と諸星しうせいを動かすかの愛に。」（私訳）

〔ゲーテやダンテの愛の消息については第二卷『芸術のたましい』参照〕

絶対界からくる霊的な愛だけが、本当の平安とそして本当の平和をもたらす唯一の原動力、原始力であります。大詩人ゲーテやダンテが一切の愛の根源はそのような神的存在に在るとしていたことは今御紹介した通りです。

イエス・キリストと釈迦如来

イエス・キリストの無、即、無限、無量の愛、釈迦如来の大慈大悲の本願、何といってもこの二大宗教は人類がつねに新たに回帰し、南無せざるを得ぬ原点で、これをもし拒み、忘れ去ったあかつきには世界の終末が来るでしょう。

道元の「衆生本来仏なり」とか「一塵の中に無量の諸仏在ます」とか「山川草木悉く仏性あり」とかいう言が語る靈的根源現実。「神その像に即して人を創造せり」（創世記一・二七私訳）靈なる神はその無相の相に即して人を創造されたのです。またパウロの「神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの中に在ます」（エペソ四・六）という神の超在、遍在、内在の神秘的現実を思うとき、電波、光波、と共に靈波が遍く漂うていることにたましいは気がつかねばならないです。

終りにキリストの「山上の大告白」の中の最大の言を掲げます。

「我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天に在ます汝らの父の子たらんがためなり。神はその日を惡しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給うなり。……然らば汝らの父の全きが如く、汝らも全かれ。」（マタイ五・四四：四八）この「全」は無量の愛なのです（ルカ六・三六）。

このようなつきぬけた底ぬけの愛は、聖靈の力をもつ愛であります。アーメン、ハレルヤ。

〔附言〕これを読まれて、更に掘りさげたい方は、拙著作集第一巻『無者キリスト』及び第三巻『無の神学』をお読みくださらんことを。第二巻『芸術のたましい』もその伴奏としての役割を充分果しましょう。

十一 『一』の宗教

(一九七一年十一月七日)
 小池先生講述要旨
 文責 船橋俊一、一九七一年十二月

きょうは、予定では「天国の譬話」ですけれども、昨夜、聖書のある箇所を読んできましたら、パット閃きがきて、『ははあ、聖書の世界は「一」だなあキリストの福音は「一」だなあとはっきり掴んだものですから、演題をかえ、「一の宗教」と題して語る事にしました。大体私が見当づけた一に即する所を拾い上げてみました。まず最初はマタイ伝五章一七―二〇節。

非常に厳しいことばです。これは完全にユダヤ的思想の直系の所をキリストは擱んで言われたのです。「……律法の一点一画も廃ることなく……」一つの小さなものをもおろそかにしない。律法の一つを破る事は全体を破ることである。一と全との関係。一が全である。一即全と言うこの角度をはっきりと身に体さなければだめなのです。ですから、モーゼの十戒は私たちは皆落第。勿論法律的犯罪者ではありませんが十戒の根本精神はキリストが山上の垂訓で言っておられる通りで、これ「義人なし一人だになし」と言われる所以です。律法の一点一画も守られることが大事なのだがそれができない。

しかしそれが厳としてあると言う法則の世界なのです。その法に執した所にユダヤ教の宿命的な誤謬がある。キリストはこのように厳しい事を述べながら、これを超えてしまったのです。そこが法律と福音の差ですが、まあ段々と語ってゆきます。

次にマタイ伝六章二五―三四節。このテーブルのまわりにも沢山の花がありますが、一つの花を見てキリストはそこに現われている神の栄光をみる。小さな一つの存在。そこに神が宿っている。宇宙の神秘がある。そういう一個の存在。そこに神のすばらしい無限無量の栄光が現われている。このようなものの見方、握え方、これは非常に大事です。キリストは一を惜しみこれを限りなく顯みの方である。そして三四節。

この一日は千年。一刻に永遠が含まれている。一つの瞬間に於て永遠に生きる——これが本当の生き方ですね。これが内村先生の「一日一生」。一日に生命を賭ける。結果がどう出ようといい、神さま相手の一日です。ここからキリストが現在というものをしっかりみているということが判ります。「即」の世界、現在「即」の世界です。思い出すのはあのブレイクの名句です。

To see a World
in a grain of sand,
And a Heaven
in a wild flower,

Hold Infinity

in the palm of your hand,

And Eternity

in an hour.

一粒の砂に宇宙を見、

一つの野草に天界を見、

君の掌に無限をつかみ、

一刻に永遠をつかむ。

それから、マタイ伝八章五——三節。百卒長のことが書かれてあります。この百卒長においてキリストはある「一」を見た。この百卒長という一人の信。この一人の在り方にキリストはグッとほんとうの姿を見られた訳です。イエスという方は、ことにこだわらない人ですから、ほんものがみえたらバツとそれを言うのですね。

その次にマタイ伝一〇章二八、二九節。鳥一羽の存在が神の前に忘れられていないという事。即ち小さな一個の存在が決していい加減にされていないのです。神さまは十把一絡という見方はしない。一つ一つをその個性において、その存在においてみるのです。人格とはまさに一なる絶対的な個である。一なる個性。かけがえがないのです。そのように人間は勿論そうであります、十把一絡に見た

いような羊であらうと、一羽の鳥であらうと皆そのように顧みられている——なんという深い「一」のかえりみか！

それから、今日の話の主題にもっていきたいと思つていた所にくる訳です。即ちマタイ伝一三章三一—三三節、一粒の芥種、それが非常に大きなものに展開してゆくという事です。

我々一人一人が芥種一粒であります。それ程の力を持っている。山を移すほどの芥種一粒の信。芥種一粒とは、我々自身が、全存在が芥種一粒である。だから全存在が信そのものとなる。これ全信であります。全信のあるところ、そこに前進があります。即ち全存在が信そのものとなった時、これがものすごい原始力的なこととなる。それはいうまでもなくキリストの霊を宿すこと。分量的に考えとはいけません。一即全、一が即ち全なる質を持っている。質であつて分量ではないのです。「一」というものは質的存在なのです。これは本当に不思議なのです。その「一」そしたらこれが全信となりますから、これがものすごい力となる。いやそれはとてもなれません。とあなた方は思うでしょう。そうではないですよ。今度は逆説的に言います。今度は我々の存在のかたすみに一がある。かたすみにあるこの一をまた分量と思つてはいけません。これがまた質的一なのです。するとあとのマイナス九十九というダメな部分は問題にならない。何故なら、この一を本当に持つならば全体が一であるという事と同じであります。これは本当なんだ。だから失望はいらん。キリストの言われた意味は寧ろこちらで、小さな信仰がお前の内にあればそれでやってごらん。その時のこの「小さな」という、小

さな一においてキリストは全的なものを見ておられる訳です。この一を本当に全として自覚すると、マイナス九十九がもはや問題でなくなる。そうするとマイナスは現実でありながら、この一が全部を蔽っている在りかたになるのです。それが信仰的現実というのです。今、私たちにはキリストの姿がある。このキリストの姿がどんなに小さな姿でも、これは質的にこの全体を蔽っている所の一なのです。問題があっても問題のない人、それが本当のみ霊のクリスチャンであります。

續いてマタイ伝一八章一一四節。迷える一匹の羊のたとえです。如何に一というものを粗末にしないか、キリストという人は。キリストの福音は。一一六節。「かくの如く一人の幼児を受くる者は我を受くるなり……」一茎の花において神を見ているキリストは、幼児において神を見ている。自分を見ている。自分において「我を見し者は父を見しなり」と言つて神を見ている。そうなれば、一のあとに何を入れますか？——「如」

一如の世界。父、子は単なる二ではない。一如の世界。これも一であります。信仰はこの一の世界に来るまでは本物でないです。絶対に！ 一如の信。

「我を見し者はキリストを見しなり」と言えなければ本物ではないのです。私たちは、それは手放しでは言えません。しかしこの土の器、破れ器の小池をみたものはキリストをみたのであると、この破れの碎けの小池の中にあるイエスが見えないか、と言うことがはっきり言えるのです。

福音は一をしっかり願みている宗教である。そしてこの一はイエス自身が父と一如になった世界。

それから我々芥種一粒の中にキリストの御霊が入ってきて、キリストと私たち一人一人が一如の時に、この信は山をも動かす信である。ほんとうの原始力なのである。

今度は全的な一という角度から拾ってみます。ルカ伝一四章二五—三三節。「かくの如く、汝らの中その一切の所有を退くる者ならでは、我が弟子となるを得ず……」一切ということですが、これは全部の意、全部を退けること。即ち自分という一が全の中に凝集しているのです。だから、全的な一というものが土台となっていているわけです。全部を退けるということは、結局自分自身を、一なる自分自身を献げる事になる訳です。そうすると、これは私のいう「無」と通じてくる訳です。一即全、全即一。そしてこれは無という土台を持っている訳です。

一を全的に献げてしまふ。全的にキリストの中に投じた時に一如という、それはまことに自分を完全になくしている世界なのです。一なる我というものを完全にキリストの中に……。それを別の角度から説明してみます。マルコ伝十章に「……神ひとりの他に善きものなし」とありますが、神一人が善であつて自分は善ではない。自分を無善として自覚した時にはほんとうに一なる神と即如の世界、一如の世界に入つた。いいですか、この一如という気合いはどこからくるかというのと、自分を無者とした時にゼロとした時にこの一如の世界に入ってしまうのです。ですから一即全、全即一などという事がどうして可能かと言いますと、無のあり方、無の実存から、これが出てくるのです。だから「一の宗教」はまた「無の宗教」と言つてよい訳です。無のあり方、一番奥に無の世界をもっている、それ

は十字架によった。十字架によって私たちは無とされている。十字架においてもはや私心のない世界が自分の中に恩寵として与えられているのです。神、キリストはその無を即無限、無量となさる。無量は即ち聖霊ですから、聖霊という無量なるものを降して神さまは、「どうだい私が生きているじゃないか」という訳です。私たちは「はい」と言う。それが一如。即ち自分が十字架によって無とされた時に、復活の生命、聖霊がきてキリストと一如になる。だから、やはり十字架、聖霊の事態が絶対に一如をなさしめる所の根元の事態であります。

何もできないといって

神に投げ身して生きた

イエスは女の女であった。

王者も武威も財力も学者も

動かし得なかった

イエスは男の男であった。

み霊に貫かれ充満して居給う

天界のキリストに

主様！ と叫び一如となろう。

天 鐘

十二 信仰の奥義——ヨハネ六・二九

(一九七三・七)
保田集會第一講筵要旨

内村鑑三先生記念講演会が、無教会の年中行事として毎年今頃ひらかれる。聖霊の事態がハッキリして以来、私は無教会のアウト・サイダーにされた。やむを得ない。私は今やただひとり、天界の使徒たちを道しるべとして道なき道を往く。

これが私の無礙の一道である。

さて福音書を開こう。福音書を開くと、もう実は私は話すのが嫌になる。福音書はあまりにもすぐて、解説など出来る世界でないからである。よくもまあ、研究、研究といって、生きた福音書を研究のメスで斬ることができるものだ。なるほど微に入り細をうがって解りもしよう。学問的研究に対して勿論敬意ははらう。しかし我々の最大の関心事はいかにもして福音書の霊的次元に即せんことである。身読もって見たまの現実に入らんことである。キリストの靈酒に酔わされる。それは酒に酔うのとは全くちがう。

「我が酒杯はあふるるなり」と詩篇二十三にあるが、「われ」という酒杯がみたまであふれるのである。だからこれほど目覚めたことはなく、これほど生命にあふれることはないという事態である。福音書は、みたまのバプテスマを受けてから、全く身近かな、最愛の書となった。キリスト直結の世界であるからである。研究したい人には研究させておこう。私たちは聖書を、黙示録にあるように、食べ生きてよう。

さて今日はヨハネ福音書六章二十九節に喰いつこう。

「神の業はその遣はし給へる者を信する是れなり」の一句。

なぜイエスがこう言いなされたかのなりゆきをちよつと見ることにしよう。

ユダヤ人の三大節の一つである過越の祭が近づいて来た頃、それまでにイエスが行った病者の癒しの徴を見て群衆がむらがって近づいて来た。彼らはパンにこと欠いていた。ところが群衆のために工面できるようなパンのありようはない。一人の童児が大麦のパン五つと、小さな魚二つをもっているにすぎなかった。相手は五千人の群衆である。イエスは人々を坐らせて、そのパンとその魚をとって天に謝した。すると見よ。そこには五千人の人々が食べてなおあまりある大奇蹟が現じた。

その夕方、弟子たちは船に乗ってカペナウムに向った。イエスはひとり山に登った。イエスは大奇蹟のあとで、彼を王に祭りあげようとした愚かな群衆の動向を知って、さっさと山へ遁れたのであつ

た。そこで夜もすがら祈っておられた。ところがその夜大風が起って、湖は荒れてきた。弟子たちの船は木の葉のように波に奔弄された。この大時化を見てとったイエスは未明の頃湖上を素足で渡って来られた。弟子たちは幽霊かと思った。「安心せよ、わたした、おそれるな！」の力強いイエスの言！、そのときのイエスとペテロの劇的な光景は今ここに述べる必要はないが、彼らは助けられ、風も波も鎮められて、弟子たちはイエスと共にカペナウムに着いた。

群衆は風も凪いだその朝、西岸のテベリヤから来た数双の船に便乗してカペナウムにやって来た。「先生、いつここに来られたのですか」などと質問した。彼らにわがらうはずがない。イエスは、「おまえたちは本当の徴がわからないな。パンを食べて飽きたので、それで、またやって来たのだな」といった答をなさった。五千人を飽食させた徴は、イエス自身が無量の食物、生命そのものである徴なのである。徴の現象面であるパンにとらわれて大奇蹟を追い求めるのは御利益信仰。ユダヤ人が徴に躓いているのはパウロが申した通り。それはユダヤ人に限らない。幸福を追求する人類そのものが、歴史の終りまで「徴」に躓くのである。

そこでイエスは、「朽ちる糧のためではなく、永遠の生命にまで至る糧のために働け。この永遠の生命は人の子がおまえたちに与えようとするものなのだ。」と言いなさった。「働け」と彼らは言われたので、「私たちが神のいろいろな業を行うためには何をしなければいけませんか」とたずねた。これに対するイエスの答が、さきほどの「神のわざ（単数）は神が遣わし給うた者を信することだ。」

端的に言えば、「神のわざはこの私を信ずることだ」である。

神の業が即ちキリストを信ずることである、というのである。神わざと主を信ずることが一つ。信はずなわち業である。しかも業の最も根源なるもの、神わざである、という。信ずることが人間のなすべき、またなし得る最高、最深なる業である。であるから、これを神わざという。

ルターが「ロマ書の序文」の中で、「本当の信仰は、我々の中における神わざである。すなわち、このわざは我々を変えて新たに神から生れさせ、旧きアダム〔旧き我れ〕を殺して、我々を心において、情緒において、思念において、またもろもろの能力において、全く別な人間となし、しかも聖霊をもたらすものである。おお信仰とは何と活き活きとした、活動的な、力強いことがらではないか。信仰は間断なく善きことをなさないでは措かぬほどのものである。」と語っているのは、実に千古の名言である。

ところで私はもっと端的に今語ろうと思う。信ずることは、たとえば、今ここに花がある。この花を見ているというの、花があるから、花を見ているということがいえる。花という実在が、私に見るということをするがし、且つ、花を見ていると告白させるのである。信ずるも実は相手があるから信ずるというのであって、相手が無いのに信ずるというのでは、それこそ盲信、迷信ということになる。キリスト教では、キリストという驚くべき実存があつて、「我を見し者は父を見しなり」と言いなされた。このキリストに福音書で出合い、そのドラマの中で、つらつらキリストを見、且つ聞い

て、そのキリストに圧倒されると、信ずるの信じないのと詮議だてする余裕など、すつとんでしまう。キリストが私に自らを見させ、聞かしめ、よびとめ、つかみかかる。私はそれに圧倒されて、降参してアーメンというよりほかにない。このアーメンが、信であって、正にキリストを通して迫りくる神のわざのほか何であらう。信仰とはキリストという神の現象体が、主体となって我々を圧倒し給う神わざを、こちらから告白する事態のほかの何ものでもない。実に信仰は我々がこちらから「信ずる」などという主観的な独断では断じてなく、キリストという主体がなし給う神わざであって、我々の全存在に対する上からの、絶対次元からの革命的なわざである。

だから同時にみたまが臨み給う。その最もはつきりした場合は、十字架の下である。十字架の下でキリストにつかまれたらみたまがくだり聖霊の光につらぬかれて、信仰は本ものとなる。恩恵即信仰である。

こうなると信仰とは、全我のキリストへの投入という悲願が、そもそも神、キリストの圧倒的本願に動かされての、やむにやまれぬものであることに気がつく。あるがままで尻もちをついて、どうにもならぬそのすがたが直ちにキリストの本願のみふところの中であつたという事態。人生にはいろいろな、なやみ、苦しみ、失敗、ゆきづまり、まよい等々がある。そのとき、ぶつたおれたら、そのままキリストのふところの中だった、というのが、神わざの現実、これをうけとるのが信仰だ。

「神のわざはそのつかわし給えるキリストを体受することはなり。」おまえのために、神様が、いつ

どこでなり、キリストをつかわして下さる。そのキリストを体受すること、これが信仰で、これが実は神自らなし給うわざであるという。然らば、我々の側には何もすることはない。神の愛の本願力が、いっどこでもはたらいてみたまのキリストを遣わして下さって、「安心せよ、わたした、おそれるな！」といって、体受して下さい。みふところの中に！こちらは全身でハイ！すみません、ありがとうございます、と答えるだけだ。それが全的信仰というものだ。（私がこう語っているうちに全身がみたまにうたれてしびれ、平伏した人々がいる！）

人生の有形無形の出来ごとにぶつかって進退谷^{きん}まったとき、人事不省におちいったとき、四面楚歌の声のとき、八方ふさがりのとき、その全身をキリストの大愛の力が抱いておられる。みふところの中である。これが神のわざであり、それに気がつくのが信である。キリストの大愛にくるいはない。パウロがロマ書八章の終りで絶叫している通りだ。アーメン。

十三 自然・靈然・神然——ルカ十二・二十二—三四

(一九七三・五)
京都春季特別集會・要旨

イエスは言いなされた「だから私はおまえたちにつげる、何を食べようと生命のことを思い煩い、何を着ようかと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るではないか。」イエスのこの言いかたは、理論上はうなづけない。生命は糧を要し、体は衣を要する。その糧や衣を問題にして何がわるいのか、と一般には反論したくなる。

日常生活の衣食は、必要欠くべからざるものである。それなのにイエスは、更につづけて、「鴉を思つてごらん、播かず刈らず、納屋も倉もない。だが神はこれを養ひ給う。おまえたちは鳥に優ること幾許であるか。」この權威ある言葉も理窟ではわからない。

イエスの言葉は超常識である。反文明である。それは事物の本質から発した言葉、また本質に迫る言葉であるからである。衣食住の問題を考えなくては生きておられない現実であるのに、そのような相対的現実を第一とするな、というのである。現代社会の問題は正にこの衣食住のことに尽きるとい



著者臨む鶴真

ってもよい程である。こんな現代にイエスの言は正に超常識である。しかし、イエスは何故、「生命は糧にまさり、体は衣に勝る」といったのであろう。イエスがいつている生命は単なる自然的生命でもなく、体は単に肉体でもない。食べたり飲んだりして太ったの瘦せたの、という生命でもなければ、衣類でどうかなる体でもない。

それではそのような生命や体は何を食い、何を着たらいいのか。キリスト自身が言っておられるではないか、「我を喰え、我を飲め」と(ヨハネ福音書第六章を見よ)。キリスト

自身を喰べ且つ飲むことが第一のことでなければならなくなったら、本ものとなってくる。「キリストを衣よ」とパウロも言った。キリストを喰べ且つ飲み、キリストを衣る。これが第一義である。

ピフテキよりも、ウィスキーよりも力を与え、いのちを与える桁違いの食物、飲みものはキリストの霊肉、キリストの霊血である。「酔心」という酒があるが、私たちは酔神、酔主である。「ヤハウ

エーとその聖き言のために、私は酔える人の如く、酒に勝たるる人の如く」なった、と預言者エレミヤは告白した。あたまで聖書の研究など何年やつても、神学をどんなにひねくりまわしても、預言者や使徒たちの現実からは遠くなるばかりだ。全存在をキリストの中に祈り込み、投げこまない人は、いつまでたつても、キリストに酔うことはできない。キリストがこの破れ器の中にこそ注ぎこんで下さる。キリストがわが骨の骨、肉の肉、血の血となつて下さる。こう語っている私の全身は靈血の奔流のために白熱してくる。口の中には異言の泉が湧く。

こうなつてくるとハッキリした、衣食住の相對問題をとやかく問題にする論理からは抜けていくことが。これかあれかと撰びとる分別や撰択に心を用いることが思いわずらいで、謂わば都会の百貨店生活がこれに通ずる。

キリストが「空の鳥を見よ」とか「鴉を思い見よ」と言いなされた心は、自然に帰れ、仏教的な表現でいうなら、自然法爾に還れである。おのづから諸法と一如となつてゐる境地である。神の愛のあまねく涵み渡つてゐる自然界、矛盾の相を呈しながら大調和をもつてゐる大自然。そのような自然の心を心としてゐるのが動物界、植物界。人間だけが智慧を働かせて、悪いことを企てる。最もなされない反自然者は人間である。「知識を増す者は憂患を増す」と伝道之書にある消息が思い合わされる。

鴉を思い見よ！

播かず、刈らず、

納屋も倉もなし。

然るに神は之を養いたまう。

百合を思い見よ！

紡がず、織らざるなり。

栄華を極めたるソロモンに

その装此花の一つに如かず。

ああ信仰うすき者よ！

汝ら何を食い、

何を飲まんと求むな、

また心を動かすな。

ただ父の御国を求めよ。

さらば此等の物は

汝らに加えられるべし。

懼るな小さき群よ、

汝らに御国を賜うことは

汝らの父の御意なり。

(ルカ二二・二四—三二より)

キリストの詩のような言葉！ その気合は、鴉も百合も自然そのものの、しかも自然には神の愛と栄光が滲透している。況んや人間においておや！ 人間こそ神の似すがたに創造されている。人は靈止（ひと）ではないか。神靈の止まっているのがその本質ではないか。根源の相に還れ！ 父の聖国を求めよ！ 父のふところに突入せよ！ 父と一体一如たれ！ といった気合ではないか。

鴉や百合が大自然の一部として自然なあり方をしていて、父の養い、父の装を賜っているように、人間も父なる神の似姿たることが自然である。然り、靈神に即することは正に靈然！（語りゆくうちに天来のひらめきでこの表現が与えられた。）このような靈然たる姿に生きておられたのがイエスであった。イエスが自然よりも自然な言動で実存しておられたすがた。あれが靈然というものだ！

我々はイエスのまねをするわけにゆかない。神に直結はできない。そこでキリストの中に彼の十字架の門を透得して入ってゆく。そこに第二の自然、自然の根源相たる靈然の現実を賜わる。何たる福音であるか。みたまに在るとは靈然たる次元にあるということである。キリスト者といながら、この靈然たる自然を身につけないで、そういう次元に呼吸していないで、何でキリスト者であるか。イエスが山上の大告白で、鴉を見よ、百合の花を見よ、といわれたのは、彼らの自然そのもののすがたの如く、おまえたちも靈然、神然、自然たれ！ そこに天国、聖国があるぞ！ という真意であった。

「神の国を求めよ。」とは、私のふところに入れ、私を喰え、私を飲め、というキリストの心だ。

「自然」といえば、私はずっと以前から漢文の聖書が欲しくてさがしていたが、なかなか見つからない。ところがこの間（四月十六日）、神田の古本屋で偶然見つけた！「ヘウレーカー！」（見つけた！）と呼んだアルキメデスのようなよろこびであった。ところで今申したいのは、この漢文の聖書（明治十六年、耶蘇降生千八百八十三年、北英国聖書会社、日本横浜印行版）で、出埃及記第三章のあの有名な「我はありてある者なり」を漢文で何と記してあるかをしらべてみたら、次のようであった。

神謂摩西曰、我自然而然者也。

即ち、神モーセに謂って曰く、我れは自然にして然る者なり。

すなわち、神は自らを、「自然にして然る者」と自称した。要するに神は「自然者」である、という。「自然」とは神に最もふさわしい表現となる。或は天然ともいってよいし、正に靈然といって最もふさわしいではないか。

大自然者たる神の栄光のあらわれが即ち大自然である。そしてこの自然界の中の被造物の中で人間に優るものはない。然らば人間こそ自然靈然に即して神の栄光の体现者とならなければ勿体ない。

「天の父はその日を悪しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせる。……だから、おまえたちの天の父の全きが如くおまえたちも全くあれよ！」（マタイ

五・四五―四八）と最大の要求を、イエスは我々罪びとに對してなされた。善惡、正邪の相對を絶して絶對恩寵の、大慈悲の人となれ！ とのイエスの要求である。何びともこれを手ばなしでできるはずはない。しかし、善惡、正邪、明暗、死生の兩極に絶する。その絶し方が本ものとなるには、ただ絶對愛だけである。絶對の大愛をマタイ伝では「父の完全」と言い、ルカ伝では「父の慈悲」といつている。「闇の世に鳴かぬ鳥の声を聞く」未生の現実も、「隻手の声」を聞き、「右の手のなすことを左が知らぬ」一極絶對も愛の力でつかめる。「本来東西なし、南北何処にかあらん」の二極俱絶も愛が中心の力である。父なる神と一如となったキリストと一如となるとき、我々は真に靈然の自由無礙の境地に入る。キリストの本願道に於てこそ自然靈然が呼吸され体現されてゆく。聖名を讀えん

一四 涙の泉——エレミヤ九・一

(一九七四・六)

南王国ユダが滅亡に瀕したとき、偶像崇拜と社会的紊乱でエルサレム市民の生活が極度に頹廃的となっていたのを見て、予言者エレミヤは腸の煮えるおもいがした。外敵のためユダの国民が殺害される悲惨なありさまを見ては、更に暗涙に咽ぶのであった。

「ああわが頭（こうべ）水となり、わが眼涙の泉とならんことを。

ああ我れ曠野の旅人の宿りを得、わが民を離れて去りゆかん。」

(エレミヤ九・一二)

わが国が第二次大戦で惨怛たる敗戦を喫し、日本全土のめばしい都市が爆弾、焼夷弾の猛撃の餌食に供せられたときの惨状は言語に絶するものであった。況んや広島、長崎の原爆に至っては目もあてられぬ地獄そのものであった。無量の血が流れ、無量の涙が大地にしみこんだ。肉はただれ、骨が散

らばった。

戦争！ 東西古今の歴史は、ある意味で戦争史である。人間の最も人間らしからぬ姿であると同時に、人間の最も露骨な姿である。人間の罪の極限的曝露の姿である。このような事態に対するなげきの涙は、地上のどこかで、絶えず、必ず流されている。

「人の世はどうしてこうであるのか。」悲哀の詩人ダンテの顔は、そのような憤りの表現である、といった意味のことをカーライルが「ダンテ論」のくだりで言っているのを思い出す。

エレミヤは深いハートの予言者である。それだけに彼は堪えがたい想いにおちいった。

「わが頭水となり、わが眼涙の泉とならんことを」。やる瀬ない心のあまり、彼は曠野に旅人となって出てゆきたい、都から離れ去りたい、とまで嘆いた。それは逆説的な言葉で、彼は悲惨な都を棄てるわけにゆかない。愛すればこそ怒り、嘆き、糾弾し、勧告し、祈り、号哭した。

我々はこころばらく詩篇をさぐって、人生の涙の諸相をたずねてみよう。

詩篇第六では、何か神の怒りにふれて、いたくなやみくるしんでいる。「夜ごとに涙をもって、わたしのふしどを漂わせ、私のしとねをぬらした」と。しかし彼は、神のあわれみを切に求めて許され、感謝している。神に向って流す涙は拭われる。

詩篇第三十九では、主として人間のはかなさを嘆いて「わたしの涙をみて、もださないでください。私が去って、失せない前に、み顔を向け直してわたしを喜ばせて下さい」と嘆願している。

詩篇第四十二では、自分の魂は鹿が谷川を慕いあえぐように、神を渇き求めている。それなのにどうもあらたな徴が現われないので、「おまえの神はどこにいるのか」と嘲けりを受けている。それで「わたしの涙は昼も夜もわたしの食物であった」と。神の顕現に出遭わない宗教的なわきからくる涙である。

詩篇第五六では、作者は神に信頼しているのだが、敵が彼を踏みつける、迫害する。それが何とも口惜しい。それで作者は祈る。「わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえて下さい」と。皮袋は曠野では喉のかわきをいやす大切な水を畜えておくものだ。そのように神さまの皮袋に自分の涙をたくわえてもらって、砂漠に吸われて消えないようにして下さい。という心である。何という切々たる心根か。この涙は、神に憶えられ、必ず報いられるとの確信が湧いてくる。この詩篇の終りでは、神の生命の光のうちに包まれ、死から救われ、凱歌をあげている。

詩篇第八十では、イスラエルの同胞が敵にさいなまれるのを見て、「あなたは涙のパンを彼らに食わせ、多くの涙を彼らに飲ませた」と、深い同情をもって語っている。

詩篇第一〇二は、人生の内面的ななやみの詩として、独特な深みをもった詩篇である。

「わたしは灰をパンのように食べ、わたしの飲み物に涙を交えました。これはあなたの憤りと怒りの故です。あなたは私を擡げて投げすてました」

という句は、実に深刻な内面的なくしみから滲み出る涙である。

かつて藤井武先生が愛妻を失われたあとで、しばし天地晦冥の悲しみに陥った。詩篇を繙き読みゆくうちに、先生はこの句にぶかった。

「汝我を擡げて投げすて給へり」

これだ、これが今の私だ、そう先生は感じた。それを今ここに思い出した。

上掲の詩句はおそらくゲーテが『ウィルヘルム・マイスターの徒弟時代』第二卷第十三章で、老人をしてハーブの伴奏まじりに口吟せしめた歌詞の源泉であったであろう。

“Wer nie sein Brot mit Traenen aß,

Wer nie die Kummervollen Naechte

Auf seinem Bette weinend saß,

Der kennt euch nicht, ihr himmlischen Maechte.”

「涙を交えてパンを喰べたことのない人は

なやみ多き夜なをしとねに坐して

泣きあかしたことのない人は

あなたがた力ある天使よ、あなたがたを知らないのだ。」

次に詩篇第一一六、「わたしは主を愛する」という著しい句で始まっているこの詩篇は、神のめぐみにおける勝利をうたっているのです、その中に出てくる涙の句は、

「あなたは私の魂を死から、

わたしの目を涙から、

またしの足をつまずきから、

助け出されました」

であって、涙はあったがそれは拭かれたというよろこびのおとづれである。

詩篇第一二六は、捕囚から帰還してエルサレムが回復した歓喜をうたっている歌であるから、

「涙をもって播まく者は、

喜びの声をもって刈りとる。

種を携え、涙を流して

出て行く者は、

束を携え、喜びの声をあげて

帰ってくる。」

涙を流した甲斐があったというむくいられた涙である。

以上をもつて詩篇における涙の諸相を一瞥した。

人生にはいろいろな涙がある。涙をもたない人はない。失恋の涙、身内の者の不幸——死別、危禍、不治の欠陥——の涙、生活苦の涙、病弱の涙、事業の失敗、失職の涙、結婚はしたもののどうにもならぬ不調の涙、離婚の涙、不当のとりあつかい、先輩友人の誤解、迫害の涙、自己矛盾、志を果し得ぬ境遇上の涙、その他義憤の涙、深い同情の涙、世を嘆く宗教的な涙、罪禍に泣く涙、改悔の涙、感激の涙、感謝の涙、等々、涙は多種多様である。

けれどもイエスはいった。

「幸なるかな悲しむ者

その人はなぐさめられん。」

愛の人、ひとをどん底から救うことの出来る人、イエスの言である。「なぐさめ」を与える主体はイエスである。この罪を矛盾に満ちた現世には、涙を本当に拭ってくれる者はいない。キリストのなぐさめだけが、本当の喜びに転ぜしめる唯一のなぐさめであり、そしてキリストの「なぐさめ」を最も具体的にあらわして下さる者は聖霊である。聖霊は、力ある愛であるから、涙の現実の奥に入ってきて、根源現実を歓喜に変質させる。涙の現実の相対面、現象面が変えられようが、変えられないまままでいようが、根源現実がみ霊の力で変質させられる。そのことを語っているのは、例えば、

「悲しみにかえて喜びの油を与え」というイザヤ六一・三の「喜びの油」という言葉であり、これ正

に「喜びを与える聖霊」を意味する。

空中の水滴に光がさすと、そこに虹が出現する。そのように、人生の涙に聖霊の光がさすと、そこに霊的な虹が生じる。これほど美しいものはない。苦難を聖霊の力で突破せよ！そこには虹の如き美しい実存のすがたがおのずから体現されよう。女性が苦難の涙をじっと呑んで、あたかも苦難なきが如く微笑んでいるすがたほど美しいものは人間界にないのではないか。み霊の愛に滲透されて、それが何気なくあらわれている愛の微笑は、神的な香りをもっている。そのような女性の存在のまわりには、虹の輪が立つであろう。

現世において貴いのは、そのような涙を宿しつつ神の国を待望している実存である。

「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし」

とは日蓮自身の告白であった。

ダンテもまた熱い涙の人であった。ベアトリーチェに対する失恋の涙は『神曲』の源泉となった。

『神曲』の中では、その涙がいろいろな涙に変質している。

「多くの民と様々な傷とが

わが眼をいたく酔わしめ、

眼に止まって泣くことを願った」(地獄第二九曲一一三)

愛妻に対する藤井武の源は『羔の婚姻』なる大詩篇の泉であった。彼もまた、深い涙の人であった。

「ああ秋の野の野草にやどる

白露のごとく今この山に

数へつくせぬ顔また顔の

いずれ一つか地にありしころ

腸よりぞわきしとおもふ

涙の痕をのこさぬがあろう。」

『羔の婚姻』『饗宴』篇

第十歌「棕櫚」より

人生の深い涙を思い遣る「み霊」の呻きをパウロは聴いた。「われらはいかに祈るべきかを知らないが、聖霊言い難き呻きをもって執り成し給う」(ロマ書八・二六)。祈りにおける最も深いなぐさめである。パウロ自身、いくたびとなく福音のために涙をもった。「されば汝ら目を覚しをれ。三年の間、わが夜も昼も休まず、涙をもって汝ら各々を訓戒せしことを憶えよ」と、懇々とエペソ人に語った。また、ピリピ人への手紙でも彼はこう告げている。「我ししばしば汝らに告げ、今また涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者多し。彼らの終りは滅亡なり。おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地のことのみを念う」(ピリピ三・一八、一九)。

多くの人の苦しみと涙を平安と歓喜に替える實力をもっておられたキリストの実存を福音書にみる
とき、まことにイエスはよろこびのおとずれそれ自身であり給う。ひとに歓喜を与えていたイエスは
この世ではどん底の涙をひと知れず涙しておられたと思う。それが十字架上で天地を震撼し、至聖所
の幕を真二つに引き裂くような大声に爆発したのである。このような事態をへブル書の記者はこう伝
えている。

「キリストは肉体にて在まししとき、大なる叫びと涙とをもて、己を死より救い得る者に祈りと願
いとを献げ」給うた。(へブル書五・七)

この世で最も深い涙をもっている者は、聖霊の愛を力として、十字架道を歩むキリスト者であり、
その者は最も熱烈な終末的希望を有つ者であるから、最も高い歓喜をもっている。要するにパウロ、
ヨハネ、ペテロの如く、「キリストわがうちに、我れキリストの中に」在ることを告白できる人は、
使徒たちの如く、終末論的な構造において涙と歓喜をもっている。それは人のために涙する涙、人ゆ
えに飲む歓びである。

「神はかれらの上に幕屋を張り給うべし。彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵す
ことなし。御座の前にいます羔は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目よりすべて
の涙を拭い給うべければなり」(黙示録七・一六—一七)

という現実を終末の日には迎える。そのときもし涙ありとせば感謝、感激の涙のみであらう。福音

的な歡喜が、満面に漂う。

その終末的現実においては、「神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神、自ら人と偕に在まして、かれらの涙をことごとく拭い去り給う。今よりのち、死もなく、悲しみも、叫びも、苦しみもなかるべし」。(黙示録二一・三、四)

という「神われらと共に」なるインマヌエルの生活が現実となる。日月の光も要らない。神と羔の栄光が、み国の一切を遍照する。その天然は絶美の大調和であり、その民らの実存はさながら愛の交響楽であろう。ハレルヤ！

一五 ガリヤ湖

(一九七四・八)

ヨーロッパの哲学の諸潮流はカントに注ぎ入り、カントから流れ出るといわれる。カントは西洋哲学界の大湖である。イスラエルの宗教においては、イスラエルのすべての預言者の宗教はイエスに流れ入って、イエスから注ぎ出でている。イエスはイスラエル宗教の大湖である。イエスはガリヤ湖畔を伝道の中心とした。ガリヤ湖にはイエスの靈風が今もお漂うている。イエスの靈的人格とガリヤ湖、靈と水、これは一如の泌み入り、融け合いの感である。イエスという靈界の大湖をその歴史的な地域的な具体性に即して、ガリヤ湖をもって象徴したいわけである。それゆえここに言うガリヤ湖とは正にキリスト・イエスを意味するわけである。

私は一九七三年の降誕節に、それまでずっと学んできた十二小預言書のあとを受けて、十二の預言の成就としてイエスの降誕を語った。それは十二の預言が、丁度時計の十二の時極が時針の中心に集るように、イエスに向っていることを思ったからである。

今回は伝統的な意味での四大預言書イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエルを加えて、要するに旧約の文書預言者の預言の集大成としてのキリストを極めて要約の形で描いてみたいと思う。

大体において歴史的順序に従って見るのが啓示のこころをとらえるのにふさわしいことであるから、そのように展開して往こう。

紀元前八世紀の中葉、南ユダ国の出身アモスは神の召命を受けて北イスラエル国の首都サマリヤに現われ、隣邦諸民族、特に選民イスラエルの罪を、神の義ゆえに糾弾する。神と民族とその個人との縦の關係が義しく立つことを義という。神を神としてその意志に従うのが義であるのに、これが立っていないところに、諸々の罪が生ずる。そのような角度においてアモスは神の義を告げてやまない。そのような聖意を體現して義を全うしたのが正にイエスであった。イエスは神の義の體現者である。アモスと殆ど時を同じうして、踵をつぐが如くに現われたのは、預言者ホセアである。北王国イスラエルの惨憺たる不義乱倫の社会状況に心を痛め給う神は、ホセアに淫乱の女をめとらせ—多分ケデシヤー（聖娼）—宗教的姦淫を犯しているイスラエルの民を自分はお棄てないで悔改を待っているように、汝ホセアも淫婦を棄てないで贖いもどせよ、との聖旨をホセアに親しく告げた。「我れ汝をめとりて永遠に到らん。……変ることなき信実をもて汝をめとるべし」（ホセア二・一九—二〇）とあるように、不変の愛、相手の状況によって当方の愛は変らない。これが神の罪びとへの担いの愛である。あがないの愛である。

アモスの義は縦の線、ホセアの愛は神自ら罪びとの次元に降りて担う横の線、それゆえに縦線・横線のクロスするところ、そこにイエスの十字架がある。

アモス、ホセアのあとを受けて、南王国ユダの王ヨタムの時代に現われたのは預言者イザヤ、その召命(第六章)において神が特に「聖者」として顕揚されている。靈火によって、自分の罪がきよめられ、神霊を受ける体験をして、預言者としての召命を受けた。神を聖として畏るる民が「遺れる者」「聖き裔(たね)」として「地の根」となるといふ選民の新たな自覚がイザヤによってうながされる。ダビデの父「エッサイの株から一つの芽が出て、その根から一つの芽生(めばえ)が生じ、実を結ぶ。その上にヤハウエーの靈が止まる」(イザヤ一・一)という不思議な預言は、メシヤ預言である。ユダヤ人はこのメシヤ預言がイエスにおいて成就したことを今もみとめない。

メシヤ預言のもう一つの聖言は、「視よ、我れシオンに一つの石をすえてその基とした。これは試煉をへた石、貴い隅石、かたくすえた石である」(二八・一六)という「蹟きの石」の消息である。この石に信頼する者は救われ、蹟く者は滅びる。イザヤにおいては神を「聖者」として畏れることと、「メシヤ」を「石」としてこれに信頼することという二つの大きな消息が経緯をなしている。

この「聖者」とこの「石」が実はキリスト預言として重要な基調をなす。

北王国イスラエルの首都サマリヤがアッシリアのサルゴンに攻略されてイスラエルが滅びたのが紀元前七二一年、その頃南王国にイザヤと並び現われたのが預言者ミカである。ミカの預言のうち著し

い消息は、「ヘリくだって神と共に歩む」という神との共在の実存である。ミカは「平安の君」たるメシヤ出現の預言をその第五章に於て示した。平伏して神と共に歩む実存にまことの「平安」がある。この「平安」なきところに「平和」（人と人との安らかな関係）はない。一般に「平和」と訳しているが、私は「平安」と「平和」をこのようにハッキリ区別すべきであると思っている。

イザヤの預言は七〇〇年頃に終ったが、それから七〇年間は預言者あらわれず、六三〇年前後に現われたのが、ゼバニヤ、エレミヤ、ナホム、ハバクク等である。

ゼバニヤは「ヤハウエーの日」の近きをしきりに告げている。審判に関わる終末的預言者を基調として、特に高慢を戒め、謙遜を勧めている。「われ謙遜にして貧しき民を汝の中に遺さん」（三・一二）という句は、キリストの山上の垂訓の第一句を思わしめる著しい聖言である。イエスの平伏しの霊の貧しさと相通うゼバニヤの魂を尊ぶ。

次にナホムにあたってみる。その預言は専ら強暴なる大帝国アッシリアの首都ニネベの審判に関わるそれはまた仇を報ゆる「ヤハウエー」の報復の消息であり、ヤハウエーのイスラエル・ユダに対する義を貫きながらの深いあわれみなる「妬み」の愛は、イエスに於て「あがない」の愛に融け入り、止揚されてしまう。

ナホムからややおくれて現われたのがハバククである。ハバククはどうもアッシリヤを亡ぼした（六一二年）カルデア（新バビロニア）のナボポラッセルの子ネブカドネザルの暴虐を神に訴えてい

るらしい。審判は神にゆだね、ひたすら人の生くべき唯一つの道あるを啓示された。

「義人はその信仰に在って活きる」(私訳)(ハバクク二・四)。信仰とは「エムナー」、アーメンたるたましいの在り方である。神に対してアーメンを貫き生きることが義である。このことは旧約新約を貫いて一貫した消息である。パウロがこの一句をとらえて「信仰」の基本としたわけである。そしてそのことを百パーセントに満たしたのがイエスでパウロがイエスのほかには「義人なし、一人だなし」と喝破した通りである。

ナホム、ハバククよりさきにエレミヤが召命を受けた。紀元前六二八年の頃である。

彼は端的に言つて心の預言者である。深い人間性をもった人、あつい涙の預言者である。イエスの人格に最も近い預言者といつてまちがいないであろう。エレミヤに示された「新しき契約」はひとの「心の衷」に記されるものである(エレミヤ三一・三三)という表現にも彼の本質があらわれているホセア・エレミヤの線はあわれみの愛の心である。エレミヤはバビロニアに滅された南王国ユダ(五八七年)と運命を共にした。売国奴と誤解されたエレミヤこそ本当の愛国者であったのだが、エルサレムを愛惜したイエスの心と相通う。

エレサレム陥落前に第一回バビロニア捕囚があつたが(紀前五九七年)おそらくその中に預言者エゼキエルもいたと思われる。彼は捕囚時代前半の有力な精神的指導者であつた。彼は預言者の中でもきわめて祭司的な性格をもっていたことはその預言の内容に神殿のことが祥しいのでもわかる。霊的

な異象にあづかった点では黙示文学的な面もある。また組織的分析的な思惟方式に学者的な面もうかがわれる。

「子は父の悪を負わず、父は子の悪を負わざるなり、義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰すべし」(エゼキエル一八・二〇)の如き句は、神と個人の絶対関係を基定としたおごそかな宗教道念である。エゼキエルの特別な預言としては何といっても第三十七章の「枯骨の復活」で、滅び去ったイスラエル・ユダ両国の民族的復活を預言する強烈な霊的生命力がそこにうかがわれる。それは結晶しておのづからイエスの復活の霊生を預言するものである。

エルサレムと滅びを共にし、荒廃のユダに居残ったと思われる預言者オバデヤが極めて短かい文書をのこした。多分バビロニアに加担してユダの滅亡をよろこびおごっているエドムに関わる預言である。「汝たとい鷲の如くに高く昇り、星の間に巢を造るとも我そこより汝を引き下さん」(オバデヤ四)の一句が印象的である。いかなる民にせよ、人にせよ、高慢はサタンに属する。

バビロン捕囚五十年、新興のペルシヤ王クロスによってバビロンが崩解し、捕囚の民がエルサレムへ帰還する。その頃現われた無名の預言者、第二イザヤ(イザヤ四〇—五五章)、その預言者の文字こそ、旧約聖書の最高峰であり、最深渾である。その心臓部は「エベド・ヤハウエー」(ヤハウエーの僕)といわれる数篇の詩、その中心がイザヤ書第五十三章。そのまた焦点は、「彼はわれらの罪のために刺し貫かれ、われらの不義のために碎かれ、自ら懲罰をうけて、われらに平安を与う。その打

たれし傷によりてわれらは癒されたり」(五三・五)の一句！ イエスの十字架を、キリストの贖罪死を預言していると思われぬ驚くべき文字である。私がキリストの十字架を「砕け」の一語で神学的中心として捉えたのもこの一句に拠る。

捕囚の民のエルサレム帰還後、エルサレム神殿の再建(紀前五二〇—五一六年)となり、宗教は預言者から祭司の手に移る。神殿宗教、祭司宗教、戒律的律法主義へと移行してゆく。預言者は神の本願を人に伝えるのを本質とするに対して、祭司は人の悲願を神に執り成す役割を本務とする。偉大なる預言者には祭司面もあるし、偉大なる祭司には預言者面もある。イエスはこの両面を完全に體現した。

ところで神殿再建を勧告した二人の祭司的預言者があった。バビロン生れのハガイとゼカリヤとである。

神殿再建令を出したのはベルシャヤ王クロス、その掌に当ったのが、方伯ゼルバベルと祭司ヨシヤア・ハガイの預言の精神をみると、神殿は単なる建物ではない。神霊の止まる所、神の栄光の充満する所である(ハガイ二・四—九)。キリストが自らを活ける神殿として自覚しておられた事態に対する豫表である。

ゼカリヤ書は一—八章が前篇で、これが預言者ゼカリヤのもの、九—一四章が後篇で、しかも九—一四章と一一—一四章とは筆者がちがう。それでゼカリヤ書もイザヤ書の如く、第一、第二、第三

カリヤの三者によって構成されている。

(第一) ゼカリヤの預言にはメシヤ王国に関わる八種の異象が示される。これらは終末的な黙示録に投影している異象である。メシヤ預言として「わが僕なる枝」(三・八)とか「われ、この地の罪を、一日の内に除くべし」(三・九)などという句は見のしがたい。更には「平安の種子をまく」(八・一二)と云うて霊的な遺れる民を神は約束しておられる。

第二ゼカリヤ(九―十一章)も黙示文学的な預言をのこしている。特に九・九はキリストのエルサレム入城しながらの預言である。「契約の血」のことが語られ、終末的な栄光のおとづれが時折きらめいている。

第三ゼカリヤ(一二―十四章)になると、イスラエル・ユダを中心としてのエルサレムに関わる绚烂たる終末的預言である。そこには「恩恵と祈禱の霊」(一二・一〇)が豊かにそそがれる。「その日には罪と汚れを清める一つの泉が開かれる」(一三・一)。「その日には活ける水エルサレムより出で、その半は東の海に、その半は西の海に流れん」(一四・八)の如きはキリストの霊的活水(ヨハネ四章)が東洋西洋にあまねくそそがれることと冥合する。

おそらく第三ゼカリヤ書と同じ頃に第三イザヤ(イザヤ五六―六六章)が現われた。イザヤ書は全六六章を通じて最も霊的な預言者と申して可いと思われる。第三イザヤに祭司面がかなり強く出ているのは、背景がエルサレム神殿であるからである。預言者と祭司が渾然として融合している最たるも

のといつて可い。神殿を「祈りの家」と言い、自覚を促している。神の言をつたえて、「我は高き所、聖き所に住み、また心碎けて謙る者と共に住み、謙る者の霊を活かし、碎けた者の心を活かす」(イザヤ五七・一五)に至っては全く福音そのものである。

エレミヤへの新しき契約と並んで第三イザヤにも契約があつた、「汝の上にあるわが霊、汝の口におきたるわが言、今より後、永遠に汝の口より、汝の裔の口より、汝の裔の裔の口より離れざるべし」(五九・二一) 神の霊言があり、言霊がある。これはペンテコステ的降霊に通ずる。

紀前四七〇年前後にマラキ「わが使」が固有名詞の如くみなされている預言者が現れた。マラキの預言は、父と子、主と僕、夫と妻という関係を、ヤハウェーの神とイスラエルの民との関係においてみている。前二者は正にイエスが神に対して意識しておられたもの、後二者はキリストとエクレシアとの関係。しかもこの三者夫々の関係において、深い統一、一体感が感ぜられる。

さて紀前三三〇年前後にヨエルが現われた。バレスティナを襲った四次の蝗の大軍を時の徴とみて、深い悔改を警告した。(ヨエル二・一二—一四)。過去のアケドニヤ、未来のロマの大軍をほのめかしているのかもしれない。それは更に歴史の終末における神の審判に関わる(二・一〇、一一)。

ヨエル書の預言は聖霊の降臨を告げるところで極まる(二・二八、二九)。イエスが「約束の霊」と言われたキリストの御霊への預言にはかならない。

さて十二小預言の殿としてヨナがのこっていた。ヨナのユダヤ的偏狭とニネベの悔改と神のあわれ

みの深さと広さが世界的なることを語る不思議な物語であるが、書かれたのは紀前三百年前後か。ヨナ書はキリストの世界的福音への預表である。

黙示文学的聖文書として最後にダニエル書がある。これは伝道的な預言者ダニエルを主人公として、アンテオクス・エピファネス時代（一七五—一六四）の歴史的背景において書かれたもの。霊的な信仰の勇者たれ、近隣の諸大国を怖るる勿れとの雄叫びの文字。やがて信仰の勇将ユダス・マカベウスによる独立の勝利が待っている。

× × ×

以上全預言書を大湖キリストへの流れとして大観した。イエスはこれらすべての預言内容と預言者の実存を一身に包摂して渾然融合し、無限無量の霊性人間性をもって福音をあめ驚くべき言動をもって告示し、体現なさった。

この預言者たちは天界において、キリストを讃美し、メシヤとして拝跪しているにちがいない。旧約の預言は預言以上にキリストにおいて成就しているからである。

アーメン、ハレルヤ！

一六 私の教育理念

(一九七五・二)

教育者自らの人間改革

教育というものは、まづ第一に教育者自らの自己教育ということをし、土台となし、その自覚をもって実践してゆかねばならぬものと思っている。第二には、教育というものは、戦争に敗れたから、勝ったからとか、政治や政界がどう変わったか、などに左右されるようなものであつてはならぬと心得ている。たましいを絶対界につなぎ、永遠の相において、教育者は国家という巨船の本当の操者たるの自覚をもつべきであると思っている。

さて、教育も文化的な一となみの一つであるが、およそ文化文明の土台となるものは宗教(言葉の深い意味において)であると思っている。何となれば、人間そのものに、人間のいとなみのあらゆる問題の問題性がひそんでおり、人間そのものの中心は、内なる心であり、「こころ」とか「たましい」とか「霊」とかという言葉であらわされる人間の中心の問題は、宗教に関わるものであるから。大言海

をみて、「人」はもと「靈止」(ひと)、すなわち神靈の止どまっている存在であることを表現する文字であった。これはまさに「ひと」の本質をうがったものである。私たちは小学校のとき「人間は万物の靈長である」と学んだ。しからば、靈長たる「人」間が神靈を無視して靈止であり得るかというわけである。「人間」という表現は人の横の関係をあらわすに對して、「靈止」は人の縦の關係、即ち神的存在との關係の語であるわけである。我々の存在の中心であるたましいの根源たる絶対界の實在、それを神とも、如来とも、梵とも宇宙の大靈とも、アラールともヤハウエーとも、天とも、何と呼ぼうと要するに絶対界の靈的存在を意味する限り問題ではない。

事實、相對的にして不完全にして矛盾や不合理やさまざまの問題性をもった人間そのものを直接的に肯定して、知らぬ間に、ある絶対的な角度の主義意識となり、主義をかざし、主張を掲げ、自己欺瞞におちいり、問題をただ環境や制度や待遇などに帰し、鬭争意識となり、民主主義の美名のもとにまちがった自由や自主や平等を唱えて、さまざまな社会問題の渦を巻きおこしている現状の禍根はどこにあるか、といえ、教育者自らの人間の掘りさげの不足から来ていると思われる。これは小学校から大学に至るまで教育者自らが、自らの人間改革を自分でしない限り、日本の教育はいつまで経っても本當の改善の道が拓けて来ないと思う。

それゆえ、教育者自らが、宗教ないし、宗教と関わりの深い道徳哲学や芸術に對して深い関心を寄せて、たましいの世界の掘りさげをいとなみつつ、次第に根を深く張りつつ、教育にたずさわるのが、

極めて重要な在り方であると信ずる。

因みに言わせていただくなら、人間界を樹木に譬えると、根は宗教界で、幹は道德及び哲学界、枝と葉と花と果は、さまざまな文化・文明の現象界であるといったらよろしいであろう。根だけは次元がちがう。道德及び哲学界は、いかなるいとなみにも、これが媒介となるものである。宗教界は絶対次元とでも申すべきものであるが、幹と枝葉花果とは、次元がちがい、方向が反対がありながら、つらなっている。もし宗教界たる根が枯れてきたら、この大木——二十世紀という文化・文明の大木は倒れてしまう。ノストラダムスの予言をいたづらに笑うわけにはいかないであろう。

はつきりしたけじめと返事・挨拶の励行

さて私は、戦前戦後を問わず、教育者としての姿勢は一貫しているといつてよいであろう。陸軍関係の学校すなわち東京幼年学校、予科士官学校、陸軍大学などで教鞭をとっていたときも、神仏への畏敬の心をもつべきことは、折にふれて語って来た。孟子が「辞讓の心なきは人に非ざるなり」といったが、「畏敬の心なきは人に非ざるなり」と私は言いたい。あの昭和の乃木といわれた阿南惟幾陸軍大臣が東京幼年学校の校長であられたとき、宗教のこととなると私に謙虚な気持ちでたずねられた。実に立派な人格者であった。昔の陸軍の生徒たちのあの規律正しい在り方、気持ちの好い「ハイ！」という返事、それを今の一般の学校の生徒にそのまま求めはしないが、心の姿勢として、けじめのハッキリしたもの、快き返事や挨拶のことは相当強く説いている。

大学においても、私は、授業の開始にあたって、学生が起立して挨拶するようにしている。戦争に敗けたから、過去がダメで、何でも新しいのがいいなどというわけのものでは勿論ない。真実なるものは人を生かしてゆくが、まがいものは人を毒し、滅ぼしてゆく。しかるに、現状は何とまがいものに毒されて次から次へとその毒素がつたわって、いろいろな事象を奇形的にしたり、変質させたりしていることか。民主主義そのものがそういう毒素に害されているからである。

本當の自由とは何か

では、私の教育理念を更に具体的に述べさせていたどころ。上に述べたように、たましいを問題とするとき、万人が救を要することは、死が万人に共通な事実である如く、自明の理である。「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と嘆じた親鸞、「噫、われなやめる人なる哉、この死のからだより我を救はん者は誰ぞ」と叫んだパウロ。万人が救を要するとは、万人は本来宗教人である、ということである。神仏に対して平伏する魂、まことの異敬の念を教育者自らがもつことが実は大前提と思うわけである。

「神は人をおのが像（かたち）に創造した」と創世紀一・二七にある。これは勿論神話的表现であるが、神話的表现を通して、「ひと」の深い本質が語られている。すなわち人間は本来神性を賜っている、ということである。また「衆生ごとく仏性あり」と禪宗でいうように、人間はその本質からいえば神仏と同様の存在である。しかるに現実はそのほとんど失っている。けれども何らかの道に

より、神から離反しているこの我執の「我」にうち勝ってゆく事態を体験するようになるのが肝腎である。そういう宗教体験の事態そのものをここに論じようとはしないが、とにかく私心から脱却して神仏との一体一如の消息をすこしでも本当に体験することは極めてのぞましいことである。すなわち我執、宗教的に言えば罪、罪業からの解放、解脱にこそ本当の自由がある。

一般に自由などといっても、この根本的な自我からの自由を体験せずして、少なくともそういう事態を理解せずして、自由、自由と唱えているところには既に自由でない毒素が混在している。このことを認識していないところに、さまざまながい、まちがった事態が続出しているわけである。

私の学校教育理念

以上のようなたましいの角度から、私は中、高校の教育の理念として、第一、敬天愛人、第二、天賦天職、第三、自律自強の三項を掲げている。朝礼で何を語ろうと、この三項いづれかに帰する。

第一、敬天愛人。申すまでもなくこれは西郷南洲の遺訓第二十一の「道は天地自然の道なるゆえ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ、己れに克つの極功は『意なく、必なく、固なく、我なし』〔論語〕といへり。総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ」に由るものである。敬天において生徒の本当の心の姿勢をただすわけである。「心者人之神明」という益軒の言葉の如く、私心を神の前に投げ出すことによって、神が宿る神明の心となる。畏神の敬虔な心のあるところにおのずから謙虚な心が生じ、長上に対しては尊敬となり、両親に対し

ては孝道となり、先生に対しては師道となつて現れる。親を親としてこれに信頼し、師を師としてこれに従う心の姿勢が一般に稀薄になっているのは、まちがった民主主義からきている。親が子どもに変な遠慮をしたり、先生が生徒に妙に丁寧な言葉をつかつて、子や生徒が親や先生に同等な気持ちでものを言ったり、したりする光景はこれも民主主義のとりんでもないはきちがえからきている。

そのような現象の本来の責任は先生と親にあるのであつて、教育されている生徒にあるのではない。PとTとが本場に車の両輪の如く文字通りPTAとなり、家にまた学校において親らしき権威と先生らしき権威をもつて訓育教育をするなら、こんな一般の現象はなくなるはずである。そして特にその点で大切なのは、幼少年時代の訓育、教育にあたつておられる両親と先生方の姿勢であると思う。それには私が強調しているように、敬天の心を以て我々自身が生活しながら子弟生徒に対してゆくのになければならない。そこにはおのずから親や先生に権威が具わり、また本当の愛が流れるのである。義と愛が渾然として動くところ、真に硬軟宜しきに適つてゆき、まことの信愛が生ずる。

孝道の端緒は、例えば、両親に対する朝晩の挨拶、外出、帰宅における挨拶を気持ちよく行うことにある。師道の端緒は、例えば、学校の内外で先生に出会った場合、これも気持ちよく挨拶することになる。社会においては、電車の中で老人や婦人に席をゆずる心となつてあらわれる。一般の社会においても、シルヴァー・シートの若者が老人に席をゆずる情景を見たことが殆どない。こんな現象に日本の精神的な没落の徴を見る。

世間一般に言われている民主主義なるものが、ややもすれば傍若無人はおろか、傍若無神の如き驕慢の相を呈しているのは、学校生活においても反省を要する事態である。史上、民主主義の代表的人物の一人たるリンカーンの如きは、まことに敬虔な魂であった。あのゲッティスバーグにおける演説の最終句は次の如くであった。

「この国家は、神の下において、自由の新しい誕生をもつべきであり、そして国民の、国民による、国民のための政治は地上から滅び去るべからずということが、我々にとってむしろ大切である」(私訳)というので、民主的国家も政府も、神の下において、という根本的自覚をもつものであった。リンカーンは、under God「神の下において」をいい加減な気持ちで言っているのではない。民主に先だつものは神主である。神が主権者、主体者であることを忘れて、人間を解放しているのがまちがった民主主義というものである。

福沢諭吉のあの有名な句にも、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」とある如く、「天」をもつて表現される絶対者、創造主の下においての人間の人格的存在としての平等を語るものである。神の前には乞食も大臣も一個の人格として平等である。そのことは国家社会を構成する地位と使命に於て同じであることを意味しないことは言うまでもない。眼も手も脚も一個の人体の不可欠な要素という意味において平等であるが、その役割においては全くちがう。キリストの大使徒パウロが、その手紙の中で、人間社会の構成と秩序を人体を構成している諸部分に譬えて語っている通りで

ある。(コリント第一の手紙第十二章参照)

宗教改革者マルティン・ルターは一五二〇年代に „Von der Freiheit eines Christenmenschen” :『キリスト者の自由について』という小冊を書いた(これはわが親鸞の『歎異抄』と双壁の珠玉の古典だと思ふ)。その冒頭で彼は次の一見矛盾した二つの命題を掲げている。

「キリスト者は万事万物に対して自由なる主であつても何ものにも従属しない。

キリスト者は万事万物に仕える僕であつて、いかなる人にも従属する」(私訳)。

紙数も迫つて来たのでは詳述はできないが、霊神のキリストに直結するキリスト(信)者——宗教改革は神と人との間に、救済者たるキリストの他にいかなる媒介者をも本質的には要しないといふところに主眼がある——は、絶対者に直属するから、人格的個体として相対的ないかなる存在にも事態にも従属しない。絶対者に奴隷の如く依存するといふことは、自分の意志すらも神にゆだねる在り方であるから、絶対的な神的な自由があることになる。これは自己に対しても自主なるものである。ルターはそれを奴隷意志といつて、エラスムスの自由意志論に反対した。そのような神的な自由であるから、その自由をもって——我執から解放された自由であるがゆえに——万事万物に正に自主的に仕える僕となる。この場合、従属するといふのは、自発的に仕える意味であつて、担いの態勢で他者を隣人を助け救う心根である。これが本当の愛というものであるから、自由、自主なる者は、他を愛し助けざるを得ない在り方となる。それゆえ、一見背反律の如くひびくこの二つの命題は、真の人間実

存の両面を語っているわけで不可離の関係にある。

以上のルターの二命題の「キリスト者」Ein Christenmensch という語を、「まことの人」Ein wahrer Mensch とおきかえて一向さしつかえないわけである。近世の晨はこの二命題を打ち鳴らした曉鐘の音と共に明け初めたのに、二十世紀の今日、ルターのこの自由が小我の自由に変質してしまっているのが一般ではないか。自由はこのような神的な明朗にして隣人愛の情熱をもったものである。ややもすれば我欲と権利を言い張ってやまないような角度の自由は本当は自由ではない。資本家も労働者もどっちも本質的な自由を、自主を受けそこなっている。そこに現代の民主主義の根本的欠陥がある。学校の在り方においても、この本質的な神的な自由に本当の信愛関係、人格的共同体たる意識の根源があることをさとり、これに目ざめねばならない。敬天愛人の理念も、このような宗教的現実を身につけない限り、なかなか現実となつて来ない。しかし、我々において多少その窮屈気は言わず語らずのうち、醸されつつあると見ている。生徒の間での愛人とは、友情において互いに助け合うことである。

第二、天賦・天職。天興のよき性格と才能資質を天賦と申しているのだが、これを中・高校時代に親や担任の先生を中心とした先生方の認識、助言をよく聴いて、生徒各自がおのれの判断や自覚と結合して、正しい見当づけをなし、それを中心として情熱を傾けて学業いそしむ。そこにやがて自分が一生を賭けてなすべき天職があり、使命があるという抱負をもって生活するようになる。そのよう

に指導している。平均点が何点だとか、そんなことに気を奪われることはない。三無主義とは何ごとか、教育者がそんなつまらぬ現象を心配するより、積極的に大胆に各自の天賦を本當に生かしてやる情熱をもってあたるべきである。私はこのことを全校の先生方に強く主張している。

兼好法師の『徒然草』の第一八八段の「されば一生のうち……第一の事を案じ定めて、其の外の思ひすてて一事を励むべし……」の一段は痛快にもこの精神を喝破しているではないか、特色のないレッテル大学生があふれている日本の教育界は、真の有機体的、生命的学校制度を思いきってうち出すべきである。文部省ももっと弾力性のある、真の自由を尊重する学制を指示すべきではないか。

クラーク先生が、“Boys be ambitious!”ときんだときそのあとに“In Christ!”という言葉がひびいていたと聞く。それが「神に在って！」であろうと「如来にあって！」であろうといい。そういう無限無量の本体界をぬきにした野心的なアンビションではない。大なる使命感を青年はもてということだ。気骨のある日本人青年、真に日本を愛するがゆえに世界的につきぬける青年よ出でよ、である。“I for Japan, Japan for the World”と叫んだ内村鑑三の言を忘れる勿れ！

第三、自律、自強。自由と責任、自由と自律は相表裏して不可離である。このことはカントの道德哲学が不滅の文字をもって語っている。カント哲学も源泉はルターの宗教論に発している。

（紙面の関係でこの項の論述は省略した）（学事出版月刊「高校教育」一九七五年一月号新載）

（注）本稿には「この道を往く」（独協学園図書館版）及び著作集第一巻記載の「宗教と教育」参照

一七 教育の根本態勢

(一九八五・七・三一)

教育者及被教育者の根本原則

教育の問題の第一は、教育者そのものに在る。教育者自身がその専攻の専門を絶えず追求してやまぬ精進をなすこと。その熱意が、教育そのものにおのづから現われること。第二は、その教課の本質を如何に被教育者に会得させるかの道を絶えず工夫することである。

被教育者（学生、生徒）には当該学力の点で上、中、下の差がある。下の部類と雖も基本的なことは是非とも習得する要がある。その方法を工夫して徹底させる。上の部類の者には学校の教職以外の関係諸籍を大に読むことを奨励する。中の部類の者にはその教程を全部よく習得するよう導く。

試験問題の種類も、従って、基本的な問題、中庸を得た問題、及び応用問題の三種を出題して、基本的な問題ができていれば、それで及第点をやって、その教課に不得手な者に失望感を抱かせぬようにする。上部の者たちは応用問題の解答ができなければならない。

生徒も学生も、夫々天賦の資質、才能がある。生涯の天職は天賦に即した種類にあるのが當然であるから、天賦の才能の教課を中心にして勉学するように教育者は指導し、その教課は何としても優の実力と成績を修めるようにしてやる。その他の教課もこれに関連のあるものを有機体的構造に於て修得するように指導する。そういったことは、生徒、学生自ら自覚してなすように指導する。

教育者は、以上のような精神を以て、各被教育者がおのが天賦の認識と責任と使命と光栄を感謝しつつ自ら精進し、楽しみと希望を以て勉学するように指導するところに、教育者としての使命あることを自覚して教育をなすにある。

学制改革

以上が教育者及被教育者の指導及教課習得の根本原則と思うが、次の問題は、この原則に即する進学の学制が構成されていなければならないということになる。即ち、一人の生徒が自己の目的を達成するにふさわしい専門教育機関（専門学校、單科大学、総合大学）が充分存在するということである。入学試験が従って真の実力を問うやり方で行われることが肝要である。そのためにも受験倍率が三倍を最高とする程度であること。共通一次試験の如きものは不要。各専門学校及大学は公私を問わず夫々の学校が特色を大にもつことこそ肝要である。夫々の専門及大学の教授は、夫々個人的特色をもち、日本全国に分散して存在し所謂有名校ではなく、特色ある教授を有つ特殊専門学校、大学が分散して存在することが、健全なる有機体的構造と思う。卒業の生徒は自己の天賦習得進展に望まじき専門学校や

大学を自由に把握してその専門校大学に比較的容易に入学できるという教育機関の整備を成るべく速く実現させたいものである。

文部省の独立性

以上の如き教育の態勢を実現するためには、文部省は司法省の如く政治から独立した性格のものでなければならぬ。政党政治の影響下にあるような文部省及文部長官では、真の人材を養成すべき教育の方針を建てることはできない。国家及世界に貢献すべき分野に於ける人材を養成するのが教育である以上、文部長官は、文化的次元の高度な、宗教的哲学的な人物であることを要する。次官は学制及経営の面で秀れた才能と判断力のある人物であることを要する。文部省の官吏はかかる長官や次官の志向を実現する力量のある有能者を以て構成されなければならない。

かくて文部教育全般は、自由と責任と使命と栄光ゆたかな性格のものでありたいものである。

教育はかくて国家社会の各分野各方面に有能な人物を送り出し、ひいては世界に貢献する人物をおのづから送ることにならう。教育は実に国家の最重要の根本課題であることを知る。

教育の原点

教育の内的な責任者は両親である。特に母親である。偉大なる人物の母親は大方敬虔な魂の有ち主であつた。「人の母たることは最大の事業なり」とアメリカの型破りの詩人ホイットマンが言つた。

イエスの母マリヤが神秘的な敬虔な女性であつたことは論を俟たない。釈迦を生んで七日目に他界

した母マザーも神秘的な性格の女性であった。この二大宗教人を想うても女性が歴史の母体であると謂える。胎児から乳児・幼児・学童時代までの母の教育が重大な決定的な教育時代である。学校教育で大切なのはその小学校教育である。小学校の教育者は最も重要な責任と使命を荷っている。社会も特に小学校の教育者を重んじなければならない。

反之、社会のコンマーシャルイズムが、その漫画やテレビでどぎつい刺戟的な暴力沙汰や乱暴な言、野卑な仕草等を以て児童や学童の自然感情を歪曲させている。それが日常性と化してゆくことは恐るべき現象で、コンピュータ科学的スピード機械による人間性の科学技術への隷属性と相俟って、美しい自然と融合する自然感情や親子、師弟、兄弟、友人関係に本来あるべき秩序や愛情や友情の欠如を招くことはゆゆしき問題である。文部省はこのような社会現象に対して厳然と是正をはからねばならないし、学校も家庭も齊しくこれが妨止をはからねばならない。

願うてここになると、教育は、どうしても神仏に対する畏敬の念をその根柢に有たねばならないことを痛感する。その為には教育者も親もその心根が敬虔であることを土台にしなければならぬ。

人はもと靈止^{ひと}と書いた（大言海参照）。神性の止まっているのを靈止という。たましいがあるということは万人は宗教人であるということである。人間のあらゆるいとなみの中心はたましいである限り、たましいの世界から逸脱しているたましいではどうにもならない。絶対界との結びが切れているたましいでは、根のない木のようなものでいくら水をそそぎ陽光を浴びせても木は枯れてゆくのみ。

二十紀末の文化文明は根が害われた大木ではないのか、今に葉は枯れ、花は咲かず、実は結ばず、幹も枯れて、ドカンと倒れてしまうのではないか。

「神を畏るるは知識の本なり」(箴言一・七)は千古の真理である。神を畏れない文化文明は必ずや滅びてゆく。

第二章

詩の波

一 ヨルダン！

（一九五二年六月）

西の方靈峰レバノンを臨み

東に銀嶺ヘルモンを扼す

幽谷ヨルダンの源流は

南してフーレの湖に注ぎ入る

ヨルダン！ その名は「降下」の意か。

降り降りて地中海面下百尋あまり

名にし負うガリラヤの湖と化り

碧水満々と湛えたる哉。

その昔我らの主イエス

湖畔の寒村カペナウムの巷に立つて

「汝ら悔改めよ 天国は近づきたり」と
天来の福音を宣らし給へば

靈氣 湖面をかすめわたった。

漁夫ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネ

彼らは直ちにみ声に従い

えらばれて「人を漁る」人とはなった。

或る伝道の折のこと。

ゲネサレの湖邊かに荒波立って

小舟を木の葉と翻弄すれば

弟子どもはみな懼れまどうた。

ただイエスのみ安らかに父のみ腕を

枕に眠り給う

「何ゆえ臆するか 信仰うすき者よ。」

あわれみて 風と波とをいましめ給へば

見よ！ 耳あるものの如く

天地 静まりて大風となる

噫！ 偉なる哉 神の御わざ

嗚呼！ 力ある哉 主の信や

げに享けまほし キリストの御霊。

このキンネレテの湖は流れて

南下一条ヨルダンの本流となり

聖地パレスティナの大動脈をなし

豊沃の流域エル・ゴールをくり展げ

つひに淀みて静けき「塩の海」

世界最低の湖となる

その昔ヨシユアはモーセの死せし後

エホバの聖告をうけて此のヨルダンを渉り

約束の地カナンに踏み入った。

「我れ、モーセと偕に在りし如く

汝と偕に在らん

我れ 汝を離れず 汝を棄てじ。

汝心を強くし、かつ勇め！」

三度び堅うせられしかの聖言は

今わが魂に迫り来るなり。

福音の戦士 わが幕屋の子らよ！

一九五二年の聖霊降臨節を

ここ武蔵野のヨルダンに迎へ

新たに立ちし青年よ、乙女よ

懼るる勿れ 雄々しかれ！

『ヨルダン』の一誌は 即ち我らの

聖国勝ちとる 関の声

聖名を讃うる合唱の歌

聖神に祈る 祈禱の大願

魔軍を蹴散らす 聖霊の剣

闇の世を照らす真理の燈火

なやめる同胞への愛の音信

聖霊の子らよ！ いざヨルダンを

渡りて進まん 幕屋張りつつ

天上のエルサレム目指して

ときしもひらめく啓示は何か。

時にヨラムの治世 日もお浅き頃

エリヤ エリシャを伴いてみ旨のままに

ペテルを経 エリコに至り

ついにヨルダンの浜りに立った

エリヤその外套を脱いで之を捲き

水面を打てば 見よ！

そのかみあだかもヨシュアの時に

エホバの櫃の渉る折しも

ヨルダンの河水の涸れたる如く

水しりそぎて 路は拓けた

折しもあれ 天つ風

天より吹き降り

預言者エリヤを

烈火の車にうち載せて



ヨルダン川

み空に馳せ昇る

はやその英姿なし——エリヤは何処
遺されたるエリシヤの上に 見よ！

エリヤの分霊とどまりて在り

ヨルダンのこの故事の如く

預言者エリヤの靈統

この「ヨルダン」の同人にあれ

時は降りて新約の曙

エリヤの如き 曠野の預言者

ヨハネのもとに 人の子イエス

来たりて洗礼を受け給う

親しくヨルダンに身を浸し

祈りつつ 水よりのぼり給へば

視よ！ 天開け 神の御靈

鴿の如く降り来たり

照りまざるイエスの御容姿よ！

時に天より声ありて

「これはわが愛しむ子 わが悦ぶ者なり」。

ああヨルダンよ！

聖靈のバプテスマを

我らに施し給うあがないの主の

バプテスマの河として

我らは汝の名を憶ゆ。

ヨルダンよ！

かく呼ばうそのときに

我らの靈は祈りに帰り

聖靈のバプテスマ受けつつ

つねに新たに愛を現せん

つねに易らぬ奴婢としてぞ。

二 わが路

(一九五六年十・二三)

春の野路は快いかな。

秋の山路は慕はしいかな。

雪の吹息く冬の夜にもペンを執る。

あらし吹く夏の真昼にも書を繙く。

たましひもからだも

毎日歩く、進み往く、わが路を。

サタン襲はば、キリストの中に隠れる。

聖名に在って、サタンよ退けと叫ぶ。

けなす者を相手とせず。

パリサイとは主に在って戦う。

去りゆく友あらば

そのうしろから祈る。

何年経ってもその友らのために祈る。

聖霊の御執成しの中で十字架の下で。

あざむく友あらば

気の毒な人だと思いつつ祈る。

誤解されても弁解は要らない、

本ものはいつか証しされる。

ためらう人あらば

主を信じて断行せよと励ます。

疑う者あらば

信を以てこれに応へ

恐れる者あらば

愛を以てこれを包む。

諍う者を相手とせず

妬む人をも相手としない。

高慢な傍若無神の人あらば

神を畏れざるや、といましめ、

無視する人を相手とせず、

迫害する人のため逆に祈る。

喜ぶ者あらば

共に聖名を讃へ

悲しむ人あらば

共に悲しみながら慰めよう。

運命、環境、事情 悪くなれば

逆に奮い起って聖霊のみ力に与る。

疲れた者と共に憩らい

み力を祈り、み霊を受け、

病める人あらば、異言の祈りの中で

遠隔按手を以て助けよう。

困っている人には

何か与へる。

苦しむ人には

主のみ霊の愛のみ力を領ち

あらゆる事態に主の者らしく

一切を主のみ力で^{せう}行ぜん。

私には何も出来ない、

一切は主に在ってのみ可能だ。

私は罪びとの首^{かしら}、パウロはよく言ってくれた。

ひとに棄てられた石、世の塵芥。

ただこの破れ器の中に

主は光となり 愛となり、生命となり給う。

聖旨を体现したい

ただそれだけだ、そこにわが路がある。

人は誰でも各人の足^{あし}でおのが地路を歩く、

それが天道に即すれば好いのだ。

世界は危い、「末の世に信を見んや」

主の預言である、畏るべし政治家たちよ。

み霊の力で十字架道を歩ましめ給へ！

聖霊はわが力、わが光、わが生命、

キリストはわが愛！

愛はすべてを抱き総てを包む

愛はすべてを許し総てを救う、

聖名は讀むべき哉ハレルヤ！

三 三十年！（ソネット）

——一九六〇年七月十四日に寄す

武さしのの一角、新町のさとで、

五年間お世話になったあの集会。

なつかしいあの真理の城は

大戦のいけにえとなった。

夏草の跡をしのぶばかり。

恩師往きたまいて三十年！

講筵の友らはいづこに。

独りこの日を迎えた。

大詩篇「羔の婚姻」をよむ。

先生の気魂の息吹、心臓の音が

文字のなかからつたわってくる。

福音！ 大生命！ 大希望！

内蔵助ではないが、

師の志はわが胸の中に燃えている。

一九六〇年（昭和35）

曠野の愛第34号 晩夏号

四 岩つばめ

(一九七二年十二月二十三)

岩つばめ！

み霊のあらしに我れもまた

身をひるがへし飛び往かむ。

東西南北何方なりと

祈りを求むる人のもと。

岩つばめ！

あらしの呼べば躍り出で

翼鋭く風を切り

あらしに乗って天翔けり

身を幾度もじろがへ翻す

あらしと一如の岩つばめ！

東西南北いづこかの

こごしき岩間に宿を編む。

噫、自由の天地！

通うは誰の胸の中

五 たんぽぽ

(一九七二年七月二十)

コンクリートの道端ばたの

われめの中に根をおろし

ギザギザ葉はつ葉はをうち揚げ、

黄色にかがやくタンポポよ！

旺盛さかんな生命いのちのタンポポよ！

焼きつく日中^{ひなか}も何のその、
誰が水を遣るでもなしに。

おまえに負けるよ人間どもは、
運命環境に愚痴を言う。

タンポポよ、おまえはやがて

真白な羽を身にまとい、

実^みを軽々と風に乗せ、

飛んだり着いたり、また飛んで、

自由に天地を渡り往く。



たんぽぽ：実を軽々と風に乗せ

六 愛そのもの——川口愛子姉——

一九七二・十二・二七記之

ころは一九四八年の仲秋、
浅間高原小諸こもろの市まちの
一角に集いがあった。

語り終って彼は

来会者の氏名を問うた。

右うしろの片角に

三、四人の婦人がいたが、

その中の一人に

その名は川口愛子という

ひとみ美しき婦人があった。



前列右から二人目：川口愛子姉

その婦人たちの存在から
漂う妙えなる雰囲気。

それは都会では

彼が経験したことのない

あたたかい愛の香り。

その後の交りにおいて、

彼女の母なる

川口露野氏は、

まこと、愛の権化！

彼はこれをつぶさに知った。

この母ありて、

この娘あり。

彼女は脊椎カリエスの

病弱の身を推して、

碓井峠をくだった町

松井田に天涯孤独の病者を

そのあばら屋に訪ね、

ねんごろにいたわり、

その人の死出の衣替えをした。

かくて生き別れの

告別のつどいを

彼と彼女と三人でなした

その想い出が彼の胸に

昨日のようによみがえる。

ある夜、

彼はみ霊に感じて、

一夜彼女の病床に侍り、

たましいを籠めて祈った。

その按手を通して彼女、

はげしき靈動ののち、

異言ほとばしってやまず、

カリエスは癒された。

「先生、身心がすっかり軽くなりました。

本当にふしぎでございます。」

彼は平伏して、

聖名を讃え、感謝した。

彼女、無教会信者のゆえに、

ある妨害によって、

しばし曲折はあったものの、

はつきりみ霊の人とはなった、

使徒的信仰の旗じるしのもと。

生まれながらの愛の人に

更に深い天来の愛！

若き日の病弱のゆえ、

結婚問題に破れ、

言い難き心の痛みを負っていた彼女。

今や

聖霊の愛に包まれ、

キリストのみ腕に強められ、

浅間への山路を辿り、

小諸療養所をしばしば訪ね、

病者をなぐさめ、

福音を語る。

親子の契りを結んだ川口真理子姉は、

そのようにして救われた。

貧しきながら、

惜しみなくひとに与え、

友情を尽して

右の手のわざを左に知らせず、

なやみあらば

親しく聴いてなぐさめ、

悲しみあらば

共に悲しんでいたわり、

病めるあらば

ひまわりの宿は病院となり、

病みあがりあらば

川口の家は保養所となる。

その薬は何か、

主にある愛の心と手足。

暑夏の候には

避暑のはたごやともなった。

結婚の問題あらば

よく執り成しをなし、

若き男女の

縁結びの愛労いとわず、

「よかったよかった」と

肉身の如くよろこぶ。

彼女自身の

ひとり身のさびしさを

誰か知ろう。

主は知り給う、

そのハートの祈りを。

彼女は本心に、

身も心も家も、

主に捧げて生きていた。

福音のため独身を貫き、

却て多くの兄弟姉妹の

霊的なハートの母となり、

石垣会はおろか、

同信の人々に

「ママ」「ママ」と慕はれていた。

愛のわざ、

祈りの重荷のためか、

数年前、

突如、脳溢血に倒れ、

言語と身体からだの自由が奪はれ、

半ば不具者の境涯に入った。

意識の奥の

彼女の祈りと

愛の存在に

変りはなかった。

この度、

突然、吐血のため、

ついに重態におちいった。

昼夜をわかつたぬ真理子姉の

また同信の者の看護も空しく、

一九七二年十二月二十七日！

ついに

彼女の靈魂は

み使いの翼に乗って

主のみ許に

昇っていった。

余りにも

深い悲しみ！

彼はただ独り

むさし野の曠野に祈る。

十字架！

彼女は生涯を通して

十字架を負い貫いた。

しかしそのかんばせは

つねにはほえみを湛え、

不平不満の色更になく、

うらみ、ねたみの影もない。

み霊と

み言の剣をもつて

不信とは

戦いぬいた。

主の十字架と

み霊の中に

つねに新たに自分をおいて、

砕かれ

且つ満たされつつ、

ひとをゆるし、

ひとを包んだ。

主にある愛の人よ、

愛そのものよ…

その名の如く。

浅間高原の

とっておきの

大和撫子が

ここに散った！

冬の夜は更けわたり、

あかつきの星影一つ、

靈しくも十字に光る。

十字架よ、

彼女の負いし。

み霊の呻き。

沈黙の祈り。

胸底から力強く、

アーメン、ハレルヤ！

聖名は耀う。

〔註〕 この詩は、川口愛子遺稿集「落
翹」に寄稿したもの。

小池辰雄著作集第六卷「随想集」第
二部五「主よみ許に」、七「川口露野
刀自の召天」参照

七 詩と無の神学——ソネット——

八十一路の峠にて
(一九八五・二・七)

詩と神学は相抱いて一如となった。

聞け、天来の靈風が

宇宙と歴史に靈氣を吹きかけた。

すると武蔵野の無者は詩の国へ旅立った。

噫 大自然は詩そのものだ！

大交響楽の伴奏が聞えてくる。

人生は歓喜と悲哀のドラマだ。

詩はかかる自然と人生の乙女ではないか

聖書は光と闇のドラマである。

聖書は生まの神学をもっている。

歴史は戦争と平和のドラマだ。

無の神学はかかる聖書と歴史の青年である。

見よ、天裂けて靈光が

詩と神学に光を浴せた

八 全十二召団の歌

作詩 一九八六年四月十九日
歌調 一高寮歌「アムール河」
又は三高寮歌「琵琶湖周航の歌」

1

駱駝の毛織皮の帯 蝗と野蜜喰う人

ヨルダン川に現われて 水の洗礼ほどこせり

2

されども彼は宣べ伝う 「我より後に來たる者

畏るべき人その業は 燃ゆる聖靈のバプテスマ

3

旧き律法おきてを乗り超えて 聖旨みことのままに歩きける

預言者イエス故里に 容れられずしてガリラヤ

へ

4

キリストイエス叫びたり 時は満ちたり神の国

近づきたれば回帰せよ 神の福者身おとづれに受けよ

5

ガリラヤ湖畔を歩きゆき シモンとアンデレ見

給へば

「我に従へ汝らを 人を漁る者とせん」

6

彼らは直ちに網を棄つ ヤコブとヨハネ相繼

いで

直ちにイエスに従へり 信即行しんそくぎょうの福音ぞ

7

北の丘なるキリストの大告白はモーセより

はるかに深きみ霊なる 自由と愛の律法おきてなり

8

神の憐みキリストに 現はれたれば身心じんしんの

苦しみ悩み癒されて 救はれし人教知れず

9

生まれながらの我々は 我執の罪の罪びとよ

人はのこらずエゴイスト この罪の世を如何に

せん

10

キリスト・イエスは自らを 羔となし十字架に

義と愛の死を遂げ給ひ 我らの罪を贖へり

11

かくて我らの罪の根は 根こそぎせられ無罪也

この無の根源現実は 過去現在も将来も

12

この十字架の贖罪の 門をくぐりて投身せよ

見よ眼前のこの牧場 緑の野べよ水の辺よ

13 この陽の光清き風 み霊の光霊風よ

主の復活の生命かな 噫新生よ永遠の！

14 恵まれたるぞ汝今日 十字架により無者となり

み霊を受けて無量なる 天国体となりたれば

15 キリストイエス無者なるぞ さればみ神と一如

にて 無即無限の現実を その言行に現はせり

16 この罪の世はドラマなり 我ら自身もドラマな

り されどみ霊の力こそ この劇中の力なり

17

されど友らよ心せよ 十字架なくばサタン来て

妬み争い惹き起こし 混乱の渦に捲き込めん

18 十字架聖霊二焦点 無即無量の奥義なり

エンクリストの現実ぞ祈り入りてぞ身につけん

19 苦しみ悩み来らば来よ み霊の力いや増して

耐えて忍びて突き破り み霊に在りて進み往く

20 エンクリストの現実の 有難さをば味はいて

主なるイエスと一如にて 福音を身証せん

21 使徒らを慕う兄弟姉妹よ 絶対次元の人として

左顧右眄なく進み往け み霊の自由に生きよか

し

22

噫主の霊体慕はしや その血と肉を飲み喰ひ

永遠の生命を我は生き わが使命をば果さなむ

23

人は各々賜はれる 使命に生くるあるのみぞ

神は自ら指揮者 コンダクター 大交響曲 シンフォニー を奏で給う

24

噫人の世の混濁よ 二十世紀の世紀末

核の兵器を如何にせん 爆発すれば世の終末 終わり

25

平和の道は唯一つ その源の平安を

神のみ前に平伏して 体受することあるのみぞ

26

かくて互に恕し合ひ 愛の握手を交し合ひ かわ

各民族の特性を 歆び合ひて謳はなむ

27

いざ十字架を荷ひつつ 我らは往かん世の旅路

傷つき倒れ起き上る み霊の力不屈なり

28

聖霊の愛は歡喜の よろこび 源なれば相愛し

み霊の子らよ身証せよ あかし み国の現実 うつつ を今日もま

た

29

聖霊の愛は力あり 火よりも熱き愛なるぞ

十二召団身証せよ あかし 一対一の伝道を

30

神の歴史の一環を 承りて進み往け

聖国の栄光 さかえ 見ゆるかな 聖名讃 たいた へつつ進まなむ

〔附言〕 この讃歌を書き終わって私は机に伏して涙した。

九 第12四国キリスト召団讃

歌

作詞 天韻 一九八六年六月一日

歌詞 S 355 「主を仰ぎ見れば」

1 時期はつひに満ち 皐月の末

第十二召団 香川県の

屋島なる丘陵に 創立せり

聖名を高らかに 呼びまつれり

2 源平の戦い この屋島に

劇の一幕を 演じたるは

かの那須の与一 緋の扇を

見事に射ぬきし 神技なりき

3 旅館桃太郎 集会の場

聖霊聖言の み力にて

4

鬼が島ならぬ サタン退治

詩篇十六と 百十八

四国召団は 此処彼処に

燈台の如き 主の兄弟姉妹

大鳴門橋の 淡路島よ

ここにも幕屋の 燈台あり

5

主は叫び給ふ 「いざや聴けよ

全十二召団 いまや靈火

燃えさかりたれば 何をのぞまむ

我は十字架と 聖霊の主！」

〔註記〕 一九八六年四月十九日未明、目がさめたのでふと起きあがり、その前夜閃きが来ていたことをうたにしようと考えた。ぐんぐんできてゆく。とうとう二十九節にきた。そこに「全十二召団」という言葉がおのづから生じた。とその瞬間「第十二召団！」と閃いたので、即ち電話を四国の森下君にかけた。「森下君、第十二召団を創ろう！」「すると即ち！」「ハイ、創ります」「万歳！」と応えた。信仰の福音の気合であった。

十 A 42 深き情けの旅路

(ルカ五・一一―一二に因みて)
 作詞 一九八六・七・三十一 午後十時
 歌調 「卯の花の匂う」(夏は来ぬ)

一 ゲネサレの 湖の岸への

群衆に 舟より語る

イエスのみ言 み霊の波

二 「やよペテロ 舟を深処に

乗り出だし 網をおろせよ

漁り大ならん いざ往けよ」

三 「終夜 勞したれども

徒らに 漁りしのみ

されども み旨に従はん」

四 こは如何に 大漁のために

網は裂け 舟は傾き

二艘の舟に 魚は満つ

五 驚きて ペテロは言へり

「去り給へ 主よわが神よ

み前に堪えず 罪の身は」

六 キリストは ペテロに言へり

「懼るなよ 汝今より

世の人々を 漁らん！」

七 主よ、然り 我を否みて

み力を 全身に受け

深き情けの旅路往かむ

十一 A43主の大饗宴

(ルカ一四・一五―二四に因みて)

作詞 一九八六・八・一 午後十一時

歌調 「星かげやさしく」(追憶)

一 ゆたけき夕饗^{ゆうけ}ぞ 設けられたる

招かれたる人 使ひの者に

「田地を買ひたり 我れ見ざるを得ず

此度^{こた}びはゆるせよ」再^{また}たとなき招きああ拒めり その夜^よ二 「われ五耦^{いっくひき}の 牛を買ひたりこれを験^{たの}すため 往かざるを得ず」

「われ妻帯せり 往くこと能はず」

呼ばれし者たち 断はれりすべて

ああ何たる ことぞ

三 僕^{しもべ}の報せを 家主^{あるじ}は聞きて怒りて街路^{まち}より 貧しき人と

身体障害の 人々を呼びて

席に着かせしが なほ余りありし

ああ世人^{よびと}を 呼べり

四 アブラハムの子ら キリスト教徒

名のみ信にて サタンに負けて

世とその慾^{よく}とに 心乱れなば

主の大饗宴に 招かれ往く者

ああ一人も 無きぞ

五 キリスト召団！ 主の目を遡り

曠野の靈泉の み力を受け

六日の旅路を 勇ましく歩み

道往く人にも 靈泉を領たん

ああ饗宴の 希望

十二 A 44 パリサイ人と取税人

(ルカー八・九—一四に因みて)

歌詞 一作詞 一九八六・八・二農
歌調 一高察歌「思へば遠し神の御代」

一 パリサイ人と 取税人

宮にのぼりて 祈りせり

パリサイ人は 立ちあがり

心の中に かく祈る

二 「神よ感謝す わが義をば

強奪も不義も 姦淫も

他人のこと 献物

律法の如し 断食も」

三 見よはるかなる 取税人

平伏し拝み 胸うちて

「あはれみ給へ 神よ主よ

罪びと我れを」 かく祈る

四 パリサイ根性 自己義認

おのが信仰 誇るなり

主の本願は 唯だ一つ

十字架・聖霊 受くるのみ

五 我らもつねに あるがまま

砕けの心 身につけて

キリストの無者 自覚して

荷いの人よ どん底で

十三 A45 霊肉渾然一如

(ルカ第二十四章に因みて)

作詞

一九八六・八・二 正午

歌詞

一 高哀歌「春爛漫の花の色」

懼れ迷ひてふと見れば

白衣の輝く御使よ

天使は告げぬ「キリストは

甦りたりガリラヤで

語り給へるみ言を

憶ひ出だせよ」女たち

墓より帰り弟子どもに

この出来ごとを報せたり

かのマグダレナ全身の

力をこめて語れども

使徒らはこれを妄語と

みなして信ぜずペテロすら

さはあれペテロ走りゆき

見ればみ墓は空なりき

噂を聞きて弟子二人

エマオに向ひ旅立てり

一 十字架の日は暮れゆきて

安息の日明け初めぬ

園の墓なる洞窟に

横たう人に聖霊は

親しく宿り夜は更けぬ

かくて霊すしき晨は来ぬ

二 イエスを慕ふ女たち

香料もちて墓にゆく

石の扉は転びあり

墓の中には屍なし

その道すがらとやかくと
語らう傍^{かた}へに或る人が

近づき来たり「やよ君ら
如何なることを語らうや」

六 「ナザレのイエス神の人

言も業^{わざ}も靈力^{ちから}ある

預言者なりき然れども

祭司どもにも逆^{さか}はれ

十字架されぬわが民を

贖うべかりしこの人や

七 彼死してより三日目の

今朝女ども告げ報す

『御使立ちてキリストは

復活せり』と弟子どもも

墓にイエスを見ざるなり

我らは何を信すべき」

八 この旅人はこれを聞き

「ああ愚かなる弟子どもよ

預言者たちの語りたる

凡てのことを信ぜざる！

そのキリストぞ難を受けて

栄光に入る人なるぞ！」

九 かくてこの人歩みつつ

預言の歴史語らへり

日暮に及び旅人ら

エマオの宿の食につく

彼れ祈りしてパンを擘^さきて

彼らの目より消え去りぬ

十 使徒らも弟子も都にて

主の復活を語り合う

エマオに往きし旅人ら

主の語らいの証しせり

主はその席に現はれて

「平安^{シャロームラケム}汝らに」と言ひ給ふ

十一 彼ら懼れて幽霊と

見なせばイエス「何ごとぞ！

いざ撫^なでてみよこの体^{からだ}

霊には肉も骨もなし

我には骨も肉もあり」

彼は魚を喰^くひ給ふ

十二 噫キリストの霊体よ！

旅路の果つるいつの日か

聖国に呼ばれ往くときは

霊肉渾然一如なる

聖名のゆえなるみ救ひに

聖名讃へつつ躍り入らむ！

アーメン
ハレルヤ

第三章 感想集

一 私の白線水高時代

(一九四六・一〇・三十一)
宗教改革記念日に

白百合の徽章と白線の帽子を稍阿弥陀に被り、腰には手拭ひをぶら提げ、足は下駄穿きといふ昔ながらの高校生タイプが二三、武蔵野の長閑な道を歩いてゆく。——昭和医大予科の学生である——夢多き青春に幸あれと祈る。秋の空高く雲の波が漂うてゐる。国分寺から学校への道が長きまゝに、不図自分の白線時代への淡き想ひ出のひと時を有つ。あの頃からもう二十年も當つてゐるかと思うと、おのが不勉強を顧て嘆きを新たにしくなる。

私は中学時代に正直のところ一高に憧憬れてゐた。けれども叔父の世話になつていて一高を滑つてはというわけで、水高を受験することになった。受験勉強一年で自信の出来た自分は都落ちをするのが頼であつた。正直上位で入学したので、入学しても少しも嬉しくなかつた。中学へ入学した時の方が遙かに嬉しかつた。

水高第一年の春、ア式蹴球など旺にやつた。グラウンドが全国高校随一だといふので運動は盛んで



旧制水戸高校入学当時
1923年3月23日（満19歳）

の病室に入れられた。何かの注射の反応で高熱が出たときであつたと思ふ。当時同病院の皮膚科の主任で居られた萩原先生が診て下さつたことがあつた。入院生活一ヶ月暑い八月を完全に寐て暮らし退院出来たのが忘れもしない八月三十一日であつた。文字通り骨皮筋衛門となつた自分はこれが自分の身体かと思つた。東京へ帰つても当時は自分の家がなかつた。失明した母と共に叔父の家に寄寓してゐた。もし一高に入学していたら事態は全く別であつたと思つて、千歳の遺恨であつた。ともあれ、母にたゞならぬ心配を懸けたことは何としても申訳なきことであつた。その後の体力の回復には消長があつて、遂に第一学年の後半を休学するのやむなきに至つた。武蔵野の秋空の下で私は静かに自己

あつた。寮の飯ではもの足りないもので、よくホールにかよつて、汁粉、ねぎそば、あんパン、餅菓子等々食べたものである。時には市中へ遠征する。今の白線諸君の身の上を思ふと全く気の毒になる。今昔の感に堪へぬものがある。然し無茶が崇つて私は腸カタルに罹つた。近因はトンカツが悪かつたためであるが遠因は平素の不節制にあつた。寮では癒り兼ねていよいよ入院となる。常盤病院の二階

に還った。

そこには私の胸を圧する三つのものがあつた。その一つは前年（大正十年、一九二一年）の九月に北京で仆れた長兄の死であつた。幼年時代に父を失つた私にとつては親とも信頼してゐた兄であつたから、その打撃は深刻なものがあつた。その二つは母の失明であつた。父なき後、五人の子女を育て上げた多年の労苦と今や母に代つて一家を支へんとしつゝあつたこの兄の死に由る心痛落膽のため、帰途黄海の上で母は失明したのである。私は片眼を母に捧げたいと思つた。幾夜か暗涙に咽んだ。その三つはおのれ自身に対する失望である。身体は倭小虚弱であり、頭脳は愚鈍であり、意志は薄弱である。努力精進はするのであるが、一向よりよき我とならない。心の奥の重荷をどうすることも出来ない。決心は何度やり直して見ても空しく終つてしまふ。良心の声は幾度び踏み蹂られてゐたやうか。どうしたら自分は善くなるのだらう。そしてこれが私の心を最も苦しめてゐた問題であつた。

私は憂愁と苦悶から遁れたく大自然に慰安を求めて武蔵野を歩いた。否歩いたと云ふよりも野や川べや丘の上で自然に親しみながら冥想に耽つた。富士には何となく慰めと希望を与へられるやうに感じた。また読書もした。始めは漱石、蘆花その他伝記の類を読んでみた。併しそれからは慰めも力も与へられなかつた。長兄が遺してくれた本は洋書が多かつたが、和書の中で内村鑑三先生の著書教冊と、「聖書と研究」誌が創刊号から殆んど全部揃つてゐるのが眼についた。その外に聖書も二、三冊あつた。私は今迄キリスト教関係の書を読む気が起きなかつたのであるが、この時はどうしたものか、

読んで見たくなつた。二十七年を一期として地を去つた兄の最後の数年は実に充実した生活であつた。信仰なかりし私にもその事實は否定し難く印象づけられたのであつた。彼の衷には何か別な力が動いてゐるのを感じるゝことが出来た。道徳の世界から出て来ない活き活きしたいのちが動いてゐるのを見た。この兄の事実と現に自分が三重の苦惱の中にあることが私の心を知らざる世界、宗教の世界へ踏み入らしめたのである。

内村先生の著書は不思議に私の心を捉えた。私は感動しつゝ讀んだ。右手に青鉛筆を握つて。私は感動する箇所に傍線を施しつゝ讀み続けた。遂に手もとにあつた先生の著書を全部讀了した。そこで私は聖書といふものを始めて繙いた。最初は書いてあることも大分變つてゐるし、文体も「給ふ」とか「給へり」とか云ふのが耳ざわりのやうで余りピンと来なかつたが、やがてその内容の素晴らしさ、その言の犯すべからざる權威、自由、生命、力、美しさなどに捉えられて、親しみを覚えるやうになつて来た。と同時に当時大手町の大日本私立衛生会館の講堂で毎日曜午前十時から聖書の講義をして居られた内村先生の講義を拝聴に行く氣になり、出かけて行つた。時は一九二三年（大正十二年、関東大震災の年）の春なほ浅き頃であつた。「幸なるかな、心の貧しき者、天国はその人のものなり。幸なるかな、悲しむ者、その人は慰さめられん。」所謂「山上の垂訓」のくだりであつた。著書で感動した以上に、内村先生の全人格を通しての真理の言は私を打つた。私はその時感涙を抑へることが出来なかつたことを今もよく想ひ出すことができる。毎日曜が私の楽しみとなつた。渴きたる鹿が溪

川の水を慕ふやうに、私は聖書の真理を聴くことを喜びと力とする者となつた。

やがて新学年が来て、私は再び水戸へ戻つた。病氣をしたために、休学中に信仰の世界に踏み込み得たことは何ものにも替へられぬ収穫であつた。私はそこにハッキリ神の摂理を観ることが出来た。

外側はともかく、私自身は内面に於いて別人となつて水戸へ歸つた。友人達も氣がついて私を清教徒などと綽名した。

水高在校中、私の胃腸は遂に本復するに至らず、徴兵検査のときに、「お前は大学を出る頃には死ぬぞ」などゝひどく貶されたものであるが、未だ死なゝい所を見ると、何か御用があるためであらう。在校中、信仰の友人もなかつたが、私の魂は眞の自由を段々呼吸するやうになつて来た。と同時にまた、生まれつきの自分といふものがいかに惨めなものであるかもわかつて来た。信仰生活を続けてゐるうちに今まで重荷であつた勉強が重荷でなくなつて来た。真理や學問に対する関心興味といふものが湧いて来るのを覚え始めた。これは体験的事実である。勿論私は自分の信仰生活が他に誇り得るものであるとかないとかいふ様なことを毛頭問題としてゐない。若し言ふべくば寔に惨めな信仰生活二十三年である。併し私が白線時代に信仰に入つたといふ事実と、これに対する限りなき感謝とを否定することは出来ない。

水高四年の生活は病患のためブランクだらけのものであつた。私は学ぶばかりし多くのものを学ばずして卒業してしまつた。また好きな運動も遂になし得ず、高校生らしい愉快な生活も殆んど味はひ

得ずして終つた。それ等の損失にも拘らず、私は一切のものと替へることの出来ないものをつかんで再び東京に帰つて来たのである。

水高時代に私の愛読したものが二つある。一つは旧新約聖書であり、二つはヒルティの著書「幸福論」(Glück)と「眠られぬ夜のために」(Für schlaflose Nächte)とであつた。後者ヒルティのものは独乙語であつたから勿論独乙語の勉強にも大いに役立つた。また私は在校中に、ルッターとダントは大いに学ぶべき価値があるものとなることを知つた。ルッター研究の権威佐藤繁彦先生が水高に講演に來られたことがあつたが、その講演が私の心を捉へてから、ルッターは私の生涯の友となつた。今年はルッターの歿後四百周年に當る。而も今日は宗教改革記日に當つてゐる。奇しき冥合のやうに思ふ。〔著作集第七卷「聖書の人ルター」参照〕

これを以て私の白線時代の断想を終ることにするけれども、学生諸君が学生時代を最も良心的に、最も真実な心持を以て暮し、何ものにも替へ難き何ものかをその生活から体験し得んことを切に祈る。そのためにはよく学び、よく考へ、よく内面的な戦ひをしなければならぬ。

百合の徽章を見て私の心に浮ぶ言葉がある。曰く「野の百合は如何にして育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我れ汝らに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その装はひこの花の一つにも及ばざりき。」イエスは一莖の野の花にも神の比ひなき深き顧慮のあることを洞察した。まして我々人間の一人一人の存在とその魂を、真の實在者たる神が深い愛を以て顧て居られぬはずがない。人間

の父なる此の实在者に信頼せよ。そこに本当の生活があるのだとの意である。

(附記) 第八卷『詩歌集』二八六―九頁、昭和医大予科の校歌参照

二 幕屋的展開

(一九五一年十月)

ヤハウェーの神、イエスが父と呼びて親しみ給いし神は、かつてイスラエル遊牧の民と広野を共に旅し、幕屋にみ霊を以て降り給いし神でありました。その如く、キリスト昇天の後、聖霊を以て基督のエクレシヤ（最も本質的な意味に於ての教会）を導き、牧し、人類の歴史を終末的に支え、進め給いつつある神であります。我らの神はかかる動的な、前進してやまざる神であります。その神と共に歩き給いしイエスは、「我は今日も明日も次の日も進み往かざるを得ず」と言われました（ルカ一三・三三）。

そのイエスの僕らを以て任ずる我ら基督者が淀んだ水のようにでは仕方ありません。腐ってしまいます。水ならば活き活きと奔流する清き溪流の如く、風ならば、真白き波頭を掠め松籟と鳴り渡る潮風の如くで我らにはあります。キリストの霊の力によって動く基督者は此の如く活ける者であります。世界歴史の動力として底力ある者が基督者であるはずで、老いも若きも、男も女も、本質的な意味



小池政美召天35周年記念集會：1956年秋彼岸「キリストの聲」

で伝道者であるのです。罪より解放され、救われ、自由の聖霊にあって天界の空気を呼吸する者は、かくあらざるを得ないのであります。

愛する兄弟姉妹よ！ 我らは聖霊の幕屋を張って、旅を続けましょう。聖書を何とかしてこれを知らぬ人に読ませ、キリストの生命に入れてあげたいのが我らの念願ではありませんか。然らば二人でも三人でもを呼び集め、ねんごろに祈りをなし、聖書を語ろうではありませんか。「一、三人私の名に在りて集まるところには、私もその中に居るのだよ」(マタイ一八・二〇)と天上のキリストは仰つしやって下さる。キリストの聖名は同時に実であります。名ばかりでごまかされていることに馴れている日本人は、キリストの名もそうかと思う。基督者までが聖名に於ける実を知らない。それは聖霊の事態が

現実となっていないからです。実存的な信仰でないからです。

我らは併し、福音書の主の現実、使徒行伝の使徒らの現実と同質の現実を、聖霊の幕屋の展開を以て現すべき使命を与えられています。曠野の愛とは、そのようにして幕屋を張り、聖名を讃え、曠野に沃野を現じつつ、天のシオンを目指す旅心であります。在天の父は在地の聖霊となってそのような展開を全世界に望んで居られると信じます。



司会しているのは画家の長坂光彦君

三 基督者の使命

(一九五二年正月)

まづ此の年に祈るべきは、日本が生けるキリストに占領されんことである！ 天の万軍がこの国土に天降りせんことである。全基督教界が聖霊のつきぬけの実相に來らんことである！ 各基督者が預言者や使徒たちの霊的実存を生きんとすることである。

「この世の暗黒を掌るもの、天の処にある惡の靈と戦う」(エペソ六・一二) ために「御霊の劔」たる「神の言」を執り、これに護られずして如何で立つことが出来よう。いかなる事態がわが国に展

開し、変転し来たるとも、基督者の靈願は動じてはならぬ。靈闘はキリストの勝利に帰するからである。

今や、福音を単なる研究や議論から解放せよ！パウロの謂う「神の力」(ローマ・一六)たる本領に於て福音を自覚せぬならば、それは福音をもてあそび、聖靈をいつわるものである。「信仰」という事態は觀念ではなく、実存の世界であることを体認すべきである。

一九五二年は辰年を迎えて五度び。元旦に家を立ち出でて、九州、四国、大阪方面へ伝道の旅をした。決意でも、計画でもなかった。「我に従え！」であつたのみ。何処でぶつ斃れても可いと思つて歩いた。

「人もし我に來りて、その父母・妻子・兄弟・姉妹・己が生命(ブシユケー)までも憎まずば、我が弟子となるを得ず」(ルカ一四・二六)。烈しい聖言である。どうして耐え得よう。併し彼は「我らの内に住まわせ給いし靈(ブニューマ)を妬むほどに慕い給う」(ヤコブ四・五)。そのキリストの愛に捕えられて歩く。聖書一卷を枕とする旅寝の夢は日本全土を駆け廻るが如くであつた。(「紀行集」の項参照)

聖靈の熱愛に生きるつきぬけの男で私は在りたい。キリストと共に担うどん底の人間でありたい。み霊の兄弟姉妹よ！ステパノ以来、聖靈の子らに於てみなぎっていた愛の実存を祈ろう。世界の事態は真に憂うべきものを孕んでいる。併し戦争か平和かの問題よりも根本的な問題が我らには投ぜら

れている。蝗^{いんご}の王アポロン（*Ἀπολλών*「破壊者」黙示録九・一——一参照）とか、「蛙^{かわづ}の如き三つの穢れし靈」（黙示録一六・一二——一六参照）とか謂われる悪靈の支配する世界のただなかに聖靈の光被^{おほ}する世界を現すべき使命である。

今や、すべての基督者は、この悪靈が勢力を得ている世と戦い、世界をその怖るべき災禍から救うべき任務を神から課命されている。「禍害^{わざはひ}なる哉、コラジンよ、禍害なる哉、ベツサイダよ」（ルカ一〇・一三）と言わなければならない都市は世界にその数を増すばかりである。武器製造の熔鋸^{ろうこ}炉の炎を消し、享楽の紅燈を消すところの白熱の火を有っているのか。基督者がその胸に宿すべき聖靈（ロマ八・九）を措いて他に何処に此の如き火があるか。この不滅の聖火が、消えていってどうして我らは基督の者であらうか。「父は他に助主をあたえて永遠に汝らと共に居らしめ給うべし」（ヨハネ一四・一六）とのキリストの言は我らに現実となっていないのか。

「我は火を地に投ぜんとて来れり」（ルカ一二・四九）とは正にこの聖靈の火のことであった。人間の靈を熱愛してやまぬ聖靈の火を、万人の胸に燈^{とも}して、悪靈の炎を消し尽すのが基督者の愛の戦である！ この他に基督者の果すべき根本的な使命はない。新たに神の使命に目ざめたる聖靈の兄弟姉妹たちよ！ 私も亦君たちのために魂を濺^{そそ}いで祈っている、み靈に在って雄々しい戦、この聖靈の燈火を我らの隣人の胸に點せんことを我らの実存としよう。全世界をこのみ靈の光の世界に転ぜんことを我らの靈願としよう。具体的には一対一の伝道である。

これは最早戯事ではない。真劔勝負の事態となった。聖霊の子らよ、我らは一人のこらずこの使命を負わされた実存的伝道者である。預言者、使徒たちの靈統を堅持しよう。

聖霊の火矢を放ちつつ、愛の燈火を點じつつ、何時^{いつ}何処^{どこ}にても斃れよう。全世界が悔改むる日を悲願として。

「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず、日蓮は泣かねども涙ひまなし。」

四 空谷の聲音

(一九五四年七月)

北イスラエル王国は北の鷲アッシリヤのため既に紀元前七二一年に崩壊し、南ユダ王国は東の獅子バビロニヤのため五八七年に決定的な悲運を迎えて捕囚の民となる。戦乱また戦乱の叫喚も絶え歇んで、荒寥寂莫たるはただ戦場の跡。「夏草やつはものどもが夢の跡」ならばともかく、ここには祖国と運命を共にした勇士のみならず、老若男女の死骨が泥にまみれて散乱している。声なき声がその土塊の間から立ちのぼる。亡霊はぬばたまの闇の夜に目ざめておのが枯骨を慕い呼ぶ。

予言者エゼキエルはある時、祖国の変り果てた現実を嘆きつつ、祈っていた。すると自分の霊が神の聖手に導かれて出でゆき、とある幽谷に立たしめられるのを覚えた。谷の面には死骨が累々としていた。それはまたガサガサに枯れた骨であった。神の声が予言者にたずねた、「是らの骨は生くるや」。人間の理性には愚問として一笑に附せられもしよう問である。併し、予言者は理性の奥の世に眼の開かれた人である。「神よ、汝知り給う」と応えた。彼は即座に神命を受け、予言して枯骨

に告げた、「枯れたる骨よ！ 神の言を聴け、……」言下に骨と骨と相つらなり、肉がつき、皮が衣せられた。そして神命に従ってこれに靈氣を吹きかけたとき、生ける民衆となった。神はそのとき、「わが民よ、我れ汝らの墓を啓き、汝らをその墓より出で来たらしめて、イスラエルの地に至らしむべし、……我はわが靈を汝らの中におきて汝らを生かしめ、汝らをその地に安んぜしめん。」と言った。(旧約聖書エゼキエル第三十七章参照)。

枯骨は即ちイスラエルの民であつた。国が一度び崩解して枯骨にも等しくなつた絶望的なイスラエルは、この「枯骨の復活」という驚くべき靈視の啓示に於ける如く、やがて宗教的使命を荷う民として復活した(イザヤ書第四十章以下参照)。それは全く神の靈に在って新たに生くべしとの啓示であつた。

終末的な、危機的な現実に直面し、多くの難問と苦難と苦悩の中にある我が国、ある意味でたしかにこの枯骨の靈幻の如き現実にあるこの国が、真に復活するの道は唯一つ。日本民族の靈性の目覚めにある。靈生に新生することにある。宗教は日本人の、特に青年の最も根源的課題であると私は叫ぶざるを得ない。私は小学生のとき「人間は万物の靈長なり」という言葉を聞かされた。その「なり」との現実が、未だほんものでなかった。「人間は理性的存在なり」という観念哲学者の言葉がこれにとって代つてしまった。併しその「理性」が理性としての真の価値を発揮する実力はいづこにあるか。それが靈性の次元にあることを知らぬために、理性があらぬ自我的慾望と結んで正しい道を踏むこと

が出来ない。個人、社会、国家、國際の諸々の現象を見ると、あきらかに靈性の喪失、理性の無力、感性の墮落といった内的原因に発している事象の何と多いことであろう。

二十世紀はたしかに絢爛たる文明文化の世界である。科学の發達展開には極限的なものが現われている。かかる高度の文明文化の今世紀が、反対に最も血なまぐさい悲惨な戦争を二度までも起した。「二度あることは三度ある」の俗諺が実現しては二十世紀文明は壊滅せざるを得ない。この原子力的な文化の壯麗なる大建築の土台が危くなって来た。文化の一切のいとなみは、これが人間の思惟によらずして起るものは一つだにない。しかもその思惟の主体である人間そのもの、いかなる一個人をとりにしても、他の個人を以て置き換えることの出来ない人格的存在たる人間そのものは、正にそのゆえに絶対的存在たる根源性を荷うものである。人格的存在が絶対的であるということはもはや単なる理性の限界を超える消息であらねばならない。そこに必然、靈性の課題が秘められてある。この人間普通の課題に取っ組んで、何らかの意味に於て絶対界とのつらなりを有つに至ることが、換言するなら、横の世界（文化）に生きる者が、縦の世界（宗教）に生きるようになることが、人間存在の眞の回復であり、この深刻な現実に対する最も根本的な対し方であり、眞の文化への限りなき原動力を興えるものなのである。枝葉の世界に（文化）どれほど葉が繁り、花が咲き、実がみのるとも、大切な根幹の世界（宗教と道德）に水が涸渇し、虫が巢喰ってしまったては、いかなる大木も地ひびきを立てて倒れなければならない。私はこの間、庭の無花果の樹が、正に根幹に虫がつき、枯死するのを見た。

二十世紀後半の文化文明がこの様な悲運に立ち至らぬと誰が確言できよう。今にして青年が目覚め、日本文化の真の建て直しをするために、その根源たる魂の問題と取組み、まず身に深く体するのでなければ、真の百年の計は成らない。私はその様な、全霊全魂を投じて踏み出る青年の覚悟あしおとをこの東大の空谷の中に聞きたいのである。これが私の悲願靈願である。

(昭和二十九年七月東大教養学部 文科二類三組(LII3) クラス雑誌第一号所載)

五 歌道囃語

(一九五五・八・二八ゲータの誕生記念日)

信友田崎秀(笠間規久夫)君から「茨城歌人」に寄稿をおたのまれして、私の出る幕ではないと知りながら、同君の意気を感じておひき受けした。私は茨城県人ではないが、その昔白線高校時代を水戸で暮した想い出は、生涯忘れ得ぬものであり、私の人生のまことのスタートが、その時代に切られた意味からすれば、水戸が私の魂の誕生地と言えないことはない。

和歌の道では私は全くの素人である。折にふれて詠まないわけではないが、精進してはいない。そして今の歌道の状況も知らぬ私が歌道に御精進の方々に対して何か書けるがらではないのである。だから皆さまはこれを一素人の自己鞭撻の囃語と思って読んで下さい。併し、もし意気投合して下さいならば、こんな有難いこともない。

私は惟う、人生万般のこと、人の世の一切のいとなみ、世界文化のすべての現象は、その源泉にさかのぼれば、人間一個のたましいの世界に起因すると。その消息はあたかも一本の草または木にもひ

とし。即ち幹も枝も葉も花も果も、根なくしては生成展開してゆくことが出来ないように、人間のあらゆるいとなみは、たましいにつらなるものである。そしてそのたましいは、人間をうみだしたものによつて生きる。たましいがまことに、生きる世界は宗教的なものではない。それを絶対界とも本体界とも、神とも仏とも言うにまかせよう。私はここで宗教論をするのでもなく信仰告白をしようとするのではない。併し、根がなければ草木は枯死するように、人間がたましいの世界をないがしろにしたり、おろそかにしたらどういうことになるかは事実が最も雄弁に答えてくれるから私は論議はしない。たましいの世界を論議で決しようとする人々が、有神論をかざそうが、無神論をつきつけようが、汎神論を主張しようが、多神論を語ろうが、御勝手であるが、論が決した有神無神がたましいを真に生かすかは御自分でためしたらい。

私にとつては、そんなわけであるから、歌道に精進せんとならば、その精進の道はそのたましいの精進と切りはなして考えることが出来ない。たましいが根源の世界にかけ入り進み往くにつれて、歌の道も真のいのちを、力を得るものと思う。

葉は葉であり、花は花である。それは凡そ根とは似ても似つかぬものである。にも拘らず、根なくしては葉も花も枯れ凋む。そのようにたましいが生きた根として大地（絶対界、本体界）に養分を吸うことなくしては、歌の道も真の展開、限りなき進展をなし得ないこと必定である。

古来偉大な芸術家の足跡をたづねれば、想い半に過ぎるものがある。大詩人ゲーテは曰つた、「人

間がな宗教的である限りに於てのみ詩や芸術に於て生産的である」と。道は近きにありである。赤彦がこう言つた「歌には歌の大道がある。その大道の由つて来る所に礼拝するのは、自分の今踏まんとする大道を礼拝することであり、自分の踏まんとする大道を礼拝することは、自分の個性を尊重する所以なのであります。仏教の眞の行者は、皆、己れを空しくして、釈尊の前に礼拝します。己れを空しくし、愈々空しくして、一向専念に仕ふる行者にして、初めて、眞の個性を發現させることが出来ます。法然、親鸞、道元、日蓮の徒皆この類であります。」（傍点筆者）。これは千古の名言である。宗教の本道もこれであり、芸術の境地もここに存する。また学者が眞理に對し、職人が仕事に對し、政治家が政治に對するも、皆この私心を去りたる心境に通じないなら本ものであり得ない。

歌の世界にも種々の流派がある。あたかも花に菊、ダリヤ、桔梗撫子と百花ある如く。しかし、大切なことは、それぞれが生きている、ということである。作り花でないということである。また切り花でもないということが極めて重大なことである。歌には歌の用語があり、語法がある。歌道の諸要素諸技を習得し、習熟する事が大切であるのは言うまでもないが、茶道に於ても茶道の法則にただ是れ順応するのみでは茶道の真髓に却て反する如く、歌道も技を修めつつも技を支配する絶技の氣がまえばつねにはたらいていなければならぬであらう。それは信仰が脱落心身的な絶信の信に於てこそまことと信である如く。今から二十余年前、私は「うたの心」という短文の中で自らこんなことを書いた、「一念凝つてしづかに迸り出づるところにうたは成るのであらう。人格の息吹であり、情意の一鼓動

である。単なる感情の所産ではなく、いのちある情意が動いてゐなければならぬと思ふ。澄みきつた認識はこれが衣であらう。而も神の前に謙虚なるいのちの心こそはうたの心の母胎であると思ふ。」
今もこの気持に变りはない。

左千夫がこんなことを言つてくれた。「如何にして一首の歌に、永久死せざる生命が附与されるか、是れ実に重大な問題である。神が独り会得し得べき問題であつて、到底人間の窺い得べき問題で無いかも知れない。よしや最も神に近き詩人の能力はそれを会得し得るとも、是れを解説する事は又到底不可能の事であること勿論である。若し云ひ得る処まで解説を試みるならば一度生命を得て生れた詩は永久に死なない。作者は無論死し、作者の国まで滅びても、其の作物は猶死なない。此の点に於て詩は人間よりも尊いのである。」(傍点筆者) 何か預言的な気魄すら漂う言葉ではないか。全生命を賭けて歌道に精進した左千夫の言葉である。日本の文化が歌に限らず、この気魄のもとに創造されてゆくなら滅びない。然るに日本は一たび敗滅を喫した。大死一番復活すべき日本が、どうして再びこのような日本であるかを願うときに、やはり日本人がそのたましいの在り方に於て不徹底であるがためであることを痛感する。

このような時に際会して超流派の「茨城歌人」の創刊されるに到つたことは、ある歴史的な意味があることを私は感ずる。世界は世界聯邦を真劔に考えるべき二十世紀後半を迎えている。宗教界も、最早、宗派や教派の争いをしてゐる時ではない。すべての分野に於て有機体的構造を実現すべき時が

来ている。生命を破壊する原子力の暴力は言わずもがな、生活を枯死させる観念のごまかしではどうにもならない。超党派、超教派、超流派というものは、党派や教派や流派を一色に塗りつぶしてしまふ全体主義ではない。それではまた没生命であつて、有機体的ではない。それぞれの特色、特質を生かすべきである。併し問題はそれぞれの流派が真におのれに絶した次元に生命の根源をもつか否かに存する。歌人は、固形化せんとし、硬化せんとする小我性を乗り超え踏み超えて、つねに新たに大我性に変質変貌しつつ限りなき生命の進展をはからなければならぬ。実に生命体はそのように生きざるを得ないものであつて、その生きざまに支障を来たすときは自らその欠陥を感じ、いのちをその源泉に汲まざるを得なくなるものである。それがたましいの呼吸というものであり、たましいの呼吸は大宇宙と相通うものである。大宇宙の呼吸は、千態万様をなして我らの身邊に環境にあふれている。また秘められている。それを観相し、それを体感し、その中に投身し、それを呼吸し、それと共感し、それを体現し、といったように生きてこそ始めてうたが生活となる。

歌道はどこまでも生くることをはなれてなく、断じて閑人のすきびではなく、まことを生くる人の芳香であり、生命の息吹である。盛り切れぬ告白であり、創造のわざである。歌道は即ち作意なしにおのづから生命の燈火を点ずる火道である。この素人の悲願のほどを、皆さまがただ笑わずに、嘲けらずに、馬鹿になつて聴きとどめ、欠けたるを充分補つていただきたい。百論一歌に如かず、素晴らしいたを詠い出で、いよいよ御精進、この国の歌界にやがて偉大なる御貢献あらんことを念願して

やまない次第である。「茨城歌人」が荊棘いばらの道を棄身で踏破し、万葉以来の偉大なる先輩たちのあとを謙虚に堅実に、また大きく強く展開されんことを切に祈つてやまない。おわりに我らの先輩曙寛の気魂に触れつつこの筆を擱く。曰く

燈火のもとに夜な夜な来れ鬼我ひめ歌の限りきかせむ

〔茨城歌人〕創刊号寄稿（昭和三十年十月）（編集発行人田崎秀氏）

六 西洋文化の源泉にして偉大なるドラマたる聖書

(一九五八年五月一日)

「学生時代から現在までに心惹かれた本」に就て書くようにとのことであるので、私は何のためらいもなく「それは聖書一巻でした!」とお答えします。その次はダンテの『神曲』、と答え得るでしょう。第三はゲーテの『ファウスト』と言って可いでしょう。丁度子供が大きな下駄をはきたがるように、人間が小さいと大もの好きになるようです。

聖書というと、大方の諸君は文字通り敬遠するでしょう。無理もないことです。私も諸君の年輩の頃そうであったからです。しかし、私が旧制高校の入学試験準備をしていた頃、突然、父とも頼んでいた長兄が北京に客死し、母は過労と悲嘆のため長兄の遺骨を抱いて帰る黄海の舟路で失明するという人生の闇雲にとざされ、私自身は高校第一年に病を得て休学するという低気圧にありました。そういう人生の風波の現実下において私は亡兄の書架から内村鑑三先生の著書を引き出して繙いてみました。不思議や、先生の文字はぐんぐんたましいの中に沁みこんで来ました。たましいに何か力があ



1964年春 東大教養学部独逸語科同僚全員による 満60歳停年退職送別会：
前列中央菊地栄一夫妻、小池辰雄夫妻

えられるおもいでした。そしてこの内村鑑三先生の文字の源泉は聖書にあったのです。因みに申しませんが、近代の文献で学生諸君に先づ勧めたいのは内村鑑三の著作（岩波や角川から出版されています）及びその高弟たる藤井武の著作（「藤井武選集」は駒場の校内売店にあり、編者は矢内原忠雄前総長と私です）

亡兄が生前、毎日欠かさず読んでいた聖書を開いてみようという気になり、読み始めたのが一九二二年の秋でありました。爾来三十数年、これを何回読んだかわかりません。ある箇所は百回を越えているでしょう。一般に聖書研究会という名称で、聖書は個人的にも集団的にも「研究」の対象たるの傾向が強くあります。私も勿論研究もいたします。しかし、聖書は「研究」によって、その内奥がつかまれる書では絶対にありません。

ここに簡単に聖書はいかに読まれるべきかの道をお話しておきます。聖書は教えの書ではなく、神的啓示の事実が証言され告白されているという事態がその根本性格です。ですから、光が闇を照破しつつある立体的な多次元的な現実を示しているドラマティックな書です。ですから、このドラマの中に自ら投身し、自ら劇中の活人物となる角度で読むことです。日蓮の言を藉りれば正に身読の態勢になることです。私自身が、前述の如く、ドラマティックな一時期にあって、これに魂をうちこんだことは、期せずしてその態勢にさせられていたわけでした。その後しかし、永いこと一般的研究的な角度に私も影響されて、端的に聖書の中に投身する角度からずれを来していました。聖書は涙と血

を以て書かれた書です。而も驚くべき天来の生命力と歓喜の書です。ここ数年、私は新たに開眼せしめられ、

すれまゝに

オラトリオ
聖劇なる聖書なれば

その現実に投げ身して読む

と、告白するに至ったのです。そして驚嘆すべきこの聖劇の主人公はキリスト。キリスト・イエスは彼の靈神にして父神なる神の現象体ですから、「我を見し者は父を見しなり」と彼は告白しているのです。

聖書は以上のようなものですから、と思ってこれに親しむことが大切です。単なる理性の限界で読んだら躓きます。研究的角度に主導性を置いてはダメです。

凡そヨーロッパ文化の重大源流をなしているキリスト教（私はむしろキリスト道と云いたいのです）の原典を読むことをしないで、西洋文化をとりあつかうことは、根を切りとつて花をもてあそんでいるに等しいことなのです。ですから、私は学生諸君に、とにかく聖書に、如上の如き心構えで親んで見給え、と勧めます。そして、どんな学問を対象としようと、その認識と研究に対して日光を投じて根源知を与えてくれるものを聖書において感知するでしょう。創造的な知力がでてくるでしょう。

何となれば西洋において偉大な学問も芸術も、皆聖書によつて養われた魂から流れ出ているからです。バッハもベートーヴェンも、ダヴィンチも、レンブラントも、ニュートンもアインシュタインも、ダンテもゲーテも、ドストイエフスキもユーゴーも、カントもヘーゲルもすべて然りです。その他雲の如く、多くの魂は聖書という生命の源泉に養われたのでしたから、ヨーロッパ文化の真の消化は聖書を敬遠していたのでは不可能なのであります。「取りて読め!」という子供の歌声に苦悩から呼び醒まされて、聖書を繙き開眼したのはアウグスティヌスでした。

(東大消費生活協組だより所載)

七 私 の 書 齋

(一九六七年晩秋)

今春(一九六七年)のペンテコステ(聖霊降臨節)を期して、武蔵野福音集会のキリスト道場ともいふべき寺小屋風の、日本的な会場が出来た。それと同時に一心同体的に階上に私の書齋と居間がつくられた。そのいづれもが同信の旧友工務店主望月健一兄の主にある友情によって建築された。私にとってパトモスのなこの書齋、ワルトブルクのなこの城で、これからの生活をこつこつと執筆にたづさわって厚き友情に応えたく思う。

天井は船底であるから、大空を大海とした相対性原理の書齋と言っても可いだろう。地球と共にこの小舟は宇宙を航行する。そういう詩的感興も秋の蒼空を窓外に見ると湧いてくる。粗目あらめの昔風の障子に秋の陽ざしがやわらかい。風雨に備えてガラス扉がこれをカヴァーする。寒さは雨戸がふせいでくれる。夏の夜の虫は網戸がひきうける、といった具合に出来ている。書齋につらなっている書庫も彼の立案による。



『曠野の愛』誌第33号「無的実存」発送のため上書きをしている著者、宛名は偶然にも：星野慎一様（ドイツ文学会の重鎮にして詩人）

二階が書齋であるために、梁には鉄骨がつかってある。書架を支えている柱は二本抱きあわせになっている。百科辞典の類は階下の応接室などに置いてあるが、大体必要と思われる書籍大小とりまぜて五千余冊はこの書齋と書庫におかれている。宗教関係の本を筆頭に文学、哲学、歴史、その他といった順である。文学は詩的なものが多い。

畳敷きの室で、まんなかに腰かけ式の電気炬燵がしつらえられてある。参考書などは畳の上にところせきほどに散らばってしまう。それがまた便利なのである。しかし、さてどこにいったしまったかと、さがしまわったりすることもしばしばである。

サイド・デスクの上には、駒場の東大をやめたとき教授会から贈られた透明な硬質ガラスの

花瓶が置いてある。藤井先生を想い出すコスモスが今日は生けてある。十月の花としてコスモスは何ともいえない天的な風情である。集会の女性会員が交替にもって来て日曜の講壇を飾ってくれる花である。そのわきには幌馬車を模した小物置きがあつて、コーベンハーゲンの小さな木細工のミミヅクが、伊豆の伊東の土産なる竹細工の亀の子と一緒にのつかつてゐる。その他ローマで購めた磁石入りのキー・ホルダー、アテネで買ったホメロスの小さな大理石像などが載つてゐる。

書庫との境目の鴨居には世界地図とヨーロッパ・小アジア地図がかかつてゐる。その上方の壁には、私のもつてゐる最古の額がかかつてゐる。中学校時代のことであつたが、長兄政美が誰からか贈られた“Return of the Mayflower” (Boughton 1834 作) という題名の名画の写真版 (Cosmos Pictures Co. New York) である。兄はこの絵を特愛してゐた。小石川同心町の二階の書齋に兄と机を並べていたが、その頃から壁にかけてあつた品で、私にとってこれほど昔なつかしい画はほかにない。それでこの書齋の壁の中央に掲げざるを得ないのである。前景に清教徒の若い夫婦が海岸に立つて、既に洋上はるか遠方へ去った「メイ・フラワー」号を感慨深く見送つてゐる情景である。婦人は白い長いエーブロンをまとい、右腕を夫に寄せ、左手はおそらく涙を拭つたであろうハンケチを胸のあたりにあててゐる。この二人の背景にはなお幾人かの二つの群が同じく遠方の帰帆を見送つてゐる。私の兄も亦、このような人生の伴侶と同信の友らを与えられて福音のために尽したい夢を抱いていたのであろう。その悲願はついに成らなかつた。

"God wills it: here our rest shall be,

Our years of wandering o'er,

For us the Mayflower of the sea,

Shall spread her sails no more."

「聖言は曰く、われらの青山此処に在れ、

われらが旅路の幾年も！

われらがために海原の「五月の花」は

再びその帆をうち張るなかれと。」

これはホイットチャーの「ザ・メイフラワーズ」という詩の一節である。（著作集第八卷「詩歌集」二四二頁及び本巻の口絵参照）

黄海を渡って北京へ赴任した私の兄は、銀の十字架を携えていた。彼は任期が終ったら、支那（中国）で伝道する志を抱いていた。ハドソン・テラーが念頭にあったであろう。ゴルドン將軍も彼は尊敬していた。彼も亦、メイフラワー号の清教徒の如く、日本へ帰らない覚悟をしていたらしい。噫何たることか、彼は一年も経たない秋九月、二十七才を一期として天界に帰ってしまった。日本へは遺骨が黄海を渡ることになったとは。遺恨四十六年、この弔合戦が私の生涯である。

„Das Echte bleibt der Nachwelt unverloren.“

「本ものは後世に遺つて不滅である」

とゲーテが言ったが、何かそんなものをいつか兄の霊前に捧げねばならない。それは私の全生命的、全生涯的なものでなければならぬ。この書齋はそのため、天国の彼岸を目指してのメイ・フラワ―的船室である。これと一体の階下のキリスト道の道場はそういう体あたりの戦場であり、曠野のオアシスの祈り場である。

別な壁面には「キリストとマグダレーナ」というロダンの彫刻の写真がかかっている。十字架のキリストにマグダラのマリヤが裸体でしがみついている大胆な作品である。あのアラバストロンをぶち割ってナルドの香油をキリストにそいだ女がこのマグダレーナであったような気がする。これはマグダレーナの全身熱涙の如き愛を表現している。香油を注がれたとき、キリストはこの女のしたこと、は福音と共に全世界に伝へられる、と叫んだ。彼女は十字架のキリストには香油でなく全身の熱涙を濺いだのである。（著作集第二巻『芸術のたましい』の口絵、及び第六巻『随想集』の口絵参照）。

この二つの写真画は、私に兄政美の十字架の生涯を偲ばせ、且つ私に棄身の闘志を喚起するものである。

（附記）爾来約二十年経った今は、第二、第三の書庫が作られてしまった。或は家中本だらけといったら好いだろう。これら万巻の書はこれから本格的に役立つ期を迎へる。

八 祈りとは何か

(一九六八年五月十八日・(土)
小諸の「キリストの石垣会」に於ける
春季福音特別集會にて。

小諸にお伺いしてから、数えてみたら、二〇年というわけで、自分でも、驚いています。一九四八年の秋から六八年の今日までというわけです。何といっても、川口さんが寝ておられますことは、痛ましいことです。

しかし、人間の言葉というものは、いよいよ深いことになりますと、表現できなくなり、絶言絶慮的な境地になるわけです。川口さんも今、そうです。しかし、奥の世界の根源意識の世界において、響くものがあります。きょうは、そのことをしみじみと直感いたしました。人間の全体が表わすところの何ものかが最高の言葉なのです。プロテストタントが、神の言葉といって重視しますが、聖書の意味や解釈を云々している間は、たいしたことではない。霊言の世界というものを、もう一度、クリスチャンが捕まなければ、新しい宗教改革にはなりません。今は、一般に預言者たちが、使徒たちがクリストが、語っている言葉の世界には、入っていない。聖書の言葉たる言葉を本当に捕んでいれば、



自宅の集会所で祈っている著者：主題は：出エジプト、出我……

今、このようなキリスト教界ではないはずです。

ペテロさんという無学のただ人が、あの書簡を書いた。学者には書けない。神の言葉が、もう一度、捕みなおさなければいけない。強い者はずかしめるために、神は、弱き者を選んだと、パウロさんがコリント前書一章に書いている。何者かであるものを、はずかしめるために、無者を選んだ。素質など、問題ではない。絶対的なものは、素質でもなんでもない。まさに、「新生」であります。新たに生まれることによって絶対的素質が生まれてくるのです。神様が与えようとするのは、無前提、無条件の世界です。ところが、この「無きもの」「無者」になるのがむずかしいようですね。こういう、逆説的なものが、本当の人間形成になるのです。それでは、形成する力は何か？ 核は何か？ ということになると、人間はこれをつく

り出せるものではありません。形成のものと、根源的なものであって、人間のつくり出せるいかなるものでもない。医者が病人を健康にするために薬を作ります。それは、横から補助するのみです。根源となるところの原動力は、本当の権威は、上からくるのです。偉大な芸術家も、科学者も、ベートーベンにしろ、ニュートンにしろ、エジソンにせよ、すべて、神の啓示によって、靈感によって、創作し、発見し、発明しました。

さて、今晚は、ルカ伝一八章をやります。(ルカ一八・一一八)

イエスという人は、実に自由な人で、最大の自由人であります。ルカ一八・一一八：第一章を読むと、こういう乱暴なような譬話をしながら、ある一点で、ぐっとつかんでいるのです。どうしても祈らざるを得ない。祈らないじゃいられない人となれということです。イエスはこの世の中に愛想をかしている。それゆえの底ぬけの愛なのです。内村先生もそうでした。私も何十年と教えて来て、大方愛想を尽かしている。中には、暁の星の如き例外は、いますかね。

末の世に、「地上に信仰を見んや」(八節)とは、このこと。キリストの靈波探知器にビリビリ感応するような靈性の人になって下さい。それには、常に祈ることです。「信仰を見んや」とは、「祈りを見んや」ということなのです。祈りのない信仰などというのは、ないからです。信仰というよりも、「祈り」でいいのです。私たちは祈りの人です。「私の信仰」などというものはありません。あるのは、ただ祈りだけです。イエスは祈りの人でした。信念的な信仰は、ダメです。魂が凝ってしま

う。

祈りの世界は、魂が楽で軽くなるのです。祈りによらない言葉も行為も何一つ、イエスにはないです。キリストの「言」も「行」も「思」も、みんな祈りの質をもっている。小諸は、いいところだね。こうやって集会をしていると、山の懐に入っているような気持となる。祈りとは、キリストの懐に入っていることです。我々は、体、浅間火山の懐に入っているのです。祈りの場です。祈りの世界には、限りなく深く入って下さい。東京のようなガソリンくさいところは、ダメです。やはり、山がいいです。どうぞ今晩は、深く祈りの世界に入っていきたいと思うのです。

うまずたゆまず祈るということは、たましいが呼吸していることです。呼吸は私たちが、寝ていても、忘れない。祈りもそうです。寝ていても、祈りの世界で深くなるのです。呼吸しなければ、肉体は死にます。魂がやはり、呼吸しなくちゃダメで、呼吸している魂とは、祈りをしていることです。呼吸している魂のクリスチャン、もうそれでなければ、私の魂は、死んでしまいます。そういう本もののクリスチャンになって下さい。それで私もベテロさん、パウロさんのような使徒たちがみんな友だちです。イエスでさえ、友と言って下さった。祈りが本ものとなればそのように親しくなれるのです。

体当たりをもっていけ！ と。祈りは、体当たりです。神は、体当たりしてくるものを、その願いを、どうして受けないでいようか。

自分の魂は、祈らざるを得ない。これが、信仰です。祈即信です。祈の姿には、そのようなすごい体当たりの迫り、つつこんでやまないものすごい積極的なものなのです。極まるころは「主よ！」の一言、全身全霊をこめて沈黙の叫びをあげるのみ！ 即時主の力強きみ手の中にありであります。

今度はマタイ伝（六章四―五）

その靈的現実は何であるか。電車の中で眼を閉じれば、戸を閉じて祈りの世界に入るほかはない。若い人は要求ばかりを出す、もう一つ奥の世界の魂の要求をしなくては。車中が混んでいたときは、眼を閉じて祈りの場が与えられたことを感謝するのです。そこがキリストの懐なのです。キリストは、神の懷に、我々はキリストの懷に入るためにあるのです。私たちの心の状態がいかなるものであろうと一向さしつかえない。キリストは彼自身が碎けの門だから私たちが碎けずに入っても碎かれてしまふ。イエス・キリストは無門の門なのです。キリストという十字架門を、あるがままに入っていけば、そこはすなわち祈りの場です。中だからすでにそこでお話（祈り）しているうちに溶けてしまつて最後には、凱歌となつてしまふ。その中に入ると、そこが靈的空間なのです！

マタイ伝（六章九節）「主の祈り」（Vaterunser）は、たとえばこう祈りなさいというだけのことです。「天にいますわれらの父よ御名があらめられますように！」この御名、ということ。親鸞の「教行信証」という語はどういうことでしょう。

「教」は「法」なのです。法（のり）です。神さまの「のり」です。法といいますが、何か、でき上がったような信条ではないのです。ヨハネが言ったあの「真理」は、この「法」と通じているのです。一切を包摂しているような「法」です。木の葉が一つ落ちるのも、物理的な世界の真理、これは靈法なのです。靈法の主体は神であります。

神の意志するところ、そこに「法」があります。親鸞の「教」は、そういう気持ちの「教」なのです。

「行」は、おこなひではなくて、南無阿弥陀仏という唱名、そのものです。無限無量の仏に、南無といて、自分を託することです。「南無阿弥陀仏と御名をあげめさせたまえ」が照合するのです。如来の本願というものの、その本願をうけるときに、南無阿弥陀仏といて、向こうの本願に自分を投げかけることが祈りであり行なのです。祈りこそ、根源の行「大行」なのです。日本人は、すばらしい先輩を持っている。東洋的な思いに、光がくると、ヨハネの深さを掘り下げてつかむことのできるものをもっている。

「信」そのような祈りという大行の行を本当に身に体することから本願を信受する次第を本当に「信」というのです。大なる憐れみの世界が「信」であって、どうしてそのような大行ができるかと、機縁を捕むことです。機縁は随時随所においてつかまえることができる。どうしてつかまえることができるかという、いたるところに十字架が立っているからです。ここに福音の絶対恩寵の世界があ

るのです。パウロの一切の秘訣は、十字架されているから、いつもその大行の世界に入れる。祈れないなどということは無いのです。あるがままでけっこうです。十字架がみんな負ってます。碎けの場に入ったから、いよいよ碎かれて、本当の生命がそこで形成されていく。これが、本当の人間形成です。常に新しく回向することができなのです。

「証」行信の世界を体受しているものは、証者なのです。キリストのみたまが証されているのが証なのです。クリスト者が証となっていないなら、本当のクリスチャンではない。みたまを宿しているのは、証であり、証者となるのです。

マルコ伝十一章 一二章

葉ばかりの無花果などは観念信仰でダメです。果が実る信仰、これはみたまが来ていなければ、果が実らない。キリストのことば、聖書は響きをうけなくちゃダメです。「神を信ぜよ」とキリストが言った。その「信ぜよ」は、どのような内実を持っているのですか。「神を信ぜよ」とは、神の本質を、そのまま、うけとれということ。神があるかないかなどは問題外。本当に在るということは、対象的に認識できない。神さまに捕まれていなければ、神が在るなどとはいえない。言えるとしたらそれは観念の認識になってしまう。

空気は私を生かしている。空気は見えない。見ようとしてもあちらの壁が見えるだけ。しかし肺は空気を吸い入れないではいられない。我々が生かされている事実が何よりの証拠、これで空気は在る。

それとかかわりが切れたら、我々は滅びる。それでこそ空気は本当に在るのです。

全世界の人々が、どのようなことを言っても、ビクともしない。それが本当の信の世界です。キリストは、祈りの内実がちがうから、祈ったことは得たり、ということになるのです。根源現実において祈ったことは、それはもうなっている。

私たちの生命が地上において病気になるっても、私の中で、霊体は、生長していく。死んでも死なない世界、根源現実の生命の世界です。祈りがもしかえられなければ、もう一つ奥の世界で、かなえられるということを経ることが信なのです。悲願を超越した本願となる。どうひっくりかえろうが、私の祈りは祈り以上にきかれています。「聞かれたりとせよ。」とは事実なのです。イエスは、汝の本願を「成らせたまえ」という祈りをします。川口さんは、キリストの本願でもって守られていくから大丈夫です、願いが本当の力をもっている。どん底で、ささえられている祈りであるから、キリストがいかに祈りに力をこめておっしゃるか、そのキリストの心をうけとらなくちゃいかん。キリストは一切の病気を癒し罪をゆるす。これが「救い」ということです。救いの終末的現実復活体です。十字架上の盗賊がまっさきに、パラダイスへ行った。これまさに、福音そのものであります。彼はパラダイスで新人に変貌したでしょう。

九 キリストの福音誌（季刊）『エン・クリスト』創刊の辞

（一九八〇年夏）

この度、『エン・クリスト』という日本キリスト召団の機関誌（季刊）を発刊することになったのですが、その前史とも言うべき私の個人誌の略歴を簡単におはなしておきたいと思います。

今から約三十年前、一九五一年一月に『曠野の愛』誌（不定期刊行）を創刊しましたが、これは一九六四年五月、第三十七号、還暦記念特輯号『宗教と文化』を以て終刊としました。

その後、新書版を思い立ち、『曠愛新書』を一九六四年八月に第一号『福音の心臓』を出版しました。これは一九六七年四月、第六号『キリスト道』の発行をもってひとまず終りとしました。

その後、一九六九年十月に『ハレルヤ』という伝道的な武蔵野キリスト召団誌を発行しました。これもやはり不定期で、一九七七年九月、第四十四号の発行を以て終りとしました。

さてその間、日本キリスト召団の片井・野中・大槻・高森・奥田の諸君の発起により「小池辰雄著作刊行会」なるものが組織され、『小池辰雄著作集』第一巻『無者キリスト』の発行を一九七五年十

日本キリスト召団誌

エン・クリスト

EN XPISTO

主幹 小池辰雄

1980年 夏季号

—— 創刊号 ——

創刊の辞

小池辰雄

エン・クリスト

天韻

足を洗う

天鐘

生命の泉

奥田昌道

聖書はドラマである

天震

召団だより

証言

著作刊行会だより

月に見る運びとなりました。これは原則的には年刊であります、著者の事情により、今までに、第一、第二、第四、第五の四巻が発行され、本年末に第三巻『無の神学』刊行の予定になっています。今やしかし、召団の兄弟団が、東京、京都、大阪、埼玉、裾野、奈良、と盛になって来ましたので、その日本キリスト召団の機関誌がおのずから形成される気運となりましたのは、まことに慶ばしきこととです。

一九八〇年の春、京都・大阪召団主催の特別集会の折に、全召団の代表者たちの話し合いで『エン・クリスト』（季刊）誌の発刊が決まりました。本誌は伝道と愛の交りをする小誌ですから、全召団の兄弟姉妹が、心からの出資・愛労・寄稿の協力をして下さいますように！ 伝道が、第一目的ですから、聖霊の愛を以て頒ち与えて下さい、なやみの人に、道を求める人に、近親に、知友に、あらゆる隣人に！ 栄光在主！

（一九八〇年夏季号）

（附記）現在（一九八六年）は更に、栃木、岡山、札幌、鹿児島、信州、四国の兄弟団が増設されていて全十二召団となっている。

各召団の代表者及集案案内は左の通り

★東京 ①千一八〇武蔵野市吉祥寺東町四一五一一九 ☎〇四二二二一一三四三三

②小池辰雄③日曜一〇時三〇―一二時三〇昼食後諸催し、祈禱会。

★京都 ①千六〇二京都市上京区東三本大通り九太町上ル南町五二五 ☎〇七五二二二一六八八七

②奥田昌道③日曜一〇時一五―一二時四五 木曜（祈禱会）一九時一五―二二時〇〇

★大阪 ①千五四四大阪市生野区鶴橋二一四一〇 ㊦〇六一七七一七二七四〇

★梅村康太郎③日曜一〇時〇〇—一二時〇〇

★埼玉 ①千三三三川口市芝二一四一三一 ㊦〇四八二一六五一一一〇（又は〇四八四一四五—八九

四七

★裾野 ②針谷康正③日曜一一時〇〇—一三時〇〇 水曜（祈禱会）一九時三〇—一二時〇〇

①千四一〇—一裾野市深良二三八六 ㊦〇五五九九—二〇一六七

★奈良 ②松井康男③日曜一〇時一五—一二時〇〇 ③三木曜ルデア会一〇時一五—一二時〇〇

①千六三一奈良市西登美ヶ丘七一六一五 ㊦〇七四二—四三—六八九七

★木 ②弘野慶次郎③日曜一〇時三〇—一二時〇〇

①千三二—三二宇都宮市道場宿町五五—一七 ㊦〇二八六一六七—五三九八・三六一九六五〇

★岡山 ②小田林 毅③日曜一〇時〇〇—一二時〇〇

①千七〇三岡山市浜一—二二九マイエ芸房 ㊦〇八六二—七三—四五四五

★札幌 ②赤木睦治③日曜一〇時〇〇—一時三〇

①千〇〇五札幌市南区川沿十条三一—〇一五 ㊦〇一一一五七一—二三四八

★鹿児島 ②水谷恵信③日曜一四時〇〇—一六時三〇

①千八九九—三鹿児島県出水郡長島町平尾二五一— ㊦〇九九六八—八—二二〇八

★信州 ②永田健太郎③日曜一〇時三〇—一二時〇〇

①千三八四小諸市荒町一—五—七 ㊦〇二六七—二二—一〇一五

★四国 ②小山文夫③日曜一〇時〇〇—一二時〇〇

①千七六一—〇七香川県木田郡三木町平木六四五—七 ㊦〇八七八—九八—五九三二

②森下一男③日曜日一〇時三〇—一二時三〇

十 ルターの足跡を訪ねて

(キリスト教新聞「橄欖」連載)

伝道の第一声 (一九八三年七月二日)

「汝ら回帰せよ！ 天国は近づきたり」(マタイ四・一七、マルコ一・一五参照、私訳)

イエスの伝道の、この第一声と共に浮かんできるのは、ルターの宗教改革の狼火となった、あの九十五条の提題の第一条である。すなわち、ルターはこう唱えた。「我らの主にして師なるイエス・キリストが、『汝ら悔改めよ…』と言ひ給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを欲し給うた」。

私は、この五月、ルター生誕五百年記念の「ルターの足跡を訪ねて」という旅行団に参じた。東ベルリンからバスで南下、ウィッテンベルクに至り着き、名だたる城教会を訪ねた際、ここに九十五条の提題が掲げられたという歴史的な門扉を見た。この上掲の第一条はイエスの第一声と共に歴史の終

末に至るまで、人類の個々人と、特に権力者への警鐘である。

「汝ら悔改めよ」は、ギリシャ語原典からの訳ではあるが、どうも消極的で感心できない。むしろ、イエスの母語ヘブライ原語「シュエブー」の原義「汝ら回帰せよ」の方が真義と思う。ルターさんもドイツ語で「ケーレット・ウム」と訳すべきであった。それは単なる回心ではなく、全存在を以てする天国体たるキリストへの回帰であるからである。キリストに全存在的に回帰してやまない全生涯であれ、が本当の信仰であり、信行であり、進行である。

ところが、世界は神から離反してやまない現状ではないか。それはサタンに回帰してやまない怪奇な現実ではないか。西ドイツ、東ドイツといっても大自然と幼児の世界には西も東もない天国的な五月であった。萌ゆる緑と百花繚乱！ 大自然は太陽の光に回帰して復活している。東西イデオロギー確執の象徴はいわゆる鉄のカーテン。イデオロギーを超えて神の子のふところに回帰、帰入せざる限り、二十世紀のラスト・コースに何が起こるか。

聖霊の戦（一九八三年七月九日）

「信仰の善き戦を戦へ」（テモテ前書六・一二）

アイゼナハの南西に当たる丘陵の上、風雨の中に夢のように聳え立っているワルトブルク城！ 旧制高校時代、村田勤氏の『マルチン・ルーテル』を読んで憧憬の城として何十年と待っていた城に登

ってゆくのだ、今日こそは！

それは一九八三年五月二十二日であった。

暴風雨のような荒れ模様。ルターがヴォルムス国会のあとで、帰途一群の騎士に奇襲されてワルトブルク城に閉じ込められたのも同じく五月（一五二二年）であった。この城が詩篇第四六篇の如く「汝はわが避け所」「神はわれらの堅き城」となったのであった。その城への急勾配の坂道を登った。今でも鬱蒼たる森林の丘陵である。昔ながらの跳橋を渡って城域に入る。城の一角がホテルになっていて、日本人でここに泊るのは我らが初めてであると聞いて驚いた。

暮色蒼然、窓外はあらし。窓べに寄って冥想。夜更けて深く祈り入る。その夜の夢の中でルターの幻影を見る。痩せ顔の戦闘的なルターである。

“Kämpfe den guten Kampf des Geistes!” 私の魂の底にそうひびいてきた。ルター訳のパウロの言は“des Glaubens!”である。だがこの時のひびきはちがう。「み霊の善き戦を戦へ！」であった。夢か現（うつ）か。ルターか小池か。夢現の現実であった。私は深く祈った夜の夢の中でしばしばそういう啓示にあづかる。

聖霊に在ってのみ戦える戦である。私は無者。キリストのみ霊がわが力である。

ワルトブルク！これは新しき靈感となった。

ルターの聖書翻訳（一九八三年七月六日）

「御霊はすべての事を究め、神の深き所まで究むればなり」（コリント前書二・一〇後半）

ワルトブルク城内を見学して最も印象深かったのは何といっても、彼が新約聖書を翻訳した素朴な室であつた。これが机かと思われるような机と、これが椅子かと疑われる椅子だけ。その机の上にはガラス箱入りの一巻の聖書。しかし私としては、彼が自筆で書いた原稿用紙だけが置いてあつたら、と思つた。

ともあれ、こんな室で一九二一年の降誕節近き頃からわずか三ヶ月で新約を訳した彼のエネルギーに驚嘆する。それは単なるエネルギーではない。永年、特にエルフルト大学および修道院で熟読翫味し、少なからぬ部分を暗誦するまでに親しんだ聖書。台本はエラスムス編纂の原典。語学力修得の上ではメラニヒトンの助力にも負つたであろうが、何よりも祈りと聖霊の力によって、ギリシャ語の奥の神の根源語のひびきを靈聴しつつ、彼はまるで創作するかの如き靈感によつて原典の真髄を握みつつ訳したにちがいない。しかもそれは言葉の深い熱い意味でのドイツの母語に！ 独乙人のハートの鼓動に通う母の言葉に！

詩魂ゆたかな彼の言葉は、聖書全巻が訳されてみると、おのづからドイツ語の基本を創造したのであつた。

聖霊の力と知恵によっての作業中にサタンの妨げに遭ったルターが、インク壺を投げつけたという伝説は私には事実と思われてならない。

私はあの室に腰をおろして、独りで祈っていたかった。立ち去りがたくあつた。

アナンケー（必然）（一九八三年七月二十三日）

「われ福音するとも、われに誇りなし。やむを得ざるなり。禍なるかな、もしわれ福音せざれば」
（コリント前書九・一六、私訳）。

一五二二年四月十八日の夕、ヴォルムス国会の議場は篝火（かがりび）に照らされていた。決定的審問に臨んだルターは、おのが著作を三種類に分類した。第一は信仰問題に関わるもの、第二は教皇庁の現実に関わるもの、第三は教皇党との論戦のもの。これを取り消すか否かに対して、ルターは応えた、「……私は聖書の証言によってか、あるいは明瞭な道理によって説破されない限り取り消しません。何となれば教皇も宗教会議も……誤謬を犯し、自家撞着の論をなしたこと瞭かでありますから。私は……聖書に打ち勝たれた者であり、私の良心は神の言に捕えられております。それ故私は何ごともあり取り消し得ません。……私はここに立っている。私は、こう【告白】するほかはない。神よ、助け給え、アーメン」。

ルターがかく叫んで真理の決定的な戦をなしたヴォルムスを訪ねたが、議事堂は今も跡かたもない。

ただ教会堂に連なる庭の一角に石板があつて、「ルターが皇帝と国会の前に立っていたのは此処である。一五二一年」と記してあるにすぎなかった。

パウロの「やむを得ざるなり」、「アナンケー」、天的必然！ ルターの「こうするほかはない」
 „Ich kann nicht anders.“これが本当の自由で、自己主張ではなく、真理の聖霊による告白であり、行為であり、実存である。

自主と奴隸（僕）（一九八三年七月三〇日）

「われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隸となれり」（コリント前書九・一九）

「一五二〇年十二月十日のマルティン・ルター博士の行為を記念して」というあざやかな記念碑をウィッテンベルクの一角で見た。教皇の破門状を焼き棄てた行為である。その直前に出版したのが「キリスト者の自由に就て」である。この書の冒頭の有名な二命題は次の通りである。

「基督者は万物の上に自主の者であつて、何人にも従属しない。基督者は万物に仕える僕であつて、何人にも従属する」。これはルター自身が註しているように上掲の聖句から得た二命題である。

キリストは「神の僕」（イザヤ書第五十三章）で、聖意に托身して、聖意を体現した唯一人の義人であつた。キリスト者が自主であるというのは、神・キリストに対しては僕であつて、他の何者にも

従属しないということである。即ちこれが絶対的福音的自由である。自己に拘束されないこの自由は敢て自ら人の奴隷となる、ということはキリストの愛の力で人助けをするということである。十字架で贖われて僕となったパウロには聖霊の力が臨んだ。これは愛の力としてはたらく。

人文主義的なエラスムスの「自由意志論」(一五二四年)は相対的現実の真理ではあるが、福音の根源現実の自由はキリストの十字架でおのれの意志に死んだ奴隷意志にある。次・元・が・ち・が・う・のである。それでルターは「奴隷意志論」(一五二五年)を以て否!と言った。

(附記) 以上「橄欖」の五項に関しては著作集第七巻『聖書の人ルター』及び「エン・クリスト」第十六号所載の「ルター生誕五百年記念旅行印象記」を参照されたし。

十一 「聖霊の愛」の証者たち

(一九八三年十一月三〇日)

おかまと山

本日はお招き頂きましてありがとうございます。

一九四八年に手島さんが独りでこのおかまと山の中へ「エホバはわが避け所なり」と涙ながらに入って行かれて、深くキリストの中に入って行かれた。その祈りが、先生の深い強い土台になったんだと思います。それからここにおられる吉村君をはじめ、二、三十名の青年が先生の熱い厳しい御指導に与った。そして一九五〇年の十一月三日から五日にかけての、大阿蘇のふところ滝見荘での特別集会を迎えました。これが幕屋のペンテコステとなったわけでした。その時に、私も祈りの中で天から聖霊のバプテスマを体受し、ハッキリ次元の違った所に入りました。

手島さんも私も、文字通りの無教会出身！ 即ち、身体が、全存在が無教会から出たのです。アブラハムもウルから身体が出ました。モーセも出エジプト。とにかく全存在で次元の違った世界に入

って行くこと、これが本当の「回心」。否、ただ心が回るだけではありません。本当は回心の心は「身」にした方が良いんです。「回身」です。まあ、そんな書き方はまだしませんけど。あるいは「出我」と言っても適切です。私はこの頃、「悔い改め」と言わずに、身を翻して帰るといふ意の「回帰」と言っています。

聖霊の良き戦を

この間、ルターの生誕五百年に当る今年を憶えて「ルターの足跡を訪ねて」という旅行団体に入つて、東ドイツに初めて行きました。鉄のカーテンとエルベ川が挟んだ三角形の所に、ルターもバッハもゲーテもシラーもリストも皆いるわけです。エルベ川が境なら、本当は鉄のカーテンはいらないんですが。そして彼ら自由の魂は、皆西ドイツに安住できるわけですが。実は彼らの世界は空界で、西も東もありません。天界で笑っているでしょう。

あのワルトブルグ城の一角にホテルがあるんです。そこに二泊しました。これは私にとって、非常に印象深いものとなりました。即ち、ルターが夢の中に現れたんです。そして、「聖霊の良き戦いを戦え」とドイツ語で響いて来ました。パウロが愛弟子のテモテに書き送った手紙には、「信仰の良き戦いを戦え」とパウロは書きましたが、ワルトブルグでは、「聖霊の良き戦いを戦え」と私には響いたんです。話はちょっと外れましたが。

そんなわけで、聖霊の世界の先駆的な確然たる証者は、何と言っても手島さんです。

彼が異言の体験をされました。私はその時は、まだ異言を知りませんでした。けれども、「あなたの体験は本当だと思う」という主旨の御返事をしましたら、「あなただけが私の異言論を肯定して下さった。この御手紙は家宝に致します」という主旨の御返事でした。ところが一九五〇年十一月の阿蘇の集会で、私は自然に異言が出ました。すると手島さんが横で「先生、それは本当の異言ですよ」ということでした。それからずっと、使徒行伝的な質の不思議なことが私にもいろいろ起きております。今でも勿論、起きております。

その後、手島先生の棄身の伝道で、驚くべき展開が日本全土になされ、原始福音の大集団となりました。これは世界に類がありませんね。今、武藤先生が、手島さんは宗教的天才だと言われましたが、正に天才です。しかしながら、単なる天才じゃないですね。彼は自分を吐き棄てるように、時折告白しておられました。キリストの前には本当に平伏した魂でした。

無の神学

さて、私の信仰告白をちょっとさして頂きます。大阿蘇のみ霊のバプテスマの後で、今度は聖言を通して内的にハッキリした体験をしましたから、それを告白させて下さい。私が「無」というと、とかく誤解されるんです。手島さんなら、私の「無の神学」をハッキリ「そうだ」と言って下さると思っておりますが、先生は神学を好きじゃなかったけれども、私のはいわゆる神学でない神学です。有機的、劇的な生きた神学なのです。「無」の由来は他でもありません、イエス・キリストは、特にヨハネ

福音書を見ると、「私は何も出来ない」「神様がさせているのだ」と仰言ったでしょう。これはマルコ伝ですが、青年が「良き先生」と言ったら、「なぜ私のことを『良い』と言うのか。神の他に良いものがあるか」と仰言っている。またヨハネ伝では「私は何も教えない。神様が言えということを行っているのだ」とあります。

即ち、キリストは自分を何者ともしなかったということを、私は「無」と言っているんです。「無私」、私心が全くない方です。だからイエス・キリストのことを「無者」キリストなどと言いだした訳ですね。しかし私に、キリストの真似は到底できません。罪びとですから。

さてところで「幸なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」。イエス様は説教はしていても、あれは本質的には大告白なのです。だから私は「山上の大告白」と申しております。キリストは霊が貧しい方だった。自分を何者ともされなかったことが、霊が貧しいということです。神を一切とされた。だからこそ、「我を見し者は父を見しなり」と仰言った。霊が貧しく、自分を何者ともしないと、天国、即ちキリストにとっては神様が入って来た。だから「我と父は一つなり」とハッキリ言われた。これがキリストの現実ですね。

それで私には「幸なるかな、汝、我が十字架によって完全に贖われた者、汝の過去も現在も未来も全部贖われている。だから汝は何者でもない、無者とされた。人間小池は相変わらず、でも心配無用。この絶対恩寵の根源現実において、汝は何者でもない。だから天国、即ち聖霊の我、汝の中にあり」

と響いてきたのです。

私はこの山上の大告白の一言でぶっ倒れたのです。それから後、キリストの御言葉がずっと読めるようになりました。キリスト教界一般に、十字架の贖いと聖霊がバラバラになっているから困る。これは十字架の贖いの土台にこそ、聖霊が臨んだことは啓示史の事実ですからね。それでなければ、キリストは聖霊を与えなかったんですからね。「我に受くべきバプテスマあり、思い迫ること如何ばかりぞや」とは十字架のことでした。「我が十字架で贖罪を果たしたら、お前たちにこの聖霊を降すから祈って待ってろ」というのが啓示の事実でした。

私の会堂には「廓然無聖、枯木龍吟」という二句が掲げてありますが、この「枯木龍吟」は手島先生もお好きな句でした。

「髑髏識尽きて 喜び何ぞ立せん。枯木龍吟 銷して未だ乾かず」（碧巖録）。「死んで骸骨のように無意識になって、人間的な知識や分別が尽きてのみ、入信の大歓喜に浸り、脱魂してのみエクスタシー（法悦）の境涯に入れるのです。枯木のチェロ楽器の弦奏する神秘的な音律の幻想曲、この枯木龍吟ではなくして何であろう。見よ、ゴルゴダの髑髏の丘に立つキリストの十字架を！ 死んでも今なお全宇宙に木霊する贖罪の絶叫を」

これは手島先生の言葉です。こんな心境は一般のキリスト者には分からんから、手島さんや私は贖きの石なんです。そういうことで、私は十字架の贖罪によって無者とされ、聖霊のバプテスマによっ

て無限無量の現実に入れられ、有難くてしょうがないです。非常に楽なんです。そして力が溢れて仕方がないです。

第二の宗教改革を起こせ

あなた方は大きな使命を担ってらっしゃるですね。先程からの諸君の烈々たる告白の通り、先生を天界に先頭として天地相応じて進んでおられる訳ですね。原始福音の聖霊集団は、どんなことがあっても展開してやまないでしょう。キリストに在る限り大丈夫！ 何ものもこれを覆すわけにはいけませんよ、これ聖霊の群だから。『生命の光』は聖霊の雑誌だからいつまでも続く。これは今の全世界のキリスト教界に独特の存在です。

二十世紀末の現在は世界的に危機ですから、本来に新しい第二の宗教改革が、今こそ使徒的な次元の信仰者たちによって、全世界の至る所で起きなければなりません。あなた方の大集団のそれぞれの小さなグループの一人一人にその使命の一端がありますから、自重してやって下さい。特に日本の教育界が精神的な危機ですから、原始福音の群れの中に私塾的な教育形体が起きたら、好いなあと思っています。形体はともかく、家庭においても学校においても、そういう青少年の力が発揮せられんことを。

この間、先にも述べましたように、東ドイツから西ドイツを旅しましたが、ちょうど五月でしたが、大自然は本当に素晴らしかったです。大自然には西も東もありやしませんよ。幼な子たちを見ると、

そこにも西も東ありません。大自然や幼な子の世界には、国境も鉄のカーテンもありません。禍な
る哉、神を無視した文化文明は！

神の魂、キリストの魂になったあなた方が、国境を越えて世界に向かってやむにやまれず伝道の旅
をし、幕屋を張ってゆかれる！ 聖霊の愛の証者たちには、国境がない。あなた方の実践は何よりも
の証拠だと思ふんですね。素晴らしいことです。あなた方自身は、素晴らしいと仰言らないだろう。
けれども、キリストの御霊がいかに不可能を可能にしてゆくか、本当の現実を展開してゆくか。「天
国は汝らの中にあり」の証者ですよ。終末的希望を現実にしておられる。心からおめでとうございま
す。否、種子は初めに根が出るから、「お根でとうございます」と言いましよう。あなた方は本当の
根っこを持っていらっしゃる。根が四方に張る。これは強いです。

今日は私は嬉しくてしょうがないんだ。もう話すことはやめた。(笑)それで、歌を歌うんです、
私は。今日のために歌を作りましたから、それをこれから歌います。

「手島郁郎先生百周年記念会」に捧ぐ

おかまどの山へ

一九八三年十一月三十日作
歌詞三三〇番「天なるわが家を」

小池天鐘

- 一 おかまどの山へ 涙ながら
主の聖名呼びつつ 我は入りぬ
- 二 祈りに祈りて 主に抱かれ
み力来たれり 我は立ちぬ
- 三 世紀のなかばよ 滝見荘に
聖靈はあらしと 降り給う
- 四 この世の波風 吹かば吹けよ
友らは馳せ来る 主の幕屋に
- 五 使徒らの如くに み霊臨み
主の驚くべき み業成れり
- 六 み許に召されて 茲に十年！
天地相呼び 進みけりな
- 七 キリストの幕屋 四方に張りて
聖書の証しに 信実なれよ
- 八 友らよ勇みて 愛の幕屋
世界の涯まで 拡めゆけよ

九 主イエスよラボニよ 我らラオス

町中野山に 道^なを伝へん

一〇 我らは誰れしも 天賜^{たまもの}あり

福音のために 捧げまつらん

十一 我らはひたすら 主のみ力

聖霊^みの愛にて 生命^{いのち}与へん

十二 キリスト主イエスの 聖名にのみぞ

み栄光^{さかえ}あれかし ハレルヤ・アーメン

一番から八番は、手島さんの心境を汲んで歌ったんです。それから九番から十二番まではあなた方の心境です。

手島先生は霊統から言うと、パウロ、ルター、内村鑑三、手島郁郎というような霊統に感じます。けれども手島さんにはパウロ的なものとヨハネ的なものと両方あります。今、ロマ法王はヨハネ・パウロとか、素晴らしい法王様です。しかしまた手島さんこそヨハネ・パウロです。ハレルヤ！

十二 八十路（傘寿）の峠を迎へて

（一九八四年二月七日）

人生には幾つもの峠がある。小学、中学、高校、大学等、学校入学という関門的な峠。華々しい峠には結婚というのがある。

私は一九〇四年二月七日に呱呱の声をあげて現世に出て来たのだが、それはキリストの復活の日に因んだ日曜の真昼であつたとは有難いことであつた。甲辰の年であつたので辰雄と命名されたわけである。黄道十二座でいうと水瓶座に太陽が当たっていた時期である。血液はA B型で、ゲートのポラリテート（両極性）か、西田哲学の絶対矛盾の自己同一か、東西文化の、キリスト道仏道の、絶対次元を以てする融合か、そんなことを連想したり冥想したりしたくなる。

歴史的には、明治三十七年の二月であるから、正に日露戦争勃発その前夜の危機の子である。長兄政美が成績優秀（全美）で、父が巖谷小波著『少年日露戦史』（全二十巻）を買ってくれたことがあつた。その本を私も小学校五、六年の頃夢中で読んだり、挿画を模写したことをありありと憶えて



1957年 聖霊降臨節に於ける武蔵野幕屋集会

いる。

長兄が北京で客死し、母が帰路に船上で失明したため、家をたたんで叔父の世話になるとき、家財道具を売り払った際に、この名著も古本屋に売られてしまったことは千載の遺恨である。

入学という峠で一番嬉しかったのは高師附属中学入学の際、六倍の競争率の入試に合格したときであった。これに反して水高入学のときは自信があったのでさっぱり嬉しくなかった。憧憬の一高を受験しなかったことが残念千万であった。しかしこれは人間的な感慨であって、私が辿らされた路に大きく神の摂理があったことを感謝している。問題は要するに人生の劇的な経験を如何に受けとり、如何に自己形成の要素としてこれを消化してゆくかにある。

峠の大なるものは結婚である。一九三三年十二

月二十三日であつたが、これが奇しくも皇太子の御誕生と同日であつたので一橋の学士会館のあたりを提灯行列が通つて賑かな雰囲気であつたのを憶えている。旧臘でもう五十年も経つたので所謂金婚記念というわけであつた。ドイツでは六十年の金剛石婚の上に更に六十五年の鉄婚 (Eiserne Hochzeit) といふのを最高としている。

私にとって峠には経歴の諸段階の他にたましいの世界での峠がある。第一は水高時代の第一年の梅雨期に腸カタルに罹り、休学となり、その病後、内村鑑三先生の大手町に於ける日曜聖書講義に列席して入信した時である。たましいの誕生といふことができよう。それは一九二三年の春であつた。

魂の世界でのその後の旅路に於ては、内村鑑三先生の諸著書、佐藤繁彦先生の雑誌「ルター研究」、ヒルティの諸著書（原文）、藤井武先生の集会とその雑誌「旧約と新約」、塚本虎二先生の集会とその雑誌「聖書知識」、佐藤繁彦先生の「ルターの根本思想」という神学論文等が主な道しるべであつた。

文学作品を景觀に譬えらるゝとするならば、ゲーテの「ファウスト」（原文）、ミルトンの「楽園喪失」（原文）、ダンテの「神曲」（独訳、英訳、日訳数篇）藤井武の「羔の婚姻」はいづれも壮大、雄渾、壮美なるもの、私の魂を感動させて余りある景觀で、生涯をかけて愛読するであらう。しかし唯一の例外者がある。それはわが全存在を圧倒するものである。曰く、聖書！

ところでこの聖書に圧倒されるようになった峠があつた。それは大阿蘇の深山幽谷にある瀧見荘に

於ける集会であつた。一九五十年の晩秋の十一月三日から五日にかけての深い白熱的な聖書集会であつた。手島郁郎氏と私が交互に聖書を講じ、且つ祈禱会をした。そのときに私は私としての未曾有の体験をした。即ちいきなり天界から聖霊の降臨にあづかつた。異言が迸つた。全身がみ霊に震撼した。これが聖霊のバプテスマであつた。聖書のヴェールがとれた。聖書の言の次元がからだに感得されてきた。キリストが「わが言は霊なり生命なり」と言い給うてることがからだで受けとられ出した。意味ではない、現実である。解釈ではない、力の体受である。見られる文字ではない、聞えてくるひびきである。研究して解るの解らないのではない、身読して圧倒されること、降参することである。かくて私はハッキリと預言者や特に使徒たちの次元に入れられた。キリストのみ霊を受けたからである。これは私の人生的決定的な峠となつた。私に対して一線をひいた無教会グループに別れを告げざるを得なくなつた。手島兄は手島兄らしい道をひたむきに走つた。「原始福音」の大集団がおのずから展開している。人間のいとなみには夫々の長所と欠点がある。大切なのは、個人にせよ、どんなグループにせよ、教派にせよ、集団にせよ、つねに新たにおのれを乗り越え、おのれを蹴破つて前進することだけである。ひとがどうだこうだではない。私はそんなことにもう関心も興味もない。何より自分が問題にならない。こんな者を問題にしても始まらないからである。第三の峠を迎へたらそういうことになつた。

第三の峠とは何か。『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻）で告白されている現実である。キリス

トの十字架で「無」を賜り、キリストの聖霊で「無限無量」なるものを賜った事態である。無即無限無量の質的絶対恩恵の絶対次元の霊的現実である。表現できないキリストの本願の祈りの現実である。キリストの無者とされ、エン・キリストの大愛、霊愛の神秘の現実である。

経歴の面而言うと一九四〇年の秋、九月二十二日(日)、長兄政美召天の日（一九二一年の同日）を記念して自宅の一角を聖書講筵の会場として集会のスタートを切ったのが一つの峠であった。もう四十四年目を迎えることになった。この一九八四年はヨハネ福音書の日曜講筵と、春、夏、秋の特別集會に於ける黙示録が一つの大きなカイロスとなろう。

この二月七日に八十路（傘寿）の峠を迎えるが、何といってもこれは人生の大きな峠である。私の気魄は百歳に向つての邁進である。著作と伝道の課題と使命があるからである。或る詩作の完成には十余年の歳月を要する。「百歳にて死ぬる者も尚若しとせられん」と第三イザヤが言ったから、聖霊のみ力に在って百歳の峠に向つて歩みつづける。

ともあれ、一九四〇年晩秋以来、信友として有形無形に福音のため協力された昔の、そしてまた協力しておられる今のすべての信友に心から感謝している。お互に人間だからいろんなことがあった。私の不備や過誤はすべて十字架の下でゆるしていただく、そして今後も。私は誰をも決して恨まない。美しき想い出を抱いて感謝している。どこまでもキリストの無者らしく歩みたい。

世界は終末的危機にある。友らよ、悩める者、悲しめる人、求める者にこの福音を伝えよう。十字

架の愛、聖霊の愛だけだ！ すべてのなやみは十字架の下で雲散霧消し（イザヤ四四・二二）、すべてのねがい^{ねがい}は聖霊の中で円現成就する（ヨハネ一五・七）アーメン、ハレルヤ！

1

明治は三十七の年 日露開戦その前夜
如月^{きさらぎ}の星閃めけば 弥生^{やよい}が岡に産声^{うぶごゑ}を
あげて生れにし吾れなるか

2

幼き時に父は去り 母は五人の遺児^{かみ}抱え
お茶の水なる女子校に 教育の道励みつつ
われらをよくぞ育てたる

3

我は弱虫泣虫の 寔^{まこと}「づくなき」児なりけり
さはれ真善美に対し 感激性の浅からぬ

4

夢ゆたかなる少年よ

同心町の二階屋に 舎兄政美と暮しける
附中時代の生きざまが 髣髴として目交まじひに
現前するかな感無量！

5

長兄北京に仆れたり 母は船路に失明す
次兄の忍苦いかばかり わが青春の暴風雨あらしなり
天地晦冥どん底よ！

6

水戸高校の時にして 大手町なる内村の
聖書の講義胸をうち 光を浴びて信ぜしは
二十歳はたちに満たぬ時なりし

7

病の波に襲はれて 惨憺たりし四年間
聖書とルッター、ヒルティーを 灯火ともしびとして辿りける
独り旅路を忘れめや

8

東大独文学窓は 古典の粹たるゲーテ、シラー、
ダンテとミルトン、欧米の 詩歌の世界に憧憬あこがれて
日に夜を継いで読み耽る

9

藤井の門下五星霜 主の日遊りて貫きぬ
噫、千九百三十年 内村、藤井仆れたり
み空に点とじる巨星はし二つ

10

阿蘇の深山みの瀧見荘 聖靈降臨み、新生よ！
使徒らの次元慕はしや 十字架みたま・聖靈の現実を
生涯いのちを賭けて生き貫ぬかん

11

大道無門キリストの 無者たる実存賜りて
左顧右眴なくわれは往く 万人すべてを抱くキリストの
無量の愛ぞ力なる



久遠教会牧師丹羽張之氏と共に開催した
YWCA に於ける講演会にて

12

八十路の峠を迎へたり 無尽の涙を霊泉とし
漲る血潮を霊火とし 吹き捲く聖霊を台風とし
一大詩篇は成りゆかん！

（「エン・クリスト」第十七号一九八四年二月 冬季号）

十三 武蔵野幕屋（東京キリスト召団）創立四十五周年記念祭

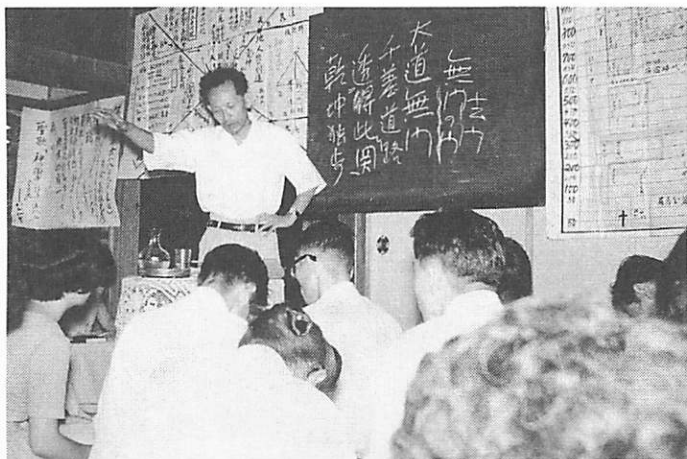
（一九八五年九月二日）

午前集会 日本キリスト召団の歴史的使命

舎兄小池政美は二十七年を地上の生涯として、北京で天界へ旅立った。（第六巻『随想集』の「藤井先生と小池政美」参照）それは一九二一年九月二十二日のことであった。この日は私にとってある決定的な日となった。彼は私のために生命を棄てた。それ以来、私の生涯はこの兄の弔合戦となった（上掲の書の「弔合戦」参照）。

私の信仰史は『随想集』に書いてあるから、ここには略すこととする。とにかく一九四〇年九月二十二日が丁度日曜日に当っており、独立伝道に踏み切る時機が熟したので、この日から自宅の一角を会場としてスタートを切った。時に「人生の半」（三十五歳）を越したばかりの三十六歳の秋であった。

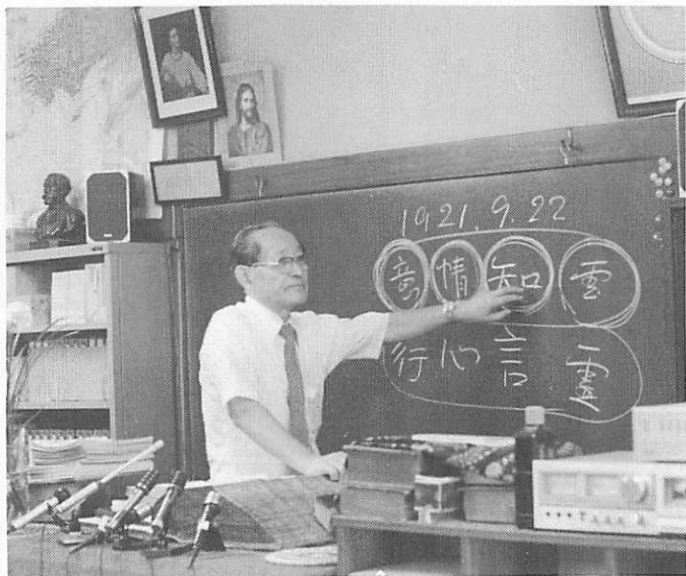
内村鑑三、藤井武、塚本虎二の三先生に相前後して日曜集会で師事したので独立の段どりとなった



第6回 夏期福音特別集会。
1959年8月7～9日
浅間高原にて

わけである。創立の集会は、和服で袴^{はかま}を穿^はいて壇上に立った。創世紀第一章から、神の歴史を辿るやり方で講筵を進めた。十年が過ぎた。旧約聖書の過半を学んだ。

一九五〇年の晩秋十一月三日から五日にかけて、大阿蘇山のふところ垂玉^{たなたま}で、手島郁郎兄の招きにより、二人で集会をした。瀧見荘というお粗末な宿舎であった。ここでの祈禱会で、私は天来の聖霊のバプテスマにあづかった。全身聖霊に充滿した。正に靈撃的な現象で全身が痺^{しび}れた。私自身全く驚いた。しかしそのあとは万物がかがやしく見えてくる。阿蘇の大自然の美しさよ。その祈禱会での女性の人たちの靈歌のおのづからなる合唱のすばらしさよ！ この垂玉瀧見荘集会は熊本を中心とした手島兄の幕屋のペンテコステとなった。私個人のペンテコ



ある秋の彼岸に、武蔵野幕屋記念祭にて
机上の大聖書は1729年版ドイツ語聖書、その横の二冊
本はルター聖書初版の（1534年）の写真限定版。

ステともなった。聖書の次元は聖霊のバプテスマを受けなければわからないことがハッキリした。パウロがコリント前書第二章で告白している通りだ。

集会は燃えて来た、み霊の力で。福音書がいかにもすごいものであるかがつかめて来た。福音書でキリストに直^ちかに接するのが何よりありがたくなって来た。東京療養所（ストレプトマイシン出現前）へ月一回伝道に出かけた。彼らが不思議なみ力にあづかって病に勝つではないか。肺結核は死への道が多かったのに、私の集会に出る患者の幾人かは健康を回復するではないか。聖霊の力がは



京都キリスト召団主催春秋の福音特別集会の代表者奥田昌道京大法学部教授（法博）と鴨川河原にて

たらし給う質は使徒行伝に迫って来た。

神癒。異言、靈歌、というような靈的現象をあやしんで、手島兄も私も無教会からアウトサイダーにされた。しかし結構である。我らは使徒たちのインサイダーとなったのであるから。私は謂はばルターの如く大学教授でありながらの伝道であるが、手島兄は提身しての伝道で、特に彼は靈的素質のゆたかな人であるので、日本全国に幕屋運動を展開し、外国にまで雄飛した。

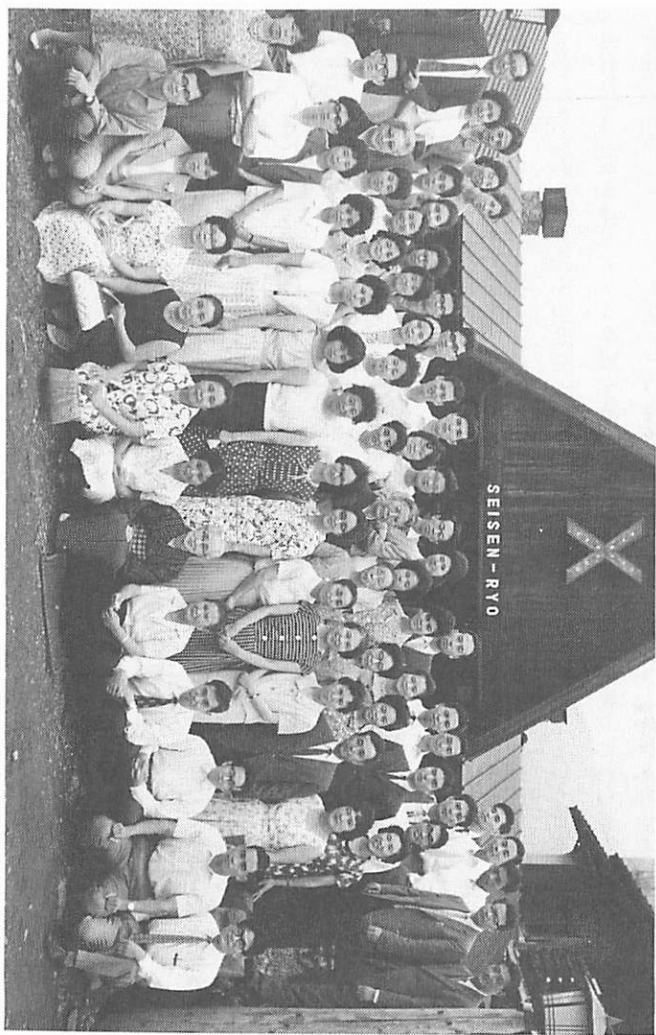
私は私らしくやるだけのことである。幕屋という名称は、一九四二年三月八日、病床で『眠りなき夜のため』第一巻（ヒルティのドイツ語原書）の同日のところを読んでいたとき靈感が閃いて示された。それはイスラエル民族の旅のすがたの幕屋であった。創世紀から黙示録まで貫いている神の歴史の動的な旅のすがた。そして歴代志略上一七・五を読んではれだと思って、集会を幕屋と呼ぶことにした。塚本虎二編集主任の『旧約知識』誌上の私の「詩篇研究」に共感していた手島兄



京大会館にて講演中の著者

は、早速この「幕屋」を活用し始めた。私はその後、恩師藤井先生が教会論で、「教会」は「召団」と訳すべしと論じていたので、それを論ではなく実践して我々の集会を「召団」と称して、手島さんの「マクヤ」と混同しないようにした。勿論「幕屋」も自由に用いている。

「原始福音」という表現も、「福音の原始に帰れ!」というスローガンを私が唱へ始めたことによる。原始福音という語も「曠野の愛」誌に私は用いた。これも手島さんが直ちに活用して今ではその週刊誌の標題となっている。私は別に「使徒的信仰」という表現を用いている。そしてこの頃は「信仰」という語も、「信交」と書くことにしている。キリスト・イエスは父との霊的一如の交りの中にいた。使徒たちは「キリストの中に」という信交に生きた。いつまで



夏期特別集会 小海沿線の清泉寮に於て

も信じ仰いでいてはどうにもならぬ。「エン・クリスト」が信交の現実で、これが本当の信仰だからである。み霊に在っての神、キリストとの交りだから、霊交でもあるわけだ。

毎夏、二泊三日の夏期福音特別集会を開いて、今夏で第三十二回を迎えた。始めの中は連続的に小諸のひまわり荘（川口愛子姉宅）であった。時にその近隣のささやき荘（竹田呉氏宅）でもあった。

その後、伊香保、かなり続いて旧鹿沢温泉紅葉館、小海線沿線の清泉寮、御殿場、箱根、松崎、修善寺、等々、最近では伊豆伊東いづみ荘、そして二十余年前からこれと並行して春秋二回京都でこれに準ずる特集を奥田教授の京都召団主催で開いているが、昨年からこれに私が参加するのはどちらか一回とした。とにかくこのような特別集会を通して大方の兄弟姉妹は私を通して聖霊のバプテスマにあづかった。神・キリストはこの破れ器を用い給う、ただ平伏すのみ。かくて今は南は鹿児島から北は北海道まで十一の召団が散在することになった。「エン・クリスト」という季刊誌が十一召団協同の伝道誌となっている。「一九八七年現在では、四国召団が創立したので全十二召団である」。

日本キリスト召団（総称）は、宗教団体としては小さなものである。しかし、現代キリスト教界の霊的水準からいえば、上部の一端を承っていることは確かである。使徒的信交の現実の質的に迫りつつあるからである。私は小池政美という曙の明星的存在、内村鑑三という日本の預言者、藤井武という宗教詩人、塚本虎二という聖書学者、手島郁郎という霊的人物、これら五人の稀代の人物の跡を受けて立たしめられているキリストの無者である。ところが私の『無の神学』はキリスト教界に無視さ

れている。謂はば「棄てられたる石」である。この石の叫びに共鳴する人がいない。結構である。旧約の預言者たち、新約の使徒たちが天界から聖書の言を以て共鳴の響きを靈送してくれている。誰よりもわが主キリストが「然り」と一言放って下さった。キリストの一言は万雷のひびきに優る。私は何ものもおおそれない。運命環境に逆行して力が天からやってくる。私が自分のいくつかの号にすべて天の字を冠するのはその意からである。

各召団の兄弟姉妹よ、各召団は夫々の特質特色を以て主の栄光を現はす身証体であっていただきました。決して全体主義ではない。各召団の各員が誰でも天下一品です。神の作品にできそこないはない。キリスト者（クリティアノス）は「聖靈の属」（フネウマトス）聖靈者でなければならない。それはパウロがその手紙で宣言している。かくて十一召団（十二召団）はキリストというコンダクター（指揮者）によって天的な交響曲を奏めます。皆使命をもった実存です。信即行の使徒的実存！ 多言は要らない。この福音を身証することあるのみ。

教育一般、学問研究、私塾活動、医療、農作業、商業一般、建築乃至工業的製作業、運搬業、銀行・会社勤め、社会的婦人活動、看護婦業、幼児保育、家庭婦人の勤め、学生の勉学、食品製造業、美術品創作、著作、詩作、伝道、等々、十一召団の人々を思うと多種多様である。要するに各人の生活の原動力が贖罪の十字架を土台とし、聖靈の御はたらきによるものであることに於て一つである。この十字架・聖靈の一から主の栄光体现の多が生ずる。そしてこれらすべてが即ち神・キリストへの

感謝であり讚美である。そういう個体の在り方の焦点が十字架・聖霊である。それゆえ個体は無者であり無限無量の質を賜った者である。まぎれもない天下一品の個でありながら、キリストの光の中の無実実存である。この個の集団が靈妙な交響曲であるという念願に生きている。

曙の十一〔十二〕の星のような小さな日本キリスト召団ではあるが、以上のような簡単な叙述の中にキリスト教史における我らの歴史的使命が秘められてある。その使命の成否はただ創造的に身証するか否かにかかっている。垣根のないこの幕屋召団の展開をただ聖名の故に祈ってやまない。

・ ・ ・

大体以上の如き内容を語ったが、この記念集会参集の兄弟姉妹の一端を記しておこう。午前集会の司会は西千恵男君、司会者の祈りと証言。講筵者は天鐘、演題は「日本キリスト召団の歴史的使命」、讚美歌は四九二「神の恵みはいと高し」、聖書朗読はイザヤ六一・一―三、ヨハネ一五・一―一三。第二、第三の讚美歌は東京召団讚歌を二つに分けて歌った。第四には、召団讚歌B1「君は葡萄樹」。

午後の感話、証言、懇親の会の司会は片井義二君。召団讚歌A1「わが道伴れ」、聖書朗読「詩篇二三」。感話・証言は司会者。次に特別会員旧友長坂光彦教授、その告白は参会者一同の胸に沁み入った。信交の奥義を身につけた言であった。同じく特別会員旧友原功君、全くみ霊の力で支えられているお身体である。過去のあたたかい復活の証言であった。同じく特別会員石黒安子姉の証言の中心は本号の証言集にある如きものであった。白洋社の重要なポストで勤めておられる。不変のキリストの

心を以てする友情をうれしく思う。以上三者の旧友たちの外にもっと旧友の来会があつて欲しかった。召団讃歌B6の「今はいづこで」の心で私は旧友たちを憶え、祈っている。創立五十周年と言はず、いつでも跳び込んで来てもらいたい。聖霊の愛に貫かれていた私は十字架の門のほとりで待っている。他の召団からの来会者は、埼玉召団の針谷康正君、小宮山欣一兄、石川早苗姉、栃木召団の小田林敬君、巻島輝雄君、裾野召団の松井康男君、増田嶽男兄、大阪召団の梅村康太郎君、京都召団の奥田昌道教授であつた。東京召団の兄弟姉妹は殆ど全員が参会してくれた。その他に東京療養所時代からの信友渕江淳一郎牧師日本クリスチャン・アッシュラム連盟理事が牧会を終えて急遽馳せ参じて下さつた。ありがたい友情である。

一人々々の証言、感話をここに記すわけにはゆかないが、いづれも心のこもつた告白や感謝や祝福の辞であつた。奥田昌道兄に最後の証言をお願いしたが、しめくりにまことにふさはしい誠意あふるる告白・感謝・祝福であつた。一切を主の栄光に帰し、聖名を讃えるのみである。独唱はいつもの如く声楽家喜多村安壽子姉にお願いした。「ベタニアのある女」（召団讃歌A28）はキリストの熱い心のひびきとなって胸に迫つた。

夕の祈禱会、司会は野中武君、召団讃歌B2「使徒らの昔を慕いて我は」。聖書朗読はイザヤ書第三十五章。司会者の祈禱と証言、野中君は西君、片井君と同様、現在の東京召団の最も古参の会員の一人である。女性では市川詩子姉が最古参で黙々として受付けをやっておられる。四十五年間を貫い

ての集会の協力者は言うもおろか荆妻順子である。彼女は彼女らしい筆記をして来た。それは藤井先生の集会につらなっていたときから始まっている。

二番目の召団讃歌はB 10の「主のみ業慕ひて」という伝道の使命の歌である。そのあとで「隅の首石」と題して語った。この聖言の基はイザヤ書の「視よ、われシオンに一つの石を据えて、その基となせり、これは試を経たる石、貴き隅石、堅く据えたる石なり。」(二八・一六)で、同じく詩篇一一八・一二「造家者の棄てたる石は隅の首石となれり。」イエスはこれらの聖言を御自身への預言と見た(マタイ二二・四二―四四)。ペテロもこれをキリストの預言として教敵の前で堂々と叫んだ。(使徒四・一〇―一二)パウロもロマ書九・三二、三三、エペソ二・二〇で、ペテロは再びペテロ前書二・六―八でこれを挙げている。実にキリストは我らの救となった隅の首石。小池政美も棄てられて我らの隅の首石となり、私も観念信仰者どもに棄てられて召団の隅の首石となった。日本キリスト召団の各員もその覚悟で生きるとき、主の悦び給う隅の首石となる。かくて祈禱会は白熱的なものとなった。

(「エン・クリスト」第二四号一九八五年秋季号)

第四章

紀行集

A 内地伝道旅行

一 聖書一卷の旅

(一九五二年頭伝道旅行)

大晦日も準備で暮れ、除夜の鐘を聞きながら旅の身仕度をなし、深夜を祈り三時間のねむりの後文字通り元旦払暁に家を立ち出でた。元旦に旅にのぼったのは既往四十七年の生涯の歴史を破るものである。別に悲壮な決意があったわけではない。併し神は今もおこの旅を契機として何かを課しつつありたまう。

東京駅頭で関根及小池集会のY、F、I、M、K、Nの諸君に見送られ、八時発の阿蘇号で一路熊本へ向った。東海道！歴史の香りを雲が漂わせ、古人の歌を波がこだま返す。白銀に薫ゆる霊峰を此の元日にじっと仰ぎ瞻た。詩篇第百二十一！目がしらがあつくなるをおぼえた。電力火力！列車は烈火の勢で西へ西へと進む。火(曜)の元日かな！聖霊の火よ、我がために燈火となり、深き愛の源となりたまえ！大方は読書。小倉の駅で武蔵野幕屋のA君を迎え、八幡駅でS・I君が加わり、新飯塚駅でM・T君を迎え、急に賑やかになった。飯塚独立教会のH・W、及C・N両姉の暖き

出迎えをも受けた。病身のS・I君が令兄に助けられて同列車で同じく熊本へ向っていることを知り、同君の再起を祈った。

二日午前十一時過ぎ、熊本駅頭で、『生命の光』主筆手島郁郎氏を始め、熊本幕屋の諸兄姉の欣然たる笑顔の出迎えを受け、わが心は同じく歓びにあふれた。直ちに辛島町の幕屋に御案内を受けた。手島兄のお子様方の元気な御様子を見てうれしかった。と共に一年前を偲び胸があつくなった。

十一月の清瀬特別集会では未だ蒼白であったY・F姉と昨夏以来病身であったC・K姉が二人とも別人の如く元気に手島兄の幕屋で働いて居られるのを見て、靈的信仰に与えられる実力を有難く思った。病者たちよ、深く祈り、み靈の能力に信頼して起たれよ！ 神はいたづらに病室に閉じこめ給わない。時あつてか「起きよ！」と宣たまう。そのみ声を正しく聴く病者は幸なる哉。

午後一時頃から、年頭の集会。手島兄の心をこめられた御挨拶があり、次いで私は「魂の光源を求めて」という課題のもとにこの貧しき魂の救の歴史をありままに語り、本年こそパウロをうちとらえた偉大なる靈光に青年たちが浴すべき年、この靈光を受くるか受けぬかに日本の将来が懸っている旨を語った。

私の魂の遍歴に於ては、第一にわが兄政美の実存とその死、第二に母の失明、第三にわが病床と魂の問題、第四に内村鑑三先生、第五に恩師藤井武先生の実存とその御召天、第六に塚本虎二先生、第七に神学の課題と拙論「碎けの神学」、第八に手島郁郎兄とその「聖靈の愛」、第九に靈的信仰の諸

体験、第十に「悲願靈願」の現在。

これらが夫々の時期に重要な契機をなして展開して来た。それはこゝに詳述するわけにはゆかないが。第八段階に於て手島郁郎兄にめぐりあいしことが或る決定的な出来ごとであったことを告白する。それ以来、聖霊の事態が信仰的実存にとっていかに重大であるかを明確に把握し、いよいよ聖霊の御導きを求めつつある。神の御導きの、攝理の奇しさに、恩寵の有難さに私の心は涙する。そは福音の源始の相がいよいよ私にもあきらかとなって来たからである。

私の二時間の年頭感話のあとを受けて、手島兄が立ち、拙訳詩篇第二百二十六（『曠野の愛』誌第九、第十号参照）を朗読しつゝ語られた。特にその「運命の転換」をこの年に念ずるところあり、且つ「笑い」なき者は基督者にあらず、我らはパウロと共に歡喜の人として前進するべきである主旨の年頭所感を披歴された。一年前愛妻を失われ、棄身の生活を営まれ、キリストの烈しさの故に、誤解も矛盾も忍んでつき進んで居られる手島兄の実存を知る者として、私は腸に涙をたたえつつ拝聴した。夕には同じく階上で、うちくつろいだ懇親の会があり、幕屋の友情に慰められた。

三日（木）は三賢堂に年頭講筵参加者全員が参集した。凜乎とした寒空のもと、我らは神の民らしくこの年の始めを迎える様に導かれたことを感謝し、聖名を讃えた。手島兄が立たれ、開筵の辞を厳かに述べられた。私は予定の如く『第二イザヤ書の本質』の題のもとに、み霊に導かれるままに語った。第二イザヤ書は、旧約の最高峰たるイザヤ書の中心であり、この霊峰の中には深き湖の如き第五

十三章がある。

一九四八年の秋から一年間に亘り武蔵野幕屋で第二イザヤの研究をしたことがある。ヤハウエーを単に義の神と見るはあやまりである。聖い、熱い、深い愛の神である。それが神の義というもののなのである。それを最も深く教えてくれるのは第二イザヤである。併し義といい、愛といつても決して公式化してはならない。神の真理はつねに流動して、つねに新たな響きを発する。私は二、三年前に研究したことをただ語つたのではない。三賢堂の第二イザヤはやはり三賢堂一回限りの性質のものであった。私はそれをここに再現することが出来ない。

ただ天来の力が、大浪の如く、深淵の如く大山の如く、この小さき者に迫るに従って、ある詩的な韻律をふくんで語らしめられたにすぎない。三日は朝から晩まで少休憩をさしはさみつつ長講義。けれど私としてはレコード破りであった。併し、私はこれを講義とは思わない。語るも聴くもただ一つ、この私という破れ琴を通してエホバの靈言に浸ったという事実であったのみ！ 私たちはキリストの弟子である。キリストの弟子は、弟子らしく靈言の子らでありたい。私は学問を愛する。併し預言者または使徒のながれの子でありたい。三賢堂に集った兄弟姉妹たちは皆同じ魂ばかりだった。

講義のあとで、夜おそくはじめてゆっくり食事及び懇親会。清い心根で「純情」を歌う青年があれば、之に応じて「愛の聖力に我れ祈る」というドイツ語の讃美歌をうたつた壮年もいた。毛布や外套をかぶって、正に幕屋的な夜を明かし、未明から沈黙の祈禱会に入る。深く恵まれた。数名の女性の

霊の歌は特に美しくあつた。

四日も引きつづき、午前午後二回、第二イザヤの本城たる「エホバの僕」の歌を中心として語った。第五十三章に来て極まつた。キリスト・イエスのみが贖罪の死を死んだ神の子である。併しキリストの僕らしく斃れた人々は空の星の如くいる。手島照世夫人の死はその如きものであつた。「生命の光」誌第十九号、夫人の記念号の或るくだりを朗読しかけたが涙が声に代つてしまつたので、私はあとを祈りを以て結んだ。

そのあとで手島兄立ち、「記念号」を読まれ、期せずして照世夫人の記念会となり、恵福であつた。素晴らしい「記念号」である。遺された三人のお子様の上、天上からのお祈りのまもりも堅く且つ熱いに相違ない。

その晩、里見安吉九大教授と私は手島兄のあつき御友情にあずかつて親しく晩餐を共にした。里見さんと私はそのあとで熊本幕屋の兄弟姉妹たちT、Y、O、M、S、N、A、F、N等の友愛を受け、熊本幕屋のF姉宅で、すきやきを共にし「食を貧る者」となつた。闊達正明な青年たちである。明朗純情な乙女たちである。つきぬけたみ霊の子らは、本当に兄弟であり、姉妹である。キリストのためには、いつにてもいのちを棄てる魂であらんことが我らの共同のあつき祈りである。我らは主にあつて永遠のいのちにある。

翌五日(土)朝、熊本駅頭で、照世夫人一周年の祈りをこめて、手島兄に尽きぬ別れをした。多く

の兄弟姉妹たちに別れを惜しまれた。飯塚の駅に降り立つと、吉田繁牧師を始め、教友T、N、I、Y等に迎えられた。昨夏御厄介になった青木盛綱氏宅に案内される。

夜は七時から吉田牧師の飯塚独立教会で講演をする。満堂の会衆。教会員は熱心な準備祈禱会を開いて待つていて下さった。使徒行伝を中心として、信仰の現実が、もともと聖霊による霊的なものであるのに、それが知的な面に移行して、今は一般に観念的信仰になつてゐること、或は形式的な宗教形体に相変らずとらわれていることを難じ、我々が霊的、霊的というとき、それを特的な判断の如く見なおすはあやまりで、霊的とは信仰の事態の全称判断たる所以を行伝を通して力説し、この信仰を賜つた自覚を新たにした。

講演は三時間に及んだ。会衆と共に祈禱に移つた。霊歌をうたう女性の中に素晴らしい歌声が響いて来た。それが靈感により日本語の歌詞を即興的に与えられつつ歌う霊歌であることを直覚し、驚嘆した。この様な歌の現実には私は始めてぶつかつたからである。丁度それはノヴァーリスの『オフテルディンゲン』(『青い花』)に出てくる王女の歌を連想させるものであつた。この人の歌声によつて、また私はパッハのカンタータの世界への門が忽然として開かれた想いがした。

集会後、青木氏宅へ戻つた。この歌の人も同道した。青木氏御夫妻と四人で夜の更けるまで語つた。なほ一人の青年S君がじつと傍聴していた。聖霊に導かれて私はある特別な執り成しの祈りを全霊こめてなした。この歌の人は忽ちみ霊に満たされて、素晴らしい靈幻を観つつ、日本語の霊歌をうたい

出した。まぼろしの歌はキリストの淨福を受けつつある内容に至つて極つた。青木氏夫妻も同時に靈幻に接し、青木氏は金色の十字架と、その背後からさし来る聖靈の光に圧倒され、完全に聖靈のバプテスマを受けられた。御夫人も「君は谷の百合、峰の桜花」の讚美歌の幻影に接し、淨福を受けて感泣された。かくてその夜は靈歌靈幻と祈りの中に明けた。

信仰の勇者として青木氏はかげながら私の尊敬していたところであるが、神がこの器をかくも強化されたことを感謝し、将来大きく用い給わんことを心から祈り奉る。またこの歌の人N・Y姉もこの夜を以て、天職への路に或る星が輝き始めたと思う。

聖靈が、人間の存在にも学問にも、事業にも、芸術にも、実存的に我らの中に力をあらわし給うこととの証人で我らにはありたいのである。キリストの証人とは、キリストの根源的な生命を生きて実証する者を謂う。信仰者とは、その様にキリストのいのちにつらなる者をいう。キリストが神の子であることを信ずるのは悪魔でもやる。「キリストわが衷に在りて生くるなり」とのパウロの告白は何といつても、靈的実存的信仰を告白して遺憾なき金言である。

何びともその存在を以て神の栄光をあらわすべき使命を擔わせられている。それがどんなに人の眼にかくれていても。岩かげのすみれは萬人の眼にうつらない。併し、これを発見する人には、そこに神の栄光の床しさを見る。私は、人や事物を比較してみることを本質的なこととは思わない。それは人も、ものも、特に人は、神の属たる角度から見るときに、夫々質的な絶対性を帯びているからである。

そのとき夫々の実存を限りなく尊びまた愛惜する心が湧くのである。

私はこの様な心でこの紀行文とも感想文ともつかぬものを書き記している。どうか、行間に、かかれた人々の名と愛の行為がこぼれていることを読者はよみとり、聖名を讃えていただきたい。すべてが聖名の栄光に帰せられないなら、私は一行も書いてはならないし、それはつまらないことである。

翌六日(日)午前十時からの日曜集会では詩篇第四十を講じた。第十節「汝の誠、汝の救、汝の愛、汝の真」と作者が言うように神の実存面に我らの一切が懸つている点を強調した。これが我らの衷につきぬけてのぞんでくることと、そして我らに内在的に恩恵の力として与えられているという信仰に於て我らの立場なき立場は不動である。

集会の後、正午頃から吉田牧師の司式のもとに高木光徳君と野見山千鶴子姉の結婚式が厳粛にとり行われた。新郎新婦の祈禱が我らの心をうつた。御指命により、私も一場の感話を述べた。Y姉が新婚を祝福する靈歌をうたつた。式後祝宴に招かれたが、新郎新婦が誰の祝宴かと思われるばかりに手伝つて居られるのは床しい情景であつた。

夕刻から始まる福岡の集会に列席すべく、はやめに宴席を辞し、里見安吉教授夫人の御案内をうけて、教友I、N、Yと共に飯塚市を去る。吉田牧師を始め幾人かの兄弟姉妹が別れを惜しんで見送つて下さる。バスで山路を越えて福岡市に入る。

夕暮からの講演は、神の靈がいかなる役割を演じつつ啓示史の現実に臨んでいるかを全聖書にわた

つて鳥瞰的に跡づけた。三時間に亘つた。講演のあとで祈禱会。里見御夫妻、中沢慶之助教授、中江健三氏は衷心から拙講を喜んで下さつた。私の酒杯は溢れた。

集会後、里見御夫妻及さきの同道者諸君と、芸術論及び演習！ いっしか夜明け近くなつてゐるのに驚いた。連日かくも時間を超越して、よく疲れないと思つた。晩夢の中でイサクを捧げるような夢を見た。キリストはわが愛である!! 私は平安に還つた。私はその後、更に棄身の魂となつて靈戦の旅を続け得た。いっどこで私自身斃れても可いと思つた。それはいささかも信仰的英雄の如き氣負つた氣もちからでなく、極めて平易な氣持ちで。

七日の午前、工学博士松屋春雄教授が里見氏宅に私を訪ねられた。卒直に語りあつた。松尾氏は他の所用のためはやく帰られた。やがておいとまの時刻がくる。里見兄の今後の福音戦のため深く祈つた。勝利を確く信じつつ。福岡駅頭で里見御夫妻及N君とお別れ。み霊の友情の明朗にして熱きことかな。

八幡は始めての土地である。既に街の灯がともつていた寒い夜である。T・I、S・I両姉の外になお幾人かの教友が再び私を迎えてくれた。中江氏をもつと私のはなしを聴きたいとて同道された。主にある友愛に感謝する。K、O、Yの青年諸君がいろいろ準備の勞をとつてくれたにも拘らず、来会者は多くなつた。こんな立派な青年たちに応じない町の子らは禍なる哉!

一月七日は祭日にあたつてゐるためでもあろう。会場も窓ガラスが破れたりしてゐるので、応急の

処置をとつてくれた。併し寒気は身に沁みて来る。

講演は黙示録のある箇所を主題にして信仰の熱戦を語つた。I君が司会をした。私は霊の火にみたされて選ばれた少数の魂に熱く迫つた。寒気とも戦いつつ二時間を語つた。祈禱のとき、Y姉が素晴らしい靈幻を觀つて歌つた。全員が船に乗せられ白き衣を着せられた。キリストが舳に輝くみ姿で立つて居られ、大洋を渡り、船は美しき天国に向つて進み行くのである。一同の魂は高揚された。録音して置きたかつた、その歌詞と調べとを。九州最後の講演として黙示録とこのフィナーレは極めてふさわしいものであつた。

冬の夜の半月とオリオンその他の輝星が寒空に冴え渡つていた。燈火の八幡を見おろしつつ坂路をI君の宿所に辿りつた。この夜も眠ること僅かであつた。大方の教友は翌払曉にそこを辞した。

八日午前I、K、兩君、M姉と四人で九州旅行最終の祈禱会をもつた。M姉は私が聖手に按手されている幻を見た。私はその時涙を流して祈つていた。私が八幡を通つた一月二日の朝から、この日まで、何かと助けてくれたI君と行橋駅で別れた。T・M姉も丁度帰路に當つていたのでここまで同道した。別府駅についた時は夜の八時。昨夏集会を開いて下さつた吉田あやの夫人のお宅を訪ねようと思つたが道を迷い、そうこうしているうちに汽船の出帆の時刻も迫つて来たので、残念だつたがそのまま波止場へ急いだ。まる六日間の九州路はかくて終幕となり、八日の夜十時、宇和島丸のスクリュの音と共に九州を離れた。

月光を浴びて銀波が舷側に碎けては消えてゆく。黙禱を捧げる。涙がにじむ。仰臥してなほ祈り心で眼を閉じているうちに、わが身も魂も神のみふところに休ろうた。ボーイが「宇和島！」と報じてくれた九日払暁五時半まで、深い眠りにあつた。むしろ着港のはやきに驚いた。

四国の陸に始めて上つた自分を顧みて、旅人の感を新たにした。省営バスで四、五時間を東へ東へと走破すること幾十料。山と谷の間をバスの大道が、なかなかの迂余曲折をなして谿流沿いに走っているのである。すてがたい眺めであつた。やがて終点窪川駅に着く。林恵氏、S・Y君が此処まで出迎えに来てくれているのには恐縮した。土佐加茂駅下車。その地の北添先生のお宅で集会があることになつてゐた。

集会は夕方から始まる。既に永く祈禱会を以て待つて居られた北添先生の御熱意に感激した。八幡の夜、寒冷的な空気の中で語つたことが因となつてか、ひどく咽喉を害し、哽声である。会衆には聴きぐるしく申訳なかつた。併し皆心をこめて聴いて居られた。祈禱とあわせて数時間。懇談会も開いた。この夜も深更に及んだ。翌朝十日の午前、再び集会を開き、あとで特に二、三人の人のための深く祈つた。汽車の時間に追いたてられて辞去し、高知へ向つた。加茂には高知県の処々から参集して来た青年相当多く、たのもしく思つた。各々の幕屋で大いに活躍されんことを祈つている。林恵君の伝道の果がかくも豊かなにみのりつつあるを知つて感服した。また手島大兄の伝道一回の偉力も拝察された。神のみ名に栄光あれ！

高知市ではその夜、Y君の自宅で小集会をした。日どりが確定しかねていたので、しらせがおくれ、Y君は準備がやりにくかったことと思う。それでも新聞にまで載せられたことをあとで知り恐縮した。十二時頃まで四時間の集会をもった。翌十一日(木)午前高知を辞したのであるが、Y君の御母堂の手あついおもてなしにより、労れも回復していた。高知駅で林氏、Y両君外数名の教友と別れ車中の人となる。吉野川は風致に富んだ眺めであつた。高松で連絡線に乗りかえる。内海は穏かであつた。乗り換えた列車がなかなかこんでいた。

神戸駅に着いたのが夜の八時。梅本重信氏と令妹愛子姉に迎えられる。西ノ宮のお宅に案内された。明治元年生まれの御母堂、重信氏夫人、それから愛嬢お二人。愛のこぼるる御家庭である。御款待にあづかり慰められた。御母堂から昔ばなしを承った。想えば植木良佐先輩と御当家次女好枝姉との御結婚は藤井先生の司式であつた。御先代梅本総吉氏がいかにも霊の人であつたかを、お話や御遺筆で知り及んで、驚き且つ敬服した。新たな発見であつた。梅本御一家をお訪ねしたことがいろいろな意味で偶然でなかつたことを知つて感謝した。

翌十二日(金)の夕方、大阪南方岸和田市の仲緯彦氏を訪ねる。地理に全く不馴れであつたので、非常に遠く感じた。私の到着時刻不明のため、朝にまた夕に駅まで出迎えてくれた仲氏に相済まなかつた。同氏の自動車に同乗して会場に急いだ。

仲氏の司会には、胸を打たれた。この集会に来得ないが、療養所で渴望している兄弟姉妹のため熱

誠こめた祈りをされた。私は最後の奮斗をした。この夜も亦殆ど夜もすがらの会となつた。ある二、三の青年が私の話を聴いてその胸に大きな波紋を感じたらしい。神願わくは仲氏の苦闘と善戦を祝し、これより続々若き魂が聖力に動かされるに到らんことを。ここで始めてお正月らしいお餅をいただいたが、仲氏御夫妻と夜明けにお別れを惜しむ。

岸和田集会に列席された梅本重信兄及愛子姉と大阪駅頭でお別れし、あとは東京まで無言のひとり旅。併しどんなに同席の人々に、彼らが求むるならば、福音を語りたかつたか。

東京駅に十三日(日)の夜七時に着いた。武蔵野幕屋の諸君が出迎えに来てくれて、むしろ驚いた。私は誰も居らぬつもりで窓から頭を出すことをしなかつたから。更に驚いたのは、文字通りうちの四人の兄弟姉妹が「お父さん！」と呼んで迎えたことである。棒げたイサクも無事に神様から還していただいたわけである。ある敵かなまた熱き想に迫られた。感涙を強いて体内にもどした。

家に辿りつくや、直ちに幕屋の一同と感謝と讃美の集会を開いた。言が言とならなかつた。噫、恩寵の旅。私は何ものでもなかつた。戦はむしろこれからである。それにしても連日連夜、よくも語りまた祈つたと思う。願えばただ聖書一卷の旅！ 貫きしは熱きキリストの愛!! 私は泣く。

手島郁郎兄から「枯木の龍吟」という語句をかつて学んだ。み霊にある私は枯木である。もしこの旅でこの枯木が龍吟した場合があつたら、み霊の兄弟姉妹らは聖霊の歌として聞いて下さつたであらう。主にありて愛する兄弟姉妹の有形無形の愛に助けられてこそ、この旅はゴールにまで辿りついた。

感謝!! 私自身を顧みて、申訳なかつたことがやはり沢山ある。それらはすべて、聖名のゆえにゆるしていただくより仕方がない。私の記憶の悪さのために、事実がまちがつているところがないとは言えないと思う。また、記すべき教友のことを幾つもおとししてしまったと思う。それやこれやの缺陷を思うと、この記事そのものがやつぱり惨憺たるものである。ただ罪びとの告白を通して、聖名と聖力の素晴らしさのみが読者の胸に印せられ、聖名のみが讃えられんことを念じつつ、筆を擱く。

聖霊の翼に乗りてわが魂は

誌友らの許に馳けりゆくなり。

(一九五二年一月末日)

A 内地伝道旅行

二 信濃路

(一九五二年十一月)

木曾の谿谷から訪諏湖畔の岡谷に出で、M・K姉宅の「みなと集会」で集りを開いた。この集会は、かつて三夏、深津牧師に招かれて集会を有つたことから親しくなつたものである。私は教会といわず、無教会といわず、キリストを贖主と信じる人々の集りに於て一切の垣根を知らない。そこに垣根をめぐらす人々は、果して聖霊の愛に生きようとしているのであろうか。信仰の枝葉に拘泥せず、気分支配されず罪びとらしい砕けの心になつて、贖われた者らしく何も勿体ぶらずに、何故もつと福音的であり得ないのだらう。何処へなりとも私はこの開放的な心根を以て行き、福音のよろこびを共にしたいまでである。そこに聖霊の幕屋、というものが、惨憺たるエクレシヤの現実を貫いて、いつにても全地いづこに於ても展開されるものと現実に信じている。岡谷の「みなと集会」も私にとつてその様な敬愛すべき幕屋の一つとして、招かるるままに訪ねるのである。共に楽しく深く聖書を学んだ。親しくあつく祈つた。祈禱会のあとで心づくしの愛餐会を共にした。A氏やM氏ともゆつくり語りあえ

て嬉しくあつた。翌七月二十二日(火)の朝はT、M、H三姉がエペソ書五、一九の如き讃美の合唱をしてくれた。きよらかなる聖霊の祝福にあづかる人々よ、いよいよコリント前書第十三章の実存を以てする証者たらんことを祈る。主にある友情を感謝して別れた。中仙道はバス越えの道を選った。道路工事のため一時バスから降りた。あぶなげな山間の道をよくこの様なバスを運転するものである。日本人はその勘のよさや器用さにまかせて相当強引のようである。峠を降りると急に炎熱の下界である。かつて教友たちと伝道をした長窪古町のあたりもこの日は素通りせざるを得なくて残念であつた。大屋——小諸間もバスで走破した。バス即ちオムニバス、「すべての人のために」と謂う如く、福音の大道も日本全土に、「すべての人のために」開かれてゆく様に！ 基督者の責務は正に伝道にある。私の如きは何と間の伸びた伝道の仕方であらう。

小諸ではその夜、集会をM・K君の三階なる小諸聖書研究会々場で開いた。病院から特別外出で来会した兄弟姉妹もいた。木曾伝道で終始主に在る友情を尽してくれたS・S君も帰途立ち寄つて参加した。

司会者は、いつもよく何くれと勞をとつてくれる武蔵野幕屋初期からの旧友M・S君であつた。ここでも参集者と共に真理の御霊に導かれて聖言を充分喰うことが出来た。どの集会も、それぞれのもち味があつていい。問題は聖言が真に生きて宣べられ、生きて聴かれるかに存する。この生が聖霊の根源相に関わることは言うまでもない。参会者の中には仏道の者もいた。「先生はけたちがいだ。全

くまいりました」などと言われた。勿論、それは福音の智恵と力に圧倒されたのであつて、私は何者でもない。その翌日も同じ会場で再び小集会を開いた。パリサイ的な妨害にあつてひどく迷つていたりする姉妹を福音の大道に導き、深く慰めることが出来て感謝であつた。

手術の一手手前まで病状が亢進していたK君が、自ら深く祈りの世界に進み、ついに聖霊のみにぐんぐん助けられて——誰か深く病みし者、「助主」のかかる恩恵を拒まんや——再起するに至り、見ちがえる様に平安と歓喜と力に満ちて居られて、こんなうれしいことはない。いよ／＼「助主」聖霊はK君をとらえて聖書の真理を開示し給うであらう。

七月二十三日(水)はやがて暮れてゆく。A・K姉宅の二階の窓から西方をうち眺めると日本アルプスの殆ど全貌が夕映えの空に影絵のように聳え立つてゐる！ 大自然を前にしていると、イザヤ書第四十章やヨブ記第三十八章の詩句が私の魂を天界に誘わんとする。ヘブライの予言者は同時に詩人であつた。彼らは啓示の真理を表現するに詩的な言を以てせざるを得なかつた。創造的なものは詩的であり、解説的なものは散文的である。神の思想は本質的に律動的である。神の被造物の動きもまたそうである。大磯に聳き寄する波の音、山嶺を吹き渡る風の声、野良にサクを切る農夫の腕、荒波を乗りきる漁夫の櫓櫓、いづれ波動的ならざるはない(拙誌第三号「霊的実存」参照)。

木曾路・信濃路伝道の最後の晩となつた。小さな集会を階上で開いた。K姉御母堂が今は地に居られぬのが寂しかつた。併しその近親に基督者婦人らしい愛の婦人たちが幾人か居られるのはたのもし

い。K姉は岡谷から来ているE、M姉とも協力して遠路をもとわず病者を訪ねてよき伝道をしている。夜半一時半の列車で帰途につくべく教友たちと別れた。小諸駅に着いたら未だ時間があつたので駅前の広場にただ独り立ち天を仰いで祈つた。祈っている間に星が一つ大きく尾を曳いて流れた。

「天のお父様！ 一週間の木曾と信濃の旅路をここまでお導き下さつて有難うございました。み旨に応えまつるだけのことが出来ませんでしたのでまことに申訳ありません。それでも貴神あなたのみ力によらなければ到底果し得なかつたことを思い感謝で一杯でございます。こんど始めて基督教に接した多くの魂や、いろいろな悩みをもっている人々を、夫々ねんごろに導きまた慰めて下さい。彼らも貴神を真に父として畏れ親しみ、キリストを贖主として正しく仰ぎ、み霊の愛による懼れなき子らにして下さい。伝道といつてもその名に価しない私の無益さをおゆるし下さい。お父様、私はどんなに人々に誤解されてもいいです。私は知っています。このダメな私を贖つて下さつた十字架の主は、今生きて在まし深く私をゆるし、愛して下さつていることを！ ダメなればこそ徹底的に愛し貫いて下さることを。だから私も勇気が出ます。その勇気は「私の」ではありません。キリストのくださる勇氣です。だから恐れません。そうです、もつともつと、主キリストの実存が、この罪びとに愛と力と光になつて下さるように！ どうか福音が自由に豊かにこの小さな器に受けとられ、み旨のままに証しするこ

とが出来ますように！ み霊に生きたベテロやヨハネやパウロが慕しいです。

ただ聖きみ霊がこの魂に主となり給う限り、何も心配はいたしません。イエス様と共になら、すべ

ての人に棄てられてもかまいません。お父様！ 貴神のみ霊を現実に基督者に深く宿らしめ、パリサ

イ精神を全キリスト教界からのぞき去り、もつと互に大きく信じあえる様にして下さい。私の胸をつねに何人に対しても開け放たせて下さい。そうです、私はこんなにみ霊によつてつき抜けとされています。感謝いたします。一人、二人、三人と、なやめる魂をキリストの許に伴れゆくためにこの僕をお遣わし下さい。この旅でこんな者をねぎらつてくれました兄弟姉妹たちを祝福し、永く護つて下さい。すべてが聖名の栄光のためでした。また全くそうであらしめて下さい！ 貴神の聖名を讀えます。贖主イエス・キリストの聖名により、アーメン。」

やがて上り列車が来る。乗り込んでみると乗客は殆どみな眠っている。幾つかの客車を歩いてやつと坐席を見出した。冥想に耽る。……私の機関車はキリスト、動力は聖霊、旅路は曠野、私はガタガタ客車……私もいつしか夢路を辿る。

帰宅したのは七月二十四日朝。出発の前夜、激痛を訴えたが、私の祈りをあわれみ給うた神によつて、一週間護られていた子供を入院させ、手術を受けさせた。感謝。

A 内地伝道旅行

三 北方伝道

(一九五四年四月)

磯浜

「北の極なる氷の山……」ロづさみつつ旅装を整えて家を跳び出した。常磐線上の客となり、読書二時間、居睡り一時間。白線高校時代の昔懐しい水戸に着く。水高第一年を終った一九二三年の春、入信最初の復活節を大手町なる内村先生の聖書講堂で迎えたのは想えば三十一年の昔。今は水戸にも白線高校生の影見え。改悪された学校制度である。高校三年の生活は学校生活の最も大切な時期である。これを失ったことを現代学生のために惜しむ。

駅頭で平山勝明夫人、藤田みつ姉、勝山一美君の出迎えを受け、バスで同道、磯浜へ向った。集会所に着く。本多保雄君らの元気な顔が迎えてくれた。伝道者根本清氏方「キリストの教会」の二階座敷から暮色蒼茫たる大洋を眺める。根本氏司会のもとに二時間余りに亘り福音を語り且つ祈る。去り



田崎秀氏宅にて日曜集会（1954年3月18日） 右端田崎君，左端勝山君

がての会員たちと更に座談。その夜は更に同教会会員にして、私と同じく水高出身、永い病床にありつつ歌道に精進の田崎秀氏に招かれ、同氏方で且つ語り且つ深く祈る。令妹竹子姉が以前よりずつと力を得ていて嬉しかった。瀬谷八重子姉の主に在る看護は美しいものである。夜更けて枕辺にひびくは波の音。「聞けよやひびくヨベルの歌の磯に碎くる波の如きを」。聖子の終末的世界統治の讚美歌一五二番が胸中にこだまかえす。いっしか夢路に。

三月十四日、聖日の朝日ざしが夢を破つた。汀に出る。日蓮ではないが、旭日を眺める。霊界の太陽キリストの聖名を呼んで祈る。キリストの聖名が全日本を揺ぎ動かすまで我らは伝道をやめない。キリストのみ霊を受けた

兄弟姉妹たちよ、君たちは皆キリストの証人であることを自覚してもらいたい。田崎兄宅で日曜集会かくて根本兄の伝道を助け得たことを感謝する。私の立場というものは、原始福音の中に絶しているから、全く自由で、キリストに在つて、一つを現せんとの一念一途あるのみ。わくをそこらいたづらに批判したり、破壊したりするのではなく、むしろ出来るだけわくの中に親しく入つて、それを満たし、その中から溢れたい。そのような力が原始福音から私に迫つて来るから、その現実生きんとするまでである。私はキリスト教界のいろいろな相対的な批判やうわさを相手にする気持をもたない。「彼らのささやきが汝に何であるか、民には語らせ置け。風に吹かれて頂きをかつて動かさぬ聖き櫓のように汝は立て！」というダンテの詩句に共感する。

瓜連

午に根本兄夫妻を始め教会員に見送られ、水郡線上の瓜連へ数名の教友とバスで急ぐ。伝道者平山勝明氏に迎えられる。同兄宅で少憩の後、午後二時からの公民館での集会にのぞむ。二時間の一般講演。町の人にわかるように砕いて語る。晩も同所で二時間の聖書講義。来会者はみな熱心に聴いてくれた。夜平山兄宅で愛餐会。その夜は平山、勝山両兄弟と共に舷々相磨するが如くして寐る。明くれば十五日(月)彼岸前の春寒料峭さながらの肌寒さである。キリストの名によつて集まつた者八、九名。朝の祈禱会を開く。使徒行伝的な現象も伴つた。坏牧師や藤田稔氏夫妻も三回の集会に熱意を以

て参加され、感謝であつた。

伝道者平山兄の夫人がその夜（三月十五日夜）書かれた書翰の一節に曰く、「……祈り始めたら異言になり、とまらず困るくらいです。祈りが終わっても異言がとまらないのです。聖書をよみ始めたら異言になり、終りまで聖書を異言でよみました。主は此のような無きが如き者をかくもとり上げ給うて伝道者の妻となし給ふとは！ 大波の如くおしよせ来る聖愛には、うたれてしまひます。此の度の集りはどれも本当に神に祝されたよき集りでした。感謝にたへません。……嬉しい力が今わが上にのぞみました。そばにねて居た純子が急にお腹がいたいと言つて苦しみはじめました。早速私は手をおいて祈りましたら、祈りが終わるや、直ちにもういたくないと言うのです。まあ、私ははじめて神癒を致しました。私の胸のとげがああ祈禱会で先生の按手を通してとれるや、本当に心の底から澄んで来ました。胸のとげさえいなくなったらしい世界が開けてくると思つたら本当にそうでした。感謝々々。主、吾と共にあり、いかなる悪魔も吾をうばう事あたはず、いかなる時も主、吾が足を強くしたまう。もう大丈夫と本当に確信が与へられました。これから一步一步と前進させて下さいます事うたがいありません。さきほど長男（宗明）が不思議な事を言つて外より帰つて来ました。「お母さん、今宗ちゃん目の前で、金色の光がピカピカ光つた」と言うのです。この間は天使のようなものが天に昇つてゆくのを見たといひました。おそろしくらいです。益々此の子の上にどんな事があらわれるのかと思ひます。私も三ヶ月前に金色の光を見ましたので長男の言ふ事はうなづけます。……大な

る感謝を以て。」

三月末の第二信に曰く、「黒崎幸吉先生編旧約畧註(下)をありがとうございました。……聖霊我が中に満ち給ふ。毎朝六時半に主人を送り出した後、午前中はお掃除お洗濯をすませた後、二時間半ぐらい聖書を学ぶ事と祈りについやって居ります。『略註』は本当にうれしうございます。私はもう主から少しもはなれて居られない。けわしい山坂も、平かな道も只主と共に行かなん。何といふ幸福、今こそ勝利です。真の勝利の意味が身を以て判つて来ました。ひとり祈つて居りましても異言が出て参ります。私の場合正に異言を以て祈る世界は素晴らしいのです。けれど現象面にとらわれるべきではないことは充分承知いたして居ります。……」

平山夫人の書信の一部分御紹介して、夫人にも相済まぬことであつたが、私は伝道者の妻がこの心がけで家事と育児と、聖書と祈禱にいそしみつつ伝道者を助けて戦つてゐる姿を、主の愛の力のあらわれ、聖名の栄光として観るので、証しとして敢て御紹介した次第である。私は平山夫人を讃めることをしない。それはなすべきことでもない。原始福音を一人の女性が正直に端的に受け入れ、キリストに在つて実存せしめられるときに、此の如きものであるということを一例として示すまでである。型は異なるとも真にいのちと歓喜と力と愛にあふれて活動している女性たちを私は各地の幕屋に主^に在る誇りを以て知つてゐる。

なおここに一言はつきり申して置きたいことは、我らのことを「異言信仰」とか「異言派」とか

「神癒派」とか「聖靈派」とか称して、教会或は無教会のある人々が誤解、曲解、中傷、攻撃、非難しているが、そんなものでは断じてないということである。併し福音を正しく受けとることが、聖書を身読することがキリストのいのちに生きて体現せしめられることが、聖言と聖霊の証人であることが、どうしても非難攻撃される事態であるならば、何を言わんやである。キリストは「汝らわが名のためにすべての人に憎まれん」と申されたからである。生ける神とキリストと聖霊に逆つて我らはいづこに安きを得んやであるからである。コリント前書第十三章を深くキリストの愛としてわが衷なるいのちの性として深く蔵するに、どうして聖霊を深く宿すことなくしてあり得るであらうか。所謂浮いた「靈的」ということは決してよきことでもない。併し真にキリストの霊を受けて、その理性と心情と意志との中に靈性が深く浸透して来て、渾然たる調和をなし、均整を持し、その靈性奥底の知れぬ態の「靈的」は、限りなく深く求められるべきものである。パウロのコリント前書第十三章の「愛」はかかる深みある霊の愛である。原始福音に生命を与えている聖書のはたらきが日本の靈性を真に生かし動かすとき、福音は真の日本の展開を果すであらう。

須賀川

平山、勝山両兄と水郡線を北上した。鉄路に沿うて縫うが如く流れる溪川、残雪なお浅からぬ早春の山陵、めぐり来るその景觀に旅情をなぐさめられる。関東地方を突き抜けて東北地方に入る。東北

本線に安精水盛で乗り換えて一駅南下すれば須賀川駅である。福島療養所に着いたのは夕陽がそろそろ西に傾きかけた頃であつた。所長菅井医博に面談。加藤佐又氏宅で少憩。晩の集会は桜井秀義氏が之を準備し且つ司会してくれた。近藤昭二君が福療をビスガの嶺として昇天して丁度一周年。この夕の集会はその意をもこめて且つ祈り、且つ語つた。一年間に振われる者は振われ、遺る者は遺つた。そして新顔も相当加わつていた。語るも聴くも同じこと、二時間余りに亘る聖書講筵及祈禱会で深くキリストの生命の中に没入し、あふるる真理の光を浴びた。集会が終つて戸外に出ると月が懸つてゐる。池畔に立つと光もろとも月影が池心に宿つてゐる。「田毎の月影」を思つてひとりほえんだ。加藤夫人のおとりはからいによつて愛餐。安らかなる眠りを与えられる。

翌十六日の朝、再び集会を開く。集会が終つてある姉妹のいかにも歓喜に溢れた顔を見て嬉しくあつた。今は天界にある小島己良君の入神の祈りによつて救への道が開かれた魂であるから。須賀川駅で加藤、桜井両兄及服部ミノ姉、佐藤とみ子姉等にお別れする。

塩釜

郡山駅で平山、勝山両兄と別れる。両兄とも勇んで去つた。東北線上白石のあたりで新学年の教科書を有つていた女子高校生と語りつつ楽しいひと時をもつた。併しこんな魂に福音の光を燈してやりたいと思うと教育の大缺陷を感じ、根のない文化で養われる乙女らの魂のため人知れず嘆息した。ど



東北新生園長鶴田牧師と

の乙女も私の胸の中の悲願を感じてくれなかったが、「あなた方東西の偉大な宗教家の伝記はお読みなさいよ」との言葉は忘れてもらいたくない。

仙台駅頭で藤井先生時代の最旧友佐藤勲兄とその家族の出迎えを受ける。会社の自動車で復興の仙台市を一巡して塩釜の自宅までドライブしてくれる。戦時中よりも元氣になられた母君にお会いする。懐旧談にも華が咲く。家庭集会となり、私の信仰の境地を一時間ほど語る。多くの旧友がみな私を解

し得ないのであるが、佐藤兄はよくうなづいてくれて嬉しく思った。小枝子夫人も私のヘブライ語のクラスの旧友で、詩篇一二一篇を今でも原語で憶えていてくれた。

登米

翌十七日朝塩釜を辞して、仙台に出で、東北本線を瀬峰で乗り換え、仙台線の終点登米駅に着く。武蔵野幕屋の会員大槻大寿君の出迎えを受け、小学校へ直ちに向った。校長や教頭先生に面晤。階上裁縫室で「日本人と宗教」と題して講演をした。

聴衆は町の一般者、高校生等。中には日蓮宗の僧も居た。思うところを忌憚なく語った。夕刻大槻君の自宅へゆく。庭前の樅の大樹に感嘆した。天然のクリスマスツリーである。内村先生の「デンマルク国のはなし」も想い出される。

同君が既に二、三回伝道して準備態勢にあつた農村の逞しい青年八名、年輩者三名、乙女三名を相手に集会。聖書を講じたのち深く祈った。彼らも魂をそそいで祈っていた。或る青年はキリストの祈り給う聖姿を靈に於て見たと告げた。或る者は合掌の手が離れなくなつたと言う。或る者は、疑問がすべて氷解したとて歓喜する。

もうひと息と思つたので、再び私は語り出した。かくて再び深き祈りに入る。彼らも魂をうちこんで祈り出した。「天国は烈しく攻むる者、之を奪う」、キリストの言に端的に従つて、参集のこの農村の青年らはついに突破した。感謝と歓喜に溢れ、讃美歌を高らかに歌つた。或る青年は「三百年生きながらえて伝道をした」との抱負を語つた。頼母しい青年たちである。しつかり聖書を身読し、且つ学び且つ祈り且つ働いて将来大いに聖霊の展開をしてもらいたい。日本は農村漁村の青年たちの魂が福音に立ちあがることによつて精神革命を起すであらう。十年靈剣を鍛えよ！（エペソ書六・一〇——一八参照）。昔の高僧たちも軽挙妄動はしなかつた。

集会終えて愛餐会。楽しい夜が更けてゆく。明くれば十八日、炉辺で大槻君の御両親としばし閑談。快晴の空の下登米の町を去る。駅頭に前夜集会を共にした青年たちが歓聲を挙げて見送つてくれる。

瀬峰

瀬峰で下車、バスに乗り換える。国鉄医師佐藤憲太郎君と一緒にいる。同君を通して鴛田牧師のお招きにより東北新生園国立癩療養所を訪ねることになったのである。素晴らしい高原の環境である。所長からいろいろ新生園の状況を承る。園内慰安会の運動により、宮城、福島、山形、岩手、諸県からの寄附が募られ、慰安救護の施設の進められているのはうれしいことである。救癩協会及カトリック仙台教区の寄附により、夫々、新教及旧教の礼拝堂が建っている。現在患者総数約六〇〇名中、新教約一六〇名、旧教約七〇名、仏教約一六〇名、天理教約一一〇名、其他約一〇〇名。即ち大部分が信仰有り、そのうち約半数がキリスト教である。

午後二時から大講堂でキリスト教の本質に関して語った。併し私は所謂講演するのでもなく、説教するのでもないとして語った。二時間余りに亘り満堂の患者が心奪われるようにして聴いてくれた。少憩の後夕刻から礼拝堂で集会を開くことになった。ぎつしり百数十名の来会者である。一般の療養所では見られぬ盛況であるのに驚き且つ敬意を表せざるを得なかつた。マルコ伝によつて聖書の身読がどのようなことを展開した。満堂一つの聖霊、一つの心、一つの体となつて、聖書の現実の中に没入した。ひきつづき祈りに移った。私はもどかしくなつて患者の真ただ中に降り立つて天を仰いで大声に執り成しの祈りをした。一同の魂も心も深く聖霊に感動しているのを見た。讚美歌を力一杯

歌つてくれた。彼らが必ずや小さきグループをいくつもつくつて祈りの集りを展開してくれることを信じ且つ望んでいる。

講演と集会を終つて八時すぎた頃、新生園療養所長、日本新生基督教会牧師鵜田雄二郎氏、新生園厚生事務官大庭彦定氏等と会食にあづかつたが、まことに楽しい晩であつた。鵜田牧師の伝道談を深い敬意を以て拝聴した。健全なる独立伝道者をここに見た。鵜田氏の東北に於ける独立伝道に聖霊の光と愛と力いよいよ加えられ、聖名に栄光あらんことを。鵜田氏も私に会い、十五年振りでこんな集会を有つたと心底から飲んで下さつた。私はただ半日のお手伝をしたに過ぎないが、主にある兄弟姉妹とかくの如く親しく聖名を讃え、主のいのちを共にし得たるを歎び、わが酒杯は溢れた。鵜田氏と共に日本の基督教界のため深く祈つてお別れをした。

私は大槻君と園内一泊。大槻君は翌朝早く起きて園内の児童に聖書のおはなしをしてくれた。朝、新生園を辞し、仙台で途中下車。もう一度会いたいという佐藤勲兄に会う。登米、瀬峰の伝道談を聞いて聖名の讃美を共にしてくれた。仙台一らしい与五郎鮎ではなく、原始魚（プロトイクス）を食べて永遠に生きようとしている。但しこれはマダガスカル島近海で発見されたものとは異う。この原始魚はイエスが神の全能によつて五千人に食わせ給うた魚の原質体である。これなくして私が生きていられない霊魚とは何であらう。

登米の産、農村の青年、東京で自活の道をたてながら大学で勉強している大槻君と急行で帰京の途

に就く。急行列車に生れて始めて乗るといつて喜んでくれたとき私の胸は熱くなった。

峰の雪と心清く

雲なきみ空と胸は澄みぬ。

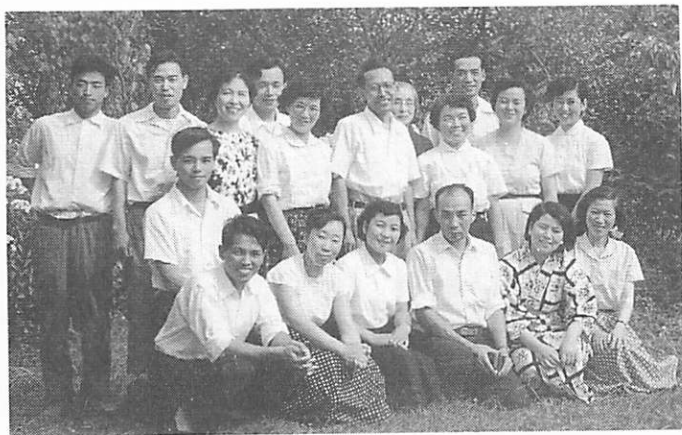
六泊七日、集会十三回延べ約三十時間の伝道旅行であつた。私などは忘れて下さつてよい。たま兄弟姉妹たちが一人も退くことなくひたすらキリストの燈火を胸にともして進み往かれんことを念願してやまない。

A 内地伝道旅行

四 小諸伝道

○ ゲーテの大作『ファウスト』、独乙文学の最高峯としばらく取っ組んでいる。この天才の豊かな全生涯の体験と智恵には驚嘆するが、その靈的次元のつきぬけ、浄化作用の澄明度は如何。人間の限界を知る彼の謙虚はよいが、無限界の世界に栄化せしめんとする天来の大恩恵に対しての絶対的投身の精神は如何。ともあれ、ゲーテは偉大な魂である。凡そいかなるイズム（主義）もこれを容れ得る器ではない。

○ 早大の夏季講座で法、政、経の一部の学生と共にヒルティの“Die Stufen des Lebens”「人生の段階」をテキストとして四週間で講了したが、その最後に近きところに「死、そのものがその国民または人類にとって何らかの行為であるとき、神はこれを最も嘉し給う」という言葉があるが、口やかましい「信仰」は本当にいやになる。救主キリストは言わずもがな、まことの人間の死はこの様な行為的愛の死であった。脚註にゴルドン・パッサの死のことが書いてある。徳富蘆花の「ゴルドン將軍



ささやき荘庭前にて

伝」を、読者よ、折あらば読まれたし。噫、ゴールドンの碧血よ！ かつてあれをよんだときの感激はいつまでも私の血の中に流れている。

○ 六月六日のペンテコステには、北は福島県の山奥から木村健彦君、南は逗子から藤垣薫様—この方に「おばあ様」というところびどくお叱りを受けるほどの「永遠の女性」です。—東は瓜連、磯浜方面から平山勝明氏夫人、藤田みつ姉、瀬谷八重子姉、宮田清子姉、勝山、小松崎兩兄弟、西は清瀬から長谷川静子姉、小池芳子姉、青梅から荒井常子、栗田恵子の両姉妹等、それぞれの幕屋を代表するが如くして参集。ペンテコステの天来の火花は薔薇の花となって馥郁たる芳香を堂にあふれただよわせた。田崎竹子姉から贈られた沢山の薔薇がその役割を果たしてくれたのであった。満堂の集会ではあったが、四方から参集した兄弟姉妹の意気込みに比して武蔵野幕屋そのものの魂の準備不足を



小諸駅頭にて、小諸幕屋の人たちと

直覚したこと、及びいくつかの遠因もあって、私の天来の霹靂の声に従って幕屋の解散を宣告した。結局は私自身が聖前に平伏すはかなかったのである。遠方からの来会者は全く驚かれたに相違なかった。高木君が司会してくれた。私は直ちにルカ伝第十四章第十五節以下を天より示されたので、これを読みあげて、先づ解散の意を語り、導かれるままに聖霊の御恩寵を語り、聖霊に在っての原始福音の一途を強調した。

感話会、祈禱会に悔改の雨、恩恵の霊降り、皆志を新にして十時頃散じた。地方からの兄弟姉妹は、翌朝、よろこび勇んで帰って行った。

○ ペンテコステの解散以来、七月四日新たに開幕されるまで、幕屋の兄弟姉妹らは思い思いに集って祈禱会をひらいて準備をしていた。ある青年は新約聖書をその間に祈りつつ読み通した。果然、七月四日からの集会は「聖霊の維新」の感歴然たるものがあつた。必



小諸のひまわり荘に於ける夏の特別集会

ずや飛躍的前進をなすと確信していた通りでうれしかった。

○ 清瀬幕屋、青梅幕屋を訪ねて集会をもつが、原始福音を愛する魂のかがやくすがたを見るにまさるよろこびはない。各地の読者が各地に於て孤独でなく是非幕屋をひらかれるように、御連絡があれば出来るだけ御援助にゆく。八月は、福島療養所、磯浜の両幕屋、小諸、屋代、岡谷の幕屋を訪ねる予定。

○ 八月六、七、八、九のまる三日間は水郡線上の近津駅から西方、八溝山中、真言宗の寺小屋に籠って有志と祈る予定。期せずして九州の彦山参集と時を同じうすることになる。東西相呼応して祈りを天にあげ、主の聖別にあづかり、原始福音による推進力を興えられるであらう。

○ 五月始め小諸伝道をした。

五月のはじめに小諸を訪ねるのは三回目。第一回的时候は四年前、当時病身であった川口愛子姉と瀕死の床にあった儘田伊都子姉を見舞った。第二回目は、二年前川口姉の母君の告別式のとき。彼女が神癒の恩寵を受けた際、その役を神様から命ぜ



小諸のささやき荘における夏の特別集会（1956年夏）

られた私は――私がそもそも神癒の賜にあづかった最初の体験として、――その証人である。当時ある方面からガラテヤ書第三章の始めを以て私は攻撃を受けたが同じ箇所を以て私は応えることができる。即ち「我ら御霊を賜わりて、我らの中に能力ある業のあらわれたるは、観念信仰にも、御利益教にも由らず、原始福音を受けとりたるまことの信に由る」と。

川口姉の家は「ひまわり荘」小諸幕屋の名を以て呼ばれるが、五月一日到着早々、幕屋の諸兄姉と小諸国立療養所を訪ねる。一同鶴首して待っている。二時間の集会・個室を幾つか歴訪。帰途見送ってくれた。木内古寿、小池孝三、永井春夫、関口徹、山崎進の諸君と星空の下、草の上に跪いて深く祈った。按手を以て霊信の勇士のため、キリストのみ霊のはたらきを堅うした。カトリック、

プロテスタント以前の原始福音、正にキリストと聖使徒たちのなまの福音を、その終末性、永遠性、靈性に於て把握せしめられた者は、もはやいかなる信条や神学説や、主義や教派によって動揺せしめられない。聖書を媒介權威としてただ限りなく根源の世界に入りゆき、キリストに体现した聖靈、聖言の權威のほか何ものにも屈しないからである。極めて平安な懼れなき人とされる。小諸の兄弟姉妹たちもその様にして浅間高原に靈燈をともしているのを見て本當にうれしかった。最近山崎進君から驚嘆すべき手紙を受けとった。アッシジのフランシスも遠くない境地である。私はこゝかしこの若い兄弟姉妹たちの著しい進境をみて本當にうれしい。どしどし前進してもらいたい。私が殿しんがとなることこそ最も希望しいことである。ある人々は私の事を「彼はゆきすぎをやっている」と申している由。

「おお、従来の教会無教会の人々よ、私はゆきすぎどころではありません。まことにまだみじめなもので、ゆき足りなくて仕方がないのです。予言者や使徒たちや日本の偉大な高僧たちや印度の聖者たちを想うと、私はまだヒマラヤ山麓をあるいているに過ぎないのです。」とお答えしなければならぬ。

Y君と懷中電燈を道しるべに夜路を楽しく語らいつつひまわり荘に辿りつく。夜も楽しい愛餐会。

五月二日(日)午前、日曜集会。マルコ伝の一ヶ所。午後、小海線で千曲川療養病院伝道。この病院が昭和医科大学と関係あり、その院長北村亮二氏も医師松本純治氏も昭和医科大学前身時代の卒業生で、私に独乙語を学んだ御連中であることがわかり、急に何か旧知の場所へ来た感じであった。

清潔な病院で心地よかった。集会につらなつた人々は初信者であつたが、よく聴いてくれた。高坂晴夫君、井出幸子姉の如き重症者が健康になつてこの日は同道した。夢のようであつた。

夜はひまわり荘の二階座敷で、吉村君司会のもとに十数名の会員と集会。驚くべき上からの力と智慧で自由無碍な聖書講筵、仏教の真理もその中に包攝、実にキリストの光は東西古今の真理を包攝するものであつて観念的な排除をなす狭量なものではない。ついに私は語るうちに異言にすらなつてしまつた。言で祈り、異言で祈る。靈風堂に満ち兄弟姉妹、悉く聖靈にうたれ倒れ伏す。この夕を一つの転期として、力ある前進を開始した幾人かの兄弟姉妹があると聞き、聖名を讃える。

翌三日は午前、小諸市のある病院に二人の姉妹をたずねた。午後は風さえ交る降雨の中を衝いて往復約三里の山路を吉村君と歩いた。この日の印象は深いものがある。菱野では、佐藤すえ姉をはじめ姉妹のみ十名ほどで、尽きぬわかれをした。病院の設備わるく、医師も不足がちときく。自然の環境は素晴らしいのだが、病院そのものは古さびれた感が深い。姉妹たちの靈的活力が一切にうち勝たんことを切に祈る。菱野訪問以来ペンテコステまで、特に菱野のために祈つた。

かくて小諸伝道は終り、その翌日に午前わかれを惜しむ小諸幕屋の吉村君、川口姉、通称まり子、みどりといった姉妹たちや掛川雄吉氏夫人に見送られ、西川和子、小川多鶴子両姉と同道で帰途にく。

○ 誌上に紹介したい書翰が山積している。「文庫」のなかに時たま書翰集といったものを交えよう

かと思う位である。諸君たちからのおたよりはうれしいが、到底一つ一つお返事は書けない。

○ 日曜講筵、ロマ書、ヨハネ伝、マルコ伝、ヘブル書と筆記も山積しているが、誌上に載せたら、百数十回にもなるだらう。当分文庫にまとめあげる時間もなく放置のままである。世には註解は沢山ある。もう類型的な形態のものを書いて、読者をわづらわせる気持ちは全くない。兄弟姉妹たちとの礼拝講筵が一番楽しい。

楽しみは聴くも語るも同じこと

聖霊みたまにありて聖書きみ学ぶとき

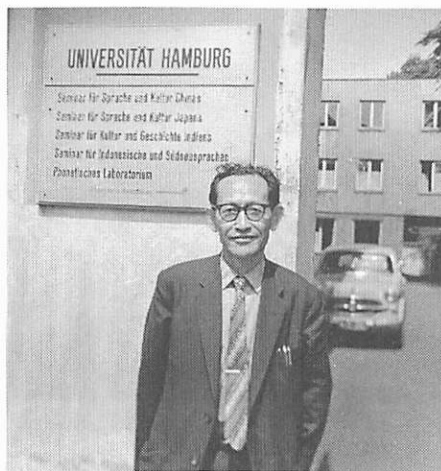
B 海外旅行

一 ドイツだより

(一九六一年晩秋)

a 鍊光術

○私は本年(一九六一年)四月二十八日午後十時半、羽田空港を飛び立って、北極まわりで西ドイツのハンブルク空港に天皇誕生日に当る二十九日の午前七時に着きました。東京とハンブルグは時差八時間ですから、十六時間半で来てしまったわけです。しかも途中一回アラスカのアンカレッジ空港で給油のため一時間ほどの中間着陸をしますから、飛行時間は十五時間半というわけで、おどろくべきスピードです。物理に弱い私などには、あんな重い大きな物体がよくも一万メートル以上の上空を飛び得るものかと思えます。飛んでいるときは電車よりも汽車よりも揺れがなく、すべてが不思議のようでした。何しろ私はおよそ飛行機なるものに生れてはじめて乗ったので、何もかも目あたらしかったわけです。



1961年7月10日、ハンブルク大学日本学研究棟、三階の右建物の室が、交換教授：安藤、小池、小城、星野の我々四名が相前後して勤務した研究室である。

○私の用は、ハンブルグ大学の日本学講義の一端を承るためで、講師 (Lektor) または客員教授 (Gastprofessor) などといわれる職で、こちらの公務員となったわけです。ですから、体格検査の如きもなかなか厳密なものでした。期間は来年の四月末日まで一年間ということになっています。こちらの大学は夏学期、冬学期の二期制で、夏休暇は八月、九月、十月の三カ月、夏といっても、日本の内地で考えるような夏とはおよそちがひ、暑いと感じ汗を流すような日は数えるくらいしかありません。

日本学 (Japanologie) を専攻する学生は勿論少なく、寺小屋的な感じで、授業としてはやり易く、親しみ深い気持ちのよいものです。夏学期では、初歩者と既習者に、夫々語学的及び文学的なものを主として会話形態で講じましたが、冬学期ではその他に「日本の精神史概説」(Einleitung in die Geistesgeschichte Japans) を講じてみた。目下準備中があります。日本学専任教授にはベール先



1961年4月～1962年3月 HAMBURG で1年間この S-Bahn (バーン) の西北終点に近い Wellingsbüttel (ウェリングスブュッテル) の駅から通勤した。

生 (Prof. Dr. Benl) とヴェンク先生 (Prof. Dr. Wenck) とが居られます。

○なおその他に、こちらのルッター教会に原則的に毎日曜日出席しています。二人の牧師が大体交代で日曜礼拝を行なっています。ホーベルク牧師 (Pastor Hohberg) とライヒムート牧師 (Pastor Reichmuth) とです。礼拝様式はカトリックほどではないのですが、相当型にはまったもので、無教会畠に育った私などには、どうもピンときません。讃美歌はしかしみんな身についたもので、よどみなくうたいます。すべてが習慣的な感じを受けます。

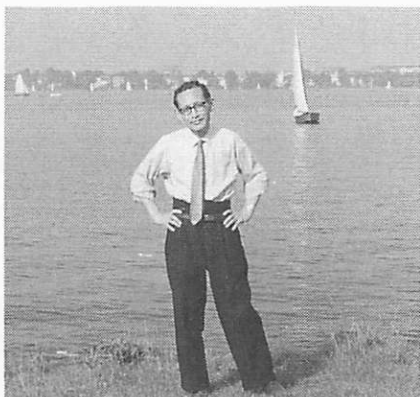
概して中年以上の婦人が多く、青年男児が一番

少ないようです。これはどこも大体同じ現象かも知れません。

私が一番なさけないと思っっているのは、讃美歌は備えつけのものを借り、聖書は殆どもって来ないということ。牧師さんのよむのを聞いているだけです。これではルッター教会の名に恥じねばな

らぬでしょう。ルッターは聖書をすべてのドイツ人の日ごろ親しむべき書にしたいために翻訳をした
はげです。私はそもそもこの教会 (Lutherkirche in Welingsbüttel) を大学学長ティリッケ博士
(Prof. D. Dr. Helmut Thielicke D. D.) の御紹介で訪ねたのですが、牧師さんにたのまれて、第一回
は、私の信仰の経歴及び私の集会などについて語りました。第二回からは、聖書時間 (隔週木曜が原
則的) の担当で「執拗な寡婦」の譬話 (ルカ一八・一一八)、第三回は「パリサイ人と取税人」の譬話
(ルカ一八・九—一四)、第四回は「なざけ深いサマリヤ人」の譬話 (ルカ一〇・二五—三七) を講ず
るようにたのまれました。本号の主題は、即ちこの最後のものです、こちらでこれと同じ内容をドイツ
語で語ったわけです。

さきほども述べましたように、自分の身体の一部とも思うべき聖書をもたずに教会にくるくらい
なら、来ない方がいいとまで言いたい位です。内村先生が開拓した道は、各人が聖書を読んで生きる道
であったのです。その点は何といっても、無教会は正道を踏んでいます。私はそれで、こちらのはな
しの中で、「私は既に三冊の聖書を読み破って今使っているのは四冊目です。私の聖書はこの通り書
きこみだらけだし、そこから補布としてあるので、これもそろそろダメ (カブト) になりかかっ
ています。皆さん、聖書は私たちの身体の一部ですから、これをもたないで教会に来ることができ
ますか」と語りました。そして、その次の日曜日に壇上から牧師さんが、プロフェッサー・小池が
こういったとって会衆に説き、「我々ドイツ人は、世界に誇るべきルッター訳聖書をもっているの



1961年7月 アルスター湖畔にて

ですから、もっと聖書をよみ、これと親しまねばなりません」というように勧めてはいたが、あまり効目はなかったようです。

何さま信仰にかけては、幕屋の兄弟姉妹たちは決してヨーロッパにもアメリカにもどこにも出かける必要はないです。最高最深度に向って進みつつあることを自覚して、いよいよ無即無限の豊かさを贈りつつ前進していただきたい！

○夏休暇に入って間もなく、即ち八月七日（月）にハンブルクを出発して西ドイツを8字形に、スイスの北部を杓子形に周遊旅行をしました。私にとってはなかなか有益な旅でした。紀行文を書くほどの時間の余裕も紙面もないので、残念ながら次号にゆずります。

○東大教養学部学友会機関誌『学園』編集部から、「ドイツだより」の注文があったので、数枚書いておきましたから、折があったら参考によんでみて下さい。秋十一月頃出版になるでしょう。

○八月十一（金）十二（土）十三日（日）と三日間に亘り、箱根芦ノ湖畔の成蹊大学の寮を借りて、武蔵野幕屋の内輪の特別集会を開きました。荒井大寿、長坂光彦、杉本善男（ABC順）の三君が分



ハンブルク西北郊外のこのロッテパウルスさん (Frau Lotte Paulus) の家の一室が、我々 (安藤、小池、小城、星野) の城、四人が相前後して同じ机、同じ椅子、同じベッドで仕事をし、寝起きしたわけである。

担して聖書を講じ、感話会、祈禱会をなし、全員夫々役割を分担して、快きチーム・ワークで、非常に恵まれた集会をもった由、感謝に堪えないです。私が周遊旅行を終えてハンブルクに帰って来たら、五十通あまりのたよりが待っていました。大方この特別集会に参加した各人の心よりの感謝のたよりで、私はこれを読みつつ天国にある心地でありました。その後、講義も感話も録音テープで送って来たので、これをこちらのテープレコーダで聴き、

集会の再現で、その場にいる想い。ドイツで箱根集会の雰囲気につれ得ると思わなかっただけうれしくあります。箱根集会のことは別項「第八回福音夏季箱根集会報告」参照。

○こちらの新聞のトップ記事は殆ど毎日ベルリン問題を中心としたものであります。ちょいちょい悲劇も起っているようです。ドイツ諸政党和国家議員の選挙の結果、絶対多数党が出来なかったことは、対外的には弾力性が出来て却てよかったのでしょう。とにかく世界は大悲劇を招来しないように、少なくとも政治家たちが大乗

的にこの危機に処するのではありません、とりかえしのつかない気狂いざたとならぬとは言えません。もはや（本号で力説したように）問題は人間が本当の人間愛を回復できるか否かにかかっています。二十世紀後半の最大問題は人間愛の回復であり、その本道は神の大愛に浴するにあります。

○私の現住所なるハンブルグのウエリングスブュッテルというところは、市の中心から三十分ほど北の方へ、エス・バーン（S-Bahn）という東京の中央線のような高架線に乗ってゆきます。郊外気分、庭をもった家が多く、森や芝生は見事です。

○日本学ゼミナールからは数分も歩かないで、アルスター湖畔に出られ、ビンネン・アルスター湖とアウセン・アルスター湖の間に美しい芝生の丘があつて、この芝生は立入禁止でないので、私は天気のよい日はよくここに腰をおろし、いろいろ冥想にふけり、想いを日本の皆様に馳せます。特に夕景が何とも言えません。私の最も好きな冥想と祈りの岸です。本号、扉の写真は、八月三十一日に、こんど渡独された信友奥田昌道君（京都大学法学部教授）に私の写真器で撮ってもらったものです。写真器は、私がこちらへくるとき、おつかい下さいといって、旧き信友望月健一君（建築技師）がくれたものです。奥田君とはこの日、湖上にボートを浮べ、日没まで愉快に漕ぎまわりました。あんな美しい夕景はこちらへ来て始めてでした。彼はやがてケルン大学で研究員として生活されます。奥田君は京都の市川喜一君、大津の私市元宏君らと共に我らの信仰の新らしき仲間です。

○私が厄介になっているパウルス夫人は、織物業を営んでいます。三人の息子と一人の娘をもった未

亡人で3北ドイツ人の気質をもった人です。私の室の前に見える二本の林檎の樹は、来たときは花ざかりでしたが、今（九月下旬）は、赤い果がたくさんなっています。寒いところですが、よく花は咲き、果がなるのでおどろいています。ひまわり草などもとても大きな花が咲くし、コスモスも日本より大輪です。人間と同様、花まで大きいかと、少々あきれています。我らはせめて、たましいだけではなくなればダメですよ！

○皆さんからのおたよりに一つ一つお返事は到底書けません、内地にいるときとちがって、非常にうれしいわけで、たんねんに拝見しています。『曠愛』誌の古いのも私の手紙だと思って読みかえして下さい。また本号は、公信であると共に、お一人と一人への私信でもあります。どうかそんなお気持ちでお読み下さい。どうか心一杯に秋の日をお暮し下さい。御平安と主の護りとを祈上げます。

○「在独偶感」（一）は紙面の関係で、選集にしましたが、いずれ後日更に載せ得るでしょう。なお『茨城歌人』という歌の月刊誌七月号に二頁ほど載っていますから御参考までに。同誌は我らの信友にして専門の歌人笠間規久夫氏（本名、田崎秀氏）主任編集の和歌編集の和歌及び歌論の雑誌です。同君はかつて再起不可能とも思える病床から、福音の力で立ちあがった人です。

今日、九月二十二日をハンブルクで迎える。十時すこしすぎ、いつもの如く郵便配達夫が「リー」とベルを鳴らす。パウルス夫人が私を呼んだ、金をうけとるためにサインが要するというはなし。「はあ、もどって来たか」と直感。金の由来。私がこの夏の最後のコース、ケルンからハンブルクの

車中で、例の如く車掌が乗客の切符のしらべをする。私の周遊券は二ヶ月有効の手帳である。ところが車掌がこれは無効、期限きれたという。私がスイスからドイツへ入ったときに別な列車の車掌が押した日付をみて、この日に期限が切れているといつてきかない。とうとう車内監督を呼びに行った。

大男の腕章をつけたのが現われて、同じことをどなるように言つて、私の説明を耳に入れない。あきれたはなしである。もしその日から無効なら、私はごまかしつづけて乗ってきたことになる。各駅員が私を通さなかつたはずである。不合理もはなだしい判断をくだすものかと思つた。私の見ている前で最後の二枚に大きくバッテンのしるしをした。そして三十七マルクはらわされた。そして私の手帳をとりあげたから、私はそれは記念にとつておくのだから返してくれといった。やっとそれは返してくれた。私は言つた、あなた方は全く私を誤解している、私ははらつたが、あなた方のいうことはわからない。私の説明にいつわりはない、と。楽しかった旅も最後の線で一時は大なしの不愉快さである。私の前に坐つていた少女が、手帳に何か書きはじめた。そしてそれを破つて私にわたした、これを駅員におみせ下さいと。よんでみると、「この人の切符が無効だといつて、この人は金をはらわされましたが、私はこの人の言うことが正当だと思うので、よく調べてあげて下さい、一人の同乗者より (Mitreisender)」とあつた。私はその少女に礼をのべた。Mitreisender (同乗者) は Mit-leidender (同情者) であつた。他の客たちは知らん顔、ガマガエルのように無関心なもいた。多分この東洋人は、ごまかしたんだろくらいに思つたのもいるらしい。少女はまもなく自分の駅で降

りた。私はもっていたチョコレートをみんなやってサヨウナラをした。私は夕陽を車窓からながめながら、冥想にふけた。人生！ 私はすべての出来ごとをついには光に変質させる秘訣をキリストの福音から受けとっている。錬金術ではなく錬光術である。金はどうでもいい。身の毒なのは、「思いこんだら百年目」というドイツの頑固さと思った。そういう頑固な鉄心をも溶かしてしまうのがキリストの福音だ。私の胸の中の福音的白熱がすべてを光に変質させる。私はすべてを感謝してハンブルク駅についた。少女の紙きれは見せなかった。駅員三人が私の周遊券を見て文句なしに「あなたが正しい」といって、然るべき手つづきをし、周遊券をシュトゥットガルト本局に送達した。そのしらべがすんでかれこれ一ヶ月、こちらが忘れかけていた頃、しかも、私の兄の四十年の日に三十七マルクもどって来た。ルカ伝第十五章の「失せたるものが再び得られた」思い。これは天からの恩恵と、私は午後から市に出かけて、本屋に入った。そこでヘブライ語の聖書とギリシャ語のめづらしい版の聖書を買った、三十七マルクは完全に旧新約聖書に変わった！ 四十年！ 天界の兄を想うと胸が一杯だ。まだ地上でどんなにも活躍できた素晴らしい兄、信仰深く、愛情あつく、しかも男らしかった兄、智能優秀なことに私の数倍の兄。まるでこの兄から贈られた聖書のようだ。私はこの日からこの原典をよみはじめた。たとえ一節でも二節でもこの原典をよまずにすごす日は私の死にいたるまであるまじく心を定めた。（本巻四二九頁―四三五頁「小池政美」を参照）

b 飯城^{ハシフル}雜感（一九六一年十一月）

御無沙太いたしました。それでは若干所感を書かせていただき、おたよりいたします。四月二十
八日、夜陰に乗じて私はこっそり、しかし、D=ZEUG（陸の急行列車はD=ZUG〔デー・ツーク〕、
空のはD=ZEUG〔デー・ツォイク〕DÜSEN=FLUGZEUGの略、ただしこれは私の創案で一般に
は通用しませんからそのおつもりで）は、けたたましく爆音をたてて飛び立ちました。何しろ飛行機
というものに生れて始めて乗ったわけで、何か別世界へ入ってゆくような気持でした。多分たましい
が肉体を離れて天界へ旅立つときはもっと自由な消息なのでしょう。

離陸せりわが人生の前編に

訣別^{わかかれ}を告げし出日本なり

いろいろな意味でこれは実感でありました。雪に蔽われた山々と針葉樹林の間に横たわるアラスカ
のアンカレッジ空港に中間着陸をして程なくまた北極圏内深く飛行機は突入、三万呎以上の高空を飛
んでゆくのでした。眼下は渺茫たる雲海、頭上は底ひも知れぬ紺青の空。見ゆるは二つの天球、まる
で創造の日の如く！

„Die unbegreiflich erhabenen Werke

Sind herrlich wie am ersten Tag“

ゲーテの感興さながらでありました。

北陸のかたへ飛びゆく雲の上、馬手に満月あり、弓手に陽あり、東西に陽と月の相見ゆる大らかな大観に私は驚異しましたと共に、東西文化の融合、東西陣営の鉄壁のとりはづしをしづかに冥想し悲願しました。こちらへ来ましてから四カ月、近ごろは殆んど連日、ベルリン問題をめぐってのトップ記事。悲劇もちょいちょい起きて読む者の胸を痛める昨今、いよいよこの悲劇を深めております。個人間も国際間も根源相をしづかに冥想してみれば同じこと。人間はイデオロギーを主張して互譲の精神を欠いたなら反目、やがては、必然のいきおい。特に権力意志と利益衝突の主体である国家といふものの相互間においては、武力を背後に有つ限り、武力的行動への発展の危険性、可能性を含んでいふことも自然の理であり、世界歴史はいくたび同様の悲劇をくり返したことでしょう。二十世紀は前半において大戦争をすでに二回起し、「二度あることは三度ある。」などともはや冗談にも言えない深刻なるべき第三次大戦は、どうあっても起こすまじきものであり、冷静に想えばあまりにもバカげた大自殺行為であるにも拘らず、これを真剣にくいとめねばならぬというバカけたまじめさをもたねばならぬとは何とバカげたことではないかと思う。

イデオロギーをもつことは理性的存在である限り必然であろうが人間間、社会間、国際間の和というものは、本当の平和というものは、イデオロギーの調整で来らせようとしても無理なはなし、イデ

オロギーの自由を尊重し、限界をわきまえ、もう一つ高所から自他を顧み、包摂し得る心根を少なくとも大国の政治家がもたねばならぬと痛感する者であります。

ネールという人物はインド的宗教性においてそのような心境をもっている人のように思われます。そしてそれは万人がもつべき心境で、神仏を信じない意識の奥においての、人間の深層意識についての、万人共通の真の人間性であります。今や真の人間性に目ざむべき重大な時であります。一般の社会問題、国際問題の奥に不問に附せられている真の人間性への目ざめこそこの二〇世紀後半の危機を脱せしめる正しき道であると痛感いたして居ります。イデオロギーのみに執着しているようなたましいは、ほどけ(仏)ていない場にあるわけで、真にものを「イディン」(見る)する主体は万人の根源にあるブニューマ(魂)であることを忘れているわけであります。「平和」の「和」は愛のないところになく、平和を百万遍唱えることも、単なるデモ行進をなすともむなしきこと、「和」の主体と相互がなつて人間共存の心の語り合いが行われ始めて結構なことですが、どうか、人間の真の思いやりが相互において働きたいものであります。

日本が敗戦の結果、所謂カイザー・クルトや封建精神から解放されたことは結構なことでしたが、自由と責任と信愛とが不可離であるべき真の民主的精神は残念ながら未だしであります。そこへゆくと、ドイツは何といつても四百年前に宗教改革を起した国であり、哲学的思想の訓練を経ておる国であるだけに、敗戦後の青年たちの気持ちは現今の不安の状況においてもおちついたものである印象を

受けます。なるほどこちらにも「ハルプ・シュタルケ」といわれる所謂「いかれた」青年たちもいるらしいですが、それが社会にいやらしい影響を及ぼすといったことはありません。

こちらの大学生は御存知の如く、学問の自由の故に、自分の研究したい学問は何でも聴講の自由をもっていますし、試験といったものはありませんから、おちついてうちこんで勉強や研究ができます。いろいろな社会事情が異なりますから、直ちに日本がドイツのような具合にできませんし、それが直ちにいき結果をもたらすわけでもありませんが、とにかく、小学校から大学卒業まで試験々々の悪夢を見つづけるような学校制度については、大いに日本文化の健全な発展のために百年の計を建て、大改革を必要とするように思われます。そのための審議が事実行なわれつつあることはいつか紙上でよみはしましたが。一般の市民生活を見ても職業に貴賤なく、自分の職業を気持よく、且つ平等の権利をもっているといった調子です。勿論そこには味気なきふしもあって、我々日本人には国民性の上から決して感心ばかりはできませんが、とにかく合理性がゆきわたっているようです。現実にはその合理性のためにドイツは実にヤボだという印象も受けることはしばしばありますが。理髪屋なども分析的で、斬髪と髭そりと洗髪と香水水類の使用など皆別勘定。私は第一回のとき日本と同様にやったところおそろしくとられて、ドイツ語のききちがいかと思っただけでしたから御用心。ドイツ人が日本へ行ったら、サービスはよいし、日本人は気がいいし、物価は安いし、長く住みたくなるのは当然でしょう。言語だけはドイツ語よりはるかにむづかしいので彼等は辞易するのでしょうか。理髪屋も夕

方の六時となれば一般の店と同様さつと店を閉じてしまいます。土曜日は半日、日曜は休みですから、勤め人はいつ理髪屋にゆくのかと思うくらいです。大体チョコチョコと頭を刈るだけが原則で三〇分もかからぬのでチョツとした時間を利用して理髪屋に行くわけです。私には経済のことはわかりませんが、同じ労働時間でもドイツの方がゆたかに受けているでしょうし、人口と財との関係も日本よりはるかに楽なパーセンテージであるわけでしょう。

さて国民性ということになれば、やはり私は日本人として何といつても日本人は一言でいうと好い国民だと思えます。勿論ヒトラーの様な意味でブルート（血）を絶対化して考えたりしたらとんでもないと思いますが、ブルートと関係の深い国民性には夫々のよさがあって、こちらで日本人にあえば気が楽になるのも自然の理でしょう。私の飯城での（これは「めしのしろ」などと読んではいけません。日独重箱よみでなかよく「ハンブルク」とよんでください。尤も、私はこちらでドイツのおそまつな月給官吏で、ともかくここは私の「飯の城」かも知れませんがね。納税も毎月〇〇〇DM程実行していますから、善良な市民のわけです。）四ヶ月の生活の感じでは、北方ドイツ人はとにかくゴツイです。それだけ一面実直でもありませんが。はじめてSバーンという東京の中央線みたいな電車にのって感じたことは、ドアが「ガターン」と大きな音をたてて閉ることでした。電車に限らず、普通の住宅でもその通り。ドイツ人は鉄の音に快感と安心感をもつ国民のようです。半ば冗談にそういいたいのです。案外それが心理的な真相かもしれません。鉄が武力と連想をもつとすれば彼等の悲

劇性の一因をなしているかも知れません。うっかりこのドアに手をはさんだら、おせんべいになりますからドイツへ来たら御用心！ だから彼等は日常生活でもなかなかフォールジヒティヒ（用心深い）です。そしてよく「フォールジヒト！」「アハトゥング！」（危い！）などというのを聞きます。アウト（自動車）が高速で走っているから道を横ぎるときには正直、注意しなければなりません。そこへいくと日本の電車のドアなどは実に手ぎわよくできたものです。器具類をみても主眼は頑丈さにおかれており、日本の製品のような手際の上さとはおおよそ感じがちがいます。市を歩いて目だつのは中年以上の婦人のなかなが多いこと、しかも大体いかめしい顔をしています。若いのおおよそ大和撫子とは種族がちがいます。

何しろドイツ人はアイゼン（鉄）が好きな国民のようです。そして直線型が多く、うっかりぶつかったらけがをしますから、これも御用心。電車も汽車もヤボな型をしています。ただ喫煙車室と無喫煙車室とが区別されて、それがしっかり守られているようなところは秩序を重んじる彼等の美点であります。この夏、西ドイツを8字型に旅してみました。客車には上段下段の荷物棚があつて、上段のが大きく、大トランクものせられます。男も女も大きなトランクを提げて旅をしているのには驚ろきました。私は小さい日本人で小さい手提げをもっていたので貧弱なのが恥かしいくらいでした。日本の旅館のように何でも借りられるのとはちがうわけで、日本くらいサービスのいい国はないでしょう。鉄が好きで鉄を尊重することは日用品ばかりでなく、金婚式、ダイヤモンド婚式の上に何とア

イゼルネ・ホッホツァイト（鉄婚式）というのがあって最高位であることをみてわかります。結婚後七〇年も御健在の勇士と女丈夫がいましたらどうぞドイツへきて鉄婚式をルール地方でお祝い下さい。大いに歓迎されることでしょう。

ハンプルクは西ドイツ第一の人口の都であります。それでものんびりしたもので、電車の中に乳母車を持ちこんで買物に出かけ、大きな階段を前後から乳母車をひっさげて登り降りしている光景はちょっと東京の人には想像しかねるでしょう。東京では百貨店の下にU・バーン（地下鉄）が入るようになっていて百貨店めぐりができるといったら驚いていました。一般人は日本はまだ文明開化の未熟な国ぐらいしか思っていない認識不足であります。

日曜は銀行、会社、商店すべて休み（駅の売店は例外）、これは実にハッキリしています。勿論、宗教的な意味からする安息日であり、教会へ礼拝にくたてまえになっているからです。日本にもお寺は多いのですが、こちらの教会通いとは大分様相がちがいます。こちらでも中年以上の婦人が一番多く教会へゆくようです。私もこちらでルッター派の教会をたずねることを原則としていますが、礼拝形式が型にはまりすぎていて、どうも無教会畠にそだった私にはピンときません。しかし彼等の讃美歌は身についてます。牧師さんの説教自身はなかなか熱のこもったものです。大教会ではハンプルク大学総長ティリッケ博士や、神学の諸教授が説教壇に立ちます。そんなときは大学生も沢山聴きにゆきます。この夏学期中、ガスト・プロフェッサーであったティリヒ博士もトゥルナイゼン博士も語

っていました。私もこちらの教会のビーベル・シュトンデ（聖書時間）に数回語らせられましたが、
 型破りであるので却って面白いらしいです。私の見るところでは、信仰のことが一般に対象的角度の
 理解程度が多く真に主体的把握まで突入していないようです。このことが現代キリスト教の弱体化の
 原因でありましょう。宗教の本質は「に就て」の研究ではいつまでたっても周辺であって、「の中
 へ」、「の中から」、「の中において」の突入や把握や告白とならねばならぬからです。東洋的な把握
 には大切な角度があつたことを日本人は忘れてはなりません。それらのことについて、この冬学期、
 「日本の精神史概説」を講ずる際触れてみたいと思っています。この間、NEU・ULM（ノイ・ウル
 ム）という南ドイツのドナウ河畔の市にグンデルト博士をおたずねしましたが、——グンデルト先生
 は私が水戸高校生（旧制）時代に親しくドイツ語を教わった先生で、ドイツの日本学の権威者であら
 れますが、目下『碧巖録』の翻訳と解説に没頭して居られる八十余才の古老——先生のおはなしの中
 に、ヨーロッパ人は言語の上で人称の表現が非常にはつきりしているので差別相、対象化の傾向が強
 く、融合の境地になかなか入りにくい面をもっている。ところが日本人はその言語に人称や主語を略
 して用いる方が自然の場合多く、自他融合の境地がひらけ易い長所をもっている、といった意味のこ
 とを言われましたが、秀れた言語学者の御所見としてまことに興味深きものと思いました。日本人は
 既にかなり成しとげて来た世界の諸精神の融合を、日本的靈性を再自覚して更に雄大になすべき使命
 を負っていると思います。すでにインドのラダ・クリシュナが「精神の共同」ということを提唱して

いますがさすがにインドには大きなたましいがあらわれて来ます。私は今の若い人々が日本精神文化を大きく展開せんと志されんことを切望する者であります。その為には、ギリシャ的文化をのみ見るのではなく、ヘブライ的な精神、インド的な精神をよくその源流から把握して大きな日本精神文化の展開を志されんことを！

偉大なる原子力科学文明を真に文明の利器として用いらるために更に更に偉大なる精神文化が主体となるのでなければ、世界は危うしであります。人間は自ら作り出したものに逆に使われて、その奴隷となつて破滅しないとはいえないからです。自らは用いているつもりで皮肉なことに用いられるという結果におちいります。

夏の旅でかなり多くの都市の博物館、美術館を見ましたが、さてこの美術館でしたか、多分ミュンヘンだったかと思いますが、武器を鍛鋳に鑄造し変えている画をみました。これは実は旧約聖書のイザヤ書やミカ書に出てくる終末的な神の国への預言をモチーフにした画です。

「彼らはその剣を打ちかえて鍬となし、

その槍を打ちかえて鎌となし、

国は国にむかいて剣をあげず、

彼等はもはや戦争のことを学ばない。」

言ではなく行為をもってどの国がこれをまず実行するであろうか。平和はそこから実現するのであらう。

„Seid umschlungen, Millionen!“

「幾百万の人々よ相抱け」平和への、否、人類愛への、否、具体的な隣人愛への行為から真の活路は開かれてゆくのであります。

筆は北極の空からハンブルクの空港へつかぬうちに、四カ月のこちらの印象が雑感へと飛翔していましたが、やはり日本の青年諸君への私の悲願は駒場にいたときと不変であります。こちらの日本の両教授、ベンル先生もヴェンク先生も駒場の学生はよく勉強するとほめておられますから、どうぞそのよくが何かの「欲」の勉強でなく、限りなく善き且つ佳き雄大な抱負の勉強であらんことを念じつつ筆をおきます。

「神寂ぶる平安の天に一つの

物体は廻り、その功力の中に

その包むすべてのものの実有り」

〔藻風訳・「神曲」天国編 二・一一二―四〕

一九六一年九月十四日 ダンテ召天の日に。

（東大教養学部学友会誌「学園」十周年記念駒場祭特集号所載）

〔附記〕 第八卷「詩歌集」の「西独ハンブルク生活より」（四二―四六頁）及び「西独周遊旅行にて」（六五―七五頁）を参照して下さい。

B 海外旅行

二 帰路点描

(一九六二年五月二十五日)

ハンブルクのことは「学園」十周年記念号に「飯城雑感」と題して書いたし、夏休暇中のドイツ旅行のことは、「茨城歌人」誌に「旅人の見たドイツの横顔」と題して連載中であるので、ここではドイツからの帰路の一端を点描してみようと思う。

往路は北極径由であったので、帰路は南まわりということにして三月十六日、偶然にも父の命日に一年間のハンブルクを立ち去った。ルフト・ハンザ機がハンブルクの上空に舞い上ったとき、私の胸の中には、「さようなら、ハンブルク!。」

機中はわたしを算えてたった五人。なつかしいアルスター湖、その汀で幾たびとなく憩うた湖がやわらかな姿を横たえている。眺望にも冥想にも恵まれた初航である。リュールベック、キール間を貫いてLH二〇〇号機は海峡を渡ってゆく。一時間もしてヨーロッパの北玄関たる大空港コーペンハーゲンに着く。

ここを訪ねてみたかったのは、アンデルセン、キェルケゴール、グルンドウィヒにゆかりある地であるからであった。しかしその目的は私の想像ほどには達し得なかった。しかし、いつ読めるようになるか知らぬがダンスク（デンマーク語）版アネルセンを手に入れ得たことはうれしかった。普通の本屋では聖書が見つかからないのは私には意外であった。古本屋でようやく一冊見つけた。宿屋の主人にヨハネ福音書第一章を読んでもらって、録音した。録音機はハンブルクで買った携帯用トランジスタ・グルンディヒである。この帰路で立ちよった諸国の国語で聖書を読んでもらうという心算で肩懸けカバンに入れて歩いた。すなわち、ドイツ、デンマーク、オランダ、イギリス、フランス、イタリア、ギリシャ、ヘブライ、支那の九ヶ国語を録音して帰った。

コペンハーゲンで印象深かったのはトルヴァルゼン博物館の驚くべき数のこの巨匠の彫刻であった。アンデルセンの人魚の物語を象徴する人魚の像は波うちぎわに、潮風のため青びかりの姿ですわっていたが、そこでバツタリ五人の日本人に出遭った。彼らは互に人魚の前で写真を撮りあっていたが、脚がすべて海水につかり人魚になりそこなったのは笑うに笑えず気の毒であった。親切な彼らは私をアウトに乗せてハムレット伝説の城へ伴れていくてくれた。城壁には番兵が立っている。対岸スウェーデンが指呼の間である。国と国の境に銃剣の番兵が立たなくなる日はいつのことであろう。ベルリンとエルサレムが二つに裂かれ緊張状態にあることが今の世界のシンボルの様である。十八日にアムステルダムヘスカンディナヴィア機で入った。聞いていたように水が多いことは、機上からよくわ

かった。ここには駒場の担任クラスの一学生であつた飯塚君が研究生として来ているので、私をよろこんで迎えてくれた。

アムステルダムで一番見たかつたのは言うまでもなくレンブラントである。博物館とレンブラント・ハウスでその目的は充分果した。エッチング製作用具といったものも見て「ヘー、こんなにして作るものか」と思った。この巨匠のエッチングは特に好きなので、ちょっと立ち去りがたくあつた。「一枚もraitたいなあ」と子供のような欲望にかられもした。ドイツ語の教科書の表紙にかかげたあの有名なルカ福音書第十五章の「放蕩息子」の原画も穴のあくほど見入つた。レンブラントはなぜあんなに沢山の自画像を描いたのだらう。彼は総じて美しいものを描かなかつた。彼の画には泥の匂いがする。しかもその泥の中に深いあたかい人間の息吹が感ぜられる。しかも彼の油絵にはどんな暗い絵でも光がさしている。宗教的なくさみを脱した深い深い宗教が漂うている。現代人を救うものはそういった意味の人間回復の道にあらう。レンブラントの画が無闇に高価になつたところで何にならう。彼は、私の画よりも、私が世を観た眼をもつて現実を見てもraitたい、と言うであらう。

ドンキホーテが槍で突きあたつたように破れた翼をもつた風車を見た。とある農夫の案内で大きな風車の内に入ることの出来たのは得難い見学であつた。その昔の風車小屋生活が想像できた。風車塔の中央を貫いている大黒柱のような回転軸は巨大な樫の樹であつた。歯車はすべて堅木の木製である。一家がその中で暮らしていたことはちょっと灯台守の生活にも似ていると思われる。危なげな楷梯をつ

たつてつべんまで昇ってみた。遠くまで見晴らしがきくので一驚した。溝が幾条となく見える。

“Water, water, everywhere, But not a drop to drink”

という中学時代の英語の教科書の一句を想い出した。

漁村を訪ねたら、丁度日曜だったのでオランダ風俗そのままの晴着を着た娘さんたちが沢山いた。

二、三人をつかまえて一緒に写真を撮ったりした。どんなに撮れているか、まだこの旅のフィルムの整理はしていない。アムステルダムのとある料理店でメニューを見たら「うなぎ」という字があったので注文してみた。およそ日本の蒲焼きとはちがい、骨ぐるみぶつぎりになっていておそれ入った。これがうなぎかという味であった。誰かあそこで日本のうなぎ屋を開店したら、大はやりとなろう。うなぎの味よりも、その店のメニューの方がはるかに芸術味豊かであったので、それを記念にもらってきた。うちの茶の間の壁に鋳でとめて眺めている。

湾入を両断するように突き出た大ダムの上をヨーロッパ道路が走っている。そこをドライブしたとき、夕陽が北海に沈むのを見た。その壮麗な夕景は、かつて直江津の海岸で日本海に沈む夕陽を眺めたときのことを想い起こさせた。これはこの帰路で見た最も印象的な夕景の一つであった。

三月十九日の晩には、幸にも Eugen Jochum 指揮のバッハのマタイ受難曲を聴くことができた。感動的なものであった。何でも日本でやがて演奏されるとのことであった。オーケストラが大ホールの中央部近いところにあるので、指揮者を前方からながめながら音楽を聴いた。こんなことは始めて

であった。もし私なりの感想をゆるされるとするなら、パッハのマタイ受難曲はフィナーレの歌詞も調子も弱いように思われる。彼の十字架の受苦が、人間的な悲しみの情で終わるようなことではこの名曲も九俵の功を一簣に虧くのがする。彼の十字架は宗教的天才の殉教の死以上の贖罪の大愛であり、復活への大転廻のどん底であるからである。

デンマークは歴史的にドイツの侵害を受けているせい、ドイツ語よりも英語をつかいたがるようであったが、オランダはドイツ語で大体通じた。デンマークもオランダも小国である。小国の人からは概してものやわらかに感ぜられた。スイスやギリシャでも大体類似の印象を受けた。

二十一日にはBE機でロンドンに渡った。それから先きは、パリ、ウィーン、チューリヒ、ローマ、アテネ、イスラエル国、香港という順路で約一カ月の旅をして四月十九日に羽田に着いた。それらの点描をする紙面はもうなくなつたので、この辺で筆を擱くことにするが。

ざっと個人的な印象だけを記ささせていただくなら、ロンドンは落ちついた都である。昔礼服を着たとき、時折りかぶらせられた山高帽を平服にかぶっているロンドン紳士たちを見て、さすがにジェントルマンのイギリスだなあとと思った。それが私のような旅人の眼に奇異に見えず、びったりして見えただからである。ロンドンに比してパリは政情の影響もあって、何となくおちつきを欠いていた。機関銃をもっている兵士が要所に立っていた。パリーの巡査のマント姿は私にはめずらしくあった。両者とも地下鉄がよく発達している。東京などは地盤さえ大丈夫なら、これから大いに地下鉄を発達さ

せるべきであらう。ロンドン、パリ、ウィーン、ローマ、アテネ、で見物した世界的な名所、旧跡、博物館などのことは記すもおろかなはなしであらう。見物ばかりして見物バカになったとも言えよう。しかしアテネおよびコリントでは特にパウロの足跡をひとりしずかに偲んだ。今ではバスで半日でアテネからコリントを訪ねて来れるが、パウロが伝道したときの苦難は第二コリント書第十一章で彼自身に告白している通り、まことに絶言絶慮の現実であつたらう。

なおこの旅でイスラエルを訪ね得たことは私にとって、かけがえのない経験であつた。ユダヤ教徒の戒律への保守性やパレスティナの自然などをこの眼で見たからである。ガリラヤ湖上に孤舟を漕ぎだして、白雪をいただくヘルモン山を望んだり、また舟板を枕に、風のまにまに舟を波にゆだねて天心にかかる半月を仰いだりして冥想した夕ひと時は、この旅の絶頂であつた。

(東京大学教授学部教授学部報第一〇五号所載)

〔附記〕 第八卷『詩歌集』七六頁―八四頁の和歌による「帰路点描」を参照して下さい。

B 海外旅行

三 夏の西ドイツ紀行

(一九七六年夏)

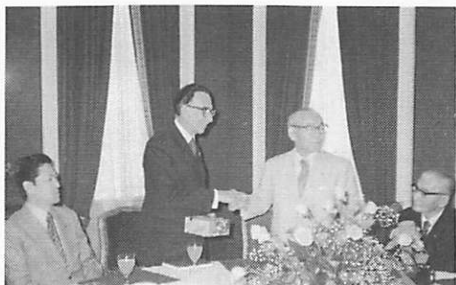
七月二十日頃、関理事長からお電話があった。「ドイツへ行かないか」とのおはなし。短かい問答で即決、「ではお伴いたします。ありがとうございます。」即ち関理事長・石橋独協医大名誉学長・本間独協医大病院長・医博高橋理事の一行の一員としてドイツ旅行をする栄に浴した。

ごく簡潔に印象を記すにとどめることにしよう。理事長のおくさまを始め関係者に見送られて、八月二十四日夜羽田空港を飛び立って、北極経由のコースをとった。フランクフルト空港に降りてゆく機上から、音に聞いていたこの夏の異常な暑さが、ときならぬ枯葉のすがたで直覚された。膨大な空港にも一驚した。ミュンヘンで案内された旅館は昔の王侯貴族の邸宅を偲ばせるものであった。八月二十六日クリンゲ社を訪ねたが、研究から薬品製造へ、綿密な構成様式に感嘆した。晚餐ではクリンゲ社長の趣向で、伴奏づきの方言民謡を聴いた。歌詞は一向わからないが可愛い歌声であった。

個人的な自由時間には古本屋を訪ねた。日本では得られない本を数冊みつけて直送の手続をとった。

五十日後まちがいなく届いた。ドイツ人は信用できるが、かつてイタリーはローマのかなり大きな書店で同じく直送をたのんだのであったが、それはついに届かなかった。それと同じ本が、去年、田中耕太郎博士のダンテ文献を古書展で買った中であつたので、ローマのうらみは東京で報いられたとも言わんか。

因みにクリンゲさんは、文学的素養の豊かな方で、御自分で俳句形式の独逸語の詩句を創作してお



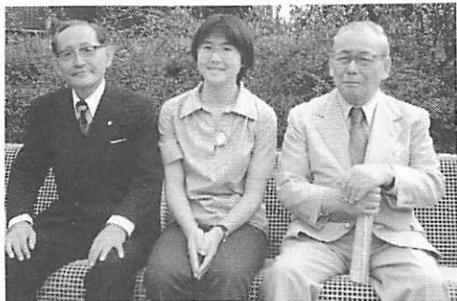
西独第一級の薬品会社社長クリンゲ氏との会合
(1976・8・26) 左は高橋和秋理事



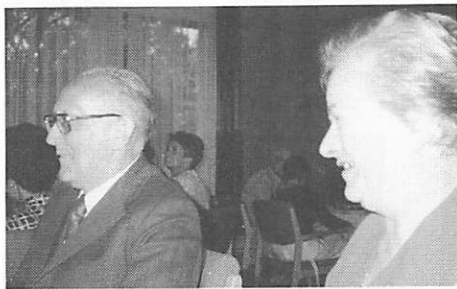
1976年8月28日ゲーテの日にビーテヒハイム市の
ベルツ博士の記念碑の前で、右から二人目石
橋長英先生、左から二人目関湊独協理事長



楽団の伴奏で MÄDCHEN たちとローレイ
を唱ったりした。



石橋長英先生のお孫さんを中心にして



1976年8月29日。カルルスルーエ市長主催の日独友好の会合にて：フリーゼ独乙大使館文化部長御夫妻、現在は独協大学客員教授。1987年3月帰国される。



石橋先生が知らぬ間に著者のプロフィールをレストランのメニューに素描された。

られる。奥様も文学趣味がおりで、大方その方面のおはなし合いをした。八月二十八日にはカルルスルーエで第二十八回ドイツ治療学会開会式があった。同日午後は、ビーティヒハイム市を訪ねた。日本医学界の育ての親といふべきベルツ博士の故里である。ベルツ先生の記念碑に一同心からの敬意を表した。旧新市長を囲んでの集いがあった。この日はゲーテの誕生日であることを想い出したので、来客記念帖に、ゲーテの句に因んで、「永遠の人間性が我々を互いに結びつける」とドイツ語で記し

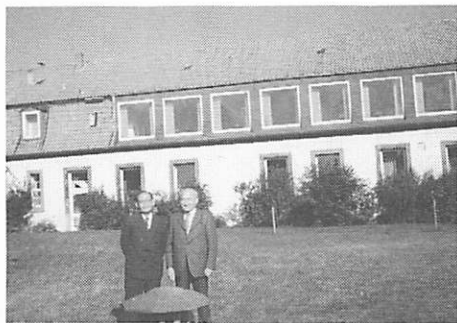
た。ベルツ博士が正にそのことを実践されたからである。博士は医学と医術と医薬の道を通して豊かな人間性を以て日独を結びつけた先覚であった。このことは我らの石橋先生も、日本からの活きた橋として実証しておられるわけである。二十九日にはカルルスルーエ市長主催の日独友好の集いがあった。ボンからは日本特命全権大使上田常光氏も賓客として来会された。この席上でフリーゼ文化部長御夫妻にもお目にかかれて嬉しかった。



日独医学界の橋の如き石橋博士（中央）はドイツ関係諸市に日本の岩石製品を長年にわたり記念や友好のため設置された。左は本間教授。



日本趣味のゆたかなフリーベ御夫妻。
うしろはドイツ語の横山理吉君



レムゴーのケムパー・ギムナジウムの校庭で
校長ドクトル・ドイベル氏と共に



安藤、小池、小城、星野（交換教授）が相前後
して世話になったハンプルクの小母さん
FRAU LOTTE PAULUS

三十日にはフランクフルトへ移った。ヘキスト社・エールリッヒ研究所訪問がたまたまかけて行われた。私のような門外漢にもうなずかれる面があった。勤務要綱の第一項に「神を畏れよ」とあった。独協中・高校の教育精神の第一項に「敬天愛人」を掲げている者として共感を覚えた。

三十一日（火）には遠く東方エルランゲンへジーメンス社訪問に出かけた。アウトバーンを時速一四〇料で飛ばしていた。エルランゲンがジーメンスか、ジーメンスがエルランゲンかとも言いいたい

大規模な会社の機構である。独協医大がこの社から素晴らしい医療機械を仕入れた。理事長さんが大いに讃歎しておられた。

更にニュールンベルク市を訪ね、その病院の庭先で、水原秋桜子句碑の除幕式があった。秋桜子の句碑や灯籠や桜の木は石橋先生が関係諸市の諸所に建て且つ植えておられる。人間の世代は替るが、碑石は不朽、桜木は永久的、後人はこれを先人の遺志を継ぐよすがとするであらう。

九月一日、忘れもせぬ関東大震災の日である。一瞬冥目、はるか東京の空を偲んだ。この日メルク社訪問。晩は石橋先生御令息のお招きを受け、一同お手づくりのなつかしい日本食にあづかった。

理事長は脚を痛めておられたが、時には手押車をつかってすらも、終始熱意を以て日独親善の旅の主役を全うされたお姿に我らは心からの敬意と感謝を胸底に感じていた。理事長と共に一同、種々ドイツに対する評価を高め、信頼の度を深めた。私も随行の目的を果たしたことになったので、二日の朝、お別れを告げて、単独マインツに向った。

マインツ訪問の目的はグーデンベルク博物館見学で、これは興味津々たるものがあつた。見学を終えてヴィースバーデンのフリーベさんをお訪ねする。フリーベさんは言うまでもなく、永く独協中・高校でドイツ語を教えて下さった先生である。彼は日本好きで家の調度品・装飾品は日本風・東洋風のものが多く、障子張りの畳部屋もできていて、そこに一泊させられた。ただしはなしはドイツ語で、ともあれ、たのしい語らいで、別れを惜しんだ。

目白台で同僚であった横山理吉君がドイツ滞在中であったので、訪ねて来てくれ、且つレムゴーまでの道を案内してくれた。厄介な道程であったので大いに助かった。レムゴー駅にドイベル博士が迎えに来ておられた。もとエンゲルベルト・ケンパー・ギムナジウムの校長をしておられたので、校内を隈なく案内していただいた。更に市街見物をした。宗教改革時代あたりからの建物が保存されているのに驚いた。非常に趣きのある市で、糸井君や合田君から聞いた通りである。ドイツ人が歴史を重んじ歴史を生かす心根がここでもうなずかれた。翌四日午前、ギムナジウムを再び訪ね、音楽と国語（ドイツ語）の授業を参観した。なかなか活発な質疑応答をやっていた。授業は大方午前で終ることになっている。自分の勉強と研究の時間の余裕が充分ある。自覚と責任観念の強いドイツ人の在り方から来る自然なすがたであろう。校内設備もガッチリしている。ロッカーをこわしたりするようなバカげた痕跡は全然ない。生徒の在り方からくる印象は、伸び伸びとした自由とチャンとした秩序との調和である。ドイツ人の教養の度はやはり高いといわざるを得ない。

日本を初めて研究し、大冊の本『日本誌』（上・下二巻 今井正訳 今井氏は本校卒業生）を書いて日本を紹介した探険家ケンパーに因んだこのケンパー・ギムナジウムの生徒の絵画作品とわが校のそれとの交換がかって行われたわけで、生徒諸君も私も勿論初対面だったが親しく迎えてくれた。一泊のレムゴー訪問であったが、終始すっかりドイベルさんの御厄介になった。おはなし合いも相互に有益なものであった。

九月四日（土）午後三時頃なつかしのハンブルクに着いた。というのは十五・六年前、交換教授として、ハンブルク大学で「日本学」の講義を担当しながら、一年間暮したからである。一年間厄介になったパウルスおばさんを訪ねた。住居は残念ながら昔のところではなく、市の西部エルベ河畔から遠くない閑静なところであった。四人の子らは皆結婚をして、夫々子供がいて、という賑かさ。パウルスさんはそのどの家族とも会わせるように計画を立て、私を案内するのであった。

土曜の晩と日曜（五日）終日は彼らとの会合、散歩、談笑、茶菓、食事で費された。私が昔とあまり変らないといって驚いていた。パウルス夫人は水彩画が相当うまい。画道精進に余生をおくっているようである。私が著作集第二巻で『芸術のたましい』という論説を書いたといったら、是非それをドイツ語に訳してくれと言っていた。

六日（月）の朝パウルス宅を辞し、ハンブルク市街を一巡しながら空港へ向った。アルスター湖畔を通ったときは、さすがに昔を偲び、胸のあつくなる思いがした。空港に着き機中の人となったら、安堵のためか、やたらに眠くなった。往復ともルフト・ハンザ七〇七号機ゼナートル級座席。帰りは私独りで勿体ない仕末。喰べるより眠るお客で、スチュアーデスのもてなしようがないわけである。文字通り一刻千金の眠り。スチュアーデスと時には冗談も飛ばしながら、飛んで帰った。感謝にあふれて。

B 海外旅行

四 聖地旅行印象記

(一九八一年三月)

アブラハム、イサク、ヤコブ（イスラエル）等の父祖以来、モーセの出エジプト、ヨシュアの「約束の地」到達。士師時代を経て、預言者サムエルの靈導のもとに展開したサウル、ダビデ、ソロモン王朝時代。エリヤ、エリシャの劇的な預言活動。北王国イスラエル、南王国ユダ滅亡の前後、靈峰の如く輩出した預言者アモス、ホセア、ミカ、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤ、第三イザヤの壮大雄渾なる預言史。このようなドラマの大展開のあと、そのすべてを包括して、しかも突き抜けて世界宗教を現したキリスト・イエス。

このキリストの故に「聖地」と呼ばれるイスラエルへ、この（一九八一年）三月廿一日から四月二日にかけて、テマサ・トラベル社の小佐々隆君の企劃及び添乗によって、聖地旅行を同行者二十二名で実行した。メンバーは諸教団混成であった。

終始九日間、バスに同乗してバス・ガイドをつとめてくれたのは、ヘブライ大学在学の「幕屋」の

青年、手島勲矢君であった。彼は現地生活二年でヘブライ語会話を自由にし、主としてイスラエル宗教思想史、就中ハシディズムの研究をしている学生で、現地を跋涉してその史跡を身につけているので、そのガイドは聖書の引用と共にすばらしいものであった。我々はおかげで聖地の歴史的ドラマを膚で感じつつ学び知ることができた。

はじめギリシャのアテネ、コリントを訪ねたときは、これも「幕屋」の青年藤原イガル君がガイドをしてくれたが、彼のギリシャ人の気質や才能や生活の具体的な説明に耳を傾け、興味津々たるものを覚えた。

私は団長として、あのケンクレヤを始め、随所で集会や祈りや讃美歌の音頭をとったが、現地で靈感に迫られ、しばしば異言状況に入った。旅行団員の誰もが、この旅を生涯の一つの峠として認識し、深く感謝している。

出発前に讃美歌を作詞した、その歌調は、私の高師附属中学時代の音楽の田村虎蔵先生が大和田建樹作詞「青葉の笛」に作曲した名曲である。この「春を迎え、イスラエルへ」の歌を旅行中、数回合唱した。それを独逸語の詩にしてみた。

旅行のメンバーを列記しておこう。(順序不同、敬称省略) ①本阿弥以子 ②平松政恵 ③山田正子 ④今村幹雄 ⑤藤本喜八 ⑥同八重子 ⑦森田雅二 ⑧同敏子 ⑨藤沢治男 ⑩同千枝子 ⑪百瀬潔 ⑫同薫 ⑬高橋よね ⑭園田くさの ⑮高橋とし子 ⑯木下かきわ ⑰増田嶽男 ⑱針谷康正 ⑲望月貴美江 ⑳金谷白蓮 ㉑小池辰雄 ㉒同



パウロがアテネ人に演説したアレ
オバゴス（使徒伝17：22）



イエスが葬られた「園の墓」、ゴルゴタの丘の下、
左から：手島勲矢君この旅をαからωまでねんご
ろに説明してくれた）当時イスラエル大学生、増
田巖男（某会社会長）、著者（旅行団長）、針谷正
康（建築会社副社長）

順子²³小佐々隆。

〔附〕第八卷「詩歌集」三八三頁及四一〇頁の「春を迎へイスラエルへ」参照

（エン・クリスト）第五号 一九八一年五月号）

一九八一（昭和五六）年三月廿一日（土）十一時、テマサ・トラベル社の添乗員小佐々隆君誘導のもとに、成田空港北ウィング第六特別待合室で団長小池は集まられた上掲二十二名の混成の教団員の結団式をした。十三時我々の搭乗したKLMオランダ航空八六四便機は離陸した。南まわりの空路でマニラ、バンコック、ドバイに中間着陸をした。サウジ・アラビアの砂漠地帯上空をかすめたときは油田の火が時折チラついていた。



ラザロの墓の入口、手島君



旅行団の男性群
右端は添乗員の小佐々隆氏（テマサ・トラヴェル）



旅行団の女性群

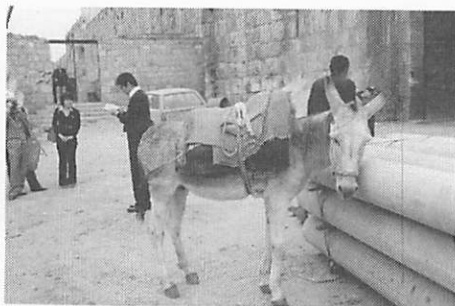


なげきの壁の境内：経典をくりひろげて朗読しているイスラエル人

アテネに着いたのは二十二日(日)の未明であった。某ホテルで少憩後、バスでコリントに向う。バス・ガイドをつとめてくれたのはアテネ幕屋の藤原イガル君であった。ソクラテス、プラトーン、アリストテレスの哲学的精神の流れは、ギリシヤ人の血の中にあると見えて、ギリシヤ人がいかにデИАレクティッシュ(弁証法的)な話し合いの好きな民であるかが、藤原君のユーモアを混じえた説明でよくわかった。悪く言えば正に議論だおれの傾きのため埒が明かなくて行動になかなか出られない

い。近年の大地震のあとの建て直しもはかどっていないようだ。沿道の丘陵にはオリーブの林が多い。一年間の観光客五五〇万人と聞く。ギリシャは何といっても紀元前四、五世紀に世界文化的役割を果たした国である。

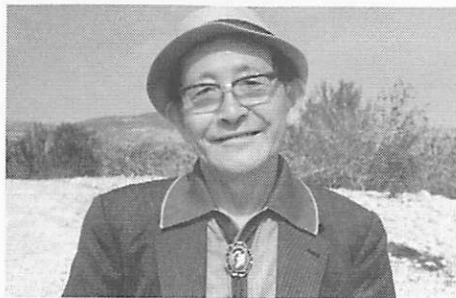
コリントでパウロの伝道の跡を偲びコリント地峡を蹴下し、ケンクレアの海岸に出る。パウロが第二次伝道の途次此処で剃髪して念願の成就したことを感謝したそのかみを慕かしみ、聖書使徒行伝第



ステパノ殉道の門前にて：手島君が使徒行伝7：48～60を朗読、小池が祈る。祈って異言になるとこのロバが急に嘶いた。



ヤコブの井泉（ヨハネ4：1～38）ギリシア正教の牧師と女性群



著者：サマリヤの丘陵地帯で



サマリヤの丘陵地帯で昼食



カペナウムの会堂遺跡にて、中央は手島君

十八章第十八節を読んで祈った。天界からパウロの霊の祈りに迫られ、異言が迸った。再びアテネに戻り、アレオパゴスの丘にのぼる。此処はパウロが同じく第二次伝道においてギリシヤ人たちに伝道した有名な地点で、「我ら神の中に生き、動き、また在るなり」(行伝一七・二八)の極めて注目すべき一言を吐いたところである。佐竹氏の一行に出会った。ここではパウロを瞑想し黙祷したのみであった。二十年前に来たときは人影稀で私は独りで、跪いて祈ることができた。

アテネ空港を一七時頃OAオリンピック航空機に乗り、イスラエルへ向った。テルアビブに着いた時はもう日が暮れていた。アルマンドさんと手島勲^{イサ}君と他に三人の幕屋の青年たちが空港まで出迎えてくれた。荷物などを運ぶ手伝いをしてくれた。

バスでエルサレムへ向うとき、手島君ははやくもガイドとしていろいろ説明してくれた。ヒルトンホテルに投宿。

三月二三日(月)からいよいよイスラエル巡礼が始まるのだが、すべて一台の貸切バスで巡行する。二三日(月)は予定の如く、まづシオンの丘から東方へ降りてオリヴの山陵へ登っていった。素晴らしく晴れていたので美事な展望であった。それからケデロンの谷間に近いゲッセマネの園へと降りてゆく。オリヴの老木がイエスの血涙を印しているかの如く、キリストの苦難が樹皮に刻まれている如きただずまいであった。ユダが炬火に光る不気味な武器を携えた兵士ども下役どもと現われたときの問答でイエスは「我はそれなり」と霊言のひびき。彼らはあとずさりして地に倒れた。霊言の権威！贖罪の十字架の聖意体现の歴史的決定の場をからだで感じたとき、もしそこに巡礼の人々がいなかったら、私は地に平伏したであろう。ケデロンの谷、ヒンノムの谷を経てシオンの丘にのぼる。ここにはダビデの墓があり、この丘にはまたナチスの首領ヒットラーの犠牲となった六百万のユダヤ人の死の灰が葬られている。この血と涙は何を以てつぐなうことができるか。

最後の晚餐、ペンテコステの祈りの高殿(アップ・ルーム)と称せられる建物に入る。そこには

折よく私たちのグループのほか、グループが居合わせなかったので、イザヤ君が聖書を読み、私が祈る。烈しい祈りとなる。贖いの十字架を意味する血の葡萄酒、復活の霊体を象徴する肉のパン、そして聖霊降臨のペンテコステの祈りの渾然たる救の事態が身に迫り、たましいを震憾させるので、どうにもならず烈しい異言の祈りとなる。二千年の昔が今となり現実となる。

音に聞きし「嘆きの壁」はまた印象深いものであった。トーラー（律法）の巻物の筒をひらいて読みつ折りつしているユダヤ人たちもいた。壁に向って帽子とガウンのような上衣を着て上半身を前後に揺り動かしながらトーラーを読むが如く祈るが如くしている人もいた。エルサレムは回復され、国は再建されたが、なお世界を統治する地上のメシヤを待ち望んで祈っているのだらう。ともあれユダヤ人はモーセの律法を重んずる信仰の民である。金品をごまかしたり、盗んだりといったことはイスラエルでは耳にしなかった。今回はヘブライ大学を訪ねる機を逸したが、世界で第一級の人物を各分野で出しているユダヤ民族の優秀さは歴史が証明するところだ。その優秀さの根源は彼らのたましいが極めて霊的であるからである。預言者塊の伝統が学問の面にも結実し、芸術の面にも花咲く。「岩のドーム」とも「黄金のモスク」ともいわれている金ビカのドームはマホメットの「昇天」を記念したもの、またアブラハムがイサクを捧げた岩もあるとされ、ソロモンの神殿の至聖所もここであったとされ、キリストが十字架上で大音声を以て叫ばれたときにこの至聖所の幕が真二つに裂けた、その場所であるとされている。ユダヤ教、キリスト教、マホメット教に深く関わる神域の中心に当る。

然らばこんな黄金色の殿堂がふさわしいだろうか。風雨に曝された岩や石柱に聖言が堀られているといったものの方がはるかにふさわしいと思われる。

ステバノが殉道の死を遂げた「ステバノ門」というところに案内される。そこで勲矢君が使徒行伝七・四八あたりから六〇節まで読んだ。ステバノの昔がまざまざと迫って来た。そこで私はステバノを謳った自作の召団讃美歌第二十三番「み霊と智慧」を独唱した。

その第四第五節は次の如くである。

（歌調は讃美歌二二八「ガラリヤの風」による）

四

五

噫ステバノはかく叫びたり　み霊に満ちて天に目をとめ

彼ら怒りて彼をとらえ　神の栄光と主を仰ぎて

町より出だし石にて撃てり　敵のゆるしを主に祈りつつ

ここにステバノ道に殉ず　凱旋したりわがステバノ

私が歌っていると、傍にいた驢馬が急に鳴くが如く、訴えるが如く、叫ぶが如く、いらないた。動物は正直であり敏感であるから、私がたましいをこめて歌ったので、何かたまらなくなったのだらう。歌い終って折ればまた異言となった。

ステバノは城門外で石に撃たれて仆れたが、彼が叫んだ聖霊の声は、バリサイ中のバリサイ、サウロ（後のパウロ）のたましいに打ち消し難いひびきをとどめたにちがひなかった。この最初の殉道者にキリストは応えて「サウロサウロ、何ぞ我を迫害するか」とサウロを靈撃し給うたのであった。

我らはこのステバノの門の近くにあるベテスタ（「恵の家」の意）の池に來た。池といつても崖から見下す水溜りといった感じで、これはいかにも今昔の感に堪えぬ廃址的なたずまいで、本ものと思つた。ヨハネ伝第五章に記してある不思議な池であつたのだとじつと見おろした。しかしイエスは池以上の池であつた。三十八年病んでいた病者を一瞬にして癒してしまつた。

我らはいよいよヴィア・ドロロサ（Via Dolorosa）「悲しみの道」にさしかかつた。いくつかのキリストのレリーフが路傍にかかげられてあつた。十字架を負いかねて倒れているイエスの姿のレリーフ（浮彫）。これほど深刻な内容のものが世にあるか。ある意味で十字架上のイエスよりも逆説的な深みをもつた相である。何たる人間の、人類の罪ぞ！ 私はその下に平伏さねばならない。イザヤ書五五・五の「砕け」の相である。イエスのお助けをしたクレネ人シモンは幸なる哉（マルコ一五・二一参照）。親を顧みぬ子は地獄に落ちる。師を殴つたりする生徒は地獄に落ちる。十字架のキリストをいつまでも靈界に懸けっぱなしにして顧みないで、核兵器の競争をつづける世界は自滅の道である。ヴィア・ドロロサの両側は土産ものの店街に大方化しているとは。救いへの道が商売の街になつたのでは、またキリストに叩き出され、店をひっくりかえされはしないか。

ダマスコ門という大きな袖をもつ城門を潜っていよいよゴルゴタの丘の見えるところへ出た。

「このゆえにイエスはおのが血をもて民を潔めんがために、門の外にて苦難を受け給えり。されば我らは彼の恥を負い、陳営より出でてそのみ許に往くべし」(ヘブル書二三・一二・一三)

この句を想わざるを得なかった。キリストの聖霊にあづかったら、恥を負う者とされ、ある陣営から出てしまった。そしていよいよキリストのみ許にゆく者とされたからである。英国のゴルドン將軍が靈感を以て推定した「園の墓」(Garden-tomb)なるイエスの墓の穴に入ってみた。何たる瞬間であつたか、全身が沈黙した。ゴルゴタの丘の下にある洞窟である。その墓の入口に、岩盤を転がして穴をふさぐために作った石の溝がある(マタイ二七・六〇)。当時が膚に感じられて来た。我々はゴルゴタの丘は下から仰ぎ見て合掌して退いた。

エルサレム第一日の主な印象はこのようであつた。

三月二十四日(火)はエルサレム近郊巡回と新市内見物といった内容のもので、ラザロの墓はキリストの愛の叫びを靈聽する想いであつた。キリストがしばしば訪ね給うたベタニヤは親しみを覚える風光の場所である。

この日は死海写本を中心とした遺品陳列の「本の寺院」を見たが庄巻であつた。解散して各自、自由な市街散歩をした。私は手島君に案内されて本屋を訪ね、M・ダブレッドの「詩篇」三巻とヘブライ語の詳細なイスラエル地図等を購めた。晩には家内とエルサレム幕屋の青年男女諸君に招かれて彼

らの手料理の愛餐にあづかり、楽しい閑談に夜の更けるのを忘れそうになった。

三月二十五日(水)は終日自由行動というわけで、団員が二つのグループにわかれ、一方は小佐々君の案内でシナイ山へ飛行し、他方は手島君の案内でサマリヤ見物に出かけた。私はサマリヤ行きの方であった。一番の見どころはヤコブの泉であった。

シナイ山紀行もすばらしかった由。御同慶の至りである。

サマリヤ人とユダヤ人は今でもあまり仲が好いとは言えない由。ヤコブの泉の場所はギリシャカトリック寺院がこれを蔽うている。その寺院の庭でヨハネ伝第四章を読んで集会を開いた。サマリヤの女とキリストの会話の現場が髪髻として眼に浮んでくる。讚美歌もうたった。その井泉のはとりでは写真を撮ることがゆるされていなかったのに、全く例外的に写真を撮って好いとのこと、しかも神父さん自身が我々に加って撮らせた。所載の写真の如くに！我々の集会に感激したのもあろうか。

私の異言の祈りが通じたのであろうか。井泉の深さ二十二米と聞く、滑車のついた釣瓶で手島君が水を掬んでくれたので一同で喉をうるおした。つるべの要らない水は集会ですでに天界から飲んでいたから、霊も肉も甦った！

三月二十六日(木)多少時雨気味の天候であった。バスは南下ラケルの墓の傍を過ぎ、ベツレヘムに着く。イエス降誕の地、馬小屋とは洞窟のような処である。現場には床に星のしるしが大きくできていた。ここも教会堂になっている。紀元五世紀の始め、ウルガタ(ラテン語聖書)の大訳業を成し遂

げたヒエロニクス（聖ジエローム）の像が立っていた。我々は更に南下、あの神秘的な伝道者ピリポの泉（行伝八章）を通じてアブラハムの故事のあるマムレの林を見た。その大古の老木を見ると、枯木龍吟銷未乾の句が想い出された。そのときバスを追跡して来た自動車がある。我々におにぎりや味噌汁を持参してくれた親切な人々である。エルサレム幕屋の諸君数名であった。降雨のため妙に寒くあったので、大変美味しく賞味した。

サマリヤの野草の上にたむろして

ひるげしたためしパラダイスかな

小池

更に南下し東に折れて遂にソドムに着く。その死海沿岸の高層なるモリヤホテルに投宿した。早速裸になって死海に浸った。身体が浮びすぎて立ちあがるのに苦心するほど塩分が強い。海水を眼に入れたら眼がおかしくなるほど塩が強い。海水を口に入れても大変。これも百聞一験に如かずの味である。夕方半円の虹が湖上に懸った。何を約束してくれる虹なのか。聖意が今にわかるだろう。聖意を知るはただ無私の実存に在り。

三月二十七日（金）死海の西岸を北上する。西側は正に荒野、起伏するユダの砂漠地帯である。その中に特に聳え立つ茶褐色の山が見えて来た。マッサダの山岳である。ヘロデ大王の離宮の由。猜疑心の強いヘロデはこういう要害の地で身を護る必要があったのか。此処はエルサレム滅亡の際、最後に立籠った難攻不落の城塞で、ついに兵糧攻めに遭い、立籠ったイスラエルの民は自殺して果てたので

あった。更に北上して有名な死海写本が発見されたクムランの洞穴を眺めた。これが一九四七年イスラエル独立戦争の直前に名もない放浪の民の少年が偶然にも発見した一つの壺に始ったとは。二千余年も丘陵の横穴が神秘的な口を開いたままであったとは。あるがままの相が却て真理の宝を護ったというものである。エリコにちょっと立ち寄る。アラブ料理の昼食。この辺には美しい花の咲く熱帯植物が見られた。バスは長駆、ひたすら北上である。時折ヨルダン川が叢林のかげに見える。ガリラヤ湖西岸のティベリアに着く。開発された都市である。ゲスト・ハウスに投宿。

三月二十八日(土)

カペナウムを訪ねる。キリストの湖畔伝道の根拠地である。福音書のドラマが幾こまも迫ってくる。ペテロが召命を受けた地点にペテロ召命教会が建っている。カペナウムのシナゴグの跡に立つ。

この旅のバスの中や重要な地点で聖書の箇所を指摘し音読し適宜現地にかゝわる我々の知らぬことをよく説明してくれるイザヤ君が、ここでも一席語ってくれた。アッシジのフランシスが此処を訪ねたと見える。両手を天にさし伸べて祈っている相は印象的であった。山上の垂訓(大告白)の「祝福の山」といわれる丘に登り集会を開き聖書を読み一席私なりの告白をさせていただき増田君、針谷君にも祈ってもらい、「ガリラヤの風」をみんなで歌う。

昼食に Peter's fish (ペテロの魚) というのがでた。鯛に似ている。イザヤ君が銀貨を口にくわえさせた。キリストの銀貨透視の故事を思い出す(マタイ伝一七・二七)。

ティベリヤにもどり、蒸気船で対岸へ渡る。湖上快適。この湖上を素足で渡られたイエスを思い、何たる次元の相異ぞや！ イエスは絶対次元に生きていた霊人である。文字通りの神人である。バスはヨルダン国との国境に來た。団体でヨルダン領にある野外温水プールで泳ごうというイザヤ君のはからいであつた。現地の安息日であるので多くの浴客が群れていた。我々も童心を以て泳いだ。

それからバスは長駟し、ゴラン高原を通つてピリボ・カイザリヤへ行つた。めずらしくも晴れ渡たり、イスラエル北端に聳ゆる四時白雪をいただくヘルモン山をかなり間近かに仰ぎ見ることができた。南では死海の虹、北ではヘルモンの雪！ 恵まれた旅である。

三月二十九日(日)

ティベリヤとガリラヤ湖をあとにして西へ走る。「カナの婚宴」(ヨハネ伝第二章)の故事を想いつつカナ見学。水瓶のサンブルがあつた。次にナザレを訪ねる。イエスの母マリヤの故里。マリヤの泉井がある。ナザレは丘陵地帯を蔽う大きな市である。自然と人工の調和のとれた市である。イスラエルの国は活気がある。港市ハイファは全く近代都市の様相を呈している。工業大学が丘陵の上に峨々として聳え立っている。この市の大なるシンボルは背景のカルメン山上の預言者エリヤの雄々しき像であろう。日本で言えば清澄山の日蓮の像というところである。現代人はもつと靈的人物に対する認識を新たに、小賢かしき理論による論争からつき抜けることを要する。

最後にカイザリヤ港に出て、半円形の野外劇場の跡に立ち、ペテロ、パウロの昔を偲び集会をした。

サフランもシヤロンのバラもアネモネも

旅の随所にほほえみてけり

小池

三月三十日(月)いよいよイスラエルを飛び立つ日を迎えた。我々はこの九日間バスに同乗して、心を尽し思いを尽して解説を担当された手島照矢君に衷心より言外無量の感謝の意を表する。またローマ、パリーを経て四月二日成田空港につくまで全旅程の一方ならぬ面倒を快くみて下さった小佐々隆君の労に深甚の謝意を表する。

〔エン・クリスト〕第五号 一九八一年五月春季号〕

B 海外旅行

五 中国旅行印象記

(一九八一年十月)

一九八一年十月三日(土)東京を旅立ち、大阪空港わきのホテルAPに投宿。

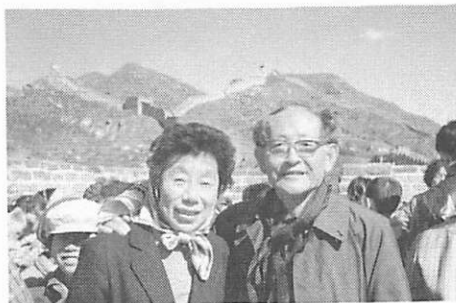
四日(日)の十時頃、斎藤桂子姉、その母君、読売新聞記者笠井孝之君、私の四名空港へ往く。奥田幸子姉、森下一男君、梅村康太郎君、笠井君の御両親に見送られて飛び立つ。われらのJAL機が北京空港に着いたのは十四時を廻った頃であった。先発の赤木睦治君、李平凡先生、唐決供氏、われらの旅行全行程の通訳をつとめて下さる周宗碧さん等に迎えられた。

この度の我々五名は、日本斎藤桂子七宝焼装飾展覧会友好訪中団という名称の団体で、中国展覧会司主催、中央工芸美術学院協助によって北京中国美術館と洛陽市工芸美術館に於て斎藤桂子さんの七宝焼芸術作品四十余点の展覧が開催され、日中の友好を深めることを目的とするものである。我々が北京で逗留したホテルは北緯飯店というのであった。

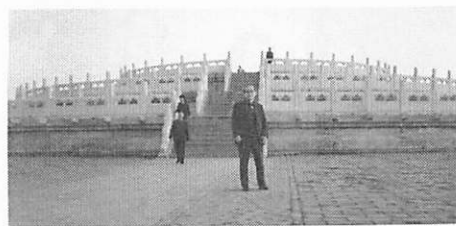
五日(月)は展覧会、工芸美術学院、中央美術出版社へ挨拶に赴いた。今回の展覧の発起人であ



故宮展示：清朝時代、特に玫瑰（燃ゆる紅玉）寶石の鍍められた匕首、斎藤桂子姉の喜んだ顔が下の鏡に映った。彼女のアトリエは玫瑰という。第八巻『詩歌集』388頁「中国の旅」のうた参照



万里の長城から降りて来て：斎藤桂子さんの御母堂と著者



大理石の天壇 祈りの場（第三巻『無の神学』の口絵参照）

られる邵宇画伯、李平凡画伯、吳勞氏等と親しく面談した。
十月六日（火）は故宮見物をした。天安門前の大広場の北にある昔の紫禁城（明、清時代の帝王の宮殿）が今は故宮博物院になっている。そこにはあらゆる種類の宝物、工芸美術品、書画、彫刻が、太和殿をはじめ、殿、宮、閣、の名称の十指に余る建物に一日では観尽くせないほど陳列してある。まことに豪華絢爛。莊嚴幽玄、眼を奪い心を魅する陳列品あふるる故宮である。

人影が途絶えた或るところで、急に声がひびいた。桂子姉の声である。「先生、玫瑰^{マリエ}が見つかりました！」私は驚いて馳せつけた。いくつかの宝石と共に玫瑰紅宝石の鏤められている七首^{あいくち}二振りの宝刀であった！ ギリシャの数学者物理学者アルキメデスが「ヒューレーカ」（発見した！）といった裸身で風呂から躍り出たような歓喜が、K姉の胸に渦巻いていた。七宝焼きの宝石の中で一番素晴らしい真紅の「玫瑰」。その意味は「火の玉」だそうだが、それを岡山の彼女の芸房の名にしている。K



西に明星、東に月が出た！ 天壇境内の犠牲の炉（第六巻『随想集』の口絵参照）（第八巻『詩歌集』387頁「長城と天壇」のうた参照）



炉辺で祈ったあとの三人：小池、斎藤、赤木、1921年秋天界に去って正に60年、還暦の1961年秋、小池政美を偲んで異言で祈る。



日本大使館の蓮見義博参事官と美術館の個展にて。左は清水寺、右は玉三郎の舞いすがた。

姉にとって、これほど嬉しいことはなかったわけである。私としても、全く飲びを共にした。早速カラフィルムにおさめた。故宮見物でこの瞬間が最高であった。

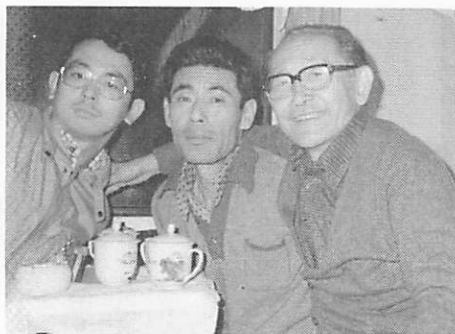
七日(水)は会場準備の一日で、特に赤木君、斎藤さんはこれに専らたづさわっていた。

八日(木)はまづ天安門前の大広場の中央にある毛主席記念堂を訪ねた。建物の中央の広間のガラスばりの中に毛沢東が静かに眠っている。生ける人の如くである。壁面に「毛沢東主席永遠不朽」と記されてあった。黙礼した。毛沢東は文武両道の英傑であった。

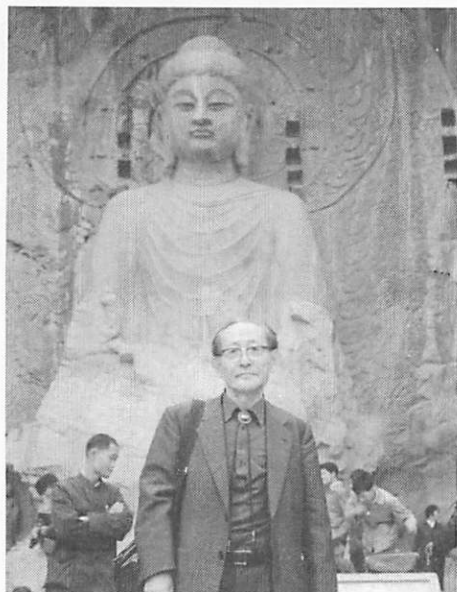
この訪問のあと、中国美術館の支関で「斎藤桂子七宝焼裝飾画展覧」の開幕式がまづとり行われた。展覧会社の代表者、この訪中友好団の団長としての私、及、桂子女史、三人の挨拶が相繼いで行われた。Kさんの場合は笠井君が通訳をした。大阪外語大学中国語科卒らしい立派な発音である。我々の語った内容はここには省略する。開幕式のあとで関係者や招待された人々の観覧が始った。団長と作者で案内と説明をした。爾後一週間ほど毎日観覧者跡を絶たずの盛況。未曾有的な大入りであった由。斎藤桂子さんはサイン攻めで大変であった。

九日(金)はタクシー二台で長駆して全長六千料という万里の長城の有名な八達嶺の一角を見に行った。万里の長城は北域であるので寒風が吹いていた。私は六十年前にここに登った舎兄政美の足跡を偲びつつ独り祈った。城壁から降りたとき、桂子さんから、こういうことを聞いた。「上の方でスケッチをしているとすごく靈感を覚え、デッサンの画筆が走るようでした。すると、後べに何だか人

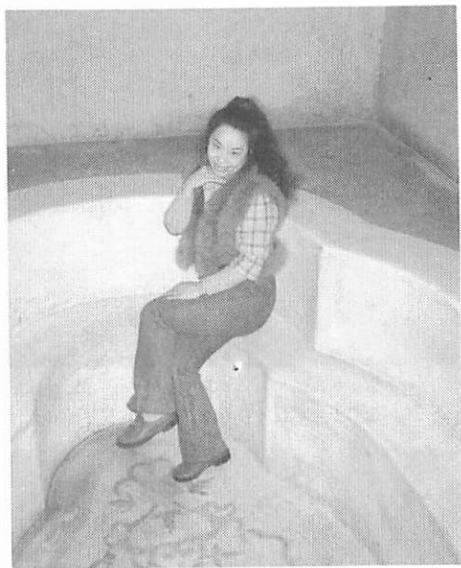
影の迫るのを感じ、しかも呼びかける声がするのです。振り向いて見るけれども誰もいません。そのようなことが三度ありました。ハッこれは先生の政美お兄様のお声と、直覚しました。すると長城の端から急に天壇へ魂が飛ぶようでした。天壇へ行きなさいとの啓示でありました。それでは、夕方天壇へ行こう、と彼女と赤木君と私は心を定めた。その朝天壇を訪ねたのにまた訪ねるという不思議なことになった。



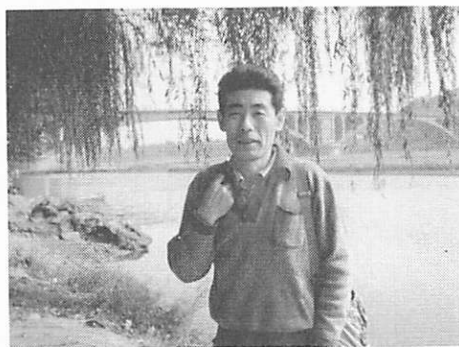
長時間の車中のひととき：左端は
新聞記者の笠井君



洛陽の無数の仏像の一つ



西安の華清宮の楊貴妃の風呂：斎藤桂子さん



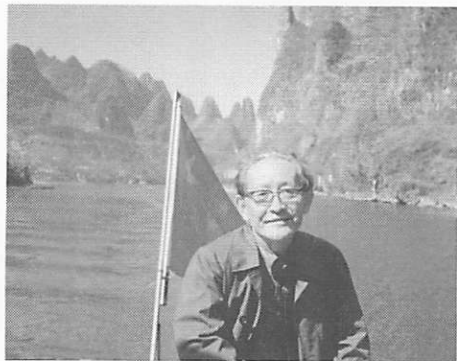
洛陽の洛河畔の楊柳。赤木睦治君は
中国旅行のよき世話役であった。

長城から帰って、天壇に脚を伸ばしたときは日も暮れかかっていた。天壇とは「皇帝の祭壇」のことで、明清時代の皇帝が天に向って祈る壇であった。天壇には祈年殿と皇穹宇と圜丘とがある。私たちが天壇といっって親しんだのはこの圜丘で、真白な大理石の円壇が三層になっていて、いづれにも白大理石の荘重な爛干がめぐらされている崇高な感にうたれるものであった。最上層の中央は円形の大理石で、この上に皇帝が年に一度跪いて、一年間の国民の罪過のため祈りを捧げる。その際に牛を屠

るので、その犠牲の炉が天壇境内の一角に置かれてある。これを見つけた我ら三人は、その青苔のむした炉のほとりに坐りこんで、召団讃歌B13番を合唱し、私が祈った。祈りは異言となった。「彼の生涯こそ永遠の星なれ」、そのとき正に西空に宵の明星があざやかに懸っていた。東には十日くらいの月が出ていた。我らが天壇にさしかかると赤木君は白妙の衣をなびかせた天女が天壇の真中から昇りゆくのを見た。何たる不思議な夕であつたか。ホテルに帰ったその晩、直ちにB14番「長城と天



七宝美術製作の下絵を折にふれては描く斎藤桂子姉。丘の上で漓江や桂林を描いているところ。



桂林の奇勝を眺めつつ漓江くだりの船上。

壇」なる召団讃歌を作った。歌詞が泉のように湧き出た。

この日「十三陵」の一つ定陵の地下宮殿を見た。とにかく中国には、どれくらい大規模のものが多いい。十月十日(土)は中央工芸美術館を訪ねた。その先生方や学生の有志に、桂子さんが斎藤桂子流の七宝焼芸術作品製作の初歩的実習を講義しながらみんなと一緒にやった。学生は女子が多かったようだが、「出来た、出来た!」とよろこんでいた。桂子さんもそれがうれしいのであった。私は別室で学生諸君に「芸術のたましい」の講演をした。芸術は技能的努力だけではダメで、たましいが大自然、天、宇宙霊、神、如来、要するに絶対界との融合の境地に入らねば本当の人間愛をもった生命的な作品は作れないことを力説した。斎藤さんの七宝焼が人の心に訴えるのは、その根源から創作されているからであることを語った。眼をかがやかせて聴いてくれてうれしかった。このとき私の講演を通訳して下さったのは李平凡先生の奥様であった。一同で日本の大使館を訪ね、蓮見義博参事官にお会いし、たのしく語り合った。月曜(十二日)の午前、美術館を訪ねて下さった。その夜はバレ―による五幕の史劇の観劇で、感嘆した。

十一日(日)北京滞在中は連日天候に恵れた。この日も素晴らしい天気だった。十月は観光シーズンの一つで、アメリカ、オーストラリア、ドイツ、イギリス、フランス等の観光団にあちこちで出会った。汽車の切符も場合によっては買えないという仕末。実際手に入れるまでは予定がたたないという状況で、世話役や通訳の東さん、周さんにはいろいろ御苦労をかけた。この日、西安を予定してい

たのが二日延期となったのも、そんな事情によった。またそのためより多く北京周辺も見物できたというもので、成るがままに甘受してゆくとところにめぐみがあった。十日は昆明湖に臨む万寿山をもった頤和園の観光をした。風光明媚とは正にこの景観であった。これは乾隆帝が母の還暦を祝って造った離宮の大庭園である。一八六〇年の阿片戦争で英仏連合軍に破壊されたので、清の末期に西太后が再建したのである。湖面に突き出ている大理石の船がその象徴をなしている。

翌十二日(月)は午後、北海公園を散策した。湖の中の瓊華島という島には永安橋を渡って入ってゆく。この島に聳え立つ白塔がこの島の象徴である。この公園は遼、金、元、明、清、歴代皇帝の御苑であったという。夜は中国雑技団の名技を観た。中国人は手足のわざが特に秀れていると思った。

十三日(火)の夜、北京滞在十日目の夜十一時に北京を去った。中国の汽車は広軌であるので、寝台車に側道が貫いており、寝台はゆったりとした感じである。

十四日(水)の未明、トイレにゆくべくドアを出た。すると桂子姉がトイレから帰ってくるところであった。「先生！　すばらしい夢を見ましたので、おはなししたいですから、トイレをすまして来て下さい」という。ふしぎな出会いである。側道で次のことを彼女は語った。――夢の中で先生の若いお兄様と歩きました。そして故宮の玫瑰の宝刀の前に来たので、「この玫瑰の寶石が欲しい、」と言いましたら、「それはあなたにあげてあるよ」と。私がびっくりしていると、「辰雄があなたにイスラエル旅行のお土産に赤い花瓶をあげたでしょう。あれが玫瑰の色なんです。」「ああそうでした

か。」それから「私たちが日本に帰るとき、お兄様も御一緒に帰って下さい」と言ったら「僕は日本へは絶対に帰らないよ」そこで私は泣いたら目が覚めたのです。この夢の啓示により、あの故宮の中で、見物中に、人影のなかった瞬間に玫瑰の宝刀が見つかったのも、実は政美お兄様の導きであったということがハッキリしました。——と彼女は告白した。万里の長城でも人影がなかったとき政美の霊が彼女に呼びかけた。全くふしぎなことであるが、さもありなんと思う。この秋は、召天後の還暦の年の秋で、特に兄が我々に呼びかけたのである。私が思いもよらず北京へ旅したのもそのわけだ。もう日本人墓地はなくなっていたが、北京城東陽門外の墓所を出で、兄の霊は自由に中国の天空を遊歩している。彼は中国で伝道しようとの魂胆であったから。ハドソン・テラーやゴールドン將軍を彼は敬慕していた。

漢代の古都西安（長安）に着いたのは車中二十一時間を過ごした十四日夜の八時であった。人民ビルに投宿。

翌十五日（木）、観るべきものの多い西安を、タクシーで駆け廻った。秦始皇帝の兵馬俑博物館！今なお発掘中の、無慮八千体にも及ばんと推測される騎馬武士の陶俑にただ瞠目するばかりであるが、権力者もここに至っては愚の極みとも囁きたくなる。彼の馬鹿げた阿房宮も今は夢と消えた。

西安の東北にある華清池（温泉のこと）を訪ねる。唐の玄宗皇帝が華清宮という離宮を建てた。楊貴妃が浴したという浴槽もあり、ロマンスの雰囲気は今も漂う如くである。月が池心に影を落として

いた。

原始母系氏族社会の村落の跡をとどめる半坡博物館は、古代漢民族文化の面影を偲ばせるものであった。

十六日(金)の午後七時に車中の人となった。

十七日(土)の午前二時半洛陽駅に着いた。深夜出迎えを受け、友誼賓館に案内された。この日、岡山市は洛陽市と姉妹都市であるので、岡山市長岡崎平夫氏の洛陽市長任普思氏に送る書状を市長に贈呈した。

十八日(日)の龍門石窟見物は極めて印象深いものであった。洛河畔の大岩壁六百米に亘って石窟を無数に穿って仏像が彫られてある。石窟は大小千三百に余り、刻まれてある仏像は約十万体と謂われる。魏の王朝から唐代にかけて数百年に亘って刻り継がれた歴史をもつという。石窟の内から仏像が現われ出たように生き生きとしている。仏教芸術の古典的傑作である。なお市の東方の白馬寺も訪ねたがこれは仏教が印度から伝来して最初に建てられた寺の由。東漢時代のものである。

十九日(月)は洛陽の名工芸の参観をした。牡丹の刺繍、三彩馬の製造等。夜は市長の御招待宴にあづかった。

洛陽での七宝展開幕式は二十日であった。北京の場合と同じ形態でなされた。日数が迫って来たので、開幕のこの日の夜洛陽を辞さねばならなかった。

二十一日(水)に鄭州に着き、その日長沙へ飛んだ。この飛行機が密雲に入ったとき、機内に霧が舞い飛んで来た。それはどういうわけか知らない。乗客はちょっと驚いた。長沙に一泊した。気持の好いホテルであった。

二十二日(木)は長沙の工芸美術の見物をして夜、寝台列車で桂林へ向った。

翌二十三日(金)の朝桂林に着き、丹桂飯店に入る。この日直ちに音に聞いていた桂林の奇山の景観を見に出かける。叠采山に登る。歓声をあげざるを得ない景色である。讃歌B15「中国の旅」に謳った通りである。夕方、赤木君、S・桂子さんと共に再び登り、夕景に観入った。桂子さんは旅を通して要所々々で一心にスケッチしていた。赤木君はこの旅を通してカメラマンであった。笠井君は記者らしく丹念に書きとめていた。私はじっと見たり、瞑想したりというわけである。

二十四日(土)は桂林の大連峰の間を龍の如く流れている漓江の河くだりをした。これも亦何とも言えないバノラマであった。こんな景観は無比な奇観であろう。

二十五日(日)桂林を正午に飛び立って上海空港に午後三時に着いた。少憩の後、上海市文化局の朱仁冬氏の案内で、上海の運河へ舟で乗り出した。この運河は遠く北方北京まで通じている万里の運河の由。舟を家として運搬等の仕事に従事している人々の生きざまがまざまざと受けとられた。貴いひと時であった。その夕方上海を立って無錫むしやくへ向った。太湖という湖の湖畔の湖畔ホテルに投宿した。二十六日(月)払暁旭日の昇ってくる湖上の景色に讃嘆した。琵琶湖の三倍以上もある太湖を舟航

し、島を訪ねたりした。夕方太湖畔を去って上海に戻った。外人のための車室がゆったりしているのにむしろ驚いた。広軌は好いなあと考えた。

中国旅行の最後の晩餐を感慨深くとり、旅の終りの一夜をあかした。

十月二十七日(火)の朝を迎えた。十時五十分、上海空港を飛び立った。中国のこの飛行機は立派なジェットであった。よく晴れているので、黄海がよく見えた。と一瞬私の眼に霧がかかった。六十年前、舎兄政美は遺骨となって、母に抱かれながらこの黄海を渡ったのであった。しかもその母は黄海の上で失明してしまった、多年の労苦と長男の死の悲しみのために！ 何たる悲痛ぞ。しばらく機上から下を見ることをやめた。噫！ 何たる不思議な旅であったか。この訪中の旅は私にとって今後何を意味するのか。大阪空港に着陸したのは一四時十分。新大阪駅で一行と別れ、独り東京へ向った。肩カバンとトランク二個。二十年前ドイツから帰って来たときに比べて体力がおとろえているとは思えない。

〔エン・クリスト〕第七号 一九八一年十一月秋季号)

(附記) この中国旅行に際してものした旅の歌 B13 B14 B15 のトリオと第八巻『詩歌集』三八六―三九〇頁を参照して下さい。

第五章 人物回想

序文 回想ということ——ゲーテの生誕記念日

(一九八六年八月二八日)

回想、追想、想い出、表現はいろいろあるが、要するに過去を想い返すことである。人間の記憶というものは全く不思議なものだ。人間の脳ほど神秘なものがあろうか。むしろ時間的には遙か遠い幼少年時代のことがハッキリと浮んでくるとは。幼少年時代は意識が単純で理的判断がなく、対象、事象を全的に受けとるから、焼き付けが鮮明なためであらう。全身的、情感的に体受するという質が深いのである。キリストが「幼児の如くならずば天国に入れない」と言はれたのも正にこの全体的体受の消息である。

ともあれ回想一般の問題として、私は知友の失敗や欠点などではできるだけ問題としない。美点、笑顔、友情などを想うことにしている。回想に於てはその人を大乗的に肯定し、自分にとって前進への善き契機とならんことを希う。私自身への回想となれば、いかなるマイナスもそれを想うことによつて逆にプラスへと変質してくる。というのはキリストに在つての回想は、プラスもマイナスもいよい

よキリストへの回帰の因子となるからである。それが過去を真に生かすこと、過去を救いあげることとなるからである。然らざる単なる想い出は人生を生かす所以ではない。ゲーテも、想い出というものは、それが現在に対して何らかの力を与える意味を以てするのでなければ無意味であって、単なる感傷的な想い出にふけることは自分はいらない、といった意味のことをどこかで言っていた。全く同感である。

本巻の「人物回想」も第六巻『随想集』の同種のものもすべて同じ精神のものである。

私は凡そひとからいただいた手紙や葉書は単なる用件以外のものは大方保存してあって、おそらく数万に及ぶであろう。それらを一ヶ所に集めたら納戸が一杯になるであろう。またそれらに大方対応する通信をしているので、大変な数の葉書、絵葉書、手紙となろう。しかしそんなものはどうぞお焼き棄て下さって結構である。心の中に記して下さってあれば、彼岸でお目にかかれるときにたのしい会話ができればよい。知友の音信をとくに読み返すと過去がほのぼのと現在化してくる。そしてその知友のために一瞬祈るのである。私には最早ねたみもうらみも諍いもない。私の中の聖霊の愛がそんな感情を消して下さっているからである。ありがたいことである。昔の超一流の僧たちの心がよくわかる。だからあの超一流の坊さんたちを心から尊敬している。私のはキリストの十字架の贖罪という絶対恩寵で賜ったもので、悟ったのでも修養したのでもない。無私、無我の無を根源現実、深層現実に於て賜っただけのものはなしである。私自身は塵芥である、虫けらの如きものである。

それから沢山のスナップ写真がある。昔からの知友のそれは、大方ニコニコしたい顔である。これも回想の良き直接的、具体的資料で過去が直ちに現前する。キリストの光の中でみると、それが永遠化される。電気の光や太陽の光を媒介とはするが、キリストの愛の光がそこに滲透するのである。

私が地上で課せられた仕事すべて終つたら、否、それは終りなき終りであるが、多分「アウス・マイネム・レーベン」即ち自伝を書くであろう。そのとき、知友からの山を成す書信が、この忘れっぽい私に過去の事象を回想させてくれるにちがいない。また知友の中の棄てがたき言葉を福音の証言として引用することもできて楽しいことだと思ふ。そんな自伝が、読む人々の慰めや励ましやになつて、私と一緒に神、キリストを讃美して下さるなら、本当にうれしいことである。

「よろづのものは神より出で、神によりて成り、神に帰するなり」とパウロが 로마人への手紙の中で告白しているが、もしこの事態から外れるとサタンに唆はれる。それほど悲しむべき怖るべきことはない。ところが世界の歴史とこの二十世紀末葉の現実はどうなのだろう。サタンの術中に入つて第三次世界大戦ともなれば、「空の空、空の空なる哉すべて空なり」と旧約聖書のコーヘレス（「伝道の書」）の預言の通りになる。そのとき預言書や黙示録の預言の畏るべきことを知っても、もう遅い。ダンテの「地獄篇」^{インフェルノ}は真剣な文学である。「神曲」そのものが聖書の預言の伴奏曲である。

回想がすべて終末的救済への前奏曲であるように祈る。

一 佐々木吉三郎先生

(一九八六年九月十日)

今から三年前の秋のある日、何のきっかけで想い立ったか忘れたが、七十年振りといっても可いだろう、東京高師附属小学校を突然訪ねた。若い校長さんにお目にかかった。実は私が小学生のとき、時の校長（主事という職名だったと思う）の佐々木吉三郎先生の月曜の朝礼の際の「講堂修身」なる御講話にいつも感銘していたので、何かきつと先生のお書きになったものがあるにちがいない、それを拝見に参上した旨を申し述べた。私の小学校時代は、明治四十三年春から大正五年春までの六年間であったが、この校長先生には多分四、五、六年生という小学生時代の後期に御薫陶を受けた。講堂修身の内容はひとつも憶えていないが先生の威厳ある相貌と堂々たる英姿、力強い声とその心を打つ内容、これらにたましひが感動した印象だけがいつまでも遺っている。

それで現校長さんは図書係の先生を呼んで、私を図書館へ案内させて下さった。果せる哉、「教育研究」という雑誌のバックナンバーがあつて、その中に佐々木先生の論説や研究や報告等が載ってい

た。ある部分のコピーをしてもらい、感謝して帰った。佐々木先生は既に欧米の視察旅行をしておられた。ドイツ語も達者であられた。それを拝見すると、当時の歐洲の宗教や道德の状況を論じ、宗教が概して形式化しており、真に生きているのは小部分に過ぎぬことを指摘しておられる。しかし道德の根柢に宗教心がないと道德の完成は難しいことも洞察しておられる。また教育は心身渾然たる教育でなければならぬとの見解のもとに体育にも大いに力を凝ぎ、ドイツやスウェーデンの体操も大いに研究し、応用実践しておられる。先生自身柔道の達人で、あちらで柔道の指南もしておられる。

そんなことは露知らぬ小学生であつたので、御業績を恒間見て驚異し、尊敬の念を新たにしたのであつた。

私は小学校の第二部に属していたので、一・二年、三・四年、五・六年というように一教室に二つの上下の学級生が収容されて六年間教育を受けた。例えば五・六年生の教室で、五年生が「算術」を学ぶとすれば、六年生は「国語」を学ぶといったように別種の授業内容を並行して先生は教へるわけ。一授業時間の半分をたくみに使いわけて、先生は一授業時間の内容を教へ込むわけである。先生が各クラスの生徒に直接接するのは二分の一でありながら実質としては一授業時間の内容を教へるのである。ヴェテランの先生が揃っていたといつて可いであらう。第一部の生徒は高師附属中学へ無試験で入学するのであったが、我々第二部の生徒は推薦者以外は五・六倍率の入学試験を受けて附属中学へ進学するのであった。



佐々木吉三郎先生

余計なことを書いたが、実は第二部は男女組で、一年一学級で、男子十二名、女子十二名、二十四名が一年、上學年下學年合せて四十八名が一教室に収容されていたわけである。であるので、他學年生の姓名も性格も出来具合も一年間のうちにみんな大体知ってしまうわけである。私の上級生の中に佐々木校長先生の娘さん佐々木淑子さんがおられたし、下級生にはその令妹徳子さんがおられた。この姉妹はいづれも才媛であった。そんな記憶もあったので、私は名簿によって、御令妹氏家徳子さんが小学校時代に通っていた小石川林町からの途上附近に住んことがないのであるから、全くびっくりされた。しかし事の次第を聞いて大へん欣び、是非会いたい旨であった。翌年四月の始め、なつかしい氷川神社の境内の桜花爛漫の頃、参上、氏家御夫妻と面談。御主人はこれも奇縁、私の舎兄政美の大蔵省での先輩であられたとは。その後、徳子夫人に案内されて狛江にお住いの御令姉淑子さんをお訪ねし、先生の御写真の前で合掌した。その後、徳子夫人から佐々木先生の著書『青年と人生観』という遺著を拝借した。その内容の基調をここに紹介しよう。即

ち先生のまじいの姿をその言説の中から素描したいと思う。

『青年と人生観』

先生はこの本を大正十三年元日、伊豆の長岡へ出向き、その大和館の六畳間で一尺七寸四方のチャブ台を机にして書いた、とある。何の参考書もなく多年の体験に基づいて自由自在に書くというのである。哲学的精神の先生は、しかし哲学は万人が哲学すべきであって「権兵衛太郎作お鍋どんのはてに到るまで」自分自身の人生観をもって生きるべしと叫んでいる。そして青年たちは人生のスタートを切る前に即ち二十代に於て人生観をしっかりと抱いて実社会に立ち出でよと。先生は非常に積極的な心気の人で、万物はみな生く、鉱物に到るまで、という物活論を堅持している。そして先生はギリシャ人の如く議論を戦はせようとするのではなく、ヘブライ人の如く実践しないではおられぬ人、そこに生きないでは居られぬ人生観であり、宇宙観であつたから、むしろ人生道宇宙道とでも謂うべき気魄であることが行間から脈々として伝はってくる。自分の哲学的精神はむしろ信仰であるかも知れないと告白しておられる。

万有の差別相の奥に万有帰一の相を洞察し、多即一、一即多という哲理を告白している。国際間も実はそうなので、各民族各国家も、人間という原点に帰一すれば、人間の最も深い心たる愛を以て世界は帰一するはずである、というのは私の持論であるが、先生をして今日在らしめば同じく烈々と万有愛を説かれるであらう。

先生はまた万有の進化を信じ、その世界観、宇宙観は非常に楽観的である。勿論原子核の問題にも深く想いを致し、しかもどんな生物にも心がある、理性よりも心情の世界に深く想いをひそめているところに先生の真面目があると私は見る。

また先生は、宇宙の断えざる創造に於て進化の相を見ておられる。また科学的精確だけに人間が踳踏しているならば哲学的な大観ができなくなるといって、先生が人生宇宙を見る究極の目は哲学乃至宗教的な角度にあることが観はれる。

なほこの本の大半が卒業論文を土台としているところを見ても、先生が如何に若きときから卓見の人であったか、そして人生をその宇宙観、人生観を一貫しつつ且つ展開してやまぬ心根を以て実存して来られたかを知る。

先生は原子構造に於ても愛の抱合とか、極微分子の舞踏とかいう表現を以て、所謂物質の世界も生きているという相を見ている。元素間の親和力といって、ゲートの「親和力」を連想しておられる。

「現象は他観なり、実体は自観なり、他観は物質にして、自は生命なり心力なり、生命心力を併称して心霊といふ、万物は他観せば物質と見え、自観せば心霊と見ゆ。心霊の現象が物質にして、物質の実体は心霊なり」とは正に物心一如の妙諦を喝破した言である。それゆえに「之を外より観て、現象として研究するを科学とし、之を内より観て実体として研究するを哲学の本領とす」と道破しておられる。

「宇宙には大理法あり、且つ宇宙には目的あり、宇宙は動体にして進化して歇まず」となしている。「この宇宙に生を享くる人生に目的あり、吾人は、進化の大潮流に投ぜられたる一小分子なり。出来得べくんば、此の潮流に幾滴かの貢献をなし、以て社会進化の助勢をなし、造物主をして、余あるが為に益する所あつて損する所なかりきといはしめよ。これ吾人の最終の希望なり、目的なり。吾人は、之を達して初めて、莞爾として瞑目すべきなり。」然り、先生は未完成の完成の質を備えておられた！ 天界にて御平安あれ……！

先生の氣宇雄大にして、人生に対する烈々たる氣魄、嚴肅なる態度の片鱗乃至本質を茲に見た。

先生は文部省の重要ポストに就き、昼夜をわかつたざる劇務に執掌したので、流石頑健な先生も身体を害し、壮年期に突如世を去られた。

日本の教育界は希世の人材を失つたのであつた。天藉するに尚二十年の齡を以てすれば、先生は哲學的精神と科學的探究の渾然たる偉大な文部大臣として、また人間を本當に愛した大教育者として、宇宙万物、世界に通う雄渾な魂の人として、内村鑑三の言を以てすれば「世界のための日本」としての愛國の心情を以て大なる貢献を果たしたことであろう。噫、惜しみて余りある存在であつた。

小さな一小学生の魂に不滅の印象を遺された佐々木吉三郎校長先生を回想して、この小文を先生に捧げ、なほ今後の生涯を以て御恩に応へんと欲う。

二 恩寵の跡——集会、学慮、散歩

(一九三二年十二月十三日)

今から六年前一九二五年の或る日のことである。駒沢の新町に下車して、桜の並木路を「く」の字に進み右に折れ左に曲つて、外れの家の戸口に着いた。扉の柱に懸つてゐる標札は雨露のために燻つてゐる。そこに記されてある三つの文字の有つ歴史と人物がいかなるものであるかを、当時殆ど知らない私であつた。今とても何程を知らうか。通されるままに階上にあがる、そこには誰も居らなかつた。ただ額縁の中に古い人が三人居た。並び立つ書籍が目あたらしくて暫らくは書架から視線を背向けなかつた。静かなお二階である、樹の間からさす初春の陽がゆらめいてゐる。指を以て数へ得る程の人が集る。時計の針が十時半をいさうとする頃であらう、跽音が登つて来た。襖が開いて大きな人が現はれた。和服の先生である。先生の存在が室の空氣に一種の重みを与へた。先生は自ら司会された。講義は黙示録第二十一章「われ新しき天と新しき地とを見たり」と云うのであつた。此の一句とそれに連なる輝かしき数節！ 斯く新町の空に仰ぎし星のアルバたりしもの、数年の後オメガとなつ



前列：野中弥六、井浪弘、藤井武先生 後列：佐藤勲、小池辰雄、辻田鬼三郎
1927年11月6日 新町の丘にて、二本松のこの秋の聖書講義は預言者大観の秋であった。この新町の丘では午後にダンテ「神曲」を読んだ。

て現れたりし冥合の、思へば何と靈たましきことであつたか。

その年の五月の或る朝、エレミヤが講ぜられたが、これは特に忘れることが出来ない。今だに「嗚呼われ憂ふ、如何にして慰めを得んや、わが心衷になやむ。……」(エレミヤハの一八一九の二)と響いてくる。聖句の意こころの一つであつた。されば先生の講義は、主観的には在りまたは在らんとする先生そのものの言語的再現のほか何ものでもなく、客観的には真理の体験と研究とが神に生くる人格の中心で消化融合されたものの発現であつた。それ故に言には力があり、真理には生命があつた。聴講せし者は勿論、著書を繙く人の誰がこのことを感じないであらうか。およそさびしき人々は、新町の城より放たれし雁かりのたまづさに、なぐさめと励ましを月ごとに得てゐたであらう。

新町に学ぶごとに心は新しき水を掬み魂は何ものか力ある土産を携へて帰つた。併し集会の人々とは相変らず無言の挨拶を交はすのみで別に親しくなるでもなかつた。ここでは喋つたりすることは悪い事であるかとさへ私は思つたゐた。それは先生御自身寡言で居られたからである。風も黙すかと思はれるほどにすべてが騒がしくなかつた。「眼ゆるやかにして重く、その姿に大なる權威を帯び、語ること稀に声やさしき人々」を緑の野辺は見た古への詩人は、ここにもその友を発見しなければならなかつたのである。

その年の秋から会場は階下に移されたと記憶する。集る人が増えたからである。講義は日曜毎に聖書の随所から選ばれて行はれた。オルガンは礼拝のときに鳴り響いたことがない。彈奏が形式だとい

うのではないが、先生が形式的なことを如何に斥けられたかは事毎に現はれてゐた。

翌二六年の春四月から創世記の講義が始められた。お互の間に親しみが生じて来た。併し先生の厳かさには無論変りはなかつた。否ある意味で先生は段々恐くなりつつあつたのである。会員の多きは先生の望まざるところ、増減や顔ぶれは先生の関せざるところ、真理のみが先生の不易の友であつた。「私は實際何人の師にもなりはしなかつた。ただ私は、私が口を開いて自分の使命を行ふとき、誰かそれを聴くことを望む者があれば、青年であれ老人であれ何人に対してもこれを拒むやうなことはしなかつたのである。」と云つた古哲の心そのまま先生のものであつた。そしてまた先生が如何に人格を人格としてとり扱はれたか、先生の人に対する欣びと憂ひの那邊にあつたかは先生を知る者は知つてゐる。非人格的言行の一切は先生の心を曇らせ、全人格的言動は仮令誤つて居ようとも先生を飲ばせたと違ひない。先生には魂のふれあひは「すべてか然らずんば無し」と云う性のものであつた。今は地に亡き井浪兄が岩元先生のことをもち出したときであつた、同じくこの哲人に師事した先生は一高時代を想起して一つの逸話を紹介された。「六十点も三十点もおんなじぢや！」と大喝された岩元先生の心である。信仰の満点性を談笑のうちに論されたのであつた。座席はそのときの司会者を除くほかは上も下もない筈であるのに、時につまらぬ遠慮をすることがあるために、先生はある日、着席は到来順にと云ふ意味の貼紙をされた。苦がき思ひ出の一つである。講義が我々にとつて満腔の感謝の連続であつて、何も質問も発しななければ、敢て所感を披露する者もないために、先生は時に木石に

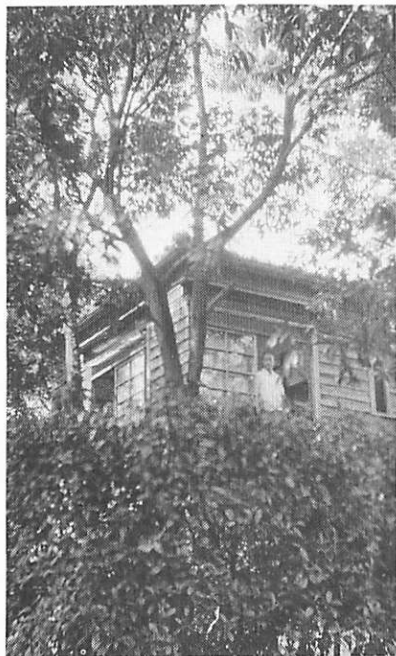
でもものを言ふの感を抱かれたのはたしかである。わが不勉強の罪よ！

秋から翌二七年の二月までは、詩篇、イザヤ、エレミヤ、使徒行伝、パウロの書翰などの中から題材を採られたが、帰するところは一つの真理であつたと言へよう。何ぞ、曰く、「信頼」と云ふ魂の姿これであつたか、先生のいのりは如何に我々が信頼の子となるやうに願つたか。思ひ出すも切なりし先生の願ひ！

二七年の春には、今までの信頼の世界とは反対に神なき世の「空の空にして風を喰ふに等しき」を伝道之書に依つて語られた。併し先生はどうも反証は自分にはしっくりとしないと言はれた。礼拝に於ける讚美歌は多分この頃から回を減じた。司会はすでに先輩の手から我々に移つてゐた。一回に唱ふ歌数も司会者の随意であつた、聖句の暗誦が始められた。「聖霊のあるところには自由あり」は新町集会の鉄則として各自が踏むべき道であつた。心より集るに非ざれば先生はいつにても集りを解散する心算で居られた。されば少なくとも先生に於ては実質上毎回が新しき会合であり解散であつた。

*

一九二七年の秋である。靈感の翼を張りて大鷲の如く、先生は預言の峻峭を大観された。アモスよりマラキに至る真理の啓示を歴史的に跡づけたる目覚ましき直観と洞察とに我らは驚異した。何と感銘深く気魄揚がりし秋であつたか。そは我らに三つの真理を齎らしたのではなかつたか。第一に預言者魂、第二に偉大なる摂理、第三に荊棘の道。而してこの秋は先生が真理の国への旅に於て御紀の方



藤井武先生の階上書斎。顔を出しているのは長男洋君。この家は第二次大戦で焼失した。

向を採らしめられたものでなかったか。幾朝となく望み見たる曙の明星はその秋を象徴してゐたかの如くであった。

扨て日曜午前の集会の外に前年の春から「樂園喪失」^{バラダイス・ロスト}の第二期講読が午後に行はれ、此の年の正月からヘブライ語が並行して始められ、日曜は朝より夕まで所謂安息日どころではなかった。冬の夕、一つの火鉢に足を並べて聴きし講義には、言はれぬ味があった。先生は言はれた。つまらない本を読むものではない、断片的な勉強は無駄である、第一流の本を組織的に読むべきであると。ミルトンの

講義が六月で閉じたので、

我々の望みは期せずしてダンテに向ひ、秋からは「神曲」をお願いした。午前の礼拝が済むと我らはあの二本松の丘に出るのを殆ど常とした。帰ると先生は椅子に憩うて待つて居られる。二時から午後の研究。「では始めませう」と云うやうな静かな言が宣せ

られると誰かが祈る。当番が訳読する。先生はじつと聴いて居られる。勿論ここでは文学と語学が問題であるのではなく、聖書真理観を以てする味解が目的である。先生の話は多弁ではない。面白味はない、併し權威と魂に泌みこんでくるものとを有つてゐる。ダンテに於ては眞のミルトンに於て学んだやうな健全な信仰そのものは期待さるべきでなく、むしろ信仰の態度を觀るべきであつて、ダンテのダンテたる所以の何処にありしかは静かに自ら学ぶべきであると言はれた。ダンテは説明すればする程傷つけられるから暗示するに止めねばならないと言はれた。ミルトンの場合とは会の気分にもおのづから異なるものがあつた。ときに先生の顔の奥にはダンテと共に悲しむ色が潜んでゐた。悲哀にも義憤にも歓喜にも言ひ知れぬ何ものかが魂の底に坐つて神を拝してゐるように思はれた。何ものも其れを砕くことの出来ない其れ自ら砕けてゐる魂である。我々は先生の言の深い余韻と先生の存在そのものでダンテを読んだ。杯は溢れた。ダンテが四時頃終るとお菓子が出る、青年のくせに皆んな案外遠慮勝ちである。小憩の後なほ一時間程グリーンンの文典で旧約原語の片鱗を学ぶ。語学が終る頃には秋の陽もその馳場を走り終つてゐる。夕の鐘は晚鴉の声か葉ずれの音か、再び祈りを以て会を閉じる。閉じるけれども我らの腰は椅子に膠着して動かない。残照の空の下、師を囲んで小数の若人は沃地の汀にでもゐる心地である。ぼつりぼつりとされる先生の妙に長い余談、何と楽しき憩ひの水浜。「夕陽おちて空くらく蟬にゆく鳥の影きえて星がめさめる」頃、我らは言ひ難き感謝の念をただ「有難うございました」の一言に託すれば、先生は応ずるに無言の叩頭を以てせられる、唇には言をなさ

ざる音が洩れて。

その秋の明治節の日である。我らは逗子に汽車を降り、乗合で半島の西岸に出で道を南下した。先生の眼は遠望勝ちであり、幾分大股の足どりにはどこことなく力が籠つてゐる。心も体も大きい人である。南の空に顔を向けた斜面に豌豆の花が咲いてゐた。其の畠に働く人に先生は何かを尋ねられた、聴き終つて先生は「どうも有難う」と挨拶されたが、その一語に祈りの余韻が響いていた。弟子の足を洗うような心で先生も弁当包みを荷つて下さつた。先生は小食であつた、その肉体にはいつも刺が在つたのである。午さがりの陽を右前より浴びて楽しく語り合ひつつ進んだ。一行が三崎の岸頭に立つたとき、城ヶ島なる燈光の明滅はゆき暮れし五人の兄弟を知るが如く識らざるが如く、東天に現はれたる半月、中空を飛び渡る白雲、涯も知られぬ黒き大洋、無窮の空に懸る星辰、その言は何か。突如「清き岸辺に」のうたが響く、先生の声！ 声に応へてわれらも唱う。先生は祈つて下さつた。「我々のはややくそ信仰と云ふんですよ。」この片言と先程の何でもない挨拶の一語とが今もなほ耳に残つてゐる。

預言者マラキの書が終つたときクリスマスは来てゐた。裝飾なき新町の祝会に於ては、一人一人の胸に感恩の念が果を結び讃美の心が花と咲いて、厳肅な歓びが満ちてゐた。星は闌干として散り、満天讃美に輝いてゐた。先生は特に「こんなクリスマスを今までに有つたことがあります」と言はれた。

明けて二八年、先生の詩篇講解は我らの魂を独り静かに神の前に招き出すのであつた。第二十九篇に達して解散すべき期は来た。神曲もその三界を垣間見て、初夏のある夕終りを告げた。木の間から光が滴つてゐたが我らの心胸もその如くあつた。

秋に入つて午前は創世紀第四章から順を追うて学び、午後はカントの「道徳哲学原論」とギリシャ語とであつた。方舟と橄欖の若葉と虹の話は何と言つてもこの秋のオリオンであつた。十字架と苦戦と勝利と来世である。「鵠暮に及びて彼に還れり、視よ其口に橄欖の若葉ありき」この一句をしづかに読みあげられた先生の眼底には言ひ知れぬ露が宿つてゐたのである。

この秋は真鶴岬へ一日の散歩を試みた。密雲とぎす朝の空、小田急線上の武蔵野の景、行人稀なりし臨海の崖路、岩礁突兀たる渚の集ひ、根府川村の密柑畠、真鶴半島の森の迷路、先生の口吟む二四九番、斜陽に映ゆる金色の岬、残光紅き空を劃する天城山、崖頭に腰打ち卸して夕暮の大洋を望み見る先生、「わづらはしき世を暫しのがれ」の讃歌、先生の祈禱、「父みこみたま」の頌詠、天の両眼の如き金星と木星の輝き、図らざりし一漁夫の先導、星空を仰ぎし還路。長き敘述をここに避け、此の一日の恩恵と先生の心とを想ふのみ。

年改つて二九年、「福音書の読みなほしをしなければならない」と先生は云はれた。参考書を一先づ閉ぢて、心を全く白紙となして、イエスその人に真を以てぶつかり、霊を以て捉へんとするのが先生の態度であつた。主として共観福音書の中から言動に現はれたるイエスの心を読まんとしたのであ

る。嶄新な講義であつた。先生の話は、先生自身の言を拝借して言ふならば、決して説教ではなかつた。真理の証明に過ぎなかつた。減多に感激はなかつた。すべてが素人的であつて、淡々たるものであつた。それでも必ず感謝に満されて散じたのである。スピノザの名を呼ばれて、「神にだけは酔つていい」と先生は云はれた。イエスの人格を知りつくすことは出来なく、また十字架を以て解き得ざる如何なる魂の問題もないことを学んだ。

カントもギリシャ語もその年の初夏でおしまひとなつた。この研究会の最後の午後であつた。先生が訳し来つて終結の一段に於ける、「我々はその理解すべからざるを理解した」と云ふ一句にさしかかるや、窓外では白雨が樹の葉を叩いた、宛ら自然の応答であるかの如くに。「諸君はこの『道徳哲学原論』を読み了つてどんな感じがしますか」。一同暫し黙然としてゐた。先生は言はれた、「読み終つた瞬間の感^{かん}は輝^{きら}かしいの一字で表される」と。静かに力強く純粹なる道念を説いてくれた哲人に我々は心から感謝した。「新町の午後」と我々が呼びなれてゐた楽しい午後はそれ以来再びめぐり来らなかつた。

斯くの如く秋空から夏空へと我らを載する星が三たび巡るうちに、ミルトン、ダンテ、カントの三つの彗星が横ぎつた。驚異してゐるうちに過ぎ去つた。併し花火を見るやうな驚きではなかつた。その光芒は永遠に互つて消えざる星である。これを親しく観せて下さつた新町の天文台を我らは如何に感謝しようか。

五月下旬の或る日、多摩川の向ひ岸なる連光寺と云ふ丘陵地を皆んなで歩いたことがある。夏にもならないのに蟬が啼いてゐた。松や灌木の生ひ茂つた高い崖の上に恰好の憩み場を見出だしてそこで感話会を開いた。その時の先生の言に、真理が真理を生み出すことは宛ら夏雲が疊重して湧き立つ様であると云ふ意味のものがあつた。その日、入道雲を望み見て先生はさう感ぜられたのであらう。

また秋を迎へた、黙示録の講義が始まつた。いつかは黙示録をと願つてゐたその時機が到来した旨を告げられた。預言書と創世紀と而して黙示録、「中も、始も、終りも、涯なく彼を讀^{たま}へんため」と云ふ句を思ふ。先生の歩み方が大きくまた澄んで来たのを感じざるを得なかつた。先生に導かれて未踏の山を登り始めた。驚くべき山である。十一月の半過ぎ、導者は傷かれた。かの忘れられぬ溝ノ口の散歩が先生をつひに病床に就かしめたのである。北風よ、わがために悲歌を星に贈れ、天涙よ、わがために哀音を奏でよ。

「私は神に向つて涙を灑ぐ」のみである。

同じ秋である。先生は真理思慕の熱と真理発見の歓びと我ら少数の青年と「私するに忍びず、新しき啓示に従つて断然学廬の門を開放」されたのである。我らも亦新しき欣びを以て講筵の席に列するの日を待つた。先生はそのために、黒板、机、椅子、下駄箱の如きを用意せられた。その苦心の少なからじりしを想ふ。その愛の心は犠牲を顧みなかつた。

月曜の晩は「歴史的に跡づけたる聖書神学」である。先生にとっては全く「久しぶりにノートに片

仮名で横書にした」原稿を手にして講義をされた。七時に祈りと共に始まり九時に祈りを以て終る充実した二時間、聖霊の光に駕して先生と共に真理の国に旅し、神を求めし古き魂に会ふの心地であった。真理啓示の跡を究め、さてはその将来を望むのは先生の特別な関心であり要求であつた。原稿は毎週ものせられたらしく御病臥のため講義を中断すると共に草稿も中絶した。

アウガスチンの『告白』とプラトーンの『ファイドーン』とは「それに就いてではなくそのものを読む」先生の主義により、勿論講読であつた、(英訳を用いて)。前者は金曜、後者は水曜の晩に講ぜられた。アウガスチンの神に呼はる声は先生にとつて或る意味で「わが声」であつた。先生のアウガスチンに対する深き同情と尊敬からする解説は祈りの心を以てするに非ざれば聴くべからざるものであつた。

プラトーンの「ファイドーン」に於ては「専門家の思ひ及ばぬ真理」が聖書の光によつて発見されてゐたと信ずる。死の問題、魂の問題は我々に真剣な興味を起した。「純潔にして永遠なる別の世界に立ち帰らんとする」ことは、それが哲学的思慕であれ、宗教的渴仰であれ、貴きいのりである。プラトーンのその崇高なる理念を聖書真理觀を以て批判された、基督者らしき謙遜を以て此の偉大なる真理の友に敬意を払いつつ。

隔夜の真理の饗宴は何と楽しくあつたか。何と静けき恩寵の秋の夜であつたか。集ひしは未丁年より還暦までさまざまであつた。(旧約と新約)一一五号、友情物語、参照。数年の過去を有する新町学園開

放されて一月半、時ならぬ風のため花と散る。言ふべきところを知らないけれど、神は讚美されねばならない。学園第二期公開の願ひも竟に神は天の巻物におさめてしまはれた。

この年の降誕節の頃はただ星を仰いで過ぎた。先生は病床に忍従の朝夕を。明くれば一九三十年、天明に玲瓏たる仙嶺を望み見て誰かこの年に祈るところあらざりし。先生をお訪ねすれば、「オメデト」と挨拶をされる病床の心。お話の中にパウロのことが出て来て、彼が如何に晩年に於て大きな深い心を有つてゐたかを述べられた。先生の関心は神の大きな経綸に向つてゐた。

丘の上は今日も寂しや野の人は病みつき給ひて八十日に余る。二月も半を過ぎるのである。来し方の先生の苦戦と忍耐は筆にとやかくと書きつらねるよりも黙すを相応はしとする。御尊父と軒を並べながらも相見ゆること難かりし父子の衷情はどんなであつたか。

春風立ちし第一の日に嚴父は天軍に迎へられ給ふ。痛苦の重襲に対し、「死すとも一步も退き給はざりし」武人の眉雪は輝きて。想ふ、降り注ぐ時雨の中に大理石の如く立ちて、去りゆく柩車を見送りし人の胸底を。同じ月の末つかた。内村鑑三先生落日の如く去り給ふ。急遽床を蹴つて馳せつけられた先生、病体を以て立たれるその後の先生の奮闘！ 神の強き力、キリストの深き愛、聖霊の言ひ難き祈りが先生を支へて居た。

黙示録は継続せられ、終に六月二十九日を以てこの靈峰は登り尽くされた。悲壮なりし牧者の嚮導を静かに願て、恩寵の名づけ難きに涙した。学びし真理の目覚ましきに感謝した。讚美歌は胸つまる

讚美の心をあらはすに足りなかつた。同じ日の午後、感話会を有った。申命記三二章一二、イザヤ書四二章一一〇、詩篇一三〇篇の三つを朗読して会を始めた。何となくすべてが悲壮に感ぜられたのはどういふわけであつたか。先生はエレミヤを語られ、おのが道のいよいよ狭く峻しかるべきことを述べられた。八時頃、頌詠を合唱してお別れた。それが、噫、はからざりき、今生の訣別となつた。先生が集りの人々を愛してその日まで来た心をわれらの誰が充分に知らう。先生と我らとの間には或る淵が横たわつてゐるのを感じられたであらう。その苦衷はどんなであつたか。深く人を愛する人の悲哀である。先生は「人の見ないものを見、人の感じないものを感じ、人の求めないものを求めた。」先生は「必然孤独であつた。」「愛を慕ふ」先生の「心は、却て最もさびしき曠野におかれたのである。知る人ぞ知る、これ人の負ふべき十字架のいと重きものの一つであることを。」

さて願ふに、先生の先生ありし所以はかの十月一日に在る。神様はその「苦杯を呑み干さしめて」、御自身を、キリストを先生のすべてのすべとなし給うた。来世も日本も自由も卓潔も真理もすべてその徹底した信仰からであつた。十月一日には集る少数の人に天のおとづれをしんみりと話されたが、記念日の最後となつた一九二九年のその日にはお室が溢れるほどに同信の人が集うた。先生の跡を追うて聖戦に仆れた秋本先輩が隻眼を害しながらも、病弱の身を千葉から運んで来られたが、彼が司会したその晩の先生の「天国の話」は、之を聴きしもののすべてを此の世ならぬ国に居るの思ひを抱かした。

一体先生は何であつたのか。真理の人、預言者、詩人、愛国者、さうである。けれども先生は何であつたか、戦つた人であつた。内からささやき外から襲ふサタンと血戦をなした人であつた。なほ内なる先生は何であつたか、そはおそらくキリストのみが十分に知つてくださる「悲哀」と云ふ実在であつた。

恩寵の跡を臚ながら辿つて見ると、そこには何ものかが棄てられてある。一つの燈火である、一つの折れたる杖である。燈火が何であり、折杖が何であるかを一生以て知らねばならぬ。

恩師の故に、栄光聖名にあらんことを。

（『藤井武の面影』所載）

〔付言〕『藤井武の面影』という追想集に、先生の告別式で述べた「噫藤井武先生」というのがあります

三 大阿蘇の恩寵

(一九五〇年十二月)

遠くよりヤーウエー我に願われて言ひ給う、

我れ窮りなき愛をもて汝を愛す。

——エレミヤ——

『聖靈の愛』を講ずる現代日本の預言者は聖靈の愛に浸っている人である。深々と更けゆく阿蘇垂玉の溪谷に、溪流を伴奏として、此の人による聖靈のおとづれに耳をかたむけたのは一九五〇年十一月三日の夜のことであった。昔の寺小屋を偲ばせる実存的講筵である。きびしくも且つ愛深きものである。聖靈の権威と愛が動いている。手島さんはキリストの十字架の愛を説きつつ、不思議な古歌を聞かせてくれた。

「闇の夜に啼かぬ鳥の声聞けば

生れぬさきの父をしぞ思ふ」



「原始福音」集団のペンテコステは大阿蘇垂玉温泉の瀧見荘集会（1950年11月3～5日）であった。これは著者にとってもペンテコステとなった。その三十周年記念祭に於て参会者に一席挨拶しているところ。（1980・11・2）。

父なる神の、キリストを通しての愛、「十字架の言」とパウロが言った意味、ヨハネが懇ろに語った愛の意味、それが聖愛の祈りの場に於て迫ってくるのである。講義と祈りと相交えつつ講筵は進む。聖霊の神の前に、我を投ずる。異言の恩恵にあづかる奇しき体験である。夜は知らぬ間に白みそめる。ある女性が異言の歌を唱った。それを始めて聞きしときの驚異。美しき天的な声音である。それは正しく我もなく世もなく、聖霊のみはたらく境地であろう。聖霊にあらざる悪しき霊かはたらかざらんために。大切なことは実存的信仰と聖書の精読である。

砕けの実存、砕けの愛が動いてゐるのでなければならぬ消息がこゝにある。ルッターの言う「悔改」の生活である。砕けの実存である。キリストの愛（いのち）への「投げ身」の場に聖霊がはたらき給う。キリスト・イエスが「お父様」といってすがった様に、す



龍見荘の前で（1980年11月3日）

がる姿（いのり）がどういふものであるかを親しく体験する。『聖霊の愛』を説く手島氏が、何を如何に体験して居られるかを親しく知らずして、兎角の批判をしてはいけない、そこにキリストの愛が心から求められ、そこに現じているなら、聖霊がはたらいっているなら、いかなる批判もいたづらである。異言、預言、神癒が深いキリストの愛の場に聖霊の愛の場に現ずるならそれが何で危険であろう。わが友の強調するところはどこまでもたゞ「聖霊の愛」であって、その華であり果である異言、預言、神癒ではないのである。コリント前書十四章の前に十三章の「愛の讃歌」ある所以である。而も、十四章がそれと逆説的關係に於て重視されねばならない。我らは手島さんから親しく十四章の解説をきいた。外では聴かれない權威ある解説であった。また使徒行伝も霊的体験の豊かな氏によつてはじめて權威ある解説がなされるのを見た。

「聖霊の愛」の実存共同体が、聖霊の幕屋であって、教会も、無教会も、神の民という自覚に於て、各々存在形態の底に於てはキリストの体として一つであることを信すべきである。パリサイ根性は聖霊によって打ち碎かれ



手島郁郎兄の歴史的な祈りの山お釜戸山を右方背景にして（1980年11月2日）
峰崎三四男君、著者、手島千代子夫人、新保浩子姉、x姉

よ！パウロが誠めている通り、各々その賜を感謝し、それを充分にはたらかせればよいのである。愛なきところに真の理解はない。パウロがいつもあの終末的な愛を根底にした倫理を勧めているのも、そこには偉大なる健全なる消息があると共に、つまらぬ分裂や批判に対しての心づかいでもあるわけだ。

三日目の祈禱会のときの異言の歌、「霊の歌」（コロサイ三・六）の合唱は素晴らしいものであった。天的饗宴であった。霊の力が湧き立たしめる天声の素晴らしさよ！手島さんが「こんな楽しいことはありませんよ！」と、腹の底からその淨福を告白して居られた。いかなるこの世のコンダクターも霊の歌の合唱を指揮することは出来ない。指揮する者と合唱する者も冥目していながら、その調べが霊波の指揮下に動きゆくとは！これを疑う者は福音書の多くの「奇蹟」と称する記事を疑うがよい。キ

リストの言、それ自身が人間のあたまからしほり出した言とは異質である。そうでなければ実にキリストそのものを疑うがよい。神の啓示的事実にぶつかった者は、理性の批判をむしろあわれむであらう。我らはかかる素晴らしき出来ごとを知らなかった今までも聖書の語る啓示的事実は強く信じて来たつもりである。併し、かかる現実**にぶつかって**、その強度が一層現実的となったことを告白せざるを得ない。回心のために倒れる青年もあつた。パウロのダマスコ途上の転倒がその強度なものであつたことも容易にうなづかれる。聖霊のバプテスマを阿蘇の三日に於て体験した小さき群は「酒杯の溢るる」を感謝し、高らかに讃美して下山したのである。

帰途、東京への車中、緋く聖書の文字が躍動するのを覚えた。復活のキリストに出遭つたエマオへの二人の旅人のことを想つた。聖霊の神、我ら（桜井信市君と私）と共に旅し給うた。

「途にて我らと語り我らに聖書を説き明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや」（ルカ二

四・三二）

（「生命の光」誌第十八号）

四 噫、内村鑑三

(一九八一年早春)

福音の告白の生涯

内村鑑三先生が天界に往かれてから、去年(一九八〇)で半世紀が経った。この短文に内村鑑三を書いてみたところで九牛の一毛にすぎない。しかし今まで出版された内村鑑三論——感想、想い出、論説、伝記など——において、おそらくいまだポイントを確かと指していないある一点がありはしないか。私はこの短文を、そこに焦点をおいて書くことにする。

噫内村鑑三！ 是は世界的な重みをもった名である。いかなる肩書をも必要としない。あつては却つてそこなう。何々博士とか、煦何等とか、功何級とか、そういうものは要らない。およそそういうことに関心も興味もない魂であつた。ベートーヴェンも漱石もそういう魂であつたように。偉大な魂はまた概念的限定もできないものである。誰かゲーテは何々主義の人間であつたと言ひ得るか。凡そ何々主義の範疇に入れ得る者はとうてい超一流の人物ではあり得ない。内村鑑三という人は、その少

年時代から晩年に至るまで、いつわりのない人間であった。虚飾やポーズのない人、言うことなすことが、その瞬間瞬間において全人的な人であった。誰が天候にいつわりがあるというか。雨天、晴天、曇天、強風、台風、千変万化の天候、そのどれもが本物である。そのように、いつも内村は全人的言動の人であった。だから矛盾があり、劇的である。あの膨大な著作の言説の内容は宇宙的なものである。内的にも外的にも劇的な生涯そのものが福音の告白であり、証示となっている。

全人的とは、あるがままの自分を分裂なくそのままぶちまける魂身の態勢をいう。知情意が渾然として全人的に動く。知情意のバランスはそのときそのときにちがっているであろう。それは問題でない。内村鑑三の文章が何よりこの事態を現している。だから力がある。人を撃つ。矛盾逆説がある。却ってそれが驚くべき生命的総合を成している。劇的生涯の点ではルターに類比できよう。氣宇壮大な点ではゲーテと相通ずるものがある。

鑑三の初期の名作に“*How I became a Christian*”〔余は如何にして基督信徒となりし乎〕という英文の日記体的な回心録があるが、そこにすでに全内村の中核が在ることを知る。

「余はキリストと彼の使徒達よりして如何にして余の靈魂を救ふ可きかを学んだ。併し預言書よりは如何にして余の国を救ふ可きかを学んだのである」すなわちキリストの使徒たち、わけても使徒パウロの十字架信仰を深く体受した。また国の存亡の危機と没落に当って輩出したイスラエルの預言者たちの畏神に基づく真の愛国心、特に預言者エレミヤの愛国心に内村は深く共感した。それで日露開戦

に當つては、非戦論を掲げて愛國の至情を吐露した。

彼は一八八六年三月八日、回心を告白してこう言っている。「余の生涯に於て極めて重大なる日なりき。基督の贖罪の力が今日の如く明瞭に余に啓示せられしこと嘗てあらざりし。神の子が十字架に釘付けられ給ひし事の中に、今日迄余の心を苦しめ凡ての難問の解決が存するなり。

…今や余は神の子なり。余の義務は耶蘇を信するに在り。彼のために、神は余の欲する凡てのものを与へ給ふべし。彼は彼の栄光のために余を用ひ給ふ可し。而して遂に余を天国に救ひ給ふべし」。

すなわち内村はおのが救いの土台をキリストの十字架に置き、生涯の意義と目的をキリスト中心に、キリストの栄光に置いた。

全く自由な受洗を

彼は十字架の贖罪を信受したとき、特にこれを記念せんとて、自分で「一房の野葡萄の果汁」を搾り、「ビスケットの一小片」を割いて、感謝の祈りを捧げ、「主の体と血に与（あずか）る」聖晚餐を自らいとなんだ。また驟雨が降ったとき、天来の水に「全身ずぶ濡れ」となつて自由な受洗をやった。

教会の信条、組織、制度、宗教的儀式、祭典などを好まず、生命的な信仰生活でなければやりきれない彼の魂は、必然ルター、カルヴィンの宗教改革をも突き抜ける方向へと徹していった。それがアメリカから帰国後、期満ちて狼火をあげた「教会なき」人たちのための「無教会」キリスト教であつ

た。信仰のほか何も要らない「教会を要せざる基督教」(Churchless Christianity)の唱道となった。これが「宗教改革仕直しの必要」(Need of Re-Reformation)と彼自ら提言した所以のものである。

内村鑑三は、札幌農学校時代に、日本古来の多神信仰からキリスト教の唯一信仰に移り、アメリカのアマスト大学総長シーリー博士の人格と信仰に感じて十字架の贖罪を信ずるに至り、愛娘ルツ子の死を契機として復活の信仰を体受し、第一次大戦を通して再臨の信仰へと展開した。

彼は非常に劇的な生涯を送った。結婚問題、不敬事件、足尾銅山鉍毒事件、社会主義との対決、日露戦争、第一次世界大戦、関東大震災、排日法案、門弟たちとの諸問題、等々。

夫々(それぞれ)の事件や問題を通して彼は信仰の内容は豊かにされ、著作活動は旺盛となり、信仰の質は深められていった。そして多角的な人間内村鑑三を支えているものはつねに贖罪の十字架であった。

それゆえ内村の「無教会」的信仰の中心は十字架であることに異論はない。しかし「無教会」のその後の歴史において、十字架信仰の強調のあまり、これを墨守して前進しないきらいのあることは否めない。聖書の学問的研究においては、世界的水準に達している面もある。

しかし信仰の内実ほどの程度展開しているのだろうか。内村の「救済の三段階」という短文に曰く、「行ひて救はるるに非(あら)ず、信じて救はるるなり、信じて救はるるに非ず、聖霊を受けて救はるるなり。行為は信仰を促すために必要なり、信仰は聖霊を招くために必要なり。行為、信仰、

受霊は救済の三段階なり。人はそのすべてを経由するに非ざれば神の天国に入る能はざるなり」。

このように聖霊のことに触れている言説も少なくはない。しかしなばら、十字架を真に体受するところに聖霊が降る祈りの深い消息に関する確然たる証言に欠けている。力あり、多様な聖霊のはたらきや賜（カリスマ）に関する積極的唱道に欠けている。使徒行伝やパウロのコリント前書第十二章、第十四章、その他パウロの聖霊に関わる言に対する積極的証言に欠けている。

内村において、聖霊が無意識的にはたらいっていた面は少なくなかったであろう。しかし使徒たちの信仰の現実における聖霊の次元からは、ずれていると言わざるを得ない。内村鑑三が聖霊内住の次元において使徒たちと同質であったならば、無教会はもっと驚くべき展開をしてきたはずである。

「キリストに同化されし者、キリストの活ける体の一部分となりし者、其困苦と歎喜と、其恥辱と栄光と、其死と復活とを、彼の中に在て彼と偕に父なる神より分与せられし者、是れが基督信者である。信ずるとは此場合に於ては知識的に認することではない。亦感情的に信頼することでもない。キリストを信ずるとは彼の神格の中に我が人格を投入することである。こうして我を無き者として彼をして我に代って我が裏にあらしむることである。是が即ち信の極であって、キリストは我等より斯かる信仰を要求し給ふのである。キリストが神であり、霊の宇宙であり、我等が其霊界の一部分となるを得て、始めて我等の聖化も満足に行はれ、亦キリストの光は我等を通して世に顕はれるのである」

この一文は内村鑑三の信仰告白の白眉と私は信じている。ガラテヤ書第二章二十節とコリント後書

第三章十八節を告白しているような一文である。このような天来の火花の如き告白がなされながら、なぜ、内村は十字架と聖霊に関わる深い洞察と体験と体現へと展開しなかったか。聖霊の賜（カリスマ）の事態が自在に現象しなかったか。聖霊の内住と祈りの現実がもつと証言されなかったか。そこに彼及び彼に追隨している無教会の問題性と限界があると思われる。そのことについてここに語る必要はない。

ただ事実、筆者が十字架と聖霊不可分の信仰的現実の証者となつて以来、筆者は無教会のアウト・サイダーにされたし、自らもそうならざるを得なかった。しかし、キリスト及びその使徒たち、ペテロ、ヨハネ、パウロらの現実、新約聖書の現実、聖霊の驚くべき現実である。

それがほとんど十字架の贖罪だけに止まっていたは、「キリストの御霊なき者はキリスト者に非ず」というパウロの言をどうしてくれるか、ということになる。十字架のキリストへの全存在的投入をもつて聖霊のバプテスマを顯然と受けければ、著者の言わんとしている事態と現実が何であるかを体得し共感するはずである。

内村鑑三が『聖書之研究』という月刊誌をもつて生涯の後半、三十年間を戦っていたにもかかわらず、この「研究」という語が躓きの石となって「研究」的キリスト教に「無教会」一般が類型的になり、その長所にもかかわらず、聖書の霊的現実からは遠ざかっている。

キリストが「然れど聖霊汝らの上に臨むとき、汝ら力を受けん。……地の極にまでわが証人となら

ん」(行伝一・八)と言ったように、聖霊の力の証者となることをキリストは本願とされているのである。その聖霊のもつ愛こそは最深最大の力である。新約の使徒たちはまさにその証者たちであった。聖書はそのドラマであり、告白であり、実証である。単なる教えではない。

噫、内村鑑三！あの烈々たるたましいの悲願を受け継いで、さらに突破し、あの重厚な構造をもつ使徒パウロを中心とする使徒的信仰の現実に戻らん！と私は霊願している。「エン・クリスト」(「キリストに在って」)の聖霊の十二の召団(エクレシア)がおのづから形成され、福音伝道の一環を承っている。

以上、私は忌憚なく述べた。すなわち焦点は十字架・聖霊不可分の事態にある。私は内村鑑三先生に深い敬意と感謝をいつまでももつ者の一人である。これからもこの偉大な魂の著作に触れてその文字を喰ってゆく。ただこと聖霊に関しては、使徒たちの文字の奥からの無量のひびきを体受してゆく。全聖書を光被するキリストの霊光をもってこれを身読し、その現実を化体してゆきたくひたすら願う者である。

ともあれ、現代日本の特に青年諸君が、ぜひともこの古典的内村鑑三の著作を精読せんことを切望する。この真の日本人にして世界的人物たる内村を読むか読まないかで、その人の精神的分水嶺の水の流れがちがってこよう。この精神的危機の日本に、内村の活文字あることを忘れてはならない！

内村鑑三は一つの世界であり、宇宙である。歴史であり、詩であり、大自然である。彼の魂の著し

い二つの叫びをここに掲げて筆を擱く。

「私は日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため、そして万物は神のためなり」

「宇宙万物人生ことごとく可なり。言わんと欲する事尽きず。人類の幸福と日本国の隆盛と宇宙の完成を祈る」

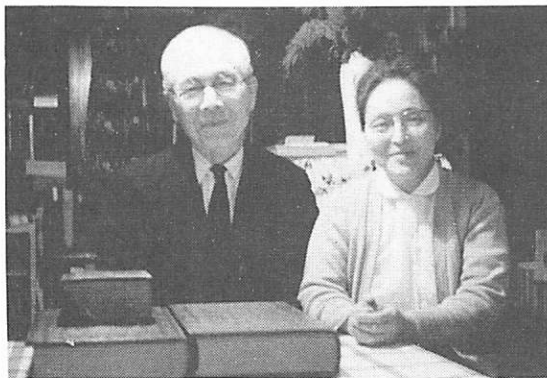
五 塚本虎二先生

(一九八六年八月二十八日)

一九三〇年、内村・藤井両巨星が天界に昇ったあと、三年間私は独りで日曜を遊んでいた。その三年目なる一九三三年の十二月二三日に藤井武先生の親友塚本虎二先生の司式で伊藤順子と結婚した。式場並びに披露宴場は神田の学士会館であった。その頃は所謂お色直しなるものはなかった。その日は偶然にも皇太子殿下誕生の日に当り、神田のあたりは花火の爆音や提灯行列で賑かであった。

ホテルに宿るでも、新婚旅行にゆくでもなく、家に帰った。二ヶ月後は満三十歳を迎える前年の暮であった。式るとき先生から載いた聖書の扉には詩篇百二十一篇の聖句「汝をまもる者は徹睡したまふことなし」が記されてある。その通り神の御護りの中にある。

そんなわけで、塚本虎二先生の丸の内集会の会員として、司会を承る一人ともなり、ヘブライ語クラス担当者ともなった。三年間ほど男性組、女性組をもった。『旧約知識』誌の同人ともなり、ヘブライ語の文法も連載した。その文例は自分で原典に当って作った。これはかなりの勉強になった。ヘ



塚本虎二先生を銀婚記念日（1958年12月23日）にお招きして。机上はルター聖書初版（1534年）の写本

ブライ語は東大で石橋智信博士から殆ど一対一で学んだお蔭であった。『旧約知識』誌上には詩篇の私訳と解説を連載した。これは特に手島郁郎兄に注目され、彼との交友はこの「詩篇研究」がきっかけとなった。本著作集第四巻『詩篇珠玉集』は、その「詩篇研究」から展開した華である。

塚本先生の「イエス伝研究」は聖書学的研究として日本一のものである。先生はまた新約聖書を訳された。学的良心的な訳である。御存命中は、推敲のため出版が完結しなかった。むしろ出版されて、あとから改訂版を出されてよかったはずである。ルターはそうのようにしていた。イエス伝の講義は正に名講義であった。学究を重んじながら結論は聖書の心を信仰を以てつかんで居られた。聴講して今日はつまらなかったと思うことは一度もなかった。聖書はかく解釈すべきものなりという固定したものではない。藤井先生は藤井先生らしい独特の味もっていた。塚本先生は塚本先生らしい味である。内村先生も勿論である。性格からいうと内村先生は預言者的、藤井先生は詩人的、塚本先生は学究的であった。いずれも

夫々の存在に於て独特の価値と特長をもっている。

塚本先生はよく研究をされた。その読書量は大変なものであろう。関東大震災の際、おくさまを失はれた。そのとき「神は愛なり」と閃いた由。先生の心臓は破れたのに。藤井先生はおくさまを失つてしばらくして「神を義とせよ」とのみ声を聞いたのであった。この両者の人格の色調もこれで拝察され得る。

我々の銀婚式の際、先生を自宅にお招きして、家内の手製の料理で晚餐を共にしていただいた。とても欣んで下さった。「順子さんはお料理が素晴らしいね。こんなおくさんに食べさせてもらっている小池君はしあはせだよ」と言われて、いやはどうもであった。金婚式のときは残念ながら先生は天界であった。

塚本先生は烈しい研究のためかなり睡眠の上で無理があつたようである。脳的作用で不治的な病に罹られる前に、お伺ひしたことがある。そのときいろいろしんみりした会話をしたが、先生はこう言はれた。

「僕の伝道は、伝道としては好いものではなかった。手島君や君のが本当だよ。西の手島君にマッチできるのは東では小池君だけだよ、しっかりやってくれたまへ。」あまりハッキリしたお言葉だったので忘れることができない。先生は本質を直観する頭脳とハートを有っている人物であった。この先生の言は今日までフェルシュヴァイゲン（黙秘）していた。ここに先生の真意をつたへるべく敢て書

くこととした。真意というのは聖霊のはたらきのない伝道は本当の伝道とは言えない、ということころである。このお言葉は正直、私への先生のあたたかき遺言となった。それ以来十年間先生にお目にかかれずして——面会謝絶の病のため——生別となってしまった。私は本当にふしぎな運命、靈しき摂理の中にある。小池政美の北京での召天——内村先生、次いで藤井先生、かなり年数を経て塚本先生、そして十二年前には手島郁郎兄の召天。この五人の人物との関わりは夫々のつびきならぬ意味をもっているからである。だから著作集の土台たる第一巻『無者キリスト』をこの五つの星に捧げたわけなのである。み霊に在って私は私の使命を果たさずしては地を去るわけにゆかない。

六 「主我れを愛す」——手の温もり未だに

(一九八〇年四月六日)

天野先生の後を承って目白台の独協中学・高校の第十四代校長を不肖私は勤めていたが、おわりの二、三年は大体月ごとに先生の自宅をお訪ねしていろいろ御高説を承っていた。先生は教育を使命としておられたから、お話は教育界のことが多くあった。先生のお考えは時流を越えていたから、先生は正に「予言者は故里（時勢）に容れられず」であった。

哲学の話題になると一番出てくるのはカントとヘーゲルであった。哲人西田先生を中心とした京都時代は先生にとって慕^{した}しい昔であった。その他、先生の「人間形成」の土台を成した内村先生を始め、福沢諭吉、小泉信三、吉田さん、ヒルティー等は先生の尊敬の念を以て語られる人物であった。同僚では九鬼周造のことが一番話題にのぼった。それから岩下壮一であった。いづれも先生の心にあたかく遺っていた友人である。

「ひととは僕をモラーリストというけれど、そうぢゃない。ぼくはヒューマニストだ」とあるとき言わ

れた。その真義は、モラルを土台としたゆたかなヒューマニティーに生きている、ということだと思ふ。先生は「道理」に強く、「愛、恕、仁」を心の底にもって、実存しておられたからである。

先生は昨年春三月六日から大方床に親しむ生活に入られた。御老衰のためである。暮の頃から私は大体週二回お訪ねしていた。先生が「讚美歌を」と言われるので、「何を歌いましょうか」とおたずねすると、「『主われを愛す』を」と言われた。「先生、この歌は讚美歌のアルファでオメガですね!」といって、私は繰り返して歌ったりした。お母さまを助けて看護に来ておられた二女の光子さんや三女の清子さん、それから羽仁恵子自由学園長さんも居合わせられたときは、みんなで合唱もした。

また先生のため声を出して祈った。あるときは三回も祈ってくれ、といわれた。二月十一日の紀元節から酸素吸入と点滴という御生活となった。一昨年から、「葬式は、小池君、君にやってもらう」と三回も言われていた関係上、私は、先生の点滴以来、外出をやめて籠城。殆ど毎日のようにお訪ねした。先生の右手をしっかりと握り、たましいをこめて祈ったり、いろいろな讚美歌を唱ったりした。先生のたましいを天的な御平安の中に入れてあげるべく。

いまだに先生の手のぬくもりが、私の右の手につたわってくるおもいである。五歳のときに父を失った私は、終り頃の先生が、父のように感じられることがあった。おそばに侍ってこの一年間を、心を尽し、力を尽して看護して来られた奥さまの存在と愛が先生の何よりも力であった!

先生はもともと病人ではない。身心のこれほどの健者は暁の星よりも稀であろう。だから御病床というのは適当な言葉ではなかった。「社会の最優等生」にして、人生マラソンの優勝者の、安らかな仰臥というお姿であった。

一九八〇年三月六日（木）、正に就床満一年の朝、旭日と共に先生の英霊は天界に昇られた。天寿（九十五年五ヵ月）を全うされた文字通りの大往生を私は目の当り拝見した。合掌！

その夕、先生の御遺志通り、納棺式と内輪の告別集会をさせていただいた。先生の相対界の終末は永遠界の開始である。独協学園は天界の先生と共に邁進する。

（註）著作集第八巻『詩歌集』の「わが人生」（詩）及び、第六巻『随想集』の「至道無難」「天野貞祐先生を想う」「勇ましい高尚な生涯」参照。なほ一九八六年暮に「独協百年史」事業の一環として出版された『回想天野貞祐』という文集を参照のこと。

七 即行の巨人関湊

(一九八五年七月)

一九八三年十月、独協学園百周年を迎へるに先立ち、一九八〇年春三月に天野貞祐学園長が召天され、迎へた翌年一九八四年秋九月に関湊理事長が他界された。両者とも少なくともあと三、四年は地上に在られまほしくあつた。独協の為まことに無念なことであつたが、天の配在、神の摂理、黙して合掌するの他なし。斯くて独協は正に百周年を以て一大時期を劃した。というのもこの百年末期の二十年に於て、独協の象徴的存在たる天野学園長を助けて、驚くべき精力を傾けて、八十年の歴史を有つ目白台の独協中・高校に、独協大学、独協医科大学、看護学校及び二つの病院、独協埼玉高校等の創設を成し遂げ、更には、栃木と姫路に大学を創立せしめんと企てながら彼は仆れた。即行また即行の巨人であつた。

私はこの二十年の前期の十五年間を独協大学教授として、及びその後期の十年を兼独協中・高校の第十四代校長として天野名誉校長の後を継いだわけであるが、一九七九年(昭和五十四年)独大停年

退職（私の場合は七十五歳）と同時に独協中・高校校長の職も辞したのであったが、その前年に、「独協学園百年史」の件を提唱した私は、理事長に「百年史」の仕事は編纂委員長として続けてもらいたいとのことで、今日もこれに携はっている。約二十年間、折にふれ、事に臨んで親しく関理事長の譬咳に接したわけである。

関理事長と言えば、独協関係者は誰しも念頭に閃くのは、その雷鳴の如き叱声であろう。と同時に、あの天真な笑顔でもある。人情味の熱い人柄であった。理事長は少年時代から人生の苦難を体験し、これに鍛えられ、うち勝って来た人である。机上の思索ではなく、諸々の実体験で培はれた直感的な判断を以てする即行型の人物である。「学者は考へてばかりいて、さっぱり埒（ら）ちが明かない」といった言を時折吐いておられた。

新約聖書のマルコ福音書には「直（ただ）ちに」という副詞がよく出てくる。キリストの直弟子ペテロ、ヤコブ、ヨハネ等は、キリストに直ちに従った。全身的な行動を即ちに起こす。「信仰」は実は本質的には「信行」と書くべき気合の言なのである。理事長はこの即行の人であった。全身的な行動である。理事長と相談したり、お頼みしたりする会話に於て、理事長は「即（す）」電話をかけて行動に移る気合の人であったことは私自身よく経験したところである。

入学式や卒業式の式辞に、彼はよく「親孝行」を口にされた。特に母親に手紙を書くこと、理事長自身が、親思い、祖母思いの人、その感恩の心から発している「親孝行」の論しであった。所謂民主

主義の人情の薄さに対して理事長は伝統の日本人らしい「義理人情」を重んずる人であった。それらの発言は実践に裏づけられたものであった。

「独協」のために生命賭けの仕事をした。学園所属の人々の生活のことは責任を以て考えておられた。これに対して教職員は信頼と誠意を以て仕事をして居れば、要求はあまりすべきではなかった。

「義理人情」の理事長は、権利主義、理づめな要求の角度の考へ方や態度に対しては、時に雷鳴を轟かせた。学園らしさというものは、信愛関係、自由と責任を以て地道に展開すべきものである。天野学園長の理念、関理事長の恩義を今後の独協は忘却してはならない。これを如何に創造的に継承し展開してゆくかに第二の百年の課題がある。

理事長は感情も烈しい個性の強い人であったから、時に思いちがいからくる叱咤もなくなかった。強烈な性格の人物にありがちな面ではある。しかし雷鳴のあととは、非は非、是は是として碧空のように霽れてゆく。瞬間に全人的な人はこだはらない。矛盾があっても分裂はない。そういう巨人型の人である。

理事長のあの即行的な在り方、これは仕事を生命とする人々の範とすべき亀鑑であった。ゲーテが、ヨハネ福音書の劈頭の「原始に言ありき」を「ファウスト」劇の主人公ファウストをして「原始に行ありき」と訳させたことを聯想する。行為の裏づけなき言の空しさを思う。このことに於て、天野学園長と関理事長は夫々の在り方ながら共通していた。独協の人々はこの一事を銘記すべきである。

理事長の癌の病革^{あらた}まり、殆ど面会謝絶的となったある日、「百年史」委員長の私と主任の斎藤博君と副主任の合田憲君の三人で独協医大病院にお見舞に参上した。重病にも氣力でうち勝っている理事長は、まるで健康者の如く元氣に一時間ほど朗かに談笑された。独協学園進展の構想を希望を以て語っておられた。この印象深い明るいひと時が、今生の生き別れとなった。かく火の如く生きた人はいつまで経っても死んだとは思はれないものである。天界で生きておられる。私への遺言ではなく遺行は、正に「即行」の一事である。

(註) 著作集第八卷「詩歌集」の「懸星的人物閑談」参照。それから、一九八六年九月十四日、理事長の召天一周年を期して、独協百年史事業の一環として出版された「人間閑談」という見事な「あるばむ」的回想集参照のこと。

八 ゲルマニウム浅井

(一九八二年十一月十六日)

旧制水戸高校文科乙類の第四期の同期生、日本厚生振興会理事長南与之君の紹介で、同じく文乙で三期後輩の同窓浅井一彦という人を知ったのは、私が教職五十年を終った年(一九七九年)の秋であった。調布入間のお宅をお訪ねした。未知の間柄であるのに、初めから何だか旧知の感であった。彼は非常にざっくばらんで而も深い信愛の情の人であることを直ぐ感じた。有機ゲルマニウムの由来を承りながら、そこに閃く彼の人生道に深い共感を覚え、肝胆相照すのであった。

その後間もなく、私の家の一角たるキリスト伝道場で、集会のあと、彼に有機ゲルマニウムの話と「ルルドの水」と「山吹のお水」の映画の催しをしていただいた。これは我ら一同に深い感銘を与えた。

この十一月の始め、久しぶりで南君を訪ねようと思って電話をしたところ「浅井君が亡くなったよ!」という言葉が耳に飛び込んできた。私にとっては正に青天の霹靂的な不意打ちであった。有機

ゲルマニウムの元祖が、よもやかくと突如、天界に馳せ逝かれたとは！

直接の死因が何であつたにせよ浅井さんの死には何か深い天意があると私は思わざるを得ない。有機ゲルマニウムという驚くべき創作を果した彼は歐洲の斯界では讃嘆されながら、わが国では白眼に遭っている。「預言者は故里に容れられず」、開拓者がしばしば負わされる十字架を彼も荷わされていた。

私の訪問のとき、彼は私に『ゲルマニウムと私』を、彼の来訪のとき『ゲルマニウム讃歌』を進呈してくださつた。前者の扉には「創意通天」、後者の扉には「天人合一」と筆端に靈雲湧くが如き筆勢で墨書してある。この二著がもうお形見となろうとは。しかしこの二著に溢れている彼の告白は永遠の生命をもっている。

有機ゲルマニウム創作に、劇的な全生活をうち込み、文字通り第二次大戦の死線を越え、生命賭けでやり抜いた彼の気魄と業績、自らの癌にも自作のゲルマニウムで打ち勝つた実績等に深甚の敬意を表する。今後彼の有機ゲルマニウムは地道に連綿として人々に恩沢を及ぼすであらう。しかし人々は治療作用そのものにただ感謝をしたのでは、彼の隠れた悲願に応えないことになる。

哲人オイケンが、*Der Mensch ist mehr als seine Arbeit* “人間はその仕事に優る”と言つたが、この言葉が暗示するように、浅井ゲルマニウムは身体に作用するが、ゲルマニウム浅井は心魂に作用する。それは上記の二著を親しく読むとひびいてくる靈的な迫力である。

この薬ならざる天然原素の靈妙なるメタモルフォーゼ、浅井ゲルマニウムの中には、ゲルマニウム浅井という見えない祈りの力がこもっていることを服用する人々は忘れてはならない。

この二著の扉に彼が書いた「創意通天」は正に彼の体験から発した告白である。十三年間の祈りと思索と研究と労作は天に通じて有機ゲルマニウムが創作された。

もう一つの彼の墨書「天人合一」は宗教体験の極致の言葉である。誰でも人間である限り、矛盾の面もある。ただあるがままのおのれを、童心を以て、天に、神に、仏に、体当りし、全托し、帰入する人が本当の人間である。そこに「天人合一」の消息が与えられてくる。そういう人間で浅井さんはあった！ 噫、惜しむべし、斯の人今や地には無し。

二、三回しか会ったことがない私ではあるが、そのことは直感された。そして彼の二著がその真相を証示している。彼の二著は私にとってゲルマニウム浅井であって天界の浅井さんといつまでも楽しく、この二著を通して以心伝心のおはなしができるし、私にとって彼の存在は天の援軍である。

どうか御遺族の方々が、不朽の偉業を果され今は天界に生きておられる浅井さんと天地相照応して勇ましく信愛一貫の御生活を続けて往かれますように！ 合掌。

九 高島鴻子小母さま

高島一家は私が小石川区林町九十四番地に小学校時代の大半を暮らしていたときに、東北方程遠からぬ原町十三番地なる坂道を上りかかったところの立派な邸宅に住んでおられた。その頃交際はなかったが、多少白人に近い面だちの品のいい人たちだなあと直感したことがある。そのあたりの街路を通ることしばしばあったので小学生ながら妙に印象にのこっていた。小学五年生のとき、六年生の中に高島礎雄いづもさんがおられることに気がついた。同じく高師附属中学生になると、こんどは令兄いへの效きこうさんがおられた。この少年は中学の誰でもが知っているほどの雷名を轟かせていた。凛々しいまた一種粹いさな風貌の、何ものも怖れない剽悍な気質の、而も内的な權威のある人格に対しては男らしく正直に恭敬の念を表はす特異な存在であった。旧制弘前高等学校でも京都大学でも同じく雷名を以て聞えていた由、令弟礎雄氏から承った。〇〇〇員と雖もこの京大生高島效には手が出せなかった由である。長女にして長姉なる君代さんは今年米寿、末妹静江さんは修道尼であられる。次女の嘉代さんは数年前

他界された。このような五人の兄弟姉妹の母君がここに書く高島鴻子小母さまなのである。

舎兄小池政美の一高東大時代の友人に神田十拳氏があった。その令兄が神田盾夫教授父君が神田乃武先生。親戚に高木八尺教授、これらの人物は社会的には上層、学問的にはいづれも博士級、そういう親族関係の中に高島家もあるわけで、舎兄政美は学友としてこの人たちと親交を有ったのであった。そういうわけで、兄は正直のところ人物であつたので、高島鴻子さんの眼にとまり、兄も小母さまを敬慕していたことは、中学生の私にも感じられていた。礎雄氏は私に、「お兄さんは秀才という表現ではあたらない、英才というべきです。というのは秀才だけではなく信頼すべき素晴らしい人物でしたから英才という表現の方が当ると思う」と述懐された。

高島鴻子小母さまと私が言いたいののは、この御婦人の品格と信仰の奥床しさと愛の深さのゆえである。才媛で小学校時代に飛び級進級をされた由、礎雄氏から承った。お交りは短期間であつたけれども、その印象は永遠的で極めて慕はしいからである。藤井武先生が「美しき印象を私に残した人々」という文章に於て四人を挙げておられるが、その一人がこの高島鴻子さんであり、また一人は小池政美である。（藤井武全集第十二巻参照）先生が書かれたようなことはここには書かないことにする。

舎兄が北京で仆れたことを最も悲しんだのは勿論母であるが、非常に愛惜して下さったのは、藤井先生とこの高島さんであった。高島さんは、大手町に於ける内村鑑三先生の日曜の大集會に参會しておられた。兄も一高の末期頃からずっと参會していた。信仰の上でこそ高島さんは親しい小母さまで

あったわけだ。また英語が両者とも日本語同様に達者であったからその点も似ていた。高島さんは女性の温和の奥に犯すべからざる気質を備えておられたことを磯雄氏のおはなしの中から拝察した。

高島さんも若かりし日にそうであったにちがいないが、御令嬢方は典型的な美人であった。私自身正直驚いた。

舎兄政美が北京で召天してからあとで私が入信したことは別項でも書いた通りだが、高島さんに手紙を書いた。非常に欣んで下さった。それでお交りが始まったのであった。水戸高校生になったために、お交りは手紙の上であった。水戸生活第二年の冬、寮に小包が届いた。誰からかと思ったら、高島鴻子とあった。手づから羊毛で編まれたスウェーターであった。驚きと歓びと感謝に心の中で涙した。病弱であった私を気づかっただの愛のプレゼントで、そのときの感激はいつまでも新たである。小母さまのお手紙の文字は本当に水の流れるような美しい文字である。

高島さんが北京の兄政美に書いて下さった多くの手紙も、藤井先生への手紙も、またその逆の場合のも、皆戦火のため、また別の理由のため全部喪失してしまつて残念である。小母さまから私へのお手紙としては最終のもののお大半を次に掲げたいと思う。

満二年のよき日〔舎兄政美召天の九月二十二日のこと〕を迎へまして、歩みのたどたどしさを感じ悲しき思ひのみ一杯になります。しかし静かに二四一番の讚美歌「わづらはしき世をしばしのがれ」〔新讚美歌集の二九七番〕を唱へつつ、御聖旨のままに浸つて毎日を過しております。

四、五年前北京「政美のこと」と御一諸に御名の故にと、凡て堪へ行く御力頂きまして思ふにまさる御恵頂きましたと同じに今も御恵頂きつつ、より深くより近く本統にありがたい事と存じて居ります。私はイザヤ書に引かれて毎日朝九時頃、誰れも居らぬ時御恵を頂いて居ります。今日は頂度五十章（毎日一章づつ）四節から九節が本統にありがたく、私に毎日この御言葉通りにと教へて下さいます。

「註、イザヤ五〇・四―九は、「エホバの僕の歌」の第三にあたるところ、信仰のない環境にあつて、これを忍び、主のみ力にあづかっている恵みを感じておられるわけである」

辰雄さまは本統に選ばれた方と喜んでおります。お父様「父なる神のこと」の御ふところについてまでもと願つて居ります。北京「政美」もお祈り下さいます。藤井先生も助けて下さいます。本統にうれしさの極みであります。私も何卒と藤井先生におすがりいたすばかり、随分、満二年間「というのは舎兄政美が召天してからの二年間のこと」が、私の環境の空氣が變つて参りまして辛らすぎますが、矢張り私のより強くお父様に御すがりする為の御恵みと存じて、ありがたく頂いて居ります。多分御恵がなくて却て救ひの内に入られぬ私でありませう。この世的な雑音、不信の波にかき乱されたり、さらはれたりしないために柏木「内村先生の集会」の御集り（大手町の代り）に行きたいのです。けれども出来ませんので見えぬ大きな御手にすがりつつ聖日を過ごすのも大きな御試みであります。御祈りにおすがりして幸であります。体の方は以前の様に働く事不可能になりました。

辰雄様も多勢の方々の中に在つて何卒しつかりと大きい御手の中にいつもいつも在らせらるる様念じあげて居ります。私は夜の九時の御祈りは出来なくなりましたから「政美在世中、その様に祈り合っていた」いつと定まらず静かに御胸にすがつて居ります。朝は休日でない限り唯一人ゆつくり御聖旨のままに御言葉に引かれて聖書に没る一日の幸なる時であります。辰雄様も何卒私の為に御祈り下さいませ。今日は善き金曜日「十字架の金曜日のこと」まことに感謝のみにあります。

何卒、御父様の御恵深からん事を

辰雄様 一九二三年十一月三日 鴻子

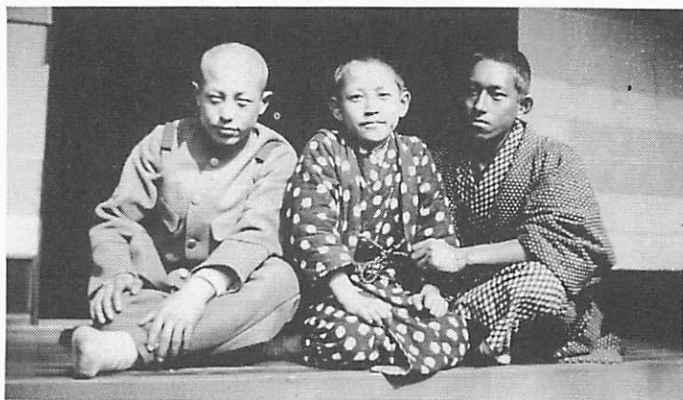
私に対する遺言の如きお手紙である。いろいろな意味内容の苦難の中で高島鴻子夫人「御夫君はつとに死別された」は独り耐へ忍び祈り愛して来られたことは言外から拝察できる。「お恵み」とはそういう苦難の中での神キリストへの信仰に賜る平安の心境のことである。つとりゆく御病氣のため翌年の八月二日に召天された。藤井先生が告別式をいとなまれた。

因みにここ数年前から親しくお話し合いの出来るのは三生会病院を舎兄效氏のあとを継いで再建復興された理事長福島（元高島）礎雄氏である。氏は同病院構内にお住いの御高齢の姉君君代様を親しくお護りしておられる。

十 小池政美

舎兄のことは第六卷『随想集』にある程度書いたが、ここにある補遺をさせていただく。

彼は一九二〇年（大正九年）の晩秋から、翌年の初秋までの一年にも満たぬ北京の日本公使館勤務を精力的にやり抜いて天界へ旅立ってしまったが、その間、最も多くの手紙を母に書いている。それも美事な毛筆である。これは全部保存してある。数十通ある。驚くべきことだ。関漢理事長が母親に手紙を書きなさいと独協大学入学式のときよく語っておられたが、私の兄のことを聞かれたら驚き喜ばれたにちがいない。藤井先生も私に、「君のお兄さんからこんなに手紙をもらっている」といって両手にあふれるばかりのものをを見せて下さった。先生が召天されてから、いただいておけばよかったものを。先生の家は焼夷弾でやかれてしまったから先生の貴重な書籍などと共に焼けてしまった。残念千萬である。高島鴻子様へも同様に書いたに相違ない。これもその後戦火で消え失せた。兄の病は悪性腸チフスであったので、伝染をおそれて身辺のものは大方焼却されたために、そのような書翰類



小石川区同心町十八番地借家の縁側で、(左)龍二(陸軍士官学校生)辰雄(高師附属小学校生)政美(旧制一高生)、大正5年早春。

も日誌類も残っていない。ただ上司公守^{きんもり}氏の弔辞は次兄龍二がいただいていたので、それを茲に全文掲げて兄の北京での在り方の証言とさせていただきます。

弔 辞

「謹ミテ僚友故専売局副参事小池政美君ノ靈ニ告グ

君去年十一月選バレテ任ニ此ノ地ニ就キ爾来予等ト

共ニ専ラ支那財政經濟ノ組織的研究ニ従事シ夙夜恪勤精勵圖書堆裏ニ在リテ倦ムコトヲ知ラズ曩ニ「支那財

政ノ現状」テフ一文ヲ脱稿シ今夏亦「支那銀行二十年史」ヲ草シ神身ヲ勞スルコト頗ル多シ。稿終ルヤ欣然

旅装ヲ整ヘ青島ニ暑ヲ避ケ留ルコト半月、静養其ノ效アリ更ニ勃々タル勇氣ヲ以テ滿洲ニ渡リ一ハ現下ノ紛

乱ヲ極メタル大連取引所建直シ問題ヲ究メテ将来支那幣制改革上ノ実験的好資料ヲ得、一ハ日露代表委員大

連會議ノ経緯ヲ探リテ両国通商上ノ適策ヲ案ズルノ抱

負ヲ以テ勇躍大連ニ入ルヤ不幸ニ豎^{ジュ}ノ犯ス所トナリ未



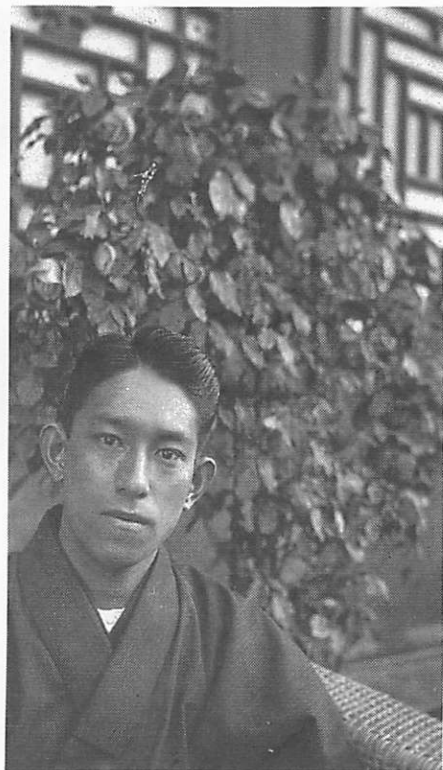
1921年（大正十年）夏 信州追分温泉にて（右）母と叔母（武田まつ子）、長男政美の急病報告以前失明前の最後の笑顔

ダ調査ニ着手スルニ到ラズ急遽北京ニ還リ病ヲ養
フコト三旬、名医ノ献身的治療モ骨肉ノ寢食ヲ忘
レタル看護モ其ノ效無ク終ニ復タ立ツコト能ハズ
月ノ二十二日二十七歳ヲ一期トシテ溘焉トシテ逝
キヌ、嗚呼悲シイ哉悼マシイ哉

回顧スルニ予ノ君ト交ル僅カ二十閏月ニ過ギズ
ト雖モ其ノ間君ニ負フ所甚ダ多ク又君ノ才徳ニ敬
服スル所尠シトセズ、君天資穎敏頭腦明晰殊ニ數
理ニ明カニシテ心理学上ノ所謂數系ノ顯著ナル発
達ヲ為シタル異才タルコトヲ疑ハズ又其ノ研鑽ノ
蹟ヲ見ルニ其ノ方法理路整然トシテ一糸乱レズ紛
雜ニシテ捕捉スルニ難シトスル支那財界ノ諸問題
モ之ヲ組上ニ陳ベテ利刀ヲ以テ料理スルノ慨アリ
キ、加フルニ君ハ非凡ノ英文読書ノ能力ヲ備ヘ、
赴任以来欧米人ノ手ニ成レル支那ニ関スル名著數
十冊ヲ読破シ碌々タル濟輩數年ノ造詣ヲ一年ナラ

哉

君ハ優秀ナル智能ノ人タリシト同時ニ崇高ナル人格ノ人ナリキ、帷フニ君幼ニシテ敝父ヲ喪ヒ母君ノ手一ツニ依ル周到ナル鞠育ノ力ハ君ノ玉ノ如キ温良ナル人格ノ基礎ヲ作リタルベク、大学法科在学中深ク内村氏ニ私淑シテ信仰ノ端ヲ開キ、教会牧師説教等ノ迂路ヲ辿ラズ聖書ニ依リ独思冥想直チニ神ニ接スルノ信念ヲ堅メタルハ君ガ正道ノ為水火ヲモ辞セザル大勇猛心ヲ發揮スルノ根幹ヲ作リタル



北京公使館員小池政美1921年春この薔薇の樹を愛していた。

ズシテ贏チ得タルノ想アラシメタリ、天若シ君ニ許スニ歲月ヲ以テセバ君ノ研究ノ結果ハ啻ニ中日両國ノ為ノミナラズ、世界ノ文明ニ一大貢獻ヲ為スニ至ルベキヲ信ジテ疑ハザル所ナリ、而シテ今ヤ此ノ人亡シ惜シムベキ

ベクスノ如クシテ神人ノ力ニ依リテ渾一セラレタル君ノ人格ノ発露ハ或ハ謹嚴なる素行トナリ、或ハ高尚ナル氣品トナリ、或ハ凡俗ト相容ルルノ雅量トナリ、君ト相交ル者ヲシテ轉タ敬慕ノ情ヲ禁ズル能ハザラシメタリ、天若シ君ニ藉スニ壽齡ヲ以テセバ社会風教ノ薰化ニ一大寄与ヲ為スニ至ルベキヲ信ジテ疑ハザル所ナリ、而シテ今ヤ此ノ人去ル憾ムベキ哉

君支那ノ土ヲ愛シ支那ノ生活ヲ好ムコト極メテ深シ、一日真卒ノ面持ニテ予ニ語リテ曰ク、予ハ支那ヲ愛シ又其ノ生活ヲ好ム、予ハ終世支那ニ於テ過サンコトヲ冀フト、而シテ毫モ故国ニ戀々タルノ態ヲ示サザリキ、其ノ言果シテ鍼ヲ為セルカ遂ニ燕京北邸ノ煙ト化シヌ、誰カ知ラン其ノ期ノ斯クノ如ク速カナラントハ、想フテ之ニ到レバ腸寸断ス

サハレ君ガ懷抱セル支那研究ノ志ト支那愛好ノ至情トハ更ニ之ヲ繼グ者踵ヲ接シテ起ルベク又君ガ信仰ニ依リテ理想トセシ地上ノ天国恒久ノ平和モ人類ノ昂上ト世界ノ進歩ト共ニ実現スルノ期無キニアラズ君以テ瞑シテ可ナリ

庶幾クバ髣髴トシテ来リ饗ケヨ

大正十年九月二十五日

大藏事務官從五位勲五等

公森太郎

これは上質の巻紙に公森さん自ら心を籠めて墨書したもので、延々三米余の長文の弔辞である。正

直この通りの在り方であつたにちがいない。信仰の消息については勿論表現の適切でない面もあるが、信仰が実践されていた面は瞭かにされている。かくも部下を信頼し愛し善用して下さった公森さんに秘かに敬意と感謝の念を新たにする。兄は勿論公森さんを心から尊敬していた。

兄は中国（支那）にとどまって、伝道を志ざしていた。伝道用の地図まで用意してあつた。福音の心を以て中国を愛したゴルドン將軍、ハドソン・テラーを彼は慕っていた。彼はメイフラワー号に乗って渡米して、本国に再び環らぬ心構への清教徒のように、銀製の十字架を携えて行つた。それには英語で一九一九年秋と浮き刻りがしてある。この秋に決意したのであつた、口絵の清教徒夫妻のようでありかつたが、その希望が達せられなかつたので一生独身で献身することを。情愛も深い彼としては泪の決意である。上からの啓示によつたのであつて単なる決意ではない。そのことは藤井先生が御存じであつた。先生が兄のことをキリストの光に映ゆる「曙の明星」と言はれ、「君のお兄さんは一人に一人いるかいけないかという人物であつた」と言はれたのもその間の消息からでもあつた。本書の「中国旅行印象記」の中で斎藤桂子さんがふしぎな体験や啓示に遭つたことを注目していただきたい。今私が書いた事態を何も知らない斎藤桂子さんに夢の中で、「僕は日本へは帰らない」といったので、彼女は泣いて夢からさめたというふしぎなことがあつた。

ともあれ、洋々たる将来をもちながら二十七歳を以て召天した兄の福音魂を受け継いで、エリヤのエリシャの如く私は伝道や著作で犠牲的な兄の死とそれと因果関係のある母の失明とに応えてきたが、

まだこれから十余年臥薪嘗胆の気魄を聖霊から賜りつつキリストの無者として、使徒的信仰の証者として邁進せずんば非ずである、合掌。

第六章

独協学園

一 天賦に生きる

(一九六九・七・一五)

適材適所ということは昔も今も不変な真理で、社会も学校もそういう人材によって有機体的に、人格協同体として形成されるべきものと思っています。私は天野校長におたのまれしたけれども、どうもそういう適材ではないので、御遠慮いたしたのではあったが、どうしてもというお話であったので、ある期限をさだめておひき受けした次第でありました。

本当の政治は政治きらいの人がやる、というプラトーンの言葉に一面の逆説的真理ありとすれば、私も教育の一端を果たし得ようと存じ、一期限を一生の気概をもって立ち向いつつあります。

人間は誰であろうと、天賦を賜っているものであります。その人の最も本質的な性格と才能、それを磨きあげることにその人の修養とその人への教育の目的があるでしょう。キュリーをメロンにしようとしても無理なはなしで、キュリーはキュリーとして美しくつくるのが最善であるように、人間も各自のもちまへの才能を限りなく仕上げてゆくところに社会の一員としての存在的使命を果たす道

があるわけでありましょう。

そういうわけで、家庭と学校とは、生徒の性格と才能に即した課目を生徒自身によく自覚させて、それを特にうちこんで勉強することを奨励したいと思います。人間は生涯を通じて結局一つのことをするのが本当でしょう。その一つのことには天賦を賭けるわけです。そしてその一つのことのことが即ち天職であります。それが天賦に生きるということでしょう。そういうねらいで、生徒が学校生活を力強くいとなんでゆくことが肝腎と思います。

勿論中学時代はそれほど明確な方向づけは出来ないでしょうが、高校時代に入ればかなり中核的なものができてくるはずです。「好きこそものの上手なれ」と俗諺にあるように、本質に即したことは好きであるわけで、これにうちこみ、これを中心として勉強すると、これと連関したかなりの範囲の課目がこの天性に即した課目を中心に廻転をはじめて、あたかも台風の目を中心に螺旋を描きながら台風が進むように、力強い前進を始めるというものです。このことは勿論課せられた他の諸課目をなおざりにしてよいということではありません。

しかし、そういうねらいと意欲が是非とも生徒諸君にあつて欲しいと念願してやまないので。お父様、お母様、或はお兄様お姉様が学園の生徒をこのねらいをもって激励していただき、我々の方でも生徒の天賦を伸ばし、天職に向つての進学の方向づけをいたく思います。

日本の学制が必ずしもこのような意欲に応えるようにはなっていないので、現実にはさまざまな困

難が伴うとしても、天賦天職に生きんと悲願の人は、万難を排しても真の勝利を勝ち得ると信ずる者であります。実力と自信ができてくると他の諸学課に対しても然るべき能力が生じてくるものです。それは、一事に集注するその集注力が他のことにもはたらく良き習慣が養はれるからです。

独協学園の中学高校の生徒がこういう天賦に生きる本質的な在り方の生徒として特質を発揮せんことを切望しています。

(独協PTA会報第三号 発行責任者、会長須佐良男)

〔注〕 この一文は、独協中学・高校第十三代校長天野貞祐先生のもので一年間副校長を勤めていたときのものです。

二 敬天愛人——校長就任に際して

(一九七〇年六月五日)

現代の若い世代に殆ど共通の欠陥は、畏敬の念を失っていることでありましょう。その因って来るところを思えば、その責めは彼らにあるというよりもむしろ我ら教育者——小学から大学に至るまで——と父母にあると思われまふ。

かつての封建的な服従には精神の萎縮を来たす面がありましたが、今の民主主義の現実はこのと反対に秩序を忘れ、家庭や学校において青少年が何か同等の気持で長上の者に対し、更には腕力を暗黙のうちに自認して言動をほしいまにする傾きなきに非ざるは、由々しき事態であると思います。

然らば秩序を心地よく持する源となる心根はどういうものでしょうか。それは信愛という心情をもったものにあると思います。社会の諸々の関係において信愛の心の喪失が、何も青少年に限らず、非常に稀薄になってきたことは、まことに嘆かわしい次第です。労資の関係においても、経済機構の問題よりも重大なのは人間性そのものの問題であります。闘争意識は真の解決をもたらすものではなく

上位の人たちが下位の人たちを本当に愛し、思い遣り、できるだけその要求を容れる心を持ち、下位の人たちが上位の人たちに信頼して責務を尽し、忍ぶべきときは忍ぶ、といった相互信愛の心をもって、対立ではなく、本心に協力し、同歎共苦の心でことを処してゆくなら、闘争や対立意識におけるよりもはるかにみのある快適な相互扶助の關係による幸福な社会となつてゆくにちがいありません。人格關係が最も正常であるべき大学において、信愛と理性をもつて問題の処理がなされず、暴力沙汰の大学紛争となつて、日本全土に蔓延し跋扈したとは。しかもそれが高校にまで波及したとは。このような事態がなお再燃してゆくならば日本の精神状況はまことに憂うべきことになりましょう。

しかしわれらの独協高校、中学校にはそのようなことはあるまじきものです。私は教育の根本はまづ畏敬の念を深く養うにあり、と確信しております。人間の中心がたましいである限り、万人は本来宗教人であると存じます。人には本来神性が具えられてある、とはキリスト教の語るところであり、衆生ことごとく仏性あり、とは仏教の告げるところであります。しかし現実の自分を見ると、誰も手ばなしで神性や仏性が主動的であると言へる人はいないわけです。我執から救われることを万人は要します。それで、神仏という絶対者乃至絶対境に対する畏敬の念、ひれ伏しの心が人間のあるべき根底の心、魂のすがたであるとは私は告白せざるを得ません。「宗教」、ラテン語の「レリギオ」は「再結」の意で、心魂が絶対的な靈的実在と「再結」すべきものであると解してよいわけです。そういう心魂の在り方乃至性格を教育の内実の根底におきたいのです。心魂がこの縦の次元にしっかり根をお

ろすならば、少なくともその志向をもって進むならば、横の次元の対人関係に信愛の心情が通うようになつてゆきます。それを南洲の言で表わすならば、正に「敬天愛人」となります。衣は経糸緯糸がなければ衣とならないように、心魂の天衣は「敬天愛人」で天衣無縫的な在り方へと展開してゆきましよう。

独協中・高校の教育は、PTA即ち、御両親と学校の我々が協力してこのような心構えで根気よくやってゆくところに、その本領があります。諸々の文化的いとなみの根底に宗教心あらまほし、一切のイズム（主義）を超えるまことの人間性の涵養に教育の主眼ありと信じております。

三 自然と人生

(一九七五年六月二〇日)

こう題名をつけてみると、戦後の人たちはどうか知りませんが、我々明治・大正の人間は、すぐ、蘆花の『自然と人生』を連想せずには居られないのです。

「春空靄として四山霞棚曳き、争はれぬ春となりぬ。海はゆら／＼として空と一つに融け、練れるが如き水の面に富士の白雲ちら／＼流れぬ。漁舟鷗よりも小なり。村々はまだ冬枯のままなれど、霞低う地に這ひ、春四方に満てり。鳶一羽悠々として山下に舞ふ。」

山崖、畑の畔、到る処路の莖青く萌え、榛の木などは已に垂々の花をつけ、春蘭も早きは花さきぬ。枯草枯葉の間より春は簇々として萌えつつあり。」(明治三十二年二月二十八日)

といった「初春の山」という一くだりを読んでも、ほのぼのと昔の春がよみがえってくるのです。目白台の下を流れている江戸川も、私の小学校時代(大正のはじめ頃)は、桜並木が兩岸にあって、花のトンネルがおのづから出来あがり、その下を和船がのどかに棹で動いているといった風情であり

ました。代々木、千駄ヶ谷のあたりにも田園があり、小川がせせらぎ、野原も森もありましたから、芹を摘んだり、蓮華をたばねたり、蛭を追ったり、蜻蛉を採ったり、田園情緒まことに豊かなものでありました。

今の東京とは全く隔世の感があります。自然が乏しくなり、自然がそこなわれてきている都会生活であるので、春、夏、秋、冬、休日や休暇を利用して御家族で自然に親しんでいただいたら生徒のため幸と存じます。

運動は心身の鍛錬に大切ですから、水泳、スキー、登山、諸々の陸上スポーツを学校で、またクラブ活動でやらせていますが、個人的にも出来るだけ乗物を用いず、山野を跋涉したり、マラソンのに走ったりすることを心がけてもらいたいです。学校の往復にしても、目白駅その他地下鉄の駅などからなるべく歩くことがのぞましいです。

自然そのものが生命力をもっているし、生命的なものを人間に不断に与えてくれますが、人間の心に影響を与える自然を見失わないようにしたいものです。

都会も田舎も今や諸々の漫画誌、週刊誌、テレビ、映画等々に混在している俗悪な精神的公害現象に毒されていることは瞭かで、思わぬ非行に、啞然また憤然とさせられることがあります。御父母も愛情と並んで厳然たる御重陶をおねがいたします。また法的に禁じられている未成年者の喫煙などは『この道を往く』で既に御承知のことと存じますが、絶対に禁じて下さい。因みに申しますが、襟

から肩にまでかかるような長髪は独協生の風調として好ましくありませんので厳にいましめていただきます。

健全な精神的生命力に自然が一つの大切な役割を果すことは瞭かで、生徒は誰でも何らかの身体の運動を自然を相手にしてやるように心がけてもらいたいです。このことが上述の精神的公害を退ける有力な一つの途であることを体験するでしょう。

また大自然が宇宙的靈的生命の象徴乃至媒介の場として、いかに人生に重大な関わりをもっているかは、古今東西の宗教人、芸術家の実証しているところであります。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、

蒼穹はその聖手のわざを示す。

この日言葉をかの日につたえ、

この夜知識をかの夜におくる。

語らず言わず、その声聞えざるに

その響きは全地にあまねく、

その言は地の極てにまで及ぶ。」

これは旧約聖書の有名な詩篇第十九篇の起句であります。ベートーヴェンがこれを主題に作曲をしています。また彼の田園交響曲は不朽の名曲でありましょう。

特に自然の美しい日本列島のゆえに、日本人は情緒豊かな芸術的な民族ともいえるべき民族的性格をもっているといえるでしょう。

我らの関理事長も自然を愛し、自然の美を草加の独協大学や壬生の独協医大のキャンパスに大いにとり入れられました。もし大学生たちが感謝の念をもって校庭の草木を大切にしないことがあるならば、それは心得ちがいというものです。

日本民族が美の民族であるなら、同時に「美しき魂」の民族でこそありたいと思うのです。そして歴史を顧みれば、たしかに美しい心魂のあらわれたる美談も多々あるといつてよいでしょう。大和ごろの美しき象徴は何といつても霊峰富士であり、優麗なる桜花でありましょう。

天地正大の気

粹然として神州に鐘（あつ）まる。

秀いでては不二の岳となり、

巍々として千秋に聳ゆ、

……

発（ひら）いては万朶の桜となり

衆芳ともに儼（たぐ）い難し。

という藤田東湖の「正気の歌」の句は、千古の名句であると思います。

天地正大の気が、靈氣が、万象を貫いて透徹しているのだということは深い真理だと思います。大詩人ゲーテもそういう角度において自然を観ていました。万葉の歌人赤人の「天地の分れし時ゆ、神さびて……」の名句も無量の神韻をひびかせています。

人情稀薄となり、思い遣りの心乏しく、とかく自分本位の傲慢な気持となっていることすら気づかず、反省の色更にならないといった風調が現代の若者の間に瀰漫しつつあるとするなら、まことに寒心に耐えぬことです。どうぞ独協学園の生徒は、およそそのような風調とは質を異にする気品があり、豊かな人間性を備えた人間でありたいと念願しております。

大自然の心。神・自然・我の一如の相。それを宗教的にどう体験しようと、そういった在り方に、自然と人生の深い消息がありましょう。そのことをゲーテが次のように詠っています。

「神らしきは、宇宙を

みふところの中に動かし、

自然をおのが内に、

おのれを自然の内に愛護すること。

さらば、神の中に生き、動き、在るものは、

神の力、神の靈を

失うこと絶えてなし。」

〔附言〕独協学園は既に創立九十周年を越えて前進中ですが、私は拙文『この道を往く』の精神で中・高校の教育にあたっておりますので、PTAの皆様が、そこに掲げました「敬天愛人、天賦天職、自律自彊」の精神をもって御子弟の教育に御協力下さらんことを切にお願い致します。

（独協PTA会報第五号）

四 他律と自律

(一九七五年十二月十五日)

ドイツ語の諺に、『*Wer nicht hören will, muss fühlen*』(言うことを聞かぬ者は、痛い目にあわねばならぬ。)というのがある。ひらったく言えば、「言うことをきかないと、ぶたれるぞ。」ということである。無闇に子供を叩くのは勿論感心したことではないが、放任的な甘さは子供をどら息子的にしてしまう。ドイツの母親は躰けがなかなか厳しい。正邪・曲直・善悪のけじめをはっきりつけて、日常の家庭生活において躰けをしかりやっているのが一般である、といってよいだろう。朝晩の挨拶、出入の挨拶をちゃんとさせる。規律や秩序を重んずるように訓育している。電車の中で若者が平然と腰かけて老人・婦人が立っているようなことはないといいようである。東京ではどうだ。シルヴァー・シートなど設けなければならないほど、若者の自覚も思い遣りもなくなっている。そしてそのシルヴァー・シートが殆ど実践されていない。この一つの現象を見ても、原因がどこにあるかわかる。家庭教育も学校教育も何となさけないことになっているか。家庭および学校における幼

少年時代からの躰けに大いに問題があるようだ。この躰けのことを、今ここで他律という表現で書いている。少なくとも中学生までは他律的な躰けが教育の極めて大切な一面であると思う。小さい子供の好きこのみに従っているような甘い育て方がどういふ結果をもたらすか、自明ではないか。規律・法則に対する自覚をすっかりもち、自ら律するように、しっかり躰けることが極めて大切である。

私は、この秋の文化祭における、中学高校生の、酒・煙草・シンナー等に関するアンケートの表示を見て、啞然・慄然・奮然たるものを覚えた。ここにそのパーセンテージのことなど書きたくはない。私は独協中・高校の教育方針を『この道を往く』で明示している。その第三章、「自律自彊の生活」の中で、

「喫煙は学校の内外を問わず絶対にしない。」

と書いて、生徒の自覚と自律に訴えているわけである。喫煙・飲酒が法律上も未成年者に禁じられていることは周知のことである。法を破ってよいのか。それが公然の黙認ではないはずだ。御父母の中に、私の『この道を往く』をお読みでない方がおられるのであろうか。御自分の子弟を制することをなさらない方がおられるのであろうか。

人間には誰にでも過誤はある。過誤はやむを得ない。しかし、規則や方針に対する厳かな心の在り方、そしてそれを遵^{したが}ろうとし、協力しようとする努力を、家庭も学校も一段と強化しようではないか。長髪のことにしてもそうである。目に余るものがある。私は、校長として、しばしばそのことに言及

し、注意を促してきた。玄関にも指示の文が掲げられてある。

世の中の学校に、相当乱れているのがあることは、いろいろ聞き及んでいる。独協は比較的良好な方だろう。善良な生徒は沢山いる。しかし、ある部分の生徒がどうしてもあらためないとすれば、その害毒がどのように波及しないとも限らない。私たちは生徒を愛している。愛すればこそ厳しいのである。義と愛とが教育の―家庭であらうと学校であらうと―不可分の両面でなければならぬ。私がここに言う他律とは、そのような義のたましいと愛の心とを以て、未成年者を育ててゆく意味である。そして、それをたましいと心において生徒諸君がよく受けとって、自ら律し、自ら鍛えていくようになってもらいたいのである。特に高等学校生は是非そのようになってもらいたい。そうでなくて何が「高等」なのであるか。「荒唐」的なことになっては、どうしようもない話ではないか。

独協中・高校が天下の独協であらんがためには、是非とも、家庭と教職員と生徒が、敬天愛人・天賦天職・自律自彊の三相を、渾然一如の自覚において相助け、実践せんと不断の精進をすることにある。

今回は、喫煙・飲酒の悔りがたい一部の不愉快な現象を契機として、生活一般と躰けの問題を深く反省すべく筆を執ったが、この正しい姿勢なくして熱心な勉学があるはずはない。このことを深く省み、勉学の精進に邁進してもらいたい。PTA会長を初め、運営委員・学年学級委員の方々、並びに全校御父母のあたたかい御協力に対しては、我々は心からの感謝の念を抱いている。温情あふる学

校であればこそ、お互に省みるべきところは厳しく省み、相助けて邁進したいものである。

(独協PTA会報 第六号)

五 図書館の世界

(一九七六年如月)

図書館というものはいつ頃どこで始まったのかといえ、紀元前十八世紀のハムラビ法典で有名なバビロニア王国時代の寺院の中や、降ってアッシリア帝国の末期アッシュールバニパル王の宮殿内の文庫などであったということである。文庫といってもそれらの本は粘土板であった。文字は所謂楔形文字で粘土板に刻み込まれたもので、私もそういうたぐいのものを大英博物館で見に来た。古代エジプトにおいてもやはり粘土板にあの図形や象形的な文字が刻まれたのであった。神殿や宮殿の一角に「本の家」とか「魂の癒やし場」とかいう名称の図書館があったという。因みに「本の家」という名称はユダヤでは「学校」のことである。

ギリシヤ全盛時代になるとアレクサンドリア図書館という大規模なのが現われた。蔵書数十万部といわれる。それは最早粘土板ではなくパピルスという植物繊維製の紙となっていた。東西の図書館の歴史をここに書くわけではないからこの辺でやめるが、人類の文化文明の成果を文字をもって歴史的

にとどめる文化財としては何といつても図書館の右に出づるものはないわけである。

わが独協中・高校の図書館は、勿論小さなものではあるが、蔵書をひとあたり見て言えることは、基本的な知識を得るには充分な内容をもっている、ということである。古典的という言葉をもって表わされる第一級の基本的文献が、かなりよく蒐集されてある。いろ／＼な全集もの、各種の単行本や辞典類、叢書類などかなり揃っているから、生徒諸君は自分が興味や目的をもっている文科方面なり、理科方面なりの書物に喰いつく意欲を大いにもってもらいたい。本の世界はこれに親しめば親しむほど深くもなり、広くもなつて、図書館が古今の歴史の映画館の如く、東西の山野のパノラマの如く感ぜられてくるであらう。

六 神・天然・福音

(一九七四年二月)

この秋は、東奔西走、南船北馬とでも言いたいように走り廻った。十月半ばには、第十九回全国中学・高等学校理事・校長研修会が北海道札幌で開催されたので、往復とも空路で往って来た。機上から鳥瞰した秋色に讃歎した。研修会がおわってから、北大法学部教授小暮得雄君にドライブしてもらって洞爺湖畔に出たが、濃淡色とりどりの紅葉また黄葉がよかった。ここから更に西の丘陵地帯に入る。そこには天然風呂があった。背空を仰ぎながら一風呂浴びた。

帰宅した翌日は箱根で全校教職員の年一回の懇親会が催され、これに参加。箱根の昔ながらの風景を貴重なものと感じた。同じ天然ではあるが、何となく歴史の余韻がのこっている想いがした。

「箱根の山は天下の嶮、…羊腸の小径は苔滑らか…天下に旅する剛毅の武夫…八里の岩根踏みならず…」小学校のとき学んだこの歌は明治三十四年作のものである。今は登山電車やケーブルが山を縫っているが、箱根の山そのものは不変の嶮山である。

その後三、四日してこんどは十月二十五日（金）から十一月一日（金）まで、独協高校第二学年の九州への修学旅行に参加した。校長として五年目を迎えているが、こんど始めて修学旅行に参加した。九州は今までに五、六回訪ねている。北九州は独逸文学会のとくに。南九州は戦時中何かの用で。熊本、阿蘇方面は手島郁郎さんと伝道の共同戦線を布いていたときに。これは最も印象深いもので、いつまでも忘れられない。私の信仰生活に大きな線を劃した聖霊降臨の出来ごとがあったからである。

さてこの修学旅行を簡単に述べるなら、東京を出発して、昔だったら長崎など二十余時間かかるところをその半分以上の時間で着いた。絶好の天候に恵まれながら旅はつづいた。五台のバスに五クラスが分乗して、九州の中部一帯を巡遊したわけである。

長崎から佐世保（させぼ）を経て平戸に向う途中、佐世保市の東方に烏帽子岳という山が聳えていたが、この山頂から武島羽衣が眺望をほしのままにしたとき、彼に詩情勃然として湧き、そのときものにした詩が田中穂積の作曲によって明治・大正のある時期、日本全土にひびき渡った。

「空にさえずる鳥の声

峰より落つる滝の音

大波小波どうどうと

響き絶えぬ海の音

聞けや人々面白き



1974年秋、独協高校生の修学旅行、不滅の青の洞門、後姿は長年独協に尽してくれた写真技師赤木氏。

この天然の音楽を

調べ自在に弾き給う

神のみ業の尊しや」

このことをバスガイド嬢のヒントとガイド・ブグで知ったとき、十才の少年の頃から六十年も歌って来たこの歌が急に親しさを一段と加えて迫ってくるのであった。

平戸ではザビエルの記念碑を訪ねたが、ずるにそこを立ち去りがたく、冥目して彼の東洋への大伝道の雄図を追想した。彼はキリスト教史上第一級の伝道者であった。そのカリスマと聖霊の愛の力があのような成果をかち得た。彼の語る言葉はわからなくとも、その霊言の波動に人々のたましいは動かされたわけである。その夕、佐世保の丘陵の上から眺めた九十九島の夕景は、天国的であった。西海に沈む夕陽！この海は対馬海峡！あの海戦史上空前絶後の大勝利の日本海海戦の火蓋が切られた対馬海

峡！ 少年時代に愛読した巖谷小波の『少年日露戦史』の「日本海海戦の巻」をふと想い出して、何かなつかしい気持ちにさそわれた。

佐世保から西海橋（さいかいばし）という名橋まで船路を辿ったが、湖上を滑るが如き静かな朝。移りゆく島影を飽かず眺めた。

長崎！ 広島と共に強烈な原爆の熱火を浴びた長崎！ 巨大な平和祈念像「天を指す右手は原爆を、水平にのばした左手は平和を、閉じた目は犠牲者の冥福を祈る」すがたである由。天を指す右手が天界の神を指して、神に帰れ！ 人々よ！ というところでもありたい。神に帰るところに平安がある。平安のあるところのみまことの平和がある。

永い歳月を、地上のいのちのある限り原爆の犠牲者のため、貴重な著作に従事しておられた永井隆博士の陋屋もお訪ねしたが、地上に再び原水爆の戦禍が臨んだら人類は滅びること明白である。そうでなくとも、二十世紀は何と危機的、世紀末的、終末的な様相を次第に呈して来たことか。いつわりの繁栄は、あのチャップリンの皮肉な諷刺のように、大音響と共に破裂してしまふであろう。長崎や広島の時鐘の音には、幾十万という人々の叫びと呻きと血と涙の祈りがこもっている。

長崎からは陸路を大村湾沿いに走って雲仙に向った。雲仙では迫害にあつて殉教の死を遂げた人々のため大きな十字架が建てられてあつた。そこは拷問の上、熱湯の地獄谷に逆さおとしにされたと聞く「地獄地帯」である。しばし佇んで冥目した。

雲仙から天草に渡り、天草五橋を巡る。橋！ 島と島をつなぐ橋というものは何か愛の通う姿である。天に懸る橋は虹である。天界と地界をつなぐ霊橋はキリストである。

天草から熊本へ向った。東海道五十三次を暗示している庭園、水前寺公園を訪ねたあと熊本城を見る。昔の人の智慧の根強さに一驚する。城は日本建築の粹といってよいであろう。

その夕、阿蘇に向った。大阿蘇の外輪山の大平原にはいつもながら驚く。世界一の外輪山である。阿蘇山は今し濛々たる噴煙を吐き、夕陽に映えて荘嚴な景観を呈していた。

翌日は九州を縦走して高千穂峡谷にくだっていった。

「春は桜のあや衣

秋はもみじの唐錦

夏は涼しき月の絹

冬は真白き雪の布

見よや人々美しき

この天然の織物を

手際見事に織り給う

神のたくみの尊しや」

高千穂峡谷の唐錦も阿蘇におとらず美事であった。こんな幽邃な峡谷があるとは知らなかった。

それから名だたる青島に出たが、細雨に烟る青島も一興であった。ビローの原生林といい、日南海岸のサボテン、棕櫚、椰子のたたずまいは全く南国情趣さながらである。

北上して風連鐘乳洞を見る。どうしてこんな洞窟が五〇〇米にも亘り不思議な形態をもって出来るものか。天然の妙にただ瞠目するのみである。

降雨のため臼杵の石仏を見そこなったことは残念であった。天然の岩壁に浮彫りにしてある由だが、さぞそれは生けるが如き神秘さを漂よわせていることであろう。

奇岩怪石の連なる耶馬溪を訪ね、かの菊池寛の『恩誓の彼方』で有名な「青の洞門」の現場に来てみて、そぞろにたましいのひきしまる想いであった。仰げば断崖を辿る一条の路、それは鉄鎖の助けを要する路とも言えぬ細路！ これでは殆ど毎日墜落の犠牲を出したのもうなづける。見るからにゾッとする路。その前身は悪党であった禅海和尚が三十余年を一貫、毎日一つの鑒と一つの鉄鎖で岩穴を掘り貫いて、人命救助の大願を成就した往時を冥想したとき、全身をある靈感が貫いた。こういう感動は滅多にあるものではない。み霊をいただいているこの身のありがたさである。もしあの場に誰もいなかったならば、私は岩穴に身を投げかけて感涙に咽んだことであろう。

この度の旅行で最も感動を覚えた瞬間であった。

高い石段を昇って羅漢寺を訪ねたとき、この禅師の用いた鉄鎖と鑒を現にこの眼で見た。その鉄器の中に禅師の人命救助の愛のたましいがこもっているのを感じた。人生万事、森羅万象、これを生か

すものは、神仏に通ずるこのような愛のみである。

この度の九州旅行は、私にあるかけがいのない印象を与えた。五台のバスを一日ごとに乗り換えて、五人のバス・ガイドの詳しい説明を聴いた。最もよくバス・ガイドの説明を学んだのは、おそらく校長であったかと思っている。

高校二年の男子生徒一台四十数名を、六日間相手にしたこれら五人のバス・ガイドさんたち―年齢は二十二、三才―が、よく生徒の名前をおぼえ、彼らをうまくリードしているさまは大したもの、優秀な女性たちだと思った。そういう意味で、おそらく日本のバス・ガイドは世界一であろう。生徒たち、別れるに当って、誰いうとなしになにがしの銭を集めて、運転士とバス・ガイドに夫々の車で感謝をしていた。ガイドさんたちは感涙に咽んでいた。美しい情景であった。

私は帰京後、野尻高原の山小屋に閉ちこもり、ある原稿書きをした。余暇を利用して家内と妙高の奥の雄大な滝を見にいった。

落葉踏む一步一步の山路かな

それから数日して、三重県名賀郡青山町の愛農学園農業高校を訪ねた。その校長杉山信太郎君の依頼を受けて全校生徒に「ルターを中心とする宗教改革の現代的意義について」語ることになった。それからである。

結局「若きルター」を語っているうちに時間ぎれとなったが、例の如く私の講筵はドラマティック

な展開をするので、演題の要点には触れたと思っている。そしてルターも農夫の子であったから、農業にたづさわる生徒諸君と人間的なゆかりもあることであり、農業日本がダメになったら、日本は滅びるから、重大なる責任と光栄ある使命を自覚して大いにガンバッテもらいたいこと、それには絶対に強力なる信仰をたましいの力とせよといって激励、本願の効力、聖霊の金剛力のことにも言及した。自分で申してはおかしいが、正直、私は聖霊の力で福音の中から語っているから、彼らに何らかの感銘を与えたと信じ、聖名に感謝している。一番欣んで下さったのは杉山校長自身で、私もこのことを何よりうれしく思っている。杉山君は元来聖霊の器であるから、いよいよ大胆に聖霊の力で重責を果されると信じている。聖名を讀める次第である。杉山君のおくさまに二泊の御厄介になったが、余暇を利して、女人高野山の宝生寺に案内して下さった。建立が天平時代であるから、樹齡千年も経っている杉木立には讃歎した。摩天樹である。おそらく私が今までに見た老杉の最たるものであろう。戸隠の老杉木立もこれには及ばないのではないかと思った。

愛農学園を辞して直ちに名古屋に行き、全国普通科高校校長会議に参加。高校教育の重要な諸問題について論議された有意義な会議であった。私は会議に参加するたびに必ず何か意見を具陳するので、あの変りものの独協高校校長といった印象を与えているようである。ある校長さんが私に、「先生が一席なさらないと会議が終らないようですね」などと冗談をいっておられた。もう来年からは沈黙することにしようと思っている。

会議後の親睦旅行Dコースに参加して飛驒の高山を訪ねた。はじめてのところである。高山までの飛驒川沿いの沿道の秋色がまた格別であった。何とこの秋は各種各様の紅葉の風光を眺めたことか。この飛驒川沿いの鉄道がまた実に趣きがある。トンネルを出たり入ったりするありさまが自然と人工の不思議なたわむれを見るような歴史的な親しさ、慕しさを覚えしめる。

高山では国宝飛驒国分寺あり、その大銀杏は樹齡實に一二〇〇余年。全く驚嘆した。大へんな巨木である。これが黄葉している美事さよ。かの有名な合掌造りの「飛驒の里」は全く別天地である。釘一本用いない床しい建物である。歴史に由緒ある飛驒の匠（たくみ）の造った家にも案内されたが、芸の道はいづれにせよ、その極意の境地に入っただけには、ある共通した神秘的な靈感を覚える。日本刀なども真の名刀となると、人を殺す武器という感じよりも、武人のたましいの象徴として、人を殺さずして人のたましいを生かす森厳さをおぼえしめる。

十一月十六日（土）、十七（日）の両日は三高会館で前後三回に亘り、マタイ福音書六・二二―七・二八を語った。奥田昌道教授の京都キリスト召団主催の伝道集会である。新人がかなり見えていた。四十名くらいの集会で、内容的にもある白熱的焦点をもった会心の集会となった。第一回は「身の灯火は眼なり」を眼目として展開した。第二回は「一日の苦勞は一日にて足れり」を中心として回転した。第三回は「門を叩け、さらば開かれん」を主題として掘り上げた。聖霊の言は力強いかな、楽しいかな。幾人かの人々が聖霊にうたれた。畳の上にたおれ伏してしまうのである。聖名を讃える。こ

ういう集会を通してたましいが顕然たる前進をするからである。

奥田君の二階でただひとり、晨一時間ほど深い祈りをしていたら、十字架の主の冥想のうちに、十字架の門をくぐって詩篇二十三篇の如き天界のパラダイスに導かれ、うれしくてたまらなく、からだのすごい靈動に入り、靈震が起きた。全身が火のように熱くなった。

「小池さんはなぜそんなにお元気なんですか」と時折人にきかれる。すると第三者が「小池さんは水泳をなさるのでお元気なんです」と説明したりする。私は、「そうなんでしょう」などと答えておく。なるほど私は今でも、すたこら歩いたり、時には走ったり、自転車で乗りまわしたり、泳いだり、野球をしたり、庭仕事や大工仕事などをやったり、とにかくまめにからだを動かしている。しかし本当の原動力は祈りの世界で上からくる、靈界からくるみ力にある。聖靈はおどろくべき活力を与えたまう。ありがたいことである。

この秋のこの京都集会には、武蔵野幕屋からは杉之内孝司、松井康男、沢田正信、藤腹明子、橋本豊子の諸君が同道した。

十一月二十三日（土）勤労感謝の日には、松井君の依頼によって、裾野市立西小学校体育館において、裾野市内高等学校PTA連絡協議会主催の文化講演会で「家庭教育における親の悩みはどこに起因するか」という演題のもとに、語った。

家庭教育も学校教育も問題は両親そのものの、教師そのものにあること。そしてその根本的解決の道

は、たましいの在り方にあること、結局宗教的次元への突入をしない限り、解決の道なきことを明言した。いろいろな悩みも、たましいが本当の力を得れば、悩みにうち勝つことができるし、悩みを来らせている諸現象が別な角度から征服されたり、消滅したりして、やがて明るい楽しい、力強い学園へと展開してゆく、といった具合に、例の如くドラマティックに語った。親も先生も本当の権威をもたねばダメである。本当の人間愛は宗教的次元から来る。私はどこへ行っても、ハッキリこのことを語る。人間のたましいは、たましいにひびく言には何かを感じる。これがなかったら、いくら講演をしてもダメである。

この秋の東奔西走南船北馬は大体以上のものであった。

七 浩然の気

(一九七七年六月二〇日)

独協学園はその濫觴たる独逸学協会学校創立以来、今年（昭和五十二年、一九七七年）で九十四年を閲する。即ち学校創立の明治十六年から数えれば、あと六年にして学園の百周年を迎えることになる。

ところで、この学園創設がそれより二年前に開設された独逸学協会の事業として企てられたものであるから、協会開設から数えると、あと四年で百年となる。いづれにせよ、我らは独協学園の歴史的に重要な時期にさしかかっている。

独逸学協会開設の音頭を採った重要な人物は品川弥二郎で、弥二郎は十六歳のとき決意して吉田松陰の門下生となった。

松陰が松下村塾を開いていたのは僅か三年有余のことであったが、少数の傑物―高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・山県有朋・品川弥二郎等―を薫陶教化したことは周知の如くである。現代流行の塾に

このたぐいの塾がどこにあるであらうか。

ところで松陰が下田踏海の挙に挫折して、萩の野山獄に幽囚の身となったとき、安政二年六月半頃から孟子の講筵を開いた。その年の暮まで同囚の者のために講じていたが、許されて帰宅し翌年三月から、自宅で再開、安政三年六月半頃孟子全巻を講じ終えた。これが有名な「講孟剖記」(別名「講孟余話」)で、松陰先生の氣宇と精神内容が渾然として旺盛している。その中で「浩然の氣」を解説しているところを紹介すれば、

「凡ソ人は浩然ノ氣ナケレバ、才モ智モ用ニ立ツモノニ非ズ。コノ氣ハ血氣客氣ニアラズ、人ノ本心ヨリ靄然トシテ湧出シ、如何ナル大敵猛勢ニモ惧レズ、小敵弱勢ヲモ悔ラズ、如何ナル至難大難ヲモ恐怖セズ、宴安逸樂ニモ解体セズ、確乎トシテ守ル所アリ、奮然トシテ励ム所アルノ氣コレナリ」。

とある。孟子が浩然の氣は、言い難きもの、至大至剛にして天地の間に塞(み)つるものといっているが、これを注して松陰は更にこう言った。

「至大トハ浩然ノ氣ノ形状ナリ。……コノ氣ノ蓋フ所、四海ノ広キ、万民ノ衆キトイヘドモ及バザル所ナシ。豈大ナラズヤ。……コノ氣ノ凝ル所火ニモ燒ケズ水ニモ流レズ。忠臣義士ノ節操ヲ立ツル、頭ハ刎ネラレテモ、腰ハ斬ラレテモ、操ハ遂ニ変ゼズ。高官厚祿ヲ与ヘテモ、美女淫声ヲ陳ネテモ、節ハ遂ニ換ヘズ。亦剛ナラズヤ。……浩然ノ氣ハ古来聖賢相伝ヘテ、孟子ニ至リ發明スル所、學者ニ於テ最モ切実ナルコト故ニ、特ニコレヲ詳カニス。」

松陰先生は正に事実このような浩然の氣を身証しつつ三十一才を一期として彼は果てた。

ところで松陰の海外雄飛の志を檄して、彼の独一の師佐久間象山は「吉田義卿ヲ送ル」の詩をものして、

「コノ子靈骨アリ

……

衣ヲ奮フ万里ノ道

心事未ダ人ニ語ゲズ

……

環海何ゾ茫々タル

五州自ラ隣ヲナス

周流形勢ヲ究メヨ

一見ハ百聞ニ超ユ

智者ハ機ニ投ズルヲ貴ブ

……

と言った。さすがは英傑象山の雄大な氣宇である。ここにも「浩然の氣」が躍如としている。象山が弟子松陰を靈骨と呼んでいるところ至言であると感じる。象山自身和魂洋才の士で、洋学を貴ぶ先

覚者であつた。また易学にも通曉して既に松代の地震を予言したという。

象山、松陰の氣宇を体受して品川弥二郎は渡欧し、在独八年、特にドイツ文化に大いに感銘するところあり、帰朝の後、松陰の士規七則を内に宿し、ドイツ文化を摂取し、精神文化及び教育方面に貢獻せんとて同志に謀つたわけであつた。その間の消息は既に『独協学園七十五年史』に、故福島博氏が「独逸協会生誕と品川弥二郎先生」と題して詳述しておられるから、あれを是非読んでいただきたい。

現今流布されている民主主義は實際には身勝手主義の美名に過ぎない面が多々ある。その責任の最たるものは我ら教育者そのものである。それゆえ不肖私の如きが、独協学園において、師道・孝道を唱道し、独協中学・高校において「敬天愛人・天賦天職・自律自彊」の三綱領を掲げて、教育の根本方針としている。その内容は「この道を往く」なる小冊子で述べているから、ここには省略する。

ともあれ、偉大なる吉田松陰の精神を体した品川弥二郎先生を学園創設者の重要な一人として有つたことを思えば、さきに掲げた松陰の「浩然の氣」の精神が、換言すればそのたましいたる大和魂が、わが学風の中に新たに覚醒されて然るべきものと痛感している。

この百年に垂んとする独協学園の歴史そのものを象徴する存在であり、教育界の權威であられる学園長天野貞祐先生が同窓会々長でもあられることに鑑み、同窓会の方々は百年祭を待ちのぞんでおられることと思う。

独協大学、独協医科大学、両大学創設に偉力を發揮され、全学園今日の大を成された関湊理事長を中心として、われらは近き将来において全学園がいかに百年祭を迎えるべきかを謀りたいと思っている。

恩師松陰先生の東送を聞き、安政六年五月、生別を惜しみ、断腸の念を以て詠じた品川弥二郎の歌二首を掲げよう。

逢ふことはこれやかきりの旅なるか

世に限りなきうらみなりけり

なにとなく聞けば涙の落るなり

いつれの時はちをそそかん

果たせる哉その秋、安政の大獄の露と消えた松陰であったが、その「留魂録」に遺した辞世の歌と詩は永遠に武蔵野の大気を震わす。

身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも

留置まし大和魂

吾今為国死 死不負君親

悠悠天地事 鑑照在明神

この雄渾なる魂に应えつつ百年祭を迎えたいと念願している。

八 寺小屋と塾精神

(一九七七年一月二〇日)

独協通信第八号に「浩然の氣」と題して、吉田松陰の塾精神を述べ、独協中学高等学校の前身、独逸学協会学校の創設の音頭をとった品川弥二郎が松陰塾生であったことも御紹介しました。歴史的にそのような塾精神が土台となっていることを我々は新たに自覚し、私学の本然の在り方を強化実践してゆきたいと思っています。

庶民の教育が近世の曙から寺小屋教育に始まったことは周知の事実であり、欧洲においては修道院のひとつのはたらきに学問の伝承があったわけです。特にわが国の寺小屋は、畳の上に端座して筆で文字を書く手習いを基本とした所謂「よみかきそろばん」に熟するためのものでありました。寺小屋にしろ、塾にしろ、指導は一对一の人格的なもので、十把ひとからげではありませんでした。

現在の学校教育が一般に諸事情の制約のため、一クラスが五十名程度のものが多く教育の理想から遠い現状を遺憾としますが、我々は事情を質的に克服すべく教育における一对一の人格的な寺小屋、

塾精神を復興せんと決意しております。孔子の言を借りれば正に「一以貫之」であります。要するに各教科の先生、特に主管の先生が、各生徒の資質才能を認識し、夫々に適切な指導助言をすることを中心とするのであります。

私が「この道を往く」に書きました如く、天賦のあるところに天職あり、と存じますので、生徒本人が自分はどういう才能を特に賜っているか、そのことを成るべく早期に自覚してもらうことです。その自覚を促すためには、御両親と主管との懇談による判断が不可欠の要素となりましょう。生徒が、生涯を賭けての天職の方向が概ね定まったら、それに必要な教科を中心に集中的な勉強を猛然とやってもらいたいです。そうすると生活に迫力がでてくるし、また必ず愉しくなつて来ます。何でも本ものには楽しみが伴つて来ます。誰でも、遊ぶことは楽しい。しかし学ぶことも楽しくなってくる。私が謂う学遊一如とはそのことなのです。

ところで勉学の態度はどうあるべきか。これも私は「この道を往く」に示しました。教場は道場である。例えば机に向つて端座する前に、まず床の上に紙屑など散乱していたら必ずこれを片づけてから授業にのぞむこと等。御家庭においても躰を厳しくして下さい。一時間の授業において、どこに注目すべき点があるか、何が基本であるかの見当づけを必ずしてしっかりマークしておくこと。これらの積み重ねが極めて大切であることを自ら体験して勉強の真のこつをつかむことであります。

ともかく校長として御父母に更にお願ひしたいことは「この道を往く」をよく読んでいたゞいてそ

の精神で更に御協力を強化していただきたいことであり、我々も授業のやり方そのものをつねに工夫し生徒の指導助言を強化して堅実なる校風を築きあげてゆく所存であります。

(独協PTA会報 第七号)

九 佐久間象山

(一九七八年七月十五日)

この春の校外授業の際、私はひとりで校外授業をさせてもらいました。それは、いつか折が与えられたら、亡き母の故里である信州松代を訪ねたいと願っていたからでした。

何十年振りのことでしたから、街の様子がまるで変貌していて母の生れた御安町のあたりに行ってみて今昔の感に堪えませんでした。この度特に訪ねたいと思ったのは、象山の記念館でありました。

象山は文化八年(一八一一年)二月十一日曙の明星が輝いていた払暁の生れでした。彼が象山の号を用い始めたのは天保七年(一八三六年)、彼の二十六才の頃で、『予が廬の西南に巨陵奮起す。其状巖然象に類す。土人目して象山と曰う。則ち余も安遂に象山を以て自ら号となす。』と自白している通り、象山と訓みます。彼は奇しくもその号の如く、精神的巨人でした。そのことを今回記念館を訪ねてしみじみと感じ入りました。

彼は幼名を啓之助と称し、父一学は極めて聡明剛毅で文武両道に優れた人物でした。文化二年(一

八〇五年）五十才のとき、足輕荒井六兵衛の娘まん（三十一才）を、相手が身分が低いため、妾として迎え入れましたが、このまんとの間には啓之助が生まれたのであります。

この母は記憶力抜群の女性でありました。啓之助は実に父と母の秀れた資質・才能をよく受け継いでいる児でした。

父が音読する易経を傍聴していつの間にか六十四卦の名称を暗誦してしまったという一事でもそのことがわかります。

父一学は第八代の藩主真田幸貫に仕えていましたが、幸貫は一学の道場にある時立ち寄った際、啓之助の太刀筋に目をとめて、「天晴なる太刀さばき、感じ入る。何か褒美を取らそう。所望の品を申して見よ」と下知しました。すると啓之助は言下に、「一つだけお願いを申させて戴きます。実は私の生みの母親は、父の雇人となっておりますので、私は母の実名を呼び捨てにしています。これは子として一番心苦しいことでございます。殿様のおなさけで、母を母と呼ぶことが出来ましたなら何よりの喜びでございます。」といったので、爾後の妾まんは一学の正妻と認められ、彼はまんを母上と呼ぶことができるようになりました。

天保四年（一八三三年）十一月、宿願成就、彼は江戸に遊学。佐藤一齋の門下生となりました。當時一齋の門下には天下の逸才多く、同門の一人大槻磐溪が象山のことをこう伝えていきます。「佐久間が眠っている姿を見たことがない。いつ行っても行灯の前に端座して一心不乱に読書していた。君は

いつ眠るのかと尋ねたら、『毎日八ッ時（夜半の二時）でないと寝ない。朝は人の起きる前に起きている。』と答えた、と。ナポレオンもエジソンも短時間しか眠らなかったということですが、象山も正にそのたぐいだったわけです。

天保十年六月、二十九才の彼は神田お玉ヶ池に居を構え象山書院、別名、五柳精舎という塾を開きました。彼は程朱の学にかけては、天下無比の自信がありました。また彼がいかに漢学の素養が豊かであったかは、彼の「桜賦」や「望岳賦」の桜花と富岳を謳歌した二詩文に瞭かであります。

彼は和魂洋才の精神を以て、黒川良庵の蘭学と自分の漢学との交換教授をやって、和蘭語をマスターしました。細竹を斜に切ってペンを作り、草の汁をインクとして字典を筆写しました。その量とその鮮かな筆跡を見て全く驚嘆しました。また僅々二ヶ月でオランダ文法書を暗記した由です。多種多様の蘭書を読破して驚くべき知識を得ました。

それを活用して、象山は大砲の製作、硝子の製造、日本で最初の電信機の製作、自製の写真機等々を成し遂げました。

医学を学び医療を調合したり電機治療器を製作したり、戦術、砲術の研究をしたり、その他いろいろ実に驚くべき知識欲、創作力の人でした。これらの消息や物件は記念館で手にとる様にわかります。彼自身の写真自像も観ました。

彼の塾精神は「東洋の道徳、西洋の芸術（学問、科学のこと）、精粗遺さず、表裏兼該し、因りて

以て民物を訳し、国恩に報ぜん」というのでした。江戸は木挽町の塾で象山に師事した面々には、吉田松陰、小林虎三郎、勝海舟、阪本龍馬、橋本左内、河内継之助、山本覚馬、加藤弘之等、幕末の志士が綺羅星の如く列なっていました。

ここに注目したいのは、かつても会報で書きましたように、独逸学協会学校の創設の時の主唱者品川弥二郎の師吉田松陰と、本校第三代の校長加藤弘之がいづれも象山の直弟子であったということです。

吉田松陰の渡米密航の罪に連座して、師象山も投獄されましたが、その獄中の冥想によって成った「省侃録」の中の有名な句をここに紹介します。「余年二十以後乃ち匹夫も一國（故郷）に繋るあるを知り、三十以後は乃ち天下に繋るあるを知り、四十以後は乃ち五世界に繋るあるを知る。」象山が自分の存在がいかに故郷、日本国、全世界に関わりがあるかとの偉大な使命感に燃えていたかということです。開国論者なる彼は上洛に際して、心なき攘夷論者たちの兇刃に惜くも五十四才を以て斃れましたが、彼の旺盛なる知的探究、創造の精神、歴史的洞察力、先見の明、強靱なる気魄が、独協学園草業時代の人物に深い関わりを以て影響を与えたことを思い、生徒諸君が感奮興起あらんことを祈る者であります。

十 峠の囁語

(一九七九年一月)

日露戦争勃発前日、明治三十七年（一九〇四年）二月七日に始めて御天道さまを私は見たのでした。それは真昼時であった由なのでゲーテの場合に似ていたわけであります。甲辰の年であったので辰雄と命名されました。烏兔^{うう}匆々、今年（昭和五十四年、一九七九年）の早春で七十五年を閲^{げん}することになりました。

教職を顧ると、半世紀を経たことになります。陸幼、陸士、陸大、一高、東大で勤め、その他、昭和医、早大、東齒等にも関係しました。東大は六十歳停年で退職し、それ以後、独大に奉職、五年後、大学と並行して丁度十年間独協中・高校に勤めさせていただいているわけです。

そのようなわけで、教職五十年を経た今日、私は人生の最終の峠に指しかかった感を深くしております。ここに峠のたわごとをPTA会報に書かせていただくわけです。

長兄は英語、次兄は仏語、私は独語というわけで、兄弟三人で英、仏、独を主たる外国語として学

びました。長兄は法学、次兄は兵学、私は文学というわけで、兄弟それぞれでありました。

独協中・高校の教育三要綱として、敬天愛人、天賦天職、自律自彊を掲げていることは皆様御存じの通りであります。私自身のことを顧みて、やはり語学、文学が好きであったので、その道を択んで、ドイツ学（ゲルマニステーク）の教職に就いたことは、間違っていないかと思っております。十七、八年前（一九六一―六二年）ハンブルク大学講師として一年間、ドイツの大学生を相手に、日本精神史と日本語を講じたことは、楽しい思い出の一つです。ドイツの大学教授は、雑務雑用も、日本のような教授会ありませんし、夏休みも三ヵ月たっぷりあるので、研究や著作に専念できます。それで私も在独一年間のうちに、『ドイツ語固有名詞小辞典』（研究社版）の原稿を大方書くことができました。

五十年間のドイツ語を中心とした教職は天職であったと申すことができます。なるほど大詩人ゲーテの『ファウスト』の演習を独大のゼミで八年間かかっていたしましたから、ドイツ語は一応やったというものの、自ら顧ると、私のドイツ語などはまだまだみじめなものであります。勿論死ぬまでドイツ語の本を読みますが、日本の文学や漢詩なども更に学びたいと思っております。即ち自彊不息の所存であります。

「敬天愛人」という南洲遺訓の有名な句を教育の第一義として掲げ、『この道を往く』に説きはしましたが、ここに体験の一端を一言させていただきましょう。私は二十歳のとき、丸の内大手町におけ

る内村鑑三先生の聖書講義の大集会に参列して以来、キリスト教の信仰を貫いて来ましたが、一九五〇年（四十五才）の晩秋、大阿蘇のふところで、手島郁郎氏と共に深い祈りの集会をしました。そのとき天から聖霊のバプテスマにあづかりました。それはたしかに次元的飛躍でありました。日蓮が佐渡に流される前に、弟子の日昭にだったと思いますが、「法華経を身読せよ」と言った由ですが、私もそれ以来、聖書の身読が出来ようになりました。それで、キリストの直弟子たちの次元に還るべきことを現代のキリスト教界に訴えているわけです。その最初の狼火が拙著作集第一巻「無者キリスト」なのであります。

「南無阿弥陀仏」とか、「南無妙法蓮華経」とかいう唱名、唱法は素晴らしい内実をもっています。「南無」において私は帰命、帰依、祈入の意味内容をとらえております。祈りは単なるお願いではなく、まづ第一に自分自身を神仏の中に投身、投入することなのです。「阿弥陀」即ち無量寿・無量光の「仏」即ち覚者の中に全存在を投入して仏と一如となるのが、「南無阿弥陀仏」の本義でありましょう。南無と称へば阿弥陀来にけりひとつ身をわれとや言はん仏とや言はん

という道歌が告白している通り、本願の慈悲による仏我一如の現実であります。それゆえ、わがキリスト道（私は「キリスト教」という表現をあまり用いません。キリスト自身が「われは道なり」と申しましたから）においては、十字架の下、たましいの奥で南無キリストと念じつつ一如の靈境に入るのであります。ここには詳説する遑がありませんから、この辺でやめておきます。「敬天」といっ

ても天人一如の現実に入らねば本ものとはならないのです。

一九四〇年の秋以来、私は自宅の一角を道場（所謂「教会」ではありません）として三十八年間、原則として日曜ごとに聖書の講義を開いて来ましたが、地上の旅路果てるまで続けざるを得ません。今までも、その他休暇には、北は北海道、南は九州まで処々方々で語ってきました。

七十五歳の峠を迎えんとして、既に昨秋再度天の啓示にあづかっていることがあります。それはこの春、峠を迎えたあとで、私の天職の分野が伝道と著作へ本格的に移行してゆくことでもあります。

たましいの問題等で、なやみがありましたら、どうぞ道場にお出で下さい。天的生命がどんなものであるかを体得していただきたいです。身体のことにしても、心身一如の消息ですから、不思議なことが起きたりします。私は何も御利益を申し立てるではありません。根源現実の消息を体得していただきたいのです。

七十五歳といえ、人生の夕暮でしょう。今や私も人生の黄昏にさしかかりましたから、この峠を越えて、星空の下徹夜して山路を登り続けて行くでしょう。そして、永遠の晨を迎えたら、羽化して天界へ飛翔したいと念願しております。聖霊の光という一燈を掲げて歩いてゆきますから、この燈火の欲しいかたにはいつでも祈りの油をもってお頒けいたします。これは暴風雨にも不滅の燈火なのであります。

以上の私の峠のたわごとを、本ものと思うかたはいつでも道場に来て下さい。生徒諸君も、そのお

父様もお母様も、また教職員の方々も。

独協中学・高等学校が、校庭は狭く、校舎は古く、設備も思わしからずとも、学校は教職員そのものの！ ということを根柢の自覚としていただきましょう。先生方の気魄と、授業に対する情熱と工夫とがいよいよたのもしき相となり、生徒諸君が学校の内外の言動にいつわりがなく、天賦に対する自覚と抱負をもって努力精進してやまぬたましいであることを切願します。然らば天下の独協たるの実はやがて現われると信じます。

(独協PTA会報 第九号昭和五四年一月十三日)

十一 独協高等学校第二十三回卒業生に対する式辞

(昭和四十五年一九七〇年)

独協高等学校卒業生諸君、諸君は独協学園八十七周年の歴史の一環を担い終えて卒業せんとしています。誠におめでとう、我々教職員一同は御父母の方々と共に、心より諸君の卒業をお祝い致します。諸君は今や三星霜の独協学園生活を後にして目白台を去ろうとするにあたり、感無量なものがあるでしょう。この三年間は諸君の今までの生活で、最も成長の著しい時期であった。学業の上での知的進展、体育の上での肉体的鍛練、個々人によってその内容は様々であります。天から授かった天賦の資質才能がそれぞれその実質を現わしてきているものと思います。

諸君のうち、ある者は、哲学・文学歴史のような文科方面へ、ある者は、法学・経済学のような法経社会科の方面へ、ある者は、数学、天文学、物理化学生生物学といった方面へ、ある者は、工芸、美術、音楽といった芸術の方面へ、ある相当多数の者は、医歯学の方面へと、多様性をもって、思い思いの分野に向かって、進学してゆくであろうことを、我々は喜びとし、期待しているわけであります。

希望にあふれ、抱負をもって、人生の次の段階たる大学なり、専門校なりへ突進して下さい。

ところで高等学校時代は、単なる準備期間であつたのではないはずで、そこには、それ自身の目的があつたのです。それは純真な人間性の基礎づけと、学問の基礎づけであつたはずで、

真実なる人間性の内容は何であつたでしょう。私は校長就任に際して、西郷南洲の敬天愛人の句をかかげました。そのことを、諸君は覚えていらっしゃると思います。諸君の卒業にあたり、やはりこの言葉をはなむけとしたいのです。詳しくは次のような言葉であります。

「道は天地自然の道なるが故に、学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己をもって終始せよ。」ということです。即ち、人の道は、天地自然の理法を見、それに即するものであつて、人間においては「敬天」すなわち深い宗教心と、「愛人」すなわち人間界では、道德の完成としての隣人愛に生きることであります。

そしてこれを実践するに大切なことは、自己に打ち勝つことです。それらのことについては、朝礼を通して、すでに多角にお話をしてきましたから、今ここに説明はしません。学問や諸文化の根幹は、なんといつても人間そのものの魂の在り方にあるので、君達はどこまでも宗教的な畏敬の念を土台とした、また両親に対する敬愛の念のある日本人らしい日本人たらんことを念として進んで下さい。

「愛人」とは君達にとつては、美しい友情をもって生きることです。利害打算で動くのではなく、美しい友情をもって、青春を生きることです。独協学園高等学校を卒業してきた者らしい人間としての

品格を、いよいよ磨き上げて下さい。そしてまた、賜りたる天賦をしっかり鍛え上げるべく、大学時代を貫いて、真剣に、研究心旺盛に学んでもらいたいです。人生のマラソンにおいて後半戦、即ち社会に出て働くにあたり、前半戦たる学生生活において、なんといっても大切なことは、しっかり学ぶことです。健全なる活動の素地は、じつくりと学ぶことにあります。真理愛の気魄が大切です。自分の天賦がすなわち那边にあるかを見当づけて、自分の天賦を中心として勉学、研究すること、いろいろ体験し、創造力を養ってゆくことが大切です。

社会に出て、真に優れたる、役に立つ、信頼するにたる人間となるために、その芽生えが、この高等学校時代において、既に吹き出たものと私達は信じています。

終りに言いますが、諸君はここに親しく学んだ先生方のことを忘れてはならない。恩を忘れる者は、人間ではありません。ダンテはあの「神曲」の中で、忘恩者を地獄の底の一ヶ所に置きました。時に及んで、同級生と同級会を開き、関係の深かった先生方をお呼びして、語り合うことが、麗しいことであると思います。

人間の世界の平和と喜びは、単なるイデオロギーからは来ません。イデオロギーを超えた人間性にあります。これを要するに、命懸けで勉強をし、仕事をする気魄ある人間、本当に隣人を担い上げるような力強い愛の人、深い宗教心を人格の中心に持っている人、そういう、人らしい人になって下さい。日本はまさに、このような人を要しているのです。

第二十三回独協高等学校卒業生 万歳!!

サヨナラ!

十二 目白台を去るに際して

(一九七九年六月九日)

明治十六年（一八八三年）の秋、独協が「独逸学協会学校」という名称を以て創立されて以来、今秋（昭和五十四年、一九七九年）で九十六周年となるので、あと四年で創立百周年を迎えることとなります。それで私は第十四代の校長として「独協学園百年史」編纂のことを提唱すべきと存じ、一昨

年の暮から然るべき議を経て編纂事業にとりかかったわけでありました。

けれども私は元来、独協大学の創業時代から教授として大学のドイツ語学科メンバーでありまして、この春で満十五年が経ち、七十五歳に達しましたので停年退職ということになり、同時に目白台の独協中学・高校の校長職も辞することになったわけであります。目白台では十年間務めさせていただいたわけで、公的にも私的にも正に時機が満ちたというものであります。

私的に申しますのは、私は一九四〇年秋以来、原則として日曜日に聖書講筵を開いて今日に至っておりますが、これは「仆れて而して後己まん」という気持のものであります。一方著作に対する使命も感じておりますので、少なくとも全十巻は書きたいわけであります。いくら私が元氣だと申しても七五歳の峠を越えましたから、愚図々々してもおられないわけであります。大体以上のような公的及び私的必然性を以て目白台を退かせていただいた次第であります。

独協中・高校の同窓会は、独協学園全体の歴史的な母体を成しているもので、会長であられる天野貞祐学園長は今秋で満九十五歳となられることを想えば、同窓会の歴史そのものの如き存在であります。

このような時独協百年を迎える時機に当って、同窓会の方々が母校を想う氣運が盛りあがって参りましたことは、まことに喜ばしいと存じております。それにつけても、鈴木浩幹事長、神尾昌朋副幹事長を始め同窓各期の幹事や世話役等の労をおとりになっておられる方々によって、各期の同窓の会

合などが催され、それが同窓会の有機体的構造の強化のため有効に相はたらいてゆくことを有難く存じ、それがまた有形無形に母校の力となりつつあることを感謝いたします。例えば、図書費の御寄附の如きは其の著しきものであります。

私は目白台を退きましたが「独協学園百年史」にはなお微力ながら委員長として関係しておりますのでその「百年史」本史の前段として「独協百年」という資料集の如きものを、編纂主任の斉藤博教授と相はかって数冊バイヘフト「傍系冊子」として出版すべく進捗しつつあります。同窓会の方々が、さらにこの「百年史」に何なりと資料を提供して下さいたり、或は何なりと御助言を賜るようお願い致します。

「百年史」編纂に関係しているメンバーは目白台の同窓であったり、中・高校、独大、独医大の教職にある先生方であります。我々がまことに残念に思っておりますのは、独協の歴史に深い関心をもっておられた福島博氏が今は他界しておられることです。しかし、北浜章先生が同窓会誌たる「独協通信」に創業時代のことを詳しく書いておられ、有難く存じております。

私は独協学園創立九十周年を迎えた際に「この道を往く」なるパンフレットを草し、敬天愛人・天賦天職・自律自強の三要綱を掲げて、乱れがちな世の風潮に抗して光榮ある歴史をもつ独協中・高校の校風振興のため、専ら教育の面において校長としての微力を尽したつもりであります。それがどのような果を結びつつあるかは私の申すべきではありませんが、百周年の秋を迎える頃、篠原寛

第十五代校長を中心に諸先生方の新しき御努力と全校生徒諸君の自覚ある意気ごみと御父母の力強き御協力によって百周年有終の美が果されんことを期待するものであります。

終りにのぞみ、目白台の独協中・高校を年々歳々卒業して同窓会員となる諸君が、校歌に謳われているように大和心の象徴たる桜花と、西欧文化の栄光の象徴たる月桂樹葉（これは御厄介になった目白台十年の記念に、私の庭から運んで来て寄贈移植させていただいたものです）を忘れることなく――それは校庭に現実には花と咲き常緑の葉を繁らせています――同窓の絆をあつく結び、母校の後輩を深く願っていたきたいとお願いいたします。

目白台を去るにあたり同窓会から会長天野貞祐先生の名において渋味のある置時計の御餞別を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

（独協学園同窓会独協通信第十二号一九七九年〔昭和五四年〕六月九日版）

十三 目白台十年——お別れに際してPTAと全校生徒諸君に

(一九七九年七月二〇日)

地下鉄東西線の早稲田駅から目白台の独協中学・高校へ、あの東京都保存樹第七号たる樹齡幾百年の銀杏双樹の聳え立つ胸突坂を登って通勤して、はやくも十年が経ちましたとは。帰路には早稲田大通りの英詩専門の古本屋に時折立ち寄るのが楽しみでありました。学生時代から古本屋に立ち寄るのが私の趣味の一つで、これは生涯不変でありましょう。本の好きな生徒諸君、いつでも遊びに来て宜しいです。金銀はないが、半世紀の間に自然に集った書籍は万巻を越えております。戦時中、生活に困って本を売って糊口を凌いだことがありましたが、それらの本は今でも愛惜の念に堪えません。

願えばこの春で独協大学十五年、目白台十年が経ち、七十五才の峠に來たので大学の停年制により大学を退くと共に、目白台ともお別れすることになりました。

私的な点から申しても、日本キリスト教界の大立物内村鑑三の直弟子でもあり、昭和十五年（一九四〇年）の秋、長兄政美が北京で客死した（大正十年、一九二一年）命日を期して、自宅の一角を会



独協学園 PTA 送別会で一席御挨拶しているところ。1979年春三月

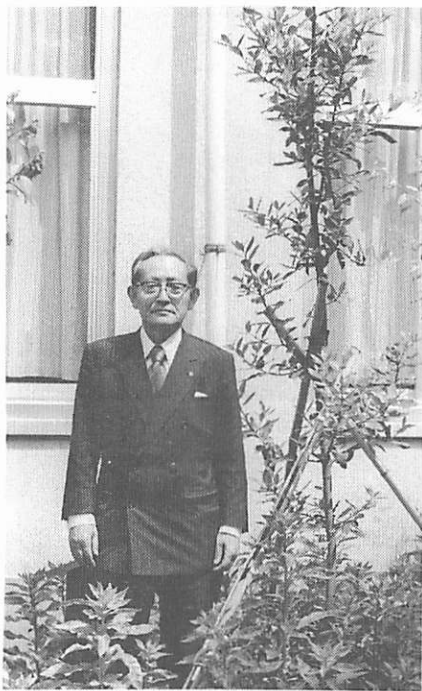
堂にして日曜の聖書講筵を開いて今日に至っているので、既に昨秋、人生の最終行程を伝道と著作に献げたく決意したのでありました。

ともあれ、過去十年、目白台における学校生活はお陰様で楽しいものでありました。教職員七十余名は和合のとれた人格協同体を成していると感じておりました。私は各人の良さと特質を認識して、学校という協同体が、ハーモニーを以て夫々の力を發揮すべく、各教科の研究的話合いと責任の自覚と自由な活動と授業の特色を期しておりました。実務に優れた手腕をもつ篠原教頭の補佐により、快く勤め得たことを感謝しております。また生徒の学校生活の上で暴力行為や喫煙、飯酒等、独協生としてあるまじき振舞に対して高梨生活部主任が厳正な舵を執っておられたことに対して同じく感謝しております。また教務及生活部の先生方歴代の事務長等を始め、事務の方々の御苦労も肝に銘じております。また黙々として掃除万端に當っておられた用務員の方々と及び夜警を衛つて下さった三名の方々に心から謝意を感じております。

私が最も力を入れたのは、火曜の朝礼の講話でありました。十年間、かなり多角的な内容のはなしをしたつもりです。そし



1979年春三月 PTA 役員一同と記念写真



1979年晩春、目白台独協学園の校庭に月桂樹の苗樹を自宅から移植した。校歌にロールベールを桜と共に謳っている句があるので記念のためにである。今はこの何倍かの立派な月桂樹となっている。

てその焦点は、敬天愛人、天賦天職、自律自彊の教育三綱要でありました。

日本の民主主義なるものが、現実には身勝手主義といった様相を多分にもっているのは、「敬天」によって表わされる神仏に対する畏敬の念を欠いているという根本的欠陥によると思うので、そういう宗教心への目醒めを促すことを第一としたわけです。そこから美しい友情（「愛人」）が湧いて来るのです。

生徒各自には天賦の才能気質があります。それに即した面にその生徒の生涯の課題と使命があります。しょう。それを当人は固より、御父母と主管の先生がよく認識して下さること。自己の本質たる天賦を自覚したら、勉強はそれに連関した教課を中心にして打ち込むこと。そこに生活の張りがででくる。



西独大使館にて、ディール大使(左)、フリーゼ文化部長(右)、



ドクトル・フリーゼ氏の推薦によったと思うが、1980年3月1日、時のディール大使から大使館で第一級功労十字章 (VERDIENSKREUZ 1. KLASSE) を授与された。大統領カルステンスの自署入りの賞状であった。人生の終りはキリストから見えない十字章を賜るべく献身しなければならない。

気魄も強くなってくる。そういうことはいろいろな実例を通して生徒の自覚を促しました。自律自強も、この自覚があれば、おのづから出来てくるのであります。

私はこんな気持で独協生を愛し且つ激励して来ました。「この道を往く」というパンフレットに詳しく記してありますので、生徒諸君も御父母の方々も私の手紙と思って時折読んでいただきたいと思います。

学校教育そのものは教職員の担当であります。これと車の両輪の関係にあるのは家庭教育で、とにかく外人から日本のお母さんは甘すぎると言われますが、独協のお母さま方は概して甘くはないと存じますが如何がでしょう。独協中・高校のPTAのPの組織はまことに良く整っております。役員・専門部委員、学級委員、そして全校の御父母。私もそのPTAの一員として特に運営委員の方々は十年間にどれほど会合をしたことでしょう。私の在職中の歴代の会長須佐良男、鳥海高行、地田満州男、伊能秀記、中井嘉文の諸氏を中心とした方々の御骨折は大変なものであります。独協のPのあたにかい御理解、御支援、御協力には肝銘しております。学校の諸施設、現在の海の家、過去における日新寮、毎年の文化祭、春の体育祭、秋のマラソン大会等における御支援、御協力など、想い出せば、有形無形の御友情にただ感謝あるのみであります。

高校生諸君、君たちが卒業してからでも、人生問題や心身のなやみごとなどがあって、もし私に会いたいと思ったら、一応電話連絡をして、いつでも御訪ね下さい。私に出来ることなら何らかのお助

けをしてあげたいと思っています。また御父母の方々でも宗教的なことでおたづねになりたい時に、どうぞ御来遊下さい。私は今は在野の自由な一伝道者で、天来の力にあづかっておりますから。

最後に感謝をもって想い出すことがあります。三月二十五日にPTA主催の送別会が椿山荘で催され、数百名の御父母の方々が心から別れを惜しんで下さったことです。両学長及び幾名かのOBの方々も加わって下さいました。伊能会長を始めいくつかの感銘深いお言葉をいただき、「仰げば尊し」を心をこめて歌って下さいましたが私はその歌声を御子弟に代って御父母が歌って下さっていると感じました。私は勿論この歌を受けるに価しない校長でありました。しかし現実の私がどんなに惨憺たる校長であったとしても、私の中にある本願的な魂はPTAの熱いお心に全身の感謝を以てお応えいたしました。いつまでも忘れられない為です。

それから数日後、三月末日、理事・評議員会のあとで、上野の精養軒で、この日を以て独協学園を退く三名の者のため、閑理事長が送別の宴を設けて下さいました。これまた感激の至りでありました。送別の会を終わって辞去すれば、上野の丘は爛漫たる夜桜のパラダイスでした。心あってか一陣の風に霏々紛々と桜花が散りかかりました。これほど印象的なことが今までの生涯に幾つあったでしょうか。教職生活に五十年（二十五歳から七十五歳）。しかもその最終の日の送別会が、昔なつかしい上野の丘。しかも桜花爛漫たる夜。散りかかる桜花と共に私も教育界から散り去ったのでありました。

散りかかる桜花と共に散りにけり

おわりに、独協学園の双樹たる天野貞祐学園長と関湊理事長の御健勝を心から祈念し、目白台独協の教職員並びにPTA全員のあたたかい御友情に対して衷心より感謝し、独協百周年に向っての力強い御進展を祈ります。

(独協PTA会報、第十号)

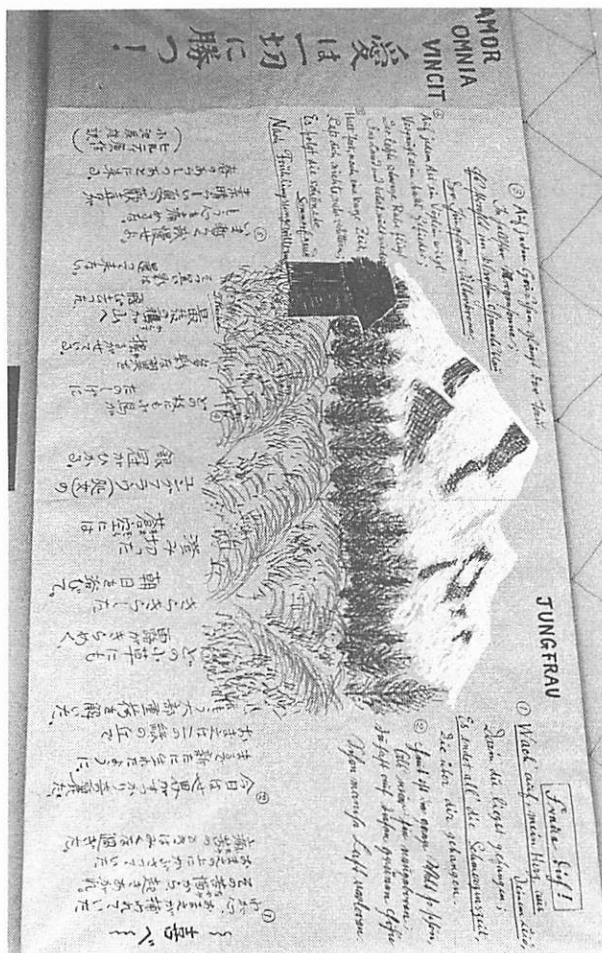
一四 第四回独協大学祭所感

―学友会総務部長として

(一九六九年一月)

今回の大学祭に参加した学友会の各サークルの活動や在り方について思いつくままに所感を記して将来の参考に供したいと思う。

体育祭ではいうまでもなく体育部の各部が主として実際の運営にあたったと思うが、フィールドとトラックの並行的進行に更に工夫をこらしたなら、より多くの種目ができるのではなからうかと思つた。マラソンの優勝走者などの氏名所属学部、所要時間などのアナウンスをはっきりやってもらいたいと思う。クラス対抗リレーの場合、走者が何部何科何クラスに属する者であるかを示す標識がはっきりつけられて欲しかった。全体としてはスポーツマンシップをもって快活に且つ整然と実施され、気持ちのよい体育祭であつたと思う。夜の提灯行列もよく秩序が遵られ、独協大学生らしいやり方であつたし、最後の解散の場所であつた小学校校庭では、煙草の吸殻などをすべて片づけて、飛ぶ鳥あつたを濁さずの心がけを以て引きあげたと聞き及び、何より嬉しく思つた。



独協大学文化祭に於て小池ゼミが、ヒルテアー著作の展示をした際、小池が自筆で睡画的な画とヒルテアーの詩とその訳を書いた。

文化祭のプログラムに掲げられた統一テーマ「考えよう、独協大学の未来と使命を、世界平和と学問の自由のために」の巻頭言（実行委員会）はまことに独協大学らしい主旨で共感を以て読んだ。講演「日本の安全保障と日米安保条約」、講演者、梶谷義久氏（朝日新聞論説委員）、三好修氏（毎日新聞論説委員）、関寛治氏（東大助教授）、司会者白鳥令氏（本学専任講師）の講演会は、国際状況や政治の事態を冷静に客観的に、そしてまた主体的に考察するのによき参考になったと思われる有意義な講演会であった。シンポジウム「独協大学を考える」に一般学生の参加の少ないのを遺憾に思った。大学が教職員と学生の生命協同体である自覚を真にもつなら、もっと積極的な参加が欲しかったことは何であるにせよ、すべての大学人が信頼関係意識のもとに、責任と光栄を分かち合ってこそ健全な展開がなされ得るからである。今回のシンポジウムそのものの雰囲気は好ましくからざる面があったことを残念に思った。

各部いくつかのゼミのさまざまな催物、展示、その他絵画、写真、体育館及グラウンドにおける諸招待試合等、自分としてはできるだけを、三日間見てまわったが、充分な準備や練習や工夫をこらしたものが多く、平素の学友会活動の精華がここに現われたと見て宜しいと思った。管弦楽の見事な演奏を聞いて、ここに今回の文化祭のシンボルが現われたとの感を抱いた。それは丁度あの体育祭での多数のマラソン参加と相照応するものであるといつてよいであろう。

献身的な努力を以てことにあたってくれた大学祭実行委員たち、大学祭に積極的に参加したすべて

の学友会学生諸君に対して心からの感謝の意を表したい。事実上、同時に全員が参加できないのではあるが、全然参加しないというようなことは、結局、自ら大学生活を乏しくするのであることを反省し、在学中に必ず一、二回は心からの参加をするように勧告したい。またパンフレットは全員が責任をもって買って、独協大学協同体の意識の実を示してもらいたい。

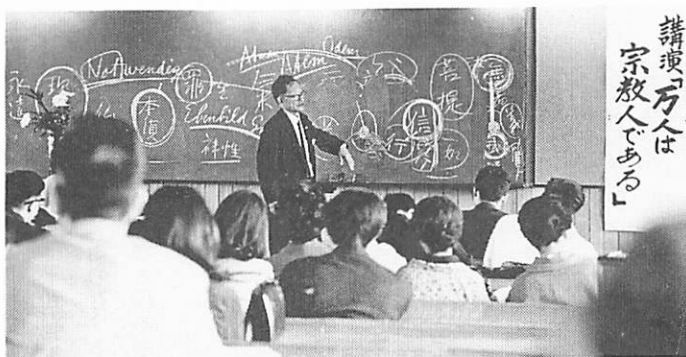
(独協大学学友会誌第三号所載)

一五 古典を身読すべし——在学中ぜひ聖書にふれて

(一九七九・五・二)

内村鑑三の門下の誰かをという天野学園長の御意向で、私は独協大学に奉職したのだが、もう十五年が経って、この間七十五歳の峠を越えた。ゲーテが七十五歳の丁度今頃（一八二四・五・二）夕陽を眺めて、沈みゆく太陽はかし絶えず輝きつづける、そのように靈魂（ガイスト）も永遠に活動する不滅のものと、エッカーマンに語ったが、私も今や人生の夕暮、独協大学教授を十五年、独協中・高校校長（第十四代）を十年で、お別れをすることになったので、これからは星空の下を、ある靈的なカンテラを提げて夜もすがら歩きつづけ——内容は伝道と著作——永遠の晨が明けそめたら、こんどは現世にお別れをして、永遠界に文字通り往生したいと念願している。

大学生活で楽しかったのはゼミ授業とその合宿であった。ルター、ヒルティ、シュヴァイツァー、ゲーテの諸著作を読んだ。特にゲーテの全『ファウスト』を前後八年間を通して学んだことは私自身にとっても極めて有意義なことであった。学生諸君よ、須らく古典を身読すべし、と申し遺しておこ



第四回独協大学祭にて

う。

もう一つ申したいことがある。私は「ドイツの宗教」を講じたが、学生諸君が一般に聖書を読んでいないから、まず聖書緒論をやってから本論にかかるのを常とした。凡そ欧米文化を学問の対象とする限り、聖書は謂わば事典であるから、独協大生たる者は在学中に是非とも聖書を読むことを、ここに遺言の如く切言しておこう。

大学創業時代に私は小栗教授や所沢教授とコンビで学友会の文化部長や総務部長を承っていたが、各部の学生諸君とも交われたし、特に大学祭（雄飛祭）は楽しい思い出の一つとして遺っている。ともあれ、クラス・メイト、クラブ員同士、ゼミナリストン等の師弟及友情関係の美しさは、独協大学の一特質と思うので、この伝統をよく育ててほしい。これはやがて独協学園全体の同窓会の健全な展開へと拡がってゆくと思っている。

さて終りに、学生諸君、二十世紀はあと二十年。世界は

天災と人災を孕んでいる危機的現実である。恐ろしいのは核兵器そのものではない。こういうものを作る人間の意志である。平和を望みながら戦争という悪霊の捕虜となっている国家という公的存在の自我心である。我欲我執の存する限り万人は救を要する。

キリストと釈迦如来の本願の呻きは今や深刻である。

(一九七九・五・一)

(前ドイツ語学科教授)

(独協大学ニュース、昭和五十四年 五月三十一日号)

一六 『独協百年』刊行に際して

(一九七九年五月一日)

幕末の大先覚佐久間象山は「和魂洋才」の精神をもって塾生を訓陶しましたが、天下の逸才たる塾生たちの中に吉田松陰、勝海舟、坂本龍馬、橋本左内、加藤弘之等々がおりました。その松陰の門下に品川弥二郎がいました。この品川弥二郎こそは独逸学協会学校創設主唱の重要な人物でありました。また第三代校長加藤弘之は上述の如く象山の直弟子でありました。松陰の果し得なかった海外雄飛を品川弥二郎は果し、在独八年の深い経験が、わが学園創設の起因になったと申して可なることを思うとき、象山・松陰の雄大なる氣宇が、欧州の中央に位する独逸、ヨーロッパ文化の中心たるドイツ——ルター、カント、ヘーゲル、ゲーテ、シラー、バッハ、ベートーヴェンの国——の文化を先づ吸収、移植すべしとの氣運となつて、明治十四年（一八八一年）、北白川宮能久親王殿下を総裁にいただき、品川弥二郎、西周、加藤弘之、桂太郎、青木周蔵、平田東助、大脇玄の諸氏の主唱によって独逸学協会が創設され、その事業の重要な一環として独逸協会学校が同十六年（一八八三年）に創立し

ました。これは独協関係者一般の周知のことではありますが、西暦ですぐわかるように、一九八三年即ち昭和五十八年に我らの独協学園は百周年を迎えることになりました。

それで独協学園の母体たる目白台の独協中学・高等学校の第十四代校長の職責上、百周年には『独協学園百年史』が出版されるべきであると存じ、閑湊理事長の御快諾、御奨励のもと、一九七七年十二月十六日、理事会全員の御賛同を得ましたので、以後準備にとりかかり、一九七八年（昭和五十二年）四月十七日に第一回編纂委員会を召集し、編纂事業のスタートを切りました。

さて我々がどのような心構えで『独協学園百年史』を編纂するかの大略をここに述べさせていただきます。なおこのことについては、別項「『独協学園百年史』編纂に就て」を御参照下さい。

本格的な『独協学園百年史』を作るに先だち、それへの資料的な、またある意味ではその傍系的なパイヘフト（傍系冊子）として『独協百年』なる冊子を数冊逐次発行することにいたしました。本冊子はその第一巻というわけであります。

ところで今日までに発刊された記念史的史誌は、『独逸学協会学校二十五周年』『独逸学協会学校五十年史』『独協七十年』『独協学園七十五年史』『独協八十五年の歩み』等で、これらの文献は『独協学園百年史』の土台となる重要な資料で、充分活用したく存じております。

現に編みつつあるこの『独協百年』は、これらの資料とは別に、各時期における同窓生、教職員、理事者諸氏の回想録、座談会、その他文献を通しての伝記、著作からの引用等々を資料として、興味

ある記事を編集し、収録してゆきたいと思っております。同窓の諸先輩の御熱心な御協力に衷心より感謝いたしております。

我らの独協学園は明治維新のわが国の大転換時代にその創業時代を有ち、明治、大正、昭和の三代にわたり、日清、日露の両戦を経たのち、第一次世界大戦（一九一四―一八）では独逸を敵国とし、第二次世界大戦（一九四一―四五）では独逸を同盟国として共に大敗を喫し、終戦後共に復興しましたが、二十世紀も残すところ二十年。世界は平和に向っているのか、それとも大危機を孕みつつあるのか。そういう現実にある独協学園は何を存在の使命とすべきか。百年史はただ歴史的記述のみを以て事足りるべきではなからうと考えています。真の歴史は、歴史において真に実存した人々の問題とし、課題としていたものが何であったかを探究することにおいて、将来への隠れた預言を、指向していた使命的なものなどを指摘する面も有つべきものでありましょう。『独協学園百年史』は明治・大正・昭和の日本の大ドラマを背景として、その歴史の中をくぐり、その歴史の一環を荷う存在として、ドラマティシユ（劇的）なものをもっているはずであります。日独文化交流も特に医学方面で、日独の橋となつて力を尽された石橋長英先生の功績は特筆すべきものの一つと感じております。独協学園長であられる文学博士、元文部大臣天野貞祐先生は、独協百年史の象徴的存在であられます。先生は独逸学協会学校創立の翌年、即ち明治十七年（一八八四年）に生れ、いくたの輝やかしき功績を積まれて、独協の危機的時代に教育愛の情熱をもって、昭和二十七年（一九五二年）母校の第

十三代校長に就任され、昭和三十九年（一九六四年）には学長として埼玉県草加に独協大学を関理事長と共に創立され、建学の理念として「大学は学問を通じての人間形成の場である」という言葉を掲げられたのであります。独協大学は法学部、経済学部、外国語学部の三部門から成っていますが、法学部には既に大学院が設けられてあります。学長は天野・黒沢・白旗の三代にわたり、現に十五年の歴史を閱しています。

更に昭和四十八年（一九七三年）には、園長の念願に基づき栃木県壬生に独協医科大学が関理事長、石橋長英学長によって創設され、石橋・磯田二代の学長のもと今春第一回卒業生を出すことになりました。同じく関理事長の御尽力による独協医大附属病院・高等看護学院も極めて順調に展開しています。天野学園長・関理事長を中心とする独協学園は現在このような構成でありますので、草加の独大、壬生の独医大の歴史が学園百年史の後半の重要な部分を占めることとなります。

加之、来春（一九八〇年）は埼玉独協高等学校が東武線浅間台の西域に創設されることになり、その初代校長として元独協大教授理学博士矢嶋仁吉氏が任ぜられ、目白台の独協中学、高校の第十五代校長には永年勤続の教頭篠原寛氏が今春任命されました。目白台の教育には永年PTAの組織があって家庭教育・学校教育の両輪の作用を効あらしめんと努力しつづあります。

以上が学園のあらましの輪郭ですが、これらの大組織をもつ有機的な、人格協同体たるわれらの独協は重大な私学教育の一環を承るべき課題を荷いながら、百年祭に向いつつありますので、今や明

治の貴き伝統に応え、新しき改革と創造の精神を以て全学園が光榮ある歴史をつくる意気にいよいよ燃えんことを念願しつつ、この蕪辞を終ることにいたします。

おわりに、この『独協百年』冊子編纂事業のため、特に力を注いでおられる編纂主任独協大教授齋藤博氏と同氏の指示により東奔西走よく働いている調査助手、独大経済学部卒、大東文化大学博士コース在学中の川田武君の労に心からの感謝の意を表します。また事務を司っておられる安宅、名取両氏の労にもあわせて謝意を表します。

○『独協百年』誌の表紙の題字として、学園長天野貞祐先生（本年九十五歳の御高齢）の御筆蹟をいただきました。

（第十四代中高校長）

（昭和五十四年五月一日発行『独協百年』第一号序文）

一七 『独協百年』誌終刊に際して

(一九八一年十二月十五日)

昭和五十四(一九七九)年五月、「独協百年」創刊号を発刊して茲に二年半、A5判四五〇頁を越える分厚な本を、半歳に一号の急テンポで編集して来ましたが、この第五号を以て「独協百年」、即ち「独協学園百年史」(本史)の傍系書バイヘットの終刊と致します。

まだ重要な資料が相当残っていましたので、終刊号は最も分厚なものになりました。是等全五巻を通じて何といっても明治年間の文化活動や文献に関わる学園資料が主たるもので、その歴史的価値は寔に浅からぬものであると存じます。世界文化に重要な地位を占めて来たドイツと主としてドイツ大使館を通してなした文化交流、また広く文献によるドイツ文化の吸収等により、独協学園が日本文化史の諸面に重要な役割を果たして来た面影は、これらの資料によって覗われると思います。また各巻に掲げた写真やイラスト等も昔を偲ぶよすがとなりましたが、明治の創業時代の先覚者たち、明治から大正にかけての歴史的継承者たち、昭和年間における独協大学、独協医科大学への発展と隆盛を形

成して来られた元文部大臣天野貞祐学園長、関漢理理事長、石橋長英独協医大初代学長の文化的業績等の記事はこの「独協百年」全五巻に大方網羅されてありますが、やがて編纂される本史と共に独協百年のすがたを能うかぎり忠実に浮き彫りはいたしたく願っております。

また本号所載の明治二十年、三十年代からの校友会雑誌は、国運発展途上の青少年の知的水準、情操、意志的活動の情勢を覗い知る上の貴重な興味ある資料であります。これらは皆大村仁太郎の創案と指導のもとに編集されたもので、当時の日本の教育、思想、文芸等の様相に関わりをもつ重要な一環を成すものと思います。

この全五巻の「独協百年」を総覧すると、そこには明治、大正、昭和に亘る独協学園そのものにおける学制の変転、校舎の移転、改変、火災による書類の喪失、関東の大地震、日清、日露、第一次第二次世界大戦、その戦禍の影響、独逸国を或は敵とし、或は味方とした史劇、これらの歴史の諸相を体験して今日を迎えた学園史のあらましのすがたが展開されております。即ち諸々の論説、講演、随筆、回想、座談、資料等の諸篇によって多彩に展開されてあるわけであります。

この全五巻の内容が成るためには、学園の永き歴史を有つ同窓会関係の諸先輩、同僚、後輩の方々の多大なる御協力、その他教職員様の様々な御援助にあづかりました。我々委員一同深く感謝感銘いたしております。また別な角度から申しますと、この全五巻に亘り、その編纂主任たる斎藤博教授の終始一貫、精魂を傾けての尽力に対しては、委員長として感謝に堪えぬところであります。

この全五巻ならびに完成さるべき『独協学園百年史』が創立百周年事業の一環として編纂され刊行されるわけですが、その重要性を深く認識されて、各巻巻頭の辞を賜り、その出版のためには出費を惜しまずに御高配下さった関湊理事長の御好意に対して我々委員一同衷心より感謝申上げる次第であります。

この「独協百年」続刊中に、記念すべき百周年祭を迎えずして天野学園長が天界に逝かれたのは、まことに残念千万のことでありました。しかし先生の高邁な言説が各巻の主調を成して「独協百年」の生命を成していることを思うて感謝を新たにしますものであります。

願わくば、この全五巻が、来るべき「独協学園百年史」と相俟って、これらが単なる紙上の記念碑としてではなく、学園の歴史を継いでこれからの歴史を、生活活動を以て実践的に継承し、且、展開してゆく各校の多くの卒業生諸君にとって、学園の過去に対する認識を新たにするに役立ち、過去の歴史を生かすべく創造的意欲を以て限りなく前進されるよすがとならんことを念願してやみません。

一八 『目で見る独協百年』(一八八三—一九八三) 序文

(一九八三年一〇月二日)

「独協」という名称は明治十四年(一八八一年)に、北白川宮能久親王を会長として設立された「独逸学協会」に由来するもので、我々が茲に謂う「独協百年」とは「独逸学協会学校」が創立された明治十六年(一八八三年)から通算して本年昭和五十八年(一九八三年)が百周年に当るからである。創立記念日は十月二十二日で、創立に際しては、人物教育の亀鑑吉田松陰の直弟子品川弥二郎が熱烈なる主唱者であったので、彼が創立委員長に推された。

この百周年記念祭の委員長は、歴史的な独協中学、高等学校の名誉校長にして第二次大戦後、創立の主旨を復興し且つ展開した哲人にして今は在天の天野貞祐学園長と協力し、諸々の艱難を克服して献身的に独協大学、独協医科大学、独協埼玉高等学校等を建設した強力な実践家関湊理事長である。如何なる国家も民族も、それぞれ存在の歴史的意義と使命を有っている。その独自性を相互に尊重し、共存共栄すべく協力するところにまことの平和と栄光があろう。世界の現実が凡そこの理念から

逸脱している危機的な現今、教育の一環を承っている「独協」は、この漢字が示唆する如く、「独協」の独、自性を深く自覚して、学園の各部門が協力する楽園的学園であると同時に、他の諸学園ともいよいよ交流するものでありたい。それを医学界に於て国際的に実証したのが独協医科大学初代名誉学長石橋長英博士である。

本誌の年表は単なる事実項目の羅列ではなく、明治・大正・昭和の歴史と関わり浅からぬ独協史がパノラマの如く繰り広げられてくる趣きを備えたもので、特に「百年史」全般の編纂主任たる斎藤博独協大学教授の苦心に負うところ大である。また多種多様の映像写真、絵画、遺墨、諸誌面紹介等々のための資料収集とこれが選択、整備等の労を尽したのは主任を始め、編纂委員、専門委員の諸氏及び助手の諸君で、茲に心からの感謝の意を表する。また誠意一貫これが協力と撮影及び印刷の掌に当たった三陽社山田社長と、特に山陽印刷の工場長城石典彦氏とその他写真製版やデザイン関係諸氏に衷心よりの謝意を表する。

一九『回想天野貞祐』序文

(一九八六年秋)

天野貞祐先生(一八八四—一九八〇年)は、明治・大正・昭和に亘つての極めて真摯な哲人教育者であった。先生の偉さは、優秀な天稟をうちに蔵しながら逆説的な平凡に於ける非凡というものであった。「道理の感覚」を身証した道念の人で、カント流に申せば先験的な道理を生きないでは居られない人格であった。ゲーテ流に謂へば、「元始はじめに行ない行為くわいありき」で、行為に裏づけられない言の教育は教育ではない、という教育愛の体現者であった。その九十五星霜の生涯に於ける劇的な諸事象に際して「棄てられたる石は隈すゐの首石くびいし」たる預言的な実存者であった。

独協学園創立(一八八三年)百周年記念事業の一環としての独協百年史編纂(既刊『独協百年』五巻、『目で見る独協百年』一巻、そして最終は刊行予定の『独協百年史』)の傍系的作業の一つとして茲に『回想天野貞祐』を編纂するに至ったことは、不思議な摂理で、理事会が満場一致を以て之を受諾したことは我々の心から感謝するところである。

本書の構成は、序文。目次。第一部、天野貞祐文集（二十三項）。第二部、天野博士を語る（四十項）。第三部、天野貞祐先生に捧ぐるの詩。第四部、追想（五十項）。第五部、年譜、著作目録。あとがき。から成っている。

本書名は「回想天野貞祐」であるが、第一部には先生御自身の人生回想の諸文があり、「道理の感覚」を基調とする珠玉的な諸論説あり、卓抜なる人物評論ありで、そこには宗教的、哲学的、道德的な心根が渾然として脈動している。この第一部こそ本書の要である。

第二部は、『天野貞祐著作集』（栗田出版会）の月報、月刊誌『心』（平凡社）等に発表されたものを主体とした大方同僚乃至後輩の方々の御寄稿である。

第四部は、自由学園代表者及び独協学園関係者と御近親御家族のもので、第二、第四部孰れにしても、天野先生に対する執筆者各位の親しき回想で、実に多彩な虹霓の感がある。すべての御寄稿に対し衷心より感謝申上げる。

読者も執筆者も齊しく、人間天野が如何にいつわりなく生きたか、如何に道理の実践のために戦ったか、という点に於て同じ焦点を結ぶと思う。先生の一つの告白に耳を傾けよう、

「私は大学教授の職は勿論、命もいらなと思った。どうかして、こういう奴輩を勝手に威張らしておく同胞に対してこんなことをして居れば、日本は滅んでしまうことを警告したかったのである。国家は生きものだ。盛衰もあれば生死もある。どんなことをしても国は亡びないなどと考えるのは迷信

だ」。これは今も預言として新たに響きを発してくるではないか。

第三部は、先生の人生の各時期の境涯に身を置いて、「わが人生」（同名の御著書あり）と題して、告白する如く、先生のなつかしがられた一高の有名な寮歌「噫玉杯」の歌調を口吟しつつ、筆者があのづからものした詩である。

第五部は、その年譜も、その著作目録も諸資料に基づいて編作したものである。これにより本書の読者が先生の諸著書に親しまれることを心から念ずる。

憶うにこの一巻の書は単なる「回想」の書ではない。先生の文集を中心として、執筆者各位の文章の中には、この頽落の微浅からぬ日本の精神状況、紛糾せる教育界、低調なる読書界に対して、いかに改革的に、創造的に処してゆくべきかの示唆に富んだ言説が随所に光を放っている。

特に全日本の青年諸君に〈colle, lege〉「採りて読み給へ」と勧めたい。ここにまことの humanity 人間道の切々たる悲願があるからである。

本書の発起人は、白旗信（現、独協大学学長、独文学者）、田中和夫（現、自由学園理事長、法学者）、町沢直治（独協大学名誉教授、数学者）、市原豊太（独協大学名誉教授、仏文学者）、小池辰雄（独協大学名誉教授、独文学者、第十四代独協中・高校校長、現、独立伝道者）である。

本書の編集にも、いつもの如く独協百年史全般の主任である現経済学部部長斎藤博教授の有能なる主役的労作、及び同副主任合田憲、中学高校独逸語科主任の忠実なる協力ありしことを、心から感謝す

る。

また独協百年史出版事業に専ら関はりある山陽印刷会社々長山田博氏の深き御好意と、同社の取締役工場長城石典彦氏の周到なる御協力に対して心からの謝意を表する。

一九八六年秋

独協学園百年史編纂委員長 小池 辰 雄

著者略歴

一九〇四年東京生れ。高師付属小学・中学出身。旧制水戸高校、東大文学部独乙文学科卒（一九二九年春）。東幼・陸士・陸大教授歴任。終戦後一高・東大教授。その間断続的に昭和医専・医大、早大、東歯大等の講師。一九六一―六二年西独ハンブルク大学の日本学交換教授。東大停年退職後、独協大学教授兼独協中学・高校第十四代校長。一九七九年春、五十年間の教職を退く。西ドイツ政府から第一級功勞十字章を授かる。現独協大学名誉教授。

内面史、水高・東大時代から内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集會に相前後して列席。一九四〇年秋から武蔵野市の自宅で日曜聖書講義を開いて今日に至る。一九五〇年秋、十字架・聖霊の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、日本キリスト召回を結成。独立伝道者にして詩人。

著作活動、皆て『旧約知識』誌、『キリスト教常識』誌の同人。後に『彌生の愛』誌、『彌愛新書』及び『エン・クリスト』誌の主筆。そしてこの『小池辰雄著作集』の著者。訳書は、白水社版の『眠られぬ夜のために』（ヒルティ著作集第四巻）、『神と人間の実在的弁証法』（ヘルジャーエフ著作集第六巻）等。

◎一九八七
小池辰雄著作集 第九巻
感想と紀行

初版印刷 一九八七年五月一日
初版発行 一九八七年五月十日
著者 小池 辰雄

発行 小池辰雄著作刊行会

東京都武蔵野市吉祥寺東町
四ノ一五ノ一九（〒一八〇）
TEL 〇四二二（〇）三四三三
（振替） 東京五一六一三二八
（責任者） 奥田昌道

印刷・製本 中央精版印刷株式会社
装幀 前野洋一

頒価 三五〇〇円（送料不要）

● 小池辰雄著作集（全十巻）

改正頒価、各巻三五〇〇円（送料不要）、分買自由。

*印は既刊

- *第一巻 無者キリスト（一九七五）……………（四版）
- *第二巻 芸術のたましい（一九七六）……………（再版）
- *第三巻 無の神学（一九八二春）……………（初版）
- *第四巻 詩篇珠玉集（一九八〇）……………（再版）
- *第五巻 百世の師ヒルティ―（一九七七）……………（再版）
- *第六巻 随想集（一九八二暮）……………（再刊）
- *第七巻 聖書の人ルター（一九八四）……………（初版）
- *第八巻 詩歌集（一九八六春）……………（初版）
- *第九巻 感想と紀行（一九八七春）……………（初版）
- 第十巻 一日千年（一九八八）……………

口座番号	東京 5—6 1 3 1 8
加入者名	小池辰雄著作刊行会

● 申込みは郵便振替にて